

# 九州縦貫自動車道関係

## 埋蔵文化財調査報告

—XII—

福岡県鞍手郡鞍手町所在向山遺跡の調査

1 9 7 7

福岡県教育委員会

# 九州縦貫自動車道関係 埋蔵文化財調査報告

—XII—

福岡県鞍手郡鞍手町所在向山遺跡の調査

1 9 7 7

福岡県教育委員会

## 序

九州縦貫自動車道路建設に伴う埋蔵文化財の調査は昭和51年度をもって終了しました。この8年の間に多額の経費と膨大な人力をもって計159個所の調査を実施いたしました。これらは、いずれも貴重な内容をもつものであります。

この報告書は、昭和50年度から51年度にかけて実施した鞍手郡鞍手町所在向山遺跡の記録であります。その内容は、群集墳・集落遺跡であります。本報告書を学問研究に、文化財愛護思想の普及、あるいは教育等にご活用いただければ幸甚に存じます。

発刊にあたり、本文中に記名した方々をはじめ、種々のご協力をいただいた関係各位に深甚なる謝意を表します。

昭和52年3月31日

福岡県教育委員会

教育長 森 田 實

## 例 言

1. この報告書は、九州縦貫高速自動車道建設によって破壊される予定の遺跡について行なった事前調査のうち、1975年（昭和50年）度と1976年（昭和51年）度に発掘した福岡県鞍手郡鞍手町所在向山遺跡・向山古墳群の調査報告書である。
2. 発掘調査は日本道路公団の委託事業として、福岡県教育委員会が実施した。
3. 本書の執筆はつぎのとおりである。
  - I .....中間研志
  - II .....中間研志
  - III .....中間研志・稲富裕和
  - IV .....上野精志・中間研志・宇野慎敏
  - V .....中間研志
  - VI .....上野精志・中間研志
4. 昭和50年度に行なった九州縦貫道関係の調査は、主として山本文和主事と、栗原和彦技術主査・石山勲・酒井仁夫・副島邦弘・上野精志・中間研志・児玉真一・池辺元明各技師が担当した。昭和51年度の調査も、上記と同様である。
5. 実測図及び写真等の作製者・撮影者名は、挿図目次及び図版目次の各項に記載した。
6. 本報告書の編集は、中間研志が担当した。



## 本文目次

	頁
I 調査の経過 .....	1
II 位置と環境 .....	5
III 向山遺跡住居群の調査 .....	8
1 第1号住居跡 .....	8
2 第2号住居跡 .....	13
3 第3号住居跡 .....	20
4 第4・6号住居跡 .....	38
5 第5号住居跡 .....	41
6 第7号住居跡 .....	42
7 土 塚 群 .....	44
8 溝 状 遺 構 .....	47
9 中世掘立柱建物 .....	51
10 中世火葬墓 .....	52
11 西下段歴史時代遺物包含層 .....	53
IV 向山古墳群の調査 .....	57
1 向山1号墳 .....	57
2 向山2号墳 .....	63
3 向山3号墳 .....	67
4 向山4号墳 .....	70
5 向山5号墳 .....	88
6 向山6号墳 .....	92
V 古墳群周囲の調査 .....	96
1 袋状竪穴 .....	96
2 弥生土塚群 .....	102
3 地下式横穴 .....	107
4 中近世の土塚墓・墳墓 .....	108
5 柱 穴 群 .....	110
VI 総 括 .....	112

## 図 版 目 次

	<b>II 位置と環境</b>	本文対照頁
PL. 1	(1) 向山遺跡及び周辺遺跡航空写真(東洋航空K. K. 撮影) .....	5
	<b>III 向山住居群の調査</b>	
PL. 2	(1) 遺跡遠景 西より(中間研志撮影) .....	8
	(2) 住居跡群全景 西より(中間撮影) .....	8
PL. 3	第1号住居跡	
	(1) 第1号住居跡 西より(中間撮影) .....	8
	(2) 第1号住居跡 東より(中間撮影) .....	8
PL. 4	第1号住居跡	
	(1) 遺物出土状態 西より(中間撮影) .....	9
	(2) 遺物出土状態 東より(中間撮影) .....	9
PL. 5	第1号住居跡	
	(1) 床面出土壺(中間撮影) .....	11
	(2) 床面出土石包丁(中間撮影) .....	11
PL. 6	第1号住居跡	
	(1) 東南半覆土中礫群・土器(中間撮影) .....	12
	(2) 覆土中出土壺(中間撮影) .....	12
PL. 7	第1号住居跡	
	(1) 北側ベッド状遺構附近炭化材(中間撮影) .....	9
	(2) 北壁際周溝(手前)と周壁溝(中間撮影) .....	9
PL. 8	第2・3号住居跡	
	(1) 第2号, 第3号(手前)住居跡全景 北より(中間撮影) .....	13
	(2) 第2号住居跡床面遺物出土状態 西より(中間撮影) .....	13
PL. 9	第2号住居跡	
	(1) 床面遺物出土状態 南より(中間撮影) .....	13
	(2) 完掘後 北より(中間撮影) .....	14
PL. 10	第2号住居跡	
	(1) 完掘後 東より(中間撮影) .....	13
	(2) 覆土中及び床面出土土器群(中間撮影) .....	13
PL. 11	第2号住居跡	

	(1) 床面出土器台他出土状態 (中間撮影) .....	13
	(2) 土製丸玉出土状態 (中間撮影) .....	13
PL. 12	第3号住居跡	
	(1) 全景・遺物出土状態 東より (中間撮影) .....	22
	(2) 全景・遺物出土状態 北より (中間撮影) .....	22
PL. 13	第3号住居跡	
	(1) 完掘後全景 北より (中間撮影) .....	21
	(2) カマド附近土器出土状態 南より (中間撮影) .....	22
PL. 14	第3号住居跡	
	(1) カマド附近土器出土状態 北より (中間撮影) .....	22
	(2) 東南隅土器出土状態 南より (中間撮影) .....	25
PL. 15	第3号住居跡	
	(1) 西南隅白玉出土状態 (中間撮影) .....	26
	(2) 4号住居跡から2・3・7号住居跡を望む 南より (中間撮影) .....	38
PL. 16	第4・6号住居跡	
	(1) 全景 西より (中間撮影) .....	38
	(2) 全景 北より (中間撮影) .....	38
PL. 17	第4・7号住居跡	
	(1) 第4号住居跡東壁際周壁溝 (中間撮影) .....	39
	(2) 第7号住居跡全景 西より (中間撮影) .....	42
PL. 18	土壇・掘立柱建物	
	(1) 第15号土壇 (中間撮影) .....	44
	(2) U字溝・掘立柱建物 (白線) 北より (中間撮影) .....	47
PL. 19	U字・V字溝	
	(1) U字・V字溝土層断面 (中間撮影) .....	47
	(2) U字溝内覆土中土器・礫群出土状態 (中間撮影) .....	47
PL. 20	火葬墓	
	(1) 火葬墓 西より (中間撮影) .....	52
	(2) 西下段トレンチ 南より (中間撮影) .....	53
PL. 21	西下段トレンチ	
	(1) 西下段 $\sqrt{2}$ トレンチ (中間撮影) .....	53
	(2) 西下段 $\sqrt{3}$ トレンチ (中間撮影) .....	53
PL. 22	第1号住居跡出土遺物	
	(1) 弥生式土器 (中間撮影) .....	9
PL. 23	第1号住居跡出土遺物	
	(1) 炭化堅果類 (中間撮影) .....	8
	(2) 第1号住居跡・その他出土石器類 (中間撮影) .....	11
PL. 24	第1号・2号住居跡出土遺物	

	(1) 第1号住居跡出土石製穂摘具(中間撮影) .....	11
	(2) 覆土中出土弥生式土器(中間撮影) .....	12
	(3) 第2号住居跡出土土師器(中間撮影) .....	16
P L. 25	第2号住居跡出土遺物	
	(1) 土製丸玉(中間撮影) .....	19
	(2) 土師器(中間撮影) .....	17
P L. 26	第3号住居跡出土遺物	
	(1) 須恵器杯蓋・合付椀(中間撮影) .....	26
P L. 27	第3号住居跡出土遺物	
	(1) 須恵器杯身(中間撮影) .....	29
P L. 28	第3号住居跡出土遺物	
	(1) 須恵器・土師器(中間撮影) .....	31
P L. 29	第3号住居跡出土遺物	
	(1) 滑石製白玉・管玉(中間撮影) .....	33
	(2) 土師器(中間撮影) .....	32
P L. 30	第3・4・7号住居跡・V字溝出土遺物	
	(1) 第3号住居跡覆土中出土土師器(中間撮影) .....	32
	(2) V字溝出土砥石(中間撮影) .....	51
	(3) 4号住居跡出土弥生式土器(中間撮影) .....	40
	(4) 第7号住居跡出土土師器(中間撮影) .....	42
P L. 31	第4号住居跡出土遺物	
	(1) 床面出土焼粘土塊(中間撮影) .....	39
P L. 32	第16号土塚・U字溝・西下段出土遺物	
	(1) 西下段包含層出土瓦器・土師器・須恵器(中間撮影) .....	56
	(2) 火葬墓副葬土師器(中間撮影) .....	52
	(3) U字溝出土須恵器・鉄鎌(中間撮影) .....	50
	(4) 第16号土塚出土鉄製鋤先(中間撮影) .....	47
<b>IV 向山古墳群の調査</b>		
P L. 33	1号墳	
	(1) 遠景 西より(上野精志撮影) .....	57
	(2) 発掘前 西より(中間撮影) .....	57
P L. 34	1号墳	
	(1) 全景 西より(中間撮影) .....	57
	(2) 全景 東より(中間撮影) .....	57
P L. 35	1号墳	
	(1) 石室全景 完掘後(中間撮影) .....	58
	(2) 石室全景 石抜き跡状況(中間撮影) .....	58
P L. 36	1号墳	

	(1) 奥壁石積み状況 (中間撮影) .....	58
	(2) 左壁石積み状況 (中間撮影) .....	58
P L. 37	1号墳	
	(1) 右壁石積み状況 (中間撮影) .....	57
	(2) 裏込め状況 (中間撮影) .....	57
P L. 38	1・2号墳	
	(1) 1号墳腰石状況 (中間撮影) .....	58
	(2) 2号墳発掘前 南より (中間撮影) .....	63
P L. 39	2号墳	
	(1) 2号墳発掘前 西より (中間撮影) .....	63
	(2) 2号墳全景 西より (中間撮影) .....	63
P L. 40	2号墳	
	(1) 2号墳石室全景 (中間撮影) .....	63
	(2) 閉塞状況 (中間撮影) .....	64
P L. 41	2号墳	
	(1) 羨道部及び閉塞状況 (中間撮影) .....	64
	(2) 鉄器出土状態 (中間撮影) .....	64
P L. 42	2号墳	
	(1) 奥壁石積み状況 (中間撮影) .....	63
	(2) 右壁石積み状況 (中間撮影) .....	63
P L. 43	2号墳	
	(1) 石室腰石のみの状況 北より (中間撮影) .....	63
	(2) 石室腰石のみの状況 西より (中間撮影) .....	63
P L. 44	1・2号墳出土遺物	
	(1) 1号墳出土鉄器類・銀環 (中間撮影) .....	61
	(2) 2号墳出土鉄鏃・刀子 (中間撮影) .....	65
P L. 45	2号墳出土遺物	
	(1) 南側周溝内出土須恵器 (中間撮影) .....	66
	(2) 石室覆土内出土石器 (中間撮影) .....	61
P L. 46	3号墳	
	(1) 発掘前状況 北より (中間撮影) .....	67
	(2) 石室全景 西より (宇野慎敏撮影) .....	68
P L. 47	3号墳	
	(1) 奥壁石積み状況 (宇野撮影) .....	69
	(2) 右側壁石積み状況 (宇野撮影) .....	69
P L. 48	3号墳	
	(1) 鉄鏃出土状況 (上野撮影) .....	69
	(2) 腰石のみの状況 (上野撮影) .....	68

P L. 49	3号墳	
	(1) 腰石及び根石の状況 北より(宇野撮影)	69
	(2) 腰石及び根石の状況 南より(宇野撮影)	69
P L. 50	3号墳	
	(1) 腰石下の根石の状態(宇野撮影)	69
	(2) 墓壇の状態(宇野撮影)	69
P L. 51	3号墳・4号墳	
	(1) 3号墳より5号・6号墳を望む 西より(上野撮影)	69
	(2) 4号墳発掘前の状況 北より(中間撮影)	70
P L. 52	4号墳	
	(1) 石室全景 西より(上野撮影)	72
	(2) 石室全景 北より(上野撮影)	72
P L. 53	4号墳	
	(1) 墳丘断面 奥壁(宇野撮影)	70
	(2) 周溝断面(宇野撮影)	70
P L. 54	4号墳	
	(1) 奥壁石積み状況(上野撮影)	72
	(2) 右側壁石積み状況(上野撮影)	72
P L. 55	4号墳	
	(1) 玉類出土状態(上野撮影)	72
	(2) 玉類出土状態(上野撮影)	72
P L. 56	4号墳	
	(1) 馬具類・須恵器出土状態(宇野撮影)	72
	(2) 刀子出土状態(上野撮影)	72
P L. 57	4号墳	
	(1) 腰石のみの状況(宇野撮影)	72
	(2) 腰石下根石の状況(宇野撮影)	72
P L. 58	4号墳・5号墳	
	(1) 4号墳墓壇(宇野撮影)	72
	(2) 5号墳全景(上野撮影)	88
P L. 59	5号墳	
	(1) 石室全景(上野撮影)	89
	(2) 閉塞状況(上野撮影)	89
P L. 60	5号墳	
	(1) 閉塞石と敷石(上野撮影)	89
	(2) 敷石残存状況(上野撮影)	92
P L. 61	5号墳	
	(1) 腰石のみの状況(上野撮影)	89

	(2) 墓壇の状況（上野撮影）	89
P L. 62	6号墳	
	(1) 全景（上野撮影）	92
	(2) 石室全景（宇野撮影）	94
P L. 63	6号墳	
	(1) 石室全景 東より（宇野撮影）	94
	(2) 腰石のみの状況（宇野撮影）	94
P L. 64	6号墳	
	(1) 根石及び墓壇の状況（宇野撮影）	94
	(2) 6号墳より西を望む（上野撮影）	94
P L. 65	3号墳・4号墳出土遺物	
	(1) 3号墳出土鉄器・玉類（岡紀久夫撮影）	69
	(2) 4号墳出土須恵器（岡撮影）	72
P L. 66	4号墳出土遺物	
	(1) 玉類（岡撮影）	74
	(2) 玉類（岡撮影）	74
P L. 67	4号墳出土遺物	
	(1) 鉄鏃（岡撮影）	82
	(2) 鉄鏃（岡撮影）	82
P L. 68	4号墳出土遺物	
	(1) 鉄鏃（岡撮影）	82
	(2) 鉄鏃（岡撮影）	82
P L. 69	4号墳出土遺物	
	(1) 馬具（岡撮影）	82
	(2) 馬具（岡撮影）	85
P L. 70	4号墳・5号墳出土遺物	
	(1) 4号墳出土刀子（岡撮影）	82
	(2) 4号墳出土鹿角鏃（岡撮影）	82
	(3) 4号墳出土太刀・鐔・鞘口金具（岡撮影）	82
	(4) 5号墳出土玉（岡撮影）	92
	<b>V 古墳群周囲の調査</b>	
P L. 71	袋状堅穴	
	(1) 1号袋堅穴内壺・石斧出土状態（中間撮影）	96
	(2) 3号袋状堅穴（中間撮影）	100
P L. 72	袋状堅穴	

	(1) 2号袋状堅穴 (中間撮影) .....	99
	(2) 1号袋状堅穴 (中間撮影) .....	96
P L. 73	袋状堅穴	
	(1) 4・5・6・7号袋状堅穴 (中間撮影) .....	100
	(2) 古墳群周辺遺構全景 東より (中間撮影) .....	96
P L. 74	袋状堅穴出土遺物	
	(1) 1号袋状堅穴出土壺 (中間撮影) .....	96
	(2) 2号袋状堅穴出土小壺 (中間撮影) .....	99
	(3) 1号袋状堅穴出土石斧 (中間撮影) .....	99
P L. 75	弥生土塚墓	
	(1) 3号土塚 (中間撮影) .....	104
	(2) 1号土塚 (中間撮影) .....	102
P L. 76	弥生土塚墓	
	(1) 4号土塚 (中間撮影) .....	104
	(2) 5号土塚 (中間撮影) .....	104
P L. 77	弥生土塚墓	
	(1) 1・3・4・5号土塚 北より (中間撮影) .....	104
	(2) 7・8・9号土塚 南より (中間撮影) .....	104
P L. 78	弥生土塚墓・中世土塚墓	
	(1) 6号土塚 (中間撮影) .....	104
	(2) 中世土塚墓 (中間撮影) .....	108
P L. 79	地下式横穴	
	(1) 全景 西より (中間撮影) .....	107
	(2) 全景 東より (中間撮影) .....	107
P L. 80	地下式横穴	
	(1) 奥壁 (中間撮影) .....	107
	(2) 玄門・堅塚部 (中間撮影) .....	107
P L. 81	地下式横穴	
	(1) 右側壁の工具痕 (中間撮影) .....	108
	(2) 奥壁中央の指ナデ痕 (中間撮影) .....	108
P L. 82	柱穴群	
	(1) 柱穴群全景 南より (中間撮影) .....	110
	(2) 柱穴群全景 西より (中間撮影) .....	110
P L. 83	近世墳墓	
	(1) 1号墳墓 (宇野撮影) .....	109
	(2) 2号墳墓 (宇野撮影) .....	109



## P L. 84 古墳群周辺遺構出土遺物

(1) 表土出土石器 (中間撮影) .....	111
(2) 中世土塚墓出土土師器 (中間撮影) .....	108
(3) 1号墳墓蔵骨器 (岡撮影) .....	109
(4) 2号墳墓蔵骨器 (岡撮影) .....	110

## 挿 図 目 次

	頁
Fig. 1 九州縦貫道と鞍手地区遺跡の位置 .....	2
Fig. 2 鞍手町周辺の遺跡分布図 (中間研志作製) .....	6
Fig. 3 向山遺跡周辺地形図 (日本道路公団原図) (中間製図) .....	7—8
Fig. 4 向山住居群遺構全体図 (中間・稲富裕和実測, 中間製図) .....	7—8
Fig. 5 向山第1号住居跡実測図 (稲富実測, 中間製図) .....	9—10
Fig. 6 向山第1号住居跡遺物出土状態実測図 (中間実測・製図) .....	9—10
Fig. 7 向山第1号住居跡床面出土土器実測図 (中間実測・製図) .....	10
Fig. 8 向山第1号住居跡床面出土石器実測図 (中間・稲富実測, 中間製図) .....	11
Fig. 9 向山第1号住居跡覆土内出土土器実測図 (中間実測・製図) .....	11—12
Fig. 10 向山第1号住居跡覆土内出土石器実測図 (稲富実測・製図) .....	13
Fig. 11 向山第2号住居跡実測図 (中間実測・製図) .....	14
Fig. 12 向山第2号住居跡床面出土土器実測図 (その1) (中間・稲富実測, 中間製図) .....	15
Fig. 13 向山第2号住居跡床面出土土器実測図 (その2) (中間・稲富実測, 中間製図) .....	17
Fig. 14 向山第2号住居跡床面出土土器・土製玉実測図 (その3) (中間実測・製図) .....	18
Fig. 15 向山第2号住居跡覆土内出土土器実測図 (中間・稲富実測, 中間製図) .....	19
Fig. 16 向山第3号住居跡実測図 (稲富実測, 中間製図) .....	21
Fig. 17 向山第3号住居跡竈実測図 (稲富実測, 中間製図) .....	22
Fig. 18 向山第3号住居跡遺物出土状態実測図 (稲富実測, 中間製図) .....	23
Fig. 19 向山第3号住居跡須恵器出土状態実測図 (栗原和彦実測, 中間製図) .....	24
Fig. 20 向山第3号住居跡白玉出土状態実測図 (稲富・中間実測, 中間製図) .....	25
Fig. 21 向山第3号住居跡床面出土須恵器実測図 (その1) (稲富・中間実測, 中間製図) .....	27
Fig. 22 向山第3号住居跡床面出土須恵器実測図 (その2) (中間実測・製図) .....	28

Fig. 23	向山第3号住居跡床面出土土師器実測図(その1) (稲富・中間実測, 中間製図)	31—32
Fig. 24	向山第3号住居跡床面出土土師器実測図(その2) (稲富・中間実測, 中間製図)	32
Fig. 25	向山第3号住居跡床面出土玉類実測図 (中間実測・製図)	33
Fig. 26	向山第3号住居跡床面出土石器実測図 (稲富実測・製図)	36
Fig. 27	向山第3号住居跡覆土内出土須恵器実測図 (中間実測・製図)	36
Fig. 28	向山第3号住居跡覆土内出土土師器実測図 (中間実測・製図)	37
Fig. 29	向山第3号住居跡覆土内出土石器実測図 (稲富実測・製図)	38
Fig. 30	向山第4号・第6号住居跡実測図 (中間実測・製図)	39—40
Fig. 31	向山第4号住居跡床面・覆土内出土土師器実測図 (中間実測・製図)	40
Fig. 32	向山第5号住居跡実測図 (稲富実測, 中間製図)	41
Fig. 33	向山第7号住居跡床面出土石器実測図 (中間実測・製図)	42
Fig. 34	向山第7号住居跡実測図 (中間実測・製図)	43
Fig. 35	向山第11~13号土坑実測図 (中間実測・製図)	45
Fig. 36	向山第14~18号土坑実測図 (中間・稲富実測, 中間製図)	46
Fig. 37	向山第16号土坑内出土鋤先実測図 (中間実測・製図)	47
Fig. 38	U字溝・V字溝実測図 (中間実測・製図)	48
Fig. 39	U字溝内出土弥生式土器・土師器実測図 (中間実測・製図)	49
Fig. 40	U字溝内出土須恵器実測図 (中間実測・製図)	50
Fig. 41	U字溝内出土鉄鏃実測図 (中間実測・製図)	50
Fig. 42	V字溝内出土砥石実測図 (稲富実測, 中間製図)	50
Fig. 43	柱穴群P33出土石器実測図 (稲富実測・製図)	51
Fig. 44	掘立柱建物実測図 (中間実測・製図)	51—52
Fig. 45	向山第1号火葬墓実測図 (中間実測・製図)	52
Fig. 46	向山第1号火葬墓副葬土師器実測図 (中間実測・製図)	52
Fig. 47	西下段トレンチ土層実測図 (中間実測, 稲富製図)	53
Fig. 48	西下段黒色土層中出土須恵器・土師器実測図 (中間実測・製図)	54
Fig. 49	西下段黒色土層中出土土師器・瓦器・白磁実測図 (中間実測・製図)	55
Fig. 50	西下段黒色土層中出土石器実測図 (稲富実測・製図)	56
Fig. 51	向山古墳群周辺地形図 (日高正幸・中間実測, 中間製図)	57—58
Fig. 52	向山古墳群及び周辺遺構全体図 (中間・赤峰義則実測, 中間製図)	57—58
Fig. 53	向山1号墳周溝及び石室測量図 (中間・赤峰・平島勇夫実測, 中間製図)	58
Fig. 54	向山1号墳周溝土層実測図 (平島実測, 中間製図)	59
Fig. 55	向山1号墳石室実測図 (平島・多々良友博実測, 中間製図)	59—60
Fig. 56	向山1号墳石室内出土鉄器・耳環実測図 (中間実測・製図)	60
Fig. 57	向山1号墳石室内覆土中出土石器実測図 (中間実測・製図)	61

Fig. 58	向山2号墳周溝及び石室測量図（赤峰・中間実測，中間製図）	62
Fig. 59	向山2号墳石室実測図（赤峰・中間実測，中間製図）	63—64
Fig. 60	向山2号墳玄門部閉塞状況実測図（中間・赤峰実測，中間製図）	64
Fig. 61	向山2号墳石室床面出土鉄器実測図（中間実測・製図）	65
Fig. 62	向山2号墳南側周溝内出土須恵器実測図（中間実測・製図）	66
Fig. 63	向山3号墳周溝及び石室測量図（上野精志・宇野慎敏実測，二神和子製図）	68
Fig. 64	向山3号墳周溝断面実測図（宇野実測・製図）	69
Fig. 65	向山3号墳石室実測図（上野・宇野実測，二神製図）	69—70
Fig. 66	向山3号墳石室掘り方実測図（上野・宇野実測，二神製図）	69—70
Fig. 67	向山3号墳石室内出土鉄器・玉類実測図（上野実測・製図）	70
Fig. 68	向山4号墳周溝及び石室測量図（上野・宇野実測，二神製図）	71
Fig. 69	向山4号墳墳丘東西断面実測図（宇野実測・製図）	71—72
Fig. 70	向山4号墳石室実測図（上野・宇野実測，二神製図）	71—72
Fig. 71	向山4号墳掘り方実測図（上野・宇野実測，二神製図）	71—72
Fig. 72	向山4号墳鉄器出土状態実測図（宇野実測・製図）	72
Fig. 73	向山4号墳玄室内遺物出土状態実測図（栗原・上野・宇野実測，宇野製図）	73
Fig. 74	向山4号墳石室床面装身具出土状態実測図（上野実測，宇野製図）	74
Fig. 75	向山4号墳出土須恵器実測図（宇野実測・製図）	75
Fig. 76	向山4号墳出土玉類実測図（その1）（宇野実測・製図）	76
Fig. 77	向山4号墳出土玉類実測図（その2）（宇野実測・製図）	77
Fig. 78	向山4号墳出土刀子・鹿角鏃・耳環類実測図（宇野実測・製図）	82
Fig. 79	向山4号墳出土太刀実測図（宇野実測・製図）	82
Fig. 80	向山4号墳出土鉄鏃実測図（その1）（宇野実測・製図）	83
Fig. 81	向山4号墳出土鉄鏃実測図（その2）（宇野実測・製図）	84
Fig. 82	向山4号墳出土馬具実測図（宇野実測・製図）	86
Fig. 83	向山4号墳出土鉄器実測図（宇野実測・製図）	87
Fig. 84	向山5号墳周溝及び石室測量図（上野・宇野実測，中間製図）	88
Fig. 85	向山5号墳石室実測図（上野実測，二神製図）	90
Fig. 86	向山5号墳掘り方実測図（上野実測，二神製図）	91
Fig. 87	向山5号墳石室内出土玉類実測図（宇野実測・製図）	92
Fig. 88	向山6号墳周溝及び石室測量図（上野・宇野実測，中間製図）	92
Fig. 89	向山6号墳石室実測図（上野・宇野実測，二神製図）	93
Fig. 90	向山6号墳石室掘り方実測図（上野・宇野実測，二神製図）	94
Fig. 91	第1・2・3・7号袋状堅穴実測図（中間・赤峰実測，中間製図）	97
Fig. 92	第1号袋状堅穴出土土器実測図（中間実測・製図）	98

Fig. 93	第1号袋状堅穴出土石器実測図（中間実測・製図）	99
Fig. 94	第2号袋状堅穴出土石器実測図（中間実測・製図）	100
Fig. 95	第4・5・6号袋状堅穴実測図（中間・赤峰実測，中間製図）	101
Fig. 96	第7号袋状堅穴出土石器実測図（中間実測・製図）	102
Fig. 97	第1・3・4・10号土坑実測図（中間実測・製図）	103
Fig. 98	第5・6・7号土坑実測図（中間実測・製図）	105
Fig. 99	第8・9号土坑実測図（中間実測・製図）	106
Fig. 100	向山地下式横穴実測図（中間・赤峰実測，中間製図）	107—108
Fig. 101	中世土坑墓実測図（中間実測・製図）	108
Fig. 102	中世土坑墓副葬土師器実測図（中間実測・製図）	109
Fig. 103	近世火葬墓出土状態実測図（宇野実測，稲富製図）	109
Fig. 104	蔵骨器実測図（中間実測・製図）	110
Fig. 105	古墳群表土出土石器実測図（中間実測・製図）	111
Fig. 106	古墳群表土出土石器実測図（中間実測・製図）	111
Fig. 107	向山1～6号墳石室平面形の方眼による操作結果（中間作製，稲富製図）	118

## 表 目 次

Tab. 1	向山3号住居跡出土滑石製白玉計測表（稲富・中間作製）	34
Tab. 2	向山住居跡一覧表（中間作製）	44
Tab. 3	向山4号墳出土玉類計測表（宇野作製）	78
Tab. 4	向山4号墳出土鉄鏃計測表（宇野作製）	85
Tab. 5	九州における滑石製模造品出土の住居跡一覧表（稲富作製）	114
Tab. 6	各古墳石室法量一覧表（稲富・中間作製）	117

## I 調査の経過

九州縦貫高速自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査は、すでに8年を経て、昭和51年秋の鞍手町所在遺跡の調査終了をもって、この関係の福岡県教育委員会受託分の現場発掘調査はすべて終了した。筑豊東I・Cまでの全線供用開始を目指す建設工事は年々ピッチを上げ、それに伴って下記のとおり発掘調査件数、面積、費用も年ごとに増加の一途にある。

調査年次	調査件数	調査面積(m <sup>2</sup> )	調査費(千円)
昭和44年	9	2,919	11,467
45	31	12,271	32,324
46	21	48,766	47,700
47	51	52,512	70,216
48	10	23,958	70,690
49	27	68,592	167,350
50	21	48,722	199,088
51	7	12,823	
計	177	270,563	

昭和50年度の調査内容は次のとおりである。

番号	遺跡名	所在地	調査期間	面積(m <sup>2</sup> )	内容
古17	古野古墳群	粕屋郡古賀町筵内	4/2～6/30	2,000	円墳12基
直3	小原遺跡	鞍手郡若宮町大字山口	9/1～12/26	5,228	弥生～古墳時代住居跡
直7	咲花遺跡	鞍手郡若宮町大字沼口	7/28～8/1	301	遺構なし
直8	都地遺跡	"	11/22～1/15	10,000	掘立柱建物
直13	段ノ上遺跡	鞍手郡鞍手町大字室木	11/4～11/15	950	遺構なし
直15	高木A-1号墳	鞍手郡鞍手町大字新北	7/1～8/31	150	円墳・横穴式石室
直16	高木A-2号墳	"	7/1～8/31	150	"
直17	高木遺跡	"	8/20～9/10	500	遺構なし
直18	高木遺跡	"	9/25～11/10	600	弥生時代住居跡・墓跡群
直19	高木B-1号墳	"	9/1～9/25	150	円墳・横穴式石室

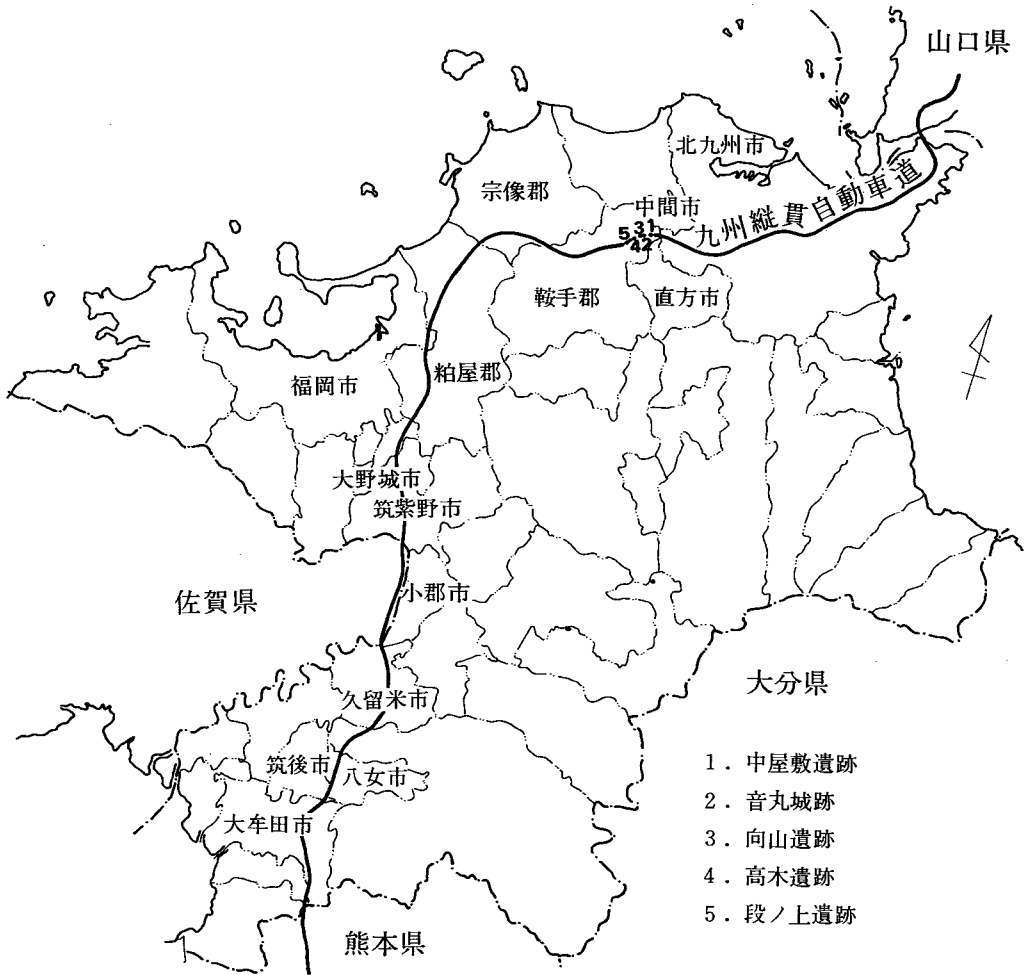


Fig. 1 九州縦貫道と鞍手地区遺跡の位置

直20	高木B-2号墳	"	9/ 1~10/20	150	"
直21	向山古墳群	"	10/ 1~11/26	1,982	円墳2基・地下式横穴
直22	中屋敷遺跡	鞍手郡鞍手町大字中山	7/ 1~10/30	4,174	弥生住居跡・中世建物群
追 1	都地原第3地点	鞍手郡若宮町大字水原	11/ 4~11/20	1,200	火葬墓4基
追 3	汐井掛遺跡	鞍手郡若宮町大字沼口	4/ 7~ 3/31	19,000	弥生~古墳時代木棺石棺群
追 4	小原古墳群	鞍手郡若宮町大字山口	7/14~ 9/ 5	735	円墳・横穴式石室3基
追 5	茶臼山城跡	"	8/29~ 8/30	40	遺構なし
追 6	末森遺跡	鞍手郡鞍手町大字八尋	10/30	280	遺構なし
追 7	音丸山城跡	鞍手郡鞍手町大字新北	8/25~ 9/ 5		山城全体測量

追 8	力石遺跡	"	10/ 1	600	遺構なし
追 9	後牟田遺跡	鞍手郡鞍手町大字中山	10/ 1~10/27	32	"

注 古……古賀地区の意  
直……直方地区の意  
追……追加地点の意

昭和51年度の調査内容は次のとおりである。

番号	遺跡名	所在地	調査期間	面積(m <sup>2</sup> )	内容
直 4	汐井掛 1号墳	鞍手郡若宮町大字沼口	4/ 1~ 5/ 1	400	円墳・横穴式石室
直13	段ノ上遺跡	鞍手郡鞍手町大字室木	7/ 1~ 8/31	2,173	遺構なし
直18	高木遺跡	鞍手郡鞍手町大字新北	7/ 1~ 8/31	420	弥生時代土壇墓群
直21	向山遺跡	"	6/ 8~ 8/31	4,676	横穴式石室4基・弥生住居跡
直22	中屋敷遺跡	鞍手郡鞍手町大字中山	4/ 1~ 5/30	3,659	中世建物跡・土壇墓
追 7	音丸城跡	鞍手郡鞍手町大字新北	3/ 1~ 5/30	1,000	中世山城跡・空濠等
追 9	後牟田遺跡	鞍手郡鞍手町大字中山	7/10~ 7/17	200	遺構なし

ここで報告する向山古墳群・遺跡は、鞍手郡鞍手町大字新北にあり、昭和50年10月1日より11月26日まで第1号墳・第2号墳及び周辺の遺構群を第1次調査として、更に昭和51年6月8日から8月31日まで第3～6号墳と西側台地部の住居群を第二次調査として実施したものである。

昭和44・45年及びその後に行われた筑豊東I・Cから福岡東I・Cまでの分布調査により、青磁・土師器・須恵器散布地として上げられていたが、昭和50年3月に行なった鞍手地区分の予備調査によって、西側台地上に竪穴住居跡・中世火葬墓が確認され、更に東側丘陵上の古墳群が路線内に含まれることが確認されて、東西の丘陵・台地全面調査の必要ありと断定された。

調査日程の関係上、当初昭和50年度調査予定分には当遺跡は含まれておらず、昭和50年度夏の中屋敷遺跡調査期間中に、直方工事事務所より年度内に工事用道路を全線に通したい意向が呈示され、工事を急ぐ公団側との協議の結果、路線内各遺跡の略片半部のみの調査を行なうこととした。直ちに、段の上遺跡・音丸城跡の測量調査、末森・力石各遺跡のブルドーザーによる遺構確認調査を行なった。これに伴い、向山古墳群の数の確認等を行ない、そのうち、北側片線部にかかる古墳2基及び周辺遺構の調査が必要となった。この結果、前記の如く調査を行ない、横穴式石室2基、弥生時代袋状竪穴7基、土壇10基、柱穴群、地下式横穴1基等を検出した。調査完了後、直方工事区星工事長及び施行業者の飯田建設の立ち合いの上で縄張りを行ない、既調査区域を示し、来年度調査予定区域を明示した。

51年度は、4月末の公団・施行業者との協議により、5月中半より7月中半までの調査期間が充てられたが、中屋敷遺跡の調査が当初より伸び、6月初頭までずれ込んだ為、これ以降調査を開始し、8月末までの2ヶ月間の期間を要し、当初予定より1.5ヶ月遅れて調査は完了した。第二次調査では、横穴式石室4基、近世火葬墓3基、弥生時代住居跡6軒、古墳時代住居跡1軒、土坑、中世掘立柱建物1棟、火葬墓1基等が検出された。

この報告書では、以上の2次分の調査をまとめて、第二次調査の住居群等、第一次、第二次両次にわたる古墳群、第一次調査分の古墳群周辺の遺構群の3部に大別して所収した。

調査に際して、鞍手町教育委員会社会教育課課長香月次郎氏には作業員の募集その他に御配慮いただいた。また旧地権者で遺跡と隣接した石田よし子氏には数々の御迷惑をおかけした。「鞍手の歴史と文化を守る会」の井手川泰子、石田勝両氏には、現場にて多くの御教示をいただいた。実際の作業に関しては、鞍手町中山区老人会及び婦人会、新北区の方々に全面的な御協力をいただいた。記して感謝の意を表する次第である。

調査関係者の構成は下記のとおりである。

#### 総括

教 育 長	森 田 實	管 理 部 長	西 村 太 郎
文 化 課 長	藤 井 功	文化課課長補佐(前任)	野 上 保
文化課課長補佐	武 久 耕 作	文化課課長補佐	川 崎 隆 夫
調 査 二 係 長	松 岡 史	技 術 主 査	栗 原 和 彦
技 術 主 査	宮小路 賀 宏		

#### 庶務会計

文化課課長補佐(前任)	野 上 保	文化課課長補佐	武 久 耕 作
文化課庶務主事	山 本 文 和	嘱 託	因 将 太

#### 発掘調査員

調 査 員	福岡県教育委員会文化課技術主査	栗 原 和 彦
	福岡県教育委員会文化課技師(51年度担当)	上 野 精 志
	福岡県教育委員会文化課技師(50・51年度担当)	中 間 研 志
調 査 補 助 員	日 高 正 幸	赤 峯 義 則
	平 島 勇 夫	多々良 友 博
	宇 野 慎 敏	稲 富 裕 和

#### 日本道路公団

福岡建設局局長	早 生 隆 彦	福岡建設局次長	長谷川 康 敏
直方工事事務所所長	稲 垣 勇	直方工事事務所副所長	石 橋 喜 衛 門
直方工事事務所工事長(前任)	星 達 雄	直方工事事務所工事長	成 富 秀 雄
直方工事事務所所員	田 中 晃 毅	直方工事事務所所員	黒 田 勝 良



## Ⅱ 位置と環境 (Fig. 2)

ここに報告する向山遺跡・古墳群は、福岡県鞍手郡鞍手町大字新北字向山に位置するものである。玄海灘にそぐ北九州の大河遠賀川の支流西川は、遠賀町から鞍手町を縦断し、源を六ヶ岳西麓に発する。この西川の支流に長谷川があり、その潤す幅 300 m 程度の水田面を見下す東側舌状丘陵上に立地する。

遠賀川流域の筑豊は一昔前の石炭産業で繁栄を極めたという面影は全く姿を消し、その象徴であったポタ山すら、次々と削られ、今では数える程しか残らない。当鞍手町周辺もその例にもれず、西川東岸及び西岸山麓の大小の炭坑はすべて廃坑となっている。そういう当地域の中ではあるが、文化財に関しては、国指定文化財の古月横穴群、長谷十一面観世音菩薩、中山不動尊などを始めとして、古くから知られる重要なものが多い。

西川周辺には、縄文時代からの大規模貝塚が多い。主なものとして、轟式・曾畑式・阿高式・並木式・中津式・出水式・夜臼式等を出土している新延貝塚、後期の土器・人骨が発見されている古月貝塚などがある。

弥生時代に至り、西川兩岸の微高地・台地上におびただしく遺跡が増加する。猪倉貝塚、古江遺跡、石田堤遺跡、木月遺跡、神崎遺跡など多いが、調査されているものはない。また、当縦貫自動車道建設に伴って調査した高木遺跡、向山遺跡、中屋敷遺跡にもこの期の遺構・遺物が検出されている。また、遠賀川式土器で有名な立屋敷遺跡や、中期初頭土器の標式となった城之越貝塚等も北隣の水巻町・遠賀町にそれぞれ位置する。

古墳時代になると、古墳が兩岸の丘陵上に数多くみられるようになる。西川左岸には、17基を有し国指定の古月横穴群、京場山古墳群、新町古墳群、大円墳を含む剣神社(鋤塚)古墳群、乙ヶ谷古墳群、県指定の巨石横穴式石室の新延大塚古墳、銀製冠を出土して有名な銀冠塚(八尋)古墳群、旭古墳群などがみられる。また、右岸及び遠賀川に挟まれる丘陵部には、藤郷地下式横穴群、殿原古墳群、長家古墳群、高木A・B古墳群、円覚寺古墳群、薄井古墳群、長目崎古墳群などが数多くみられ、当向山古墳群と同丘陵上に続く証拠山古墳群もそれに含まれる。古墳時代生産遺跡として、大型で県指定文化財の古門須恵器窯跡群、西山、倉谷池、野中の各須恵器窯跡群がみられる。生活遺跡としては、調査された例が少ないが、弥生時代遺跡と重複するものが多く、採集遺物等により古墳群周辺の微高地等がその生活地として推定されてい

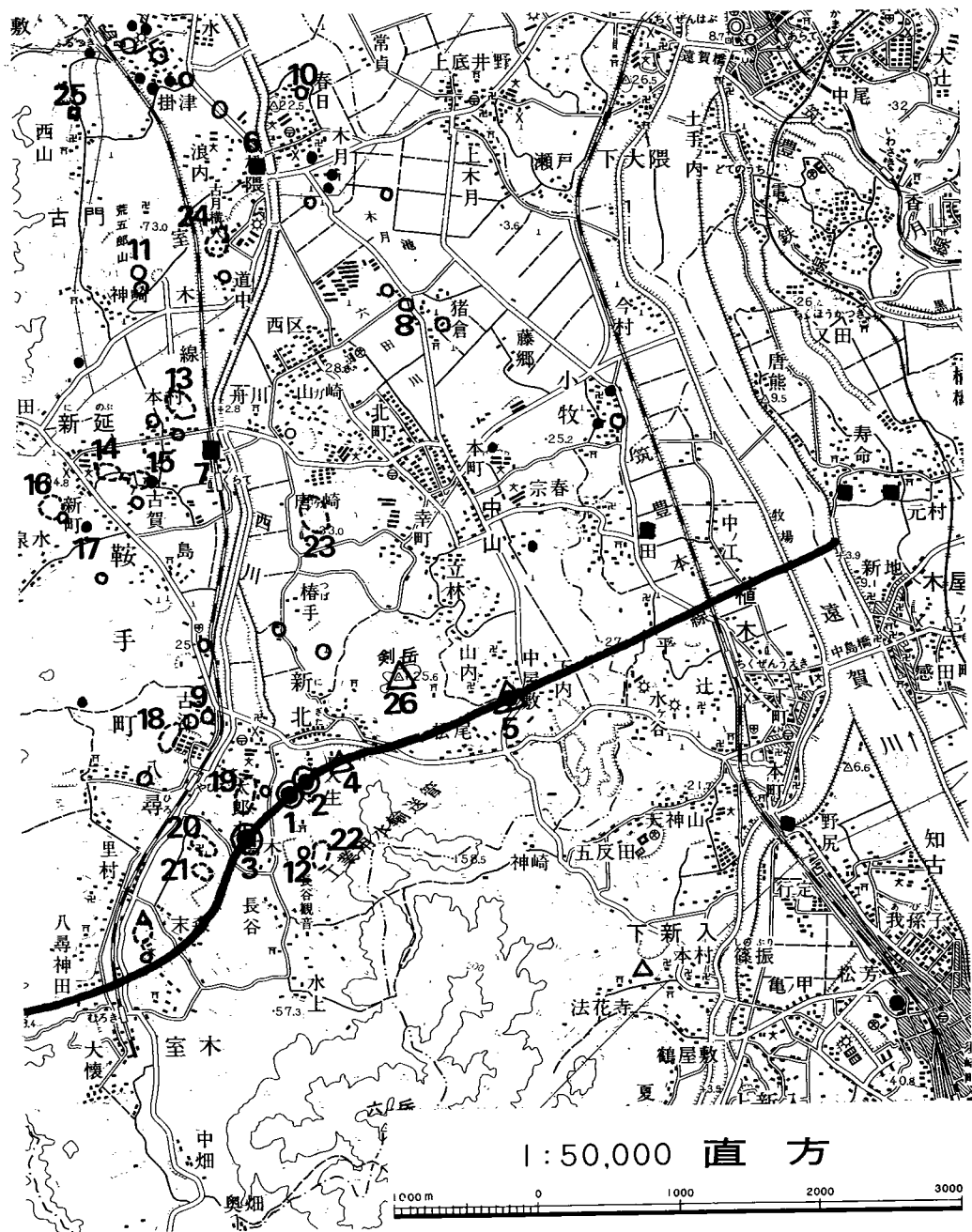


Fig. 2 鞍手町周辺の遺跡分布図

● 縄文時代    ○ 弥生時代    ● 古墳・古墳群    △ 歴史時代

- |            |            |            |           |            |
|------------|------------|------------|-----------|------------|
| 1. 向山遺跡    | 2. 向山古墳群   | 3. 高木遺跡古墳群 | 4. 音丸城跡   | 5. 中屋敷遺跡   |
| 6. 古月貝塚    | 7. 新延貝塚    | 8. 猪倉貝塚    | 9. 古江遺跡   | 10. 木月遺跡   |
| 11. 神崎遺跡   | 12. 石田堤遺跡  | 13. 京場山古墳群 | 14. 新町古墳群 | 15. 鑑塚古墳群  |
| 16. 乙ヶ谷古墳群 | 17. 新延大塚古墳 | 18. 銀冠塚    | 19. 長家古墳群 | 20. 円覚寺古墳群 |
| 21. 薄井古墳群  | 22. 証拋山古墳群 | 23. 殿原古墳群  | 24. 古月横穴群 | 25. 古門窯跡群  |
| 26. 剣岳城跡   |            |            |           |            |

る。縦貫自動車道関係では、当向山住居群や中屋敷遺跡、高木遺跡などの竪穴住居跡多くが調査例としてみられる。

歴史時代に入ると、出土遺物は数多いが特筆すべき文献に残る事柄は少ない。平安時代になると、神崎瓦窯、大善寺（推定）廃寺・瓦窯、などが散見される。平安後期になり、宗像氏の進出がみられ、遺跡としては古門の経塚、長谷観音像、木月の梵字石柱などがみられる。

鎌倉時代に入ると、中山不動尊が造立され、中屋敷遺跡に建物跡が推定され、剣岳城等山城の造築がみられるようになる。日宋貿易等による宋銭等も、久保崎、金丸等に多量出土し、中屋敷遺跡にも多い。室町、戦国時代に入ると、梅野土佐守、野中勘解由貞時、跡部安芸守などの剣岳城主が文献各所にみえ、音丸城跡、中屋敷遺跡等にその関連遺跡を有する。更に、豊臣秀吉の島津征伐に際し、剣岳城は豊臣方の手に攻められ落城している。その後、元和9年には東蓮寺藩（直方藩）家老吉田壱岐守が中山に別邸をつくり、中山円清寺を創建している。江戸時代に入ると、「太宰管内志」の筆者で国学者の伊藤常足などが輩出している。

以上、当地域の歴史の流れを略説したが、当遺跡を地域全体からみれば、年毎に遠賀川とともに氾濫して、ある時は水害に泣き、また平時は、肥沃な氾濫原の農耕地帯となった穀倉の地に、古墳時代にはかなりの権力が成立し、その下に、山際のあまり生産力も高くない小集落群のひとつとして存在したであろう遺跡としてとらえられる。（中間研志）

#### （参考文献）

鞍手町誌編集委員会編「鞍手町誌上巻」1974

上野精志「遠賀川流域遺跡地名表第3集」1972

上野精志「古門窯跡」福岡県文化財調査報告書第50集 1973

杉原荘介「遠賀川」1943

福岡県教育委員会「銀冠塚」福岡県文化財調査報告書第28集 1963

杉原荘介編「日本農耕文化の生成」1961



Fig. 3 向山遺跡周辺地形図 (縮尺 1/1000)

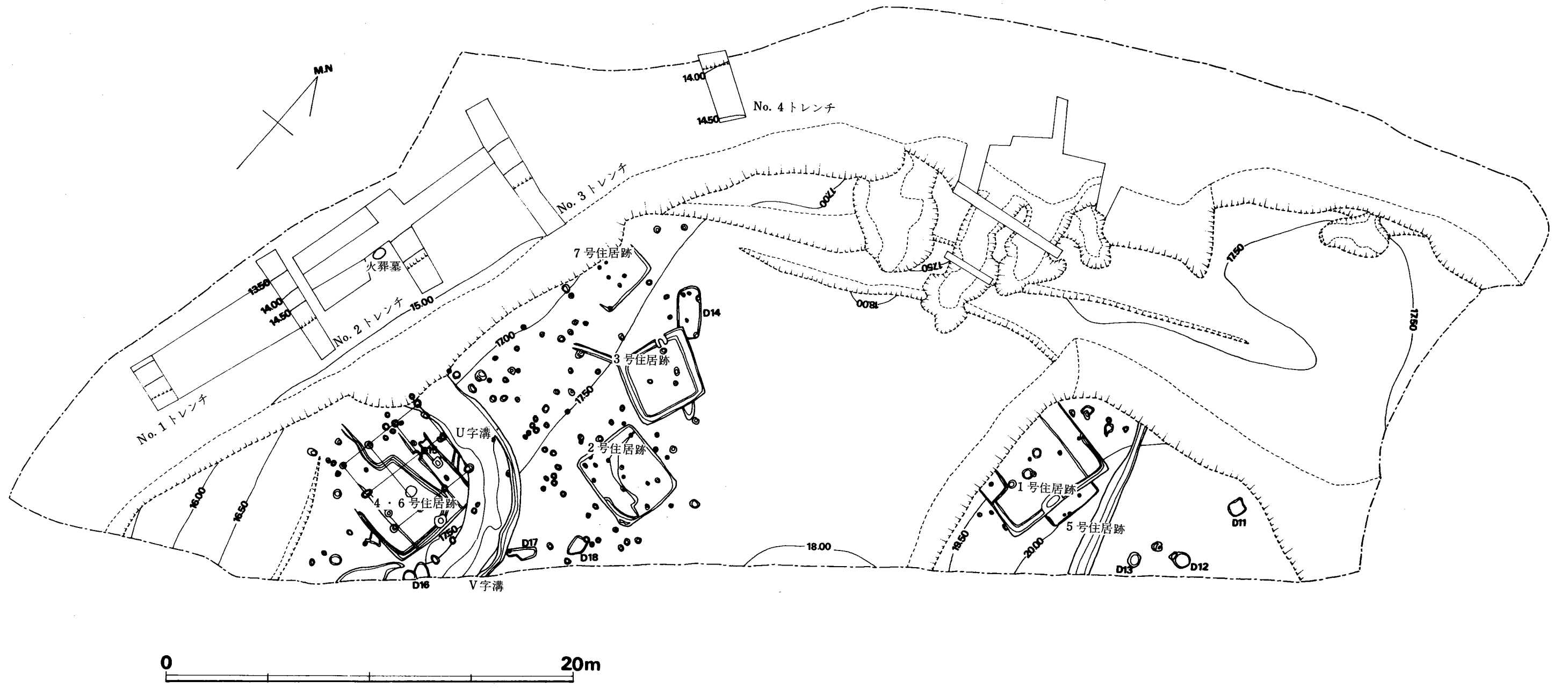


Fig. 4 向山住居群遺構全体図 (縮尺 1/200)

### Ⅲ 向山遺跡住居群の調査 (Fig. 4)

向山古墳群をのせる丘陵に沿って西側に広がる河岸段丘は、長谷川に潤される水田面より3～6m高い台地となり、住居としても絶好の場所となっている。昭和50年3月の予備調査によって試掘トレンチに住居跡・火葬墓がかかったので、遺跡としての断定を下し、昭和51年6月より調査を行なった。調査の結果、弥生時代後期竪穴住居跡4軒、古墳時代初頭竪穴住居跡2軒、古墳時代後期竪穴住居跡1軒、円形周溝（U字溝・V字溝）、土塚5基、中世掘立柱建物1棟、火葬墓1基を検出した。遺物は、弥生中期・後期・終末期土器・石器類、古墳時代初頭土師器・土玉、古墳時代後期土師器・須恵器・滑石製玉類・鉄器類、中世土師器・須恵器・瓦器・磁器類等が出土している。

#### 1 第 1 号住居跡 (Fig. 5・6, P.L.3)

当住居群中の最上段西端部に、西半部を削除された状態で検出された。平面形方形をなし、一辺5.76mで、正方形と推定したとして約33.2㎡の面積を持つこととなる。住居跡の上部は削平を受けており、最も残りの良い壁の高さは58cmを測る。主柱が2本柱でベッド状遺構を削り出し、中央に炉を有する構造である。

ベッド状遺構は北側壁に沿って幅110cm、高さ14cmにつくり、更に西南隅にも幅90cm、高さ12cmにつくっている。いずれも断面で確認したが、地山（花崗岩培乱土）を削り出して設けたものである。

柱穴は、床面及びベッド状遺構上に11個を検出したが、このうち中軸線上に並ぶ2個のものが、いずれも床面より60cmの深さで特に深く、その位置などから考えて2本の主柱になるものと推定できる。

中央の大きめのピット中からは上面に炭火物を多く含む焼土が断面レンズ状に入っており中央炉と考えられるが、その下方は深さ54cmの小ピットとなっており、炉設営以前の遺構と考えられる。また、東壁に沿った中央位置に、皿状の楕円形ピットがあり、この中にも、上半に真赤に焼けて一部がかたくなった焼土、下半に大形の炭化物を多量に含む暗褐色土がつまっております。これも炉であると考えられる。

壁に沿って幅15~25cm、深さ10~15cmの細い溝が巡っている。この周溝は、北壁中央部から東壁寄りに巡り、南壁からベッド状遺構の外縁を迂回している。この溝の深さをみてゆくと、東壁沿いの中央炉に向かって低くなり、水が入るならば、南北双方より流れ込むようになってくる。残っている部分でこの周溝の巡っていない部分、すなわち、北壁際西半部には、精査の結果、幅7~2cm、深さ5~2cmの細かい溝状の部分が切れぎれになって壁際にびったり沿って検出された。これは、壁に沿って打ち込まれた板列の痕跡であろうと考えられる。他の壁際に検出されないことから、少なくとも、壁の土留めの役を果しているとは考え難い。

なお、この住居跡は焼失して廃棄されたものである。床面より炭化材及び焼土が多量に検出された。この床面の炭化材・焼土の上は炭化物・焼土の細片を多量に含んだ土で覆われていた。

炭化材の遺存状況はそれほど良くはないが、主柱に該当するようなものは見当たらず、その方向等をみると垂木材がそのまま焼け落ちたと考えるのが妥当であろう。遺存した炭化材は大きいもので幅13cm、長さ145cmを測り、その断面は半円形をなし、焼失後のある程度の攪乱及び発掘技術等を考えると、一応丸太材を用いたものと考えたい。

遺物の出土状態を観察すると、先述の焼土及び炭化物の細片を多量に含む覆土の上に、挙大及びその倍程度のいくらか角のとれた角礫が数10個検出された。この礫群と同レベル或いはその直上に完形に近い土器が3個体（壺・甕・高杯）みられた。これらの礫は住居跡中では南半に集中して、更に、住居跡南外方の表土直下包含層にもかなり発見され、また、焼けた痕跡は全くみられず、これらの土器が、家屋焼失前及び焼失中のものとは考えられず、明らかに焼失後のものである。話は前後するが、床面直上では、直立或いは横転したままの土器4個体も検出している。

#### 出土遺物 (Fig. 7・8・9・10, PL. 22・23)

1号住居跡より出土した遺物は、大別して土器類と磨製及び打製石器類、木実の炭火物にわかれる。それらは、床面に密着するもの、床面より15~20cm浮いた状態で礫群の直上及びそれと同一レベルにあるもの、更に覆土の中でも表土直下から出土しているもの等の三類に分けられる。ここでは床面直上のものと覆土中出土のものに分けて以下述べたい。

##### a) 床面直上出土の遺物

#### 甕 (Fig. 7-1)

住居跡東南の東側壁に接して、壁内側周溝部より出土している。完形であるが、出土当初より極めてよろしく、この住居跡床面出土土器すべてにみられる特徴である、器壁の薄さと残りの悪さが際立って観察される。口縁がくの字状に外反し最大径を胴部中ほどに有し、丸底風平底のやや小さい底部をもち、全体として、ラグビーボール状の器形をなす。粗い柵目の縦ハゲが口縁部外面から頸部にかけて施される。底部は稜が一応明確ではあるが、不安定な丸底風をな

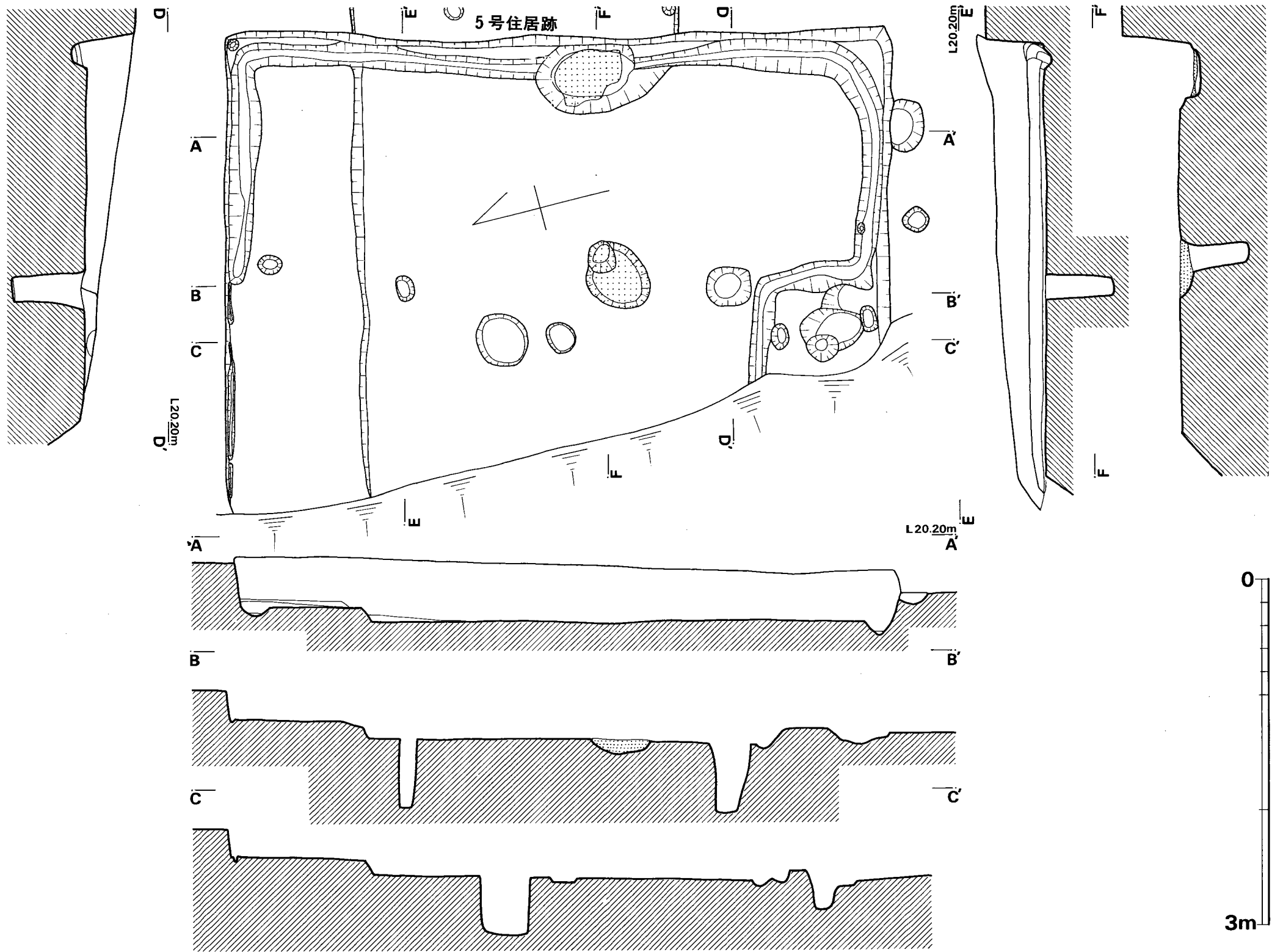


Fig. 5 向山第1号住居跡実測図 (縮尺 1/40)



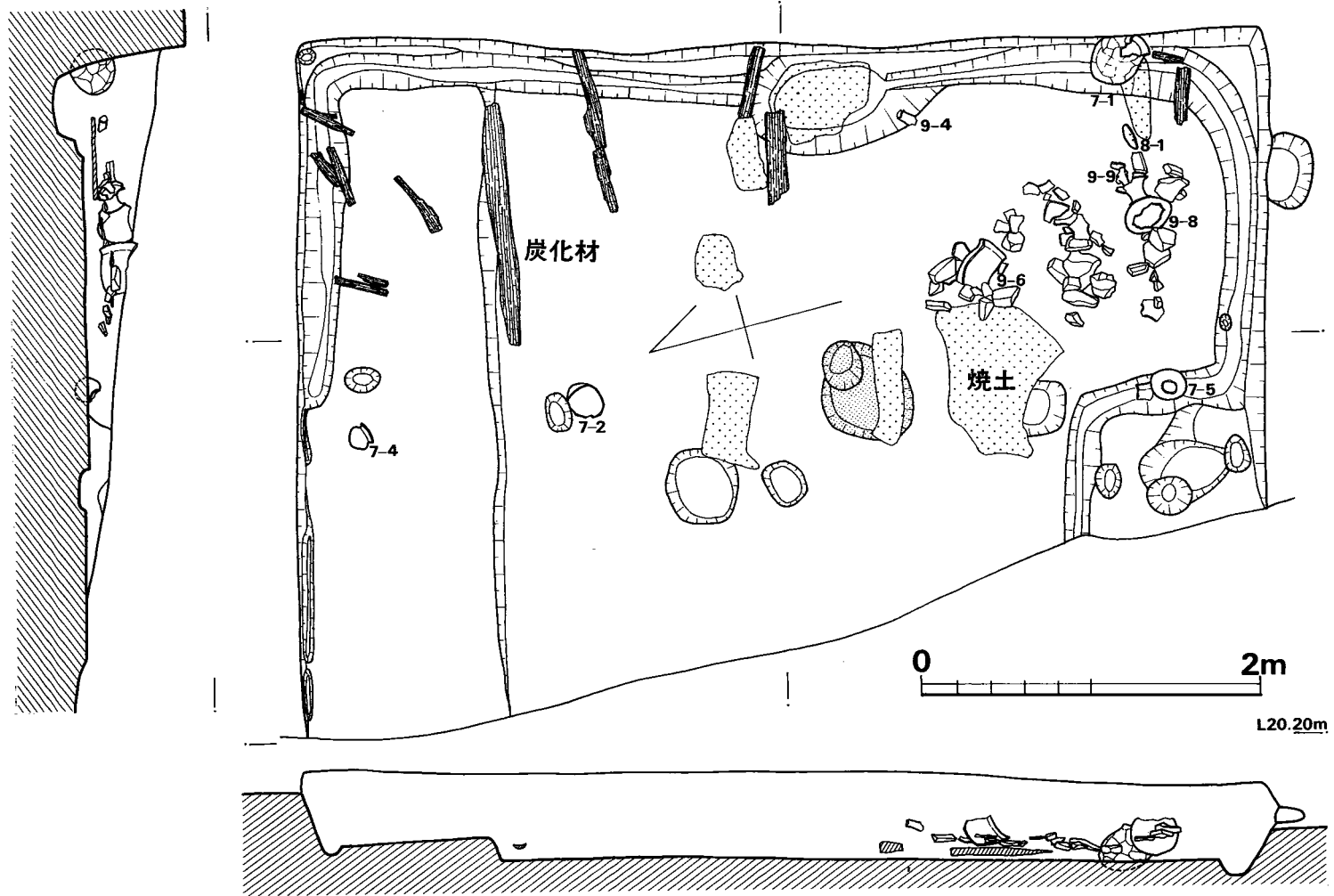


Fig. 6 向山第1号住居跡遺物出土状態実測図 (縮尺 1/40)

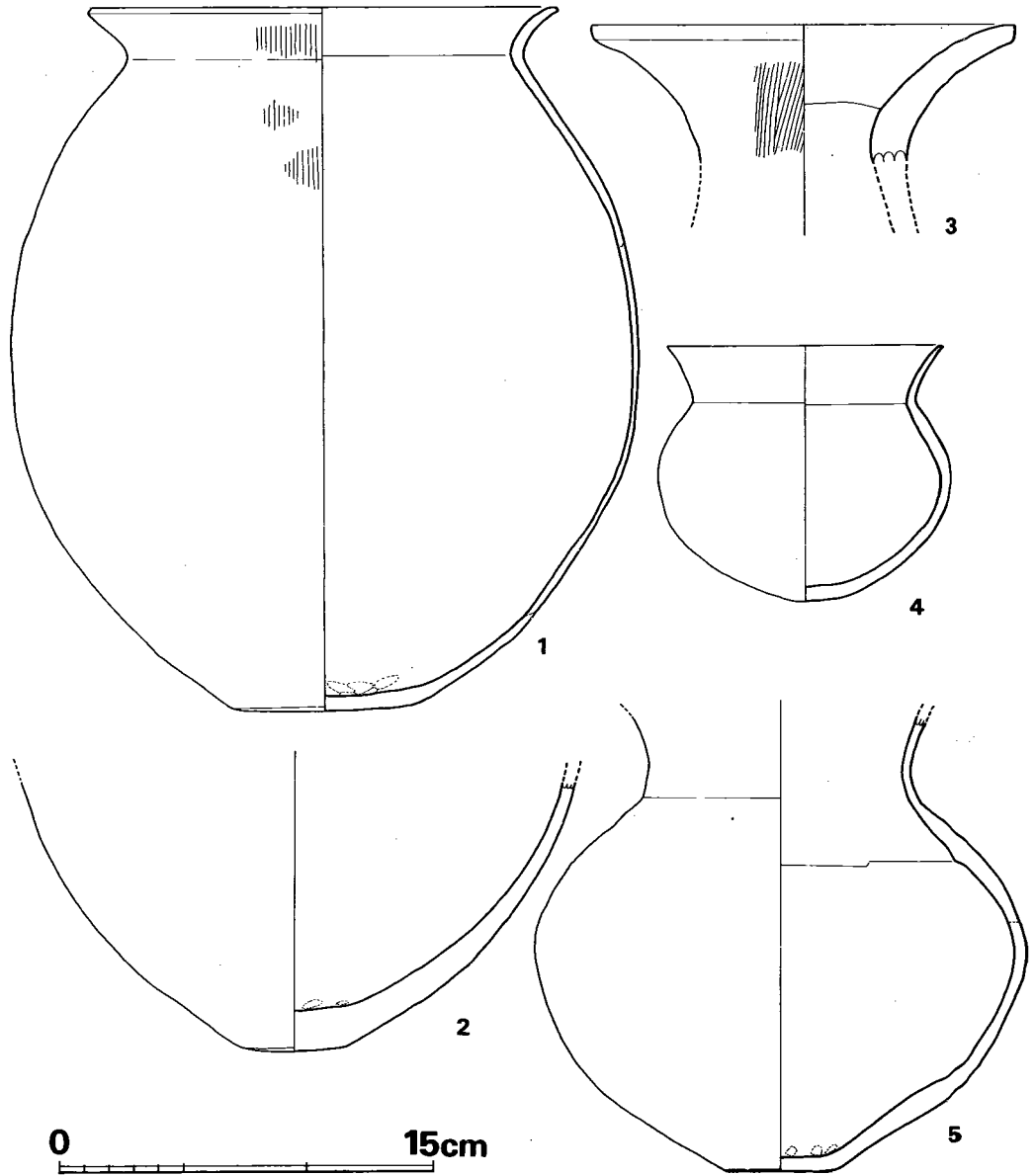


Fig. 7 向山第1号住居跡床面出土土器実測図 (縮尺 1/3)

し、内面には指オサエ痕がみられる。全体として前述の如く極めて薄手で残りが悪く、器表の調整等はそのほとんどが不明である。胎土に砂粒多く含み、焼成不良で黄褐色を呈し、口径18.8cm、器高28.4cm、胴部最大径25.1cmを測る。

## 壺 (Fig. 7-2・5)

5は、張ってやや扁平な胴部に、ゆるく外反し伸びる口縁を有し、器高 $18.5\text{cm} + \alpha$ を測る。底部は小さく、やや丸底風の平底をなし、内面に指オサエ痕が残る。胴上端内面にはヘラ削りによる明確な稜線が残るが、他器表は焼成不良のため残り悪く調整不明である。胎土に粗砂粒極めて多く含み、内面黒色、外面淡褐色を呈する。2は、小さい丸底風平底を有するやや大型の壺形土器の胴部以下である。胴部下半から底部へ急にすぼまり、厚いが $4.2\text{cm}$ と小さい丸底風の不安定な底部をなし、内面には若干の指オサエ痕がみられる。他部器表は焼成不良のため調整不明である。胎土に極めて多くの粗砂粒を含み、内面は黒色乃至暗灰色、外面は淡褐色乃至黒灰色を呈する。

## 器台 (Fig. 7-3)

厚い器壁を有し、強く外反する口縁をもつやや大型の器台上半である。口径 $17.2\text{cm}$ を測り、外面には粗い杓目の縦方向ハケが施され、口唇部周辺から内面にかけて横ナデ調整が行なわれる。胎土に細砂極めて多く、粗砂も少量みられ、焼成やや不良で、褐色を呈する。

## 小壺 (Fig. 7-4)

口縁外反し、やや張る胴部に、不安定な丸底をなす土師器坩の流りに乗る小壺である。口径 $11\text{cm}$ 、胴部最大径 $11.8\text{cm}$ 、器高 $10.4\text{cm}$ を測り、胎土は精製されるが、全体的に薄手で、焼成不良黒色を呈し、極めてもろく、器表調整等不明である。

## 石器 (Fig. 8)

石製穂摘具(1)は住居跡東南隅寄りの床面に密着して出土したものである。長さ $12.5\text{cm}$ 、巾 $4.7\text{cm}$ の中型～小型に入るが外湾片刃のものである。2孔が穿たれているが、貫通しない1孔がみられる。刃部体部間の稜は両端部では明確であるが中央部附近ではほとんど認められない。磨研部は丁寧に磨かれているが、剝落部も多い。わずかに刃部に直交して擦痕が観察される。石材は硬質である。(中間研志)

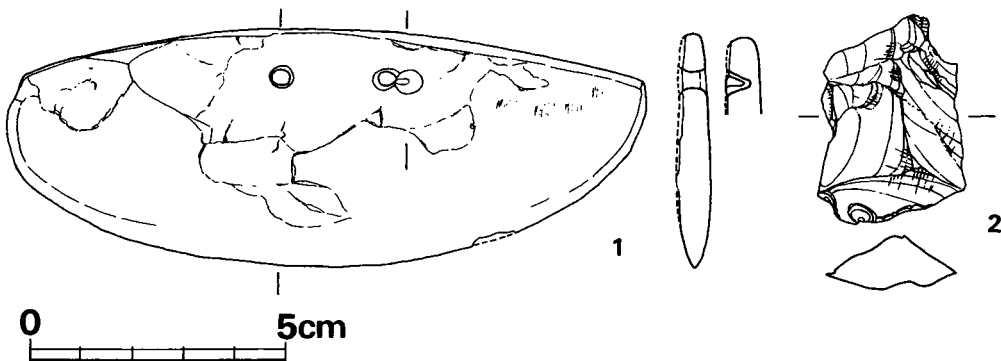


Fig. 8 向山第1号住居跡床面出土石器実測図 (縮尺 2/3)

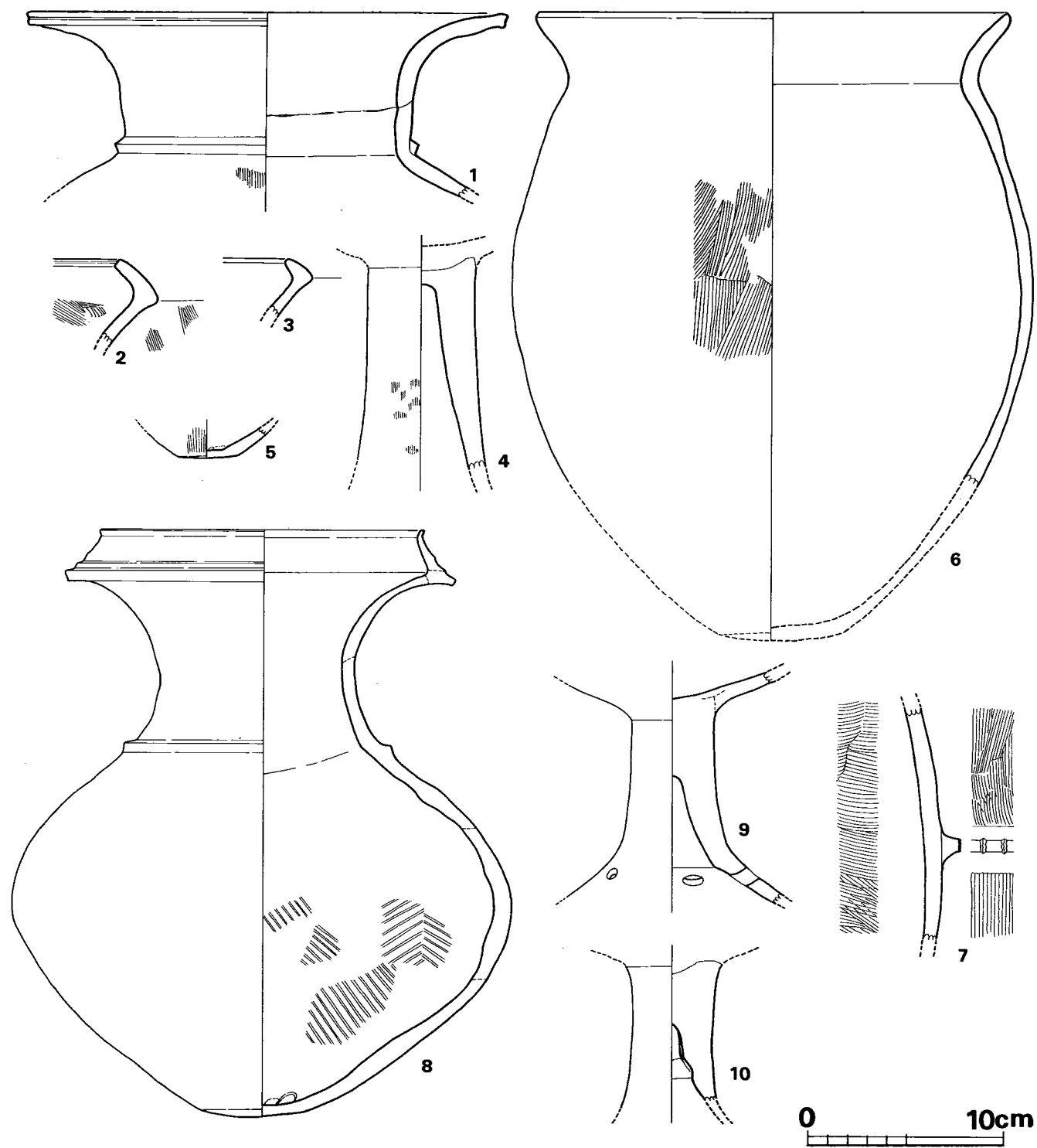


Fig. 9 向山第1号住居跡覆土内出土土器実測図 (縮尺1/3)

## b) 覆土内出土の遺物

## 甕 (Fig. 9-6・7)

7は覆土中でも上位より出土した大型土器の胴部破片である。断面はコの字状の貼り付け凸帯を有し、凸帯上には貝殻腹縁による刻目を施す。内面は横位の粗い杵目のハケが施され、外面は縦方向のハケがみられる。胎土に粗砂粒多く含み、焼成良好で茶褐色を呈する。6は、覆土中の礫群上に横転した状態で出土したもので口縁外反し、胴部のやや長い器形で、胴部外面に細かい縦ハケ調整を行なっている。口径24.4cm、胴部最大径26.8cmを測り、胎土に粗砂多く含み、焼成不良で淡黄褐色を呈する。胴部外面に煤の附着がみられ、実際に煮沸に用いられたものと考えられる。

## 壺 (Fig. 9-1・2・3・5・8)

1・2・3は覆土上半より、5・8は礫群中より出土している。1は大型の開口壺頸部から口縁部で、頸部・胴部境目に三角凸帯を有する。口唇部先端は凹状をなし、口縁部上半の内外で横ナデ調整がみられ、胴部上端外面に細かい縦ハケがわずかに残る。口径24.8cm、頸部径14.7cmを測り、胎土に粗砂粒を多く含み、焼成やや不良で、内面黄赤色、外面赤茶色を呈す。2・3は、袋状口縁壺の系統の逆くの字形口縁の壺形土器片である。2・3ともに屈曲部外縁は明確な稜をなす類である。2の口唇部先端は凹状をなし、屈曲部以下に右下がりの横・縦位の細かいハケ調整が行なわれ、以上は横ナデを施す。

3は磨滅著しく調整不明で、いずれにも粗砂多く含み、2は焼成良好にて淡茶色呈し、3は焼成不良で赤褐色を呈する。

5は小型壺の底部と考えられ、底部径3cmの丸底風平底をなす。底部器壁薄く、内面に指オサエ痕残り、外面にわりと粗い縦方向ハケを施す。焼成不良で内面は淡茶色、外面黒色乃至暗褐色をなし、胎土にはかなりの粗砂を含む。8は、複合口縁のカーブの美しい完形壺である。屈曲部以上は内傾し、口唇先端がちょっと外反する。胴部は張り、その最大径は胴中ほどに位置し、頸部中位に向かってすぼまり、更に口縁に大きく開いてゆく。底部は、胴と底部の境がそう明確ではなく、丸底風平底というよりは、もう丸底とっていいような薄い不安定な形態を示す。焼成やや不良で黄白色を呈し、胴内面には粗い杵目のハケが斜めに残り、外面はヘラ磨き部分がわずかにみられる。胎土に粗砂粒多量を含み、口径16.6cm、頸部最小径9.9cm、胴部最大径25.5cm、器高30.3cmを測る。

## 高杯 (Fig. 9-4・9・10)

4・10は、覆土中上半より出土し、9は、壺8と接して礫群中より出土している。4は、脚部径も大きく、長い大型の高杯である。脚内面は、棒状工具を突込んで回したような横方向の痕跡がみられ、外面には細かい縦ハケ調整が行なわれる。胎土に多量の粗砂粒含み、焼成不良で淡黄褐色を呈する。10も、色調・胎土ともに4と酷似し、4と同時期かと思われるが、こち

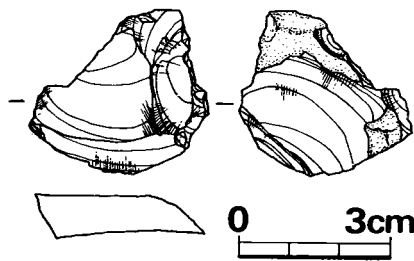
らはやや小型の類である。脚内面にはシボリ痕がみられる。9は、胎土に多く砂粒を含むが、焼成不良黄白色を呈する。脚裾部が内面の明確な稜からひろがり、円孔5個が穿たれている。器表全面にわたって剥落著しく調整は不明である。

以上、第1号住居跡床面及び覆土中の土器を概観したが、うち、床面の土器は後期後半代に覆土中の1・4は中期後半代に、2・3・5は後期前半～中葉に、6・7・8・9は後期終末期に比定されよう。特に8の完形壺は、北九州市の馬場山遺跡(註1)・高島遺跡(註2)などでみられ、当遺跡が北九州方面からの影響が強いことが考えられる。(中間研志)

註1) 北九州市埋蔵文化財調査会編「馬場山遺跡」1975

註2) 北九州市埋蔵文化財調査会編『福岡県北九州市小倉南区・高島遺跡』「古文化談叢第3集」

1976



石器 (Fig. 10, P.L. 23)

石質は黒曜石。一部自然面を残す。多方向からの剝離痕が認められる。(稲富裕和)

Fig. 10 向山第1号住居跡覆土内出土石器実測図 (縮尺 2/3)

## 2 第2号住居跡 (Fig. 11, PL. 9・10)

1号住居跡の位置する最上段から一段下の河岸段丘上にこの住居群の中心部がある。このうちの第3号住居跡の東南隣に第2号住居跡が位置する。東西辺長4.25～4.10m、南北辺長3.5mを測り、やや東西に長い長方形プランを呈する。床面積は14.7㎡となる。住居跡上部はかなり削除されていた。この住居跡は、第1・3・6号住居跡と異なり、焼失によると考えられる炭化材・焼土等は検出されていない。それにも拘らず床面に多量の祭祀用などの遺物を残していたのは注目に値する。

床面は、鍵の字形に西側と南側の0.5～1.4mの幅を深さ10～15cmに掘り下げて、東北側を略長方形に削り出している。結果としてベッド状の遺構の如くなるのであるが、床面積の半分を占めて、その位置等は、通有のベッド状遺構とは異なる。

柱穴は、大きく2種に分けられる。すなわち、床面の径30～20cmのピットと、壁際に沿って検出された小ピット列である。前者は大小あわせて14個あるが、主柱となるべきものが丁度うまい具合に並ばないが、ややいびつにはなるが4個のピットが4本柱の痕跡と考えられる。後

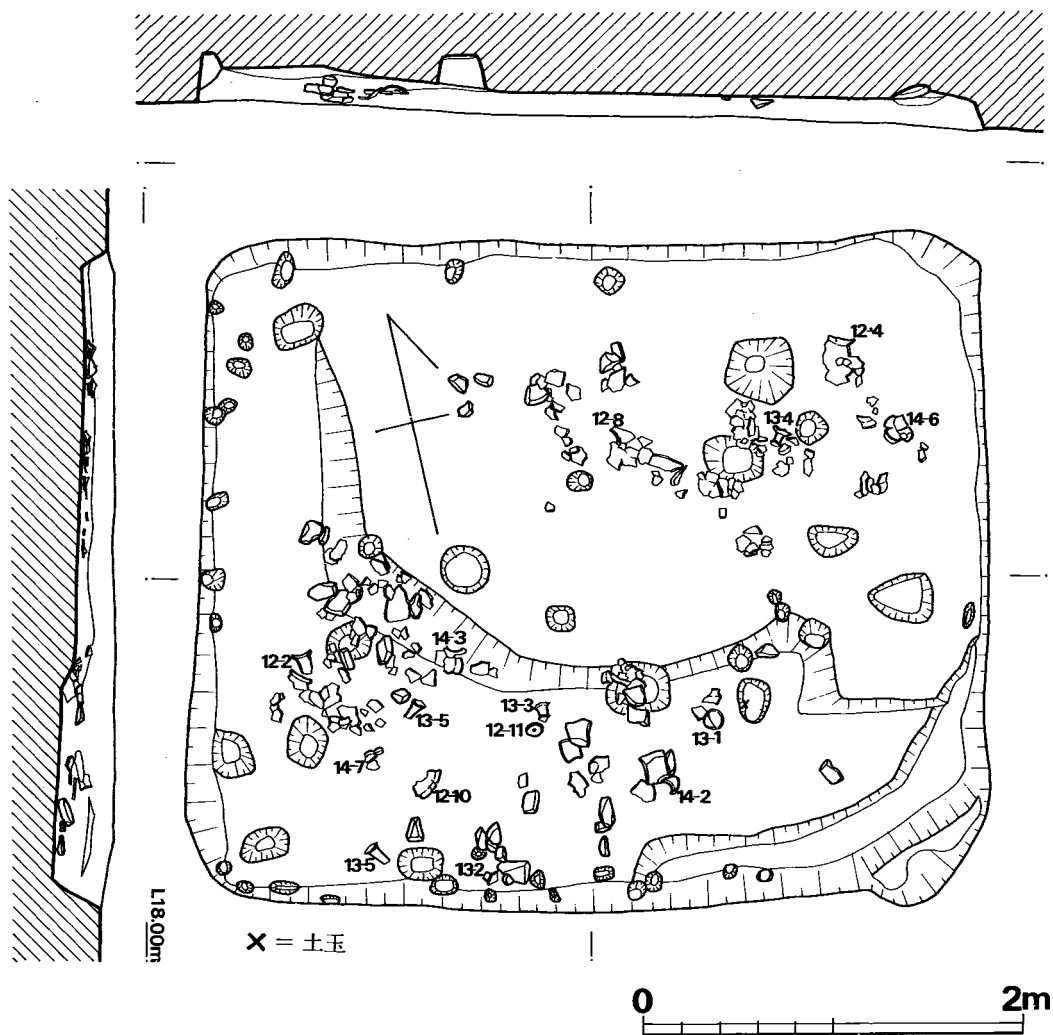


Fig. 11 向山第2号住居跡実測図 (縮尺 1/40)

者は、南・西・北壁際に、5～10cmの深さで並ぶものである。このうち、北壁際に並ぶ3ピットは約80cm間隔で検出され、わりと密に並ぶ西・南側において、この間隔での柱穴をみると、西壁に5個、南壁に4個が対応して認められる。この小ピット列については、総括において若干の考察を加えてみたい。

なお、炉跡と考えられるピットは発見されず、焼土・炭化物の残存も全く認められず、住居跡外の近辺にもそれらしい遺構も検出されていない。

出土遺物 (Fig. 12・13・14・15, P.L. 24・25)

第2号住居跡床面からは、全面にちらばって土器類が出土している。(Fig. 11) これらのも

ので特徴的にいえることは、やや小型の甕の出土が多く、また、高杯・埴・手捏ね土器の量が多く、更に土製丸玉の出土をも見ることである。以下、床面直上出土のものゝ覆土中出土のものゝに分けて述べてゆきたい。

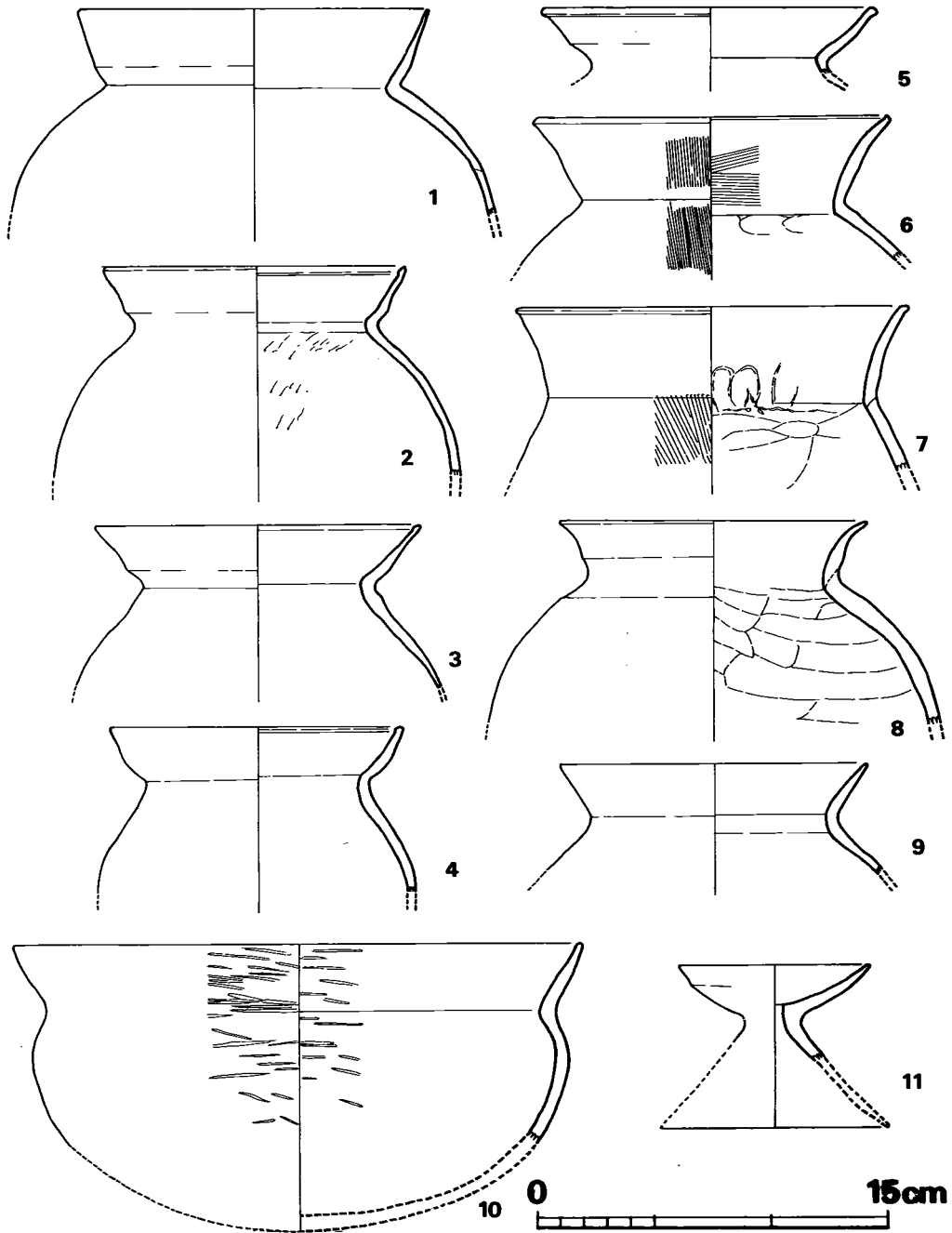


Fig. 12 向山第2号住居跡床面出土土器実測図(その1) (縮尺 1/3)



## a) 床面出土の遺物

## 甕 (Fig. 12-1~9)

**I類** (1~5) は、口縁がやや内湾気味に開くものである。これらはいずれも胴内面のヘラ削り調整が認められず、球形の胴部、丸底の不安定な底部を有する器形と考えられるものである。これらのうちでも、口唇部が薄くそのまま伸びるもの(1)や、口唇部内面に隆起をみせ段を有するもの(2・3・4)、口唇部外面が張り出し丸く突出するもの(5)などの細部のバリエーションに富む。1は、胎土に粗砂粒が目立ち、焼成やや良好で赤茶色を呈する。口径14.9cm、頸部径12.5cmを測り、胴部球形をなすものと思われる。口縁外面の頸部寄りに張り出しを有して、口縁部全体として内湾気味にみせている。2は、口径12.9cm、頸部径10.5cmを測り、口唇部内面に明瞭な隆起をみせ、頸部から口縁内面に強い横ナデ調整を加え、内面をへこませ、外面に張り出しをみせ、不明瞭な稜をつくっている。胎土精良で焼成良く、赤褐色乃至淡茶色を呈する。3は、器形としては2と同様であり、胎土・焼成も良く、外面赤褐色、内面黄褐色を呈する。4は、口径12.6cm、頸部径9.6cmを測り、やや小型に属するが、全体的な器形としては2・3と略同様である。ただ、口縁外面は丸く張り出し、稜をなすことはない。胎土に多量の粗砂粒を含み、焼成良好で、外面灰褐色、内面赤褐色を呈する。5は、口径14.4cm、頸部径10.1cmを測り、やや小型に属する。口唇外面が丸く張り出し、口縁内面ややへこみ、外面はやや張り出す。胎土に粗砂粒を少量含み、内面は暗褐色を呈するが、外面は二次焼成を受けて赤茶色を呈し、器表剝落してザラザラしている。

**II類** (6~9) は、口縁が外反し、胴部内面にヘラ削り調整がみられるものである。これらのうちでも、口唇端が平坦面をなし、口縁部がやや長く外反するもの(6・7)、口唇部がやや鋭く尖り気味におさまるもの(8・9)などがある。6は、口径15.5cm、頸部径11.3cmを測り、口縁長く外反するが、その口縁内面には段を有する。口縁及び胴部外面に縦方向の細かいハケ調整、口縁内面には横方向の同様のハケ調整を行なう。胴部内面は右から左への横方向のヘラ削り調整を行なう。胎土に細砂粒及び大きめの砂粒少量を含み、焼成やや不良で明褐色を呈する。7は、口径17cm、頸部径14.2cmを測り、口唇部に平坦面を持つ口縁部は、やや長くゆるやかに外反する。頸部の屈曲が著しくなく、胴部は球形よりやや長めの器形になると思われる。頸部において接合跡が明瞭であり、その上を指で上方にオサエナデを行なっている。頸部以下の胴部には斜め気味のやや粗いハケ調整が施され、内面にはヘラ削り調整が行なわれる。胎土に細砂粒少量含み、焼成やや良好、外面灰黒色、内面明赤褐色を呈する。8は、口縁端細く外反し、外面には強い横ナデによる稜をみせる。口径13.1cm、頸部径10.8cmを測り、内面には右から左への横方向のヘラ削り調整を施す。内面に少量の粗砂粒がみられるが全体的には胎土精良で、焼成良好、淡黄褐色を呈する。9は、口径13.2cm、頸部径10.6cmを測り、尖り気味の口唇部にむかって外反する口縁を有する。やや小型の甕である。頸部以下の内面には、ヘラ

削りによるとみられる稜がみられる。胎土に少量の細・粗砂粒を含み、内面は淡赤褐色を呈するが、外面は2次焼成を受けて赤褐色を呈し剝落著しい。

#### 鉢 (Fig. 12-10)

口縁部が軽く開き頸部で屈折して、わずかに頸部直下で張り、そのまま尻すばまりに底部に移行し、丸底の底部となるものであろう。口径24.3cm、復元器高12cmを測る。内外面ともに粗い横方向のヘラ磨きがみられ、外面は頸部凹部を除いて全面に煤附着が認められる。粗砂少量を胎土に含み、焼成良好にて淡茶褐色を呈する。

#### 器台 (Fig. 12-11)

浅く小さい受け部と、広がる脚部との間に径0.6cmの貫通する孔がみられる小型器台である。受け部口径8.1cm、くびれ部径2.4cm、復元脚部底径9.8cm、復元器高7.0cmを測る。調整不明であるが全体として精製な感じを受ける。細砂粒多く含み、焼成良好にて黄褐色を呈する。

#### 高杯 (Fig. 13-1~6)

床面から出土した高杯は6点あるが、このうちでも、器壁の薄手のもの(4・5)や、脚が低く器壁の厚いもの(2・3・6)に大別される。杯部は1・2から復元すると、いずれも杯部口縁と体部との接着部が屈折し、やや外反気味に広く開く器形を有するものと考えられる。

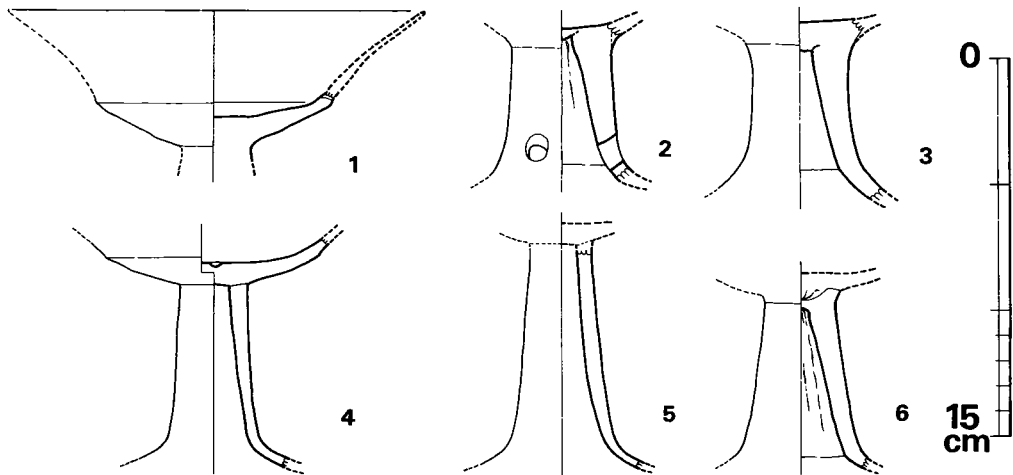


Fig. 13 向山第2号住居跡床面出土土器実測図(その2) (縮尺 1/3)

1は、砂粒を多量に含み、淡赤褐色を呈し、口縁部と体部の屈折した接合部できれいにはがれている。2は、脚部に円孔3個を配するもので、内面にはシボリ痕残る。脚中ほどは、わずかにふくらみをみせる。胎土に粗砂多量含み、焼成は良く黄褐色を呈する。3は脚部と杯部接合の際にヘソ状の突起を脚部に押し込んだ類と思われ、2も同様である。胎土には粗砂多く含み焼成良く淡白褐色を呈する。4は、薄手の脚を杯部底面にそのまま接合したもので、杯部の体部と口縁部との境に稜をなす。杯部内面中央に、径0.4cm、深さ0.15cmの貫通しない浅い孔を穿

っており、製作過程において必然的にできたのか、意図的に穿孔したものか不明である。脚部の裾との屈折部の内面には、5と同様に稜はみられず、丸く曲げている。胎土は精良であり、焼成はやや不良で淡茶褐色を呈する。5は、脚部のみであるが、器形としては4と同様である。胎土は粗砂多く、焼成やや良好で淡褐色をなす。6は、やや厚手で内面にシボリ痕を残す。脚部と杯部の接合部がきれいにはずれてヘソ状突起を押し込んだ跡がはっきりとわかる。胎土はわりと精良で、焼成良好、淡茶色を呈する。

#### 小型丸底壺 (Fig. 14-1~5)

1・2は、口縁開き、やや張った扁平な胴部をもち丸底になる典型的な小型丸底壺である。いずれも口縁外面の頸部寄りが外面に張り出し、甕の技法と同種である。1・2ともかなり薄手で、特に1の胴部は薄い。1の胴部内面には横ナデ調整がみられる。2の口縁内面には横

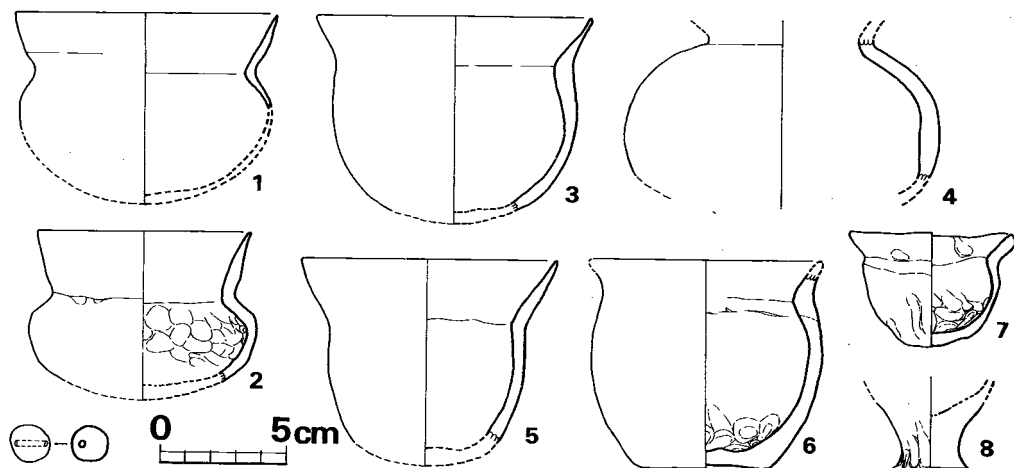


Fig. 14 向山第2号住居跡床面出土土器・土製玉実測図(その3) (縮尺 1/3)

ナデ、胴内面には指オサエ痕が全面に残る。いずれも胎土に粗砂粒少量を含み、焼成やや不良で淡茶褐色を呈する。3は、厚い頸部から急激に薄くなり開く口縁を有し、ほとんど張らずに丸く底部へすばまる小型壺である。器表磨滅して調整不明である。胎土に粗砂粒少量含み、焼成やや良好にて黄褐色となっている。4は、強く張った胴部のみであるが、口縁外反した丸底の小壺であろうと思われる。内面には横ナデ調整が残るが、外面は不明である。胎土に少量粗砂粒含み、焼成やや不良で白褐色を呈する。5は、張らない胴部に開く口縁を有する器形で、小型丸底壺というにはふさわしくないが、口縁内面をへこませていることなど、1や3と類似点が見出される。胴内面は指オサエの上を横ナデ調整を行なっている。胎土は極く少量の粗砂粒を含むが、全体としては精良であり、焼成やや良好で淡赤茶色をなしている。

#### 手捏ね土器 (Fig. 14-6・7・8)

6は、わずかに上げ底気味の平底を有しわずかに張った胴部に短かく外反する口縁を有する

甕形土器のミニチュアとでもいべき土器である。胴内部下半から底部内面に荒々しく指オサエ痕が残る。胎土に粗砂粒多く含み、焼成良好で茶褐色乃至黒褐色を呈する。7は、不安定な底をもち、短い口縁が外反する手捏ね小型品である。口径6.5cm、器高4.5cmを測る。全面、殊に胴部内面下半に指オサエ（ナデ）痕が荒々しく残る。胎土は精良で、赤茶色をなし焼成良好である。8は、充実した脚台部分であるが、やや上げ底気味で、高杯乃至台付土器のミニチュアと考えられる。脚台部外面に指オサエナデ上げ痕がみられ、二次焼成によって煤で全面黒色をなす。胎土には若干の砂粒含む。

#### 土製丸玉 (Fig. 14-9)

住居跡床面柱穴内の底面よりただ1点出土している。最大径1.6cm、最小径1.4cm、孔径2mmを測り、正球形ではなくやや歪んでいる。孔は、かなり片側に寄って穿たれている。胎土は精製され、焼成やや不良で赤褐色を呈する。

#### b) 覆土内出土の遺物

##### 甕 (Fig. 15-10)

10は、底部片で、平底の厚く大型の甕形土器であろう。胎土に多量の粗砂粒を含み、焼成良好で、色調は黄褐色をみせる。

##### 壺 (Fig. 15-1・8)

1は、厚い口縁内面に稜を有し、急に薄く頸部へすぼまる器形である。口唇端部には凹線が入り、内外ともに横ナデ調整を行なっている。胎土に粗砂粒多く含み、焼成良好で淡黄褐色を呈する。8は、丸く内湾する口縁を有する袋状口縁壺の破片である。横ナデ調整を行ない、胎土に粗砂粒多く含み、焼成良好で黄褐色をなす。

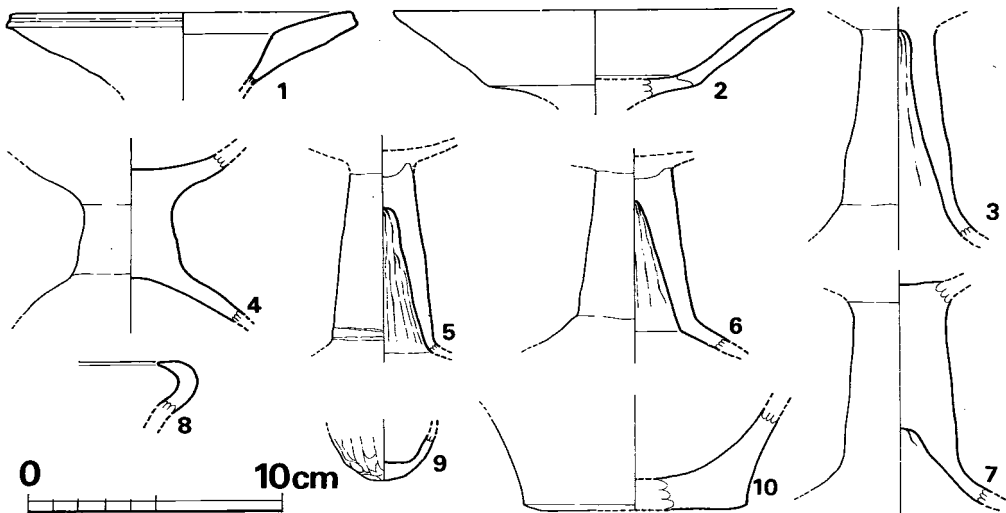


Fig. 15 向山第2号住居跡覆土内出土土器実測図 (縮尺 1/3)

## 高杯 (Fig. 15—2~7)

2は、杯部口縁と体部の屈曲が明瞭で、その接合部がきれいにはずれ、その接合法がはっきりとわかる。屈折部以上は内外面ともに横ナデ調整を施す。胎土に粗砂粒少量含み、焼成やや不良で暗褐色をみせる。3・5・6は、ほぼ同器形で、脚部中ほどでややふくらみをみせ、杯部と脚部の接合はヘソ状突起を押し込んだ形となっている。いずれも内面にシボリ痕がみられるが、5はシボリ痕の上を縦方向にナデでシボリ痕を消している。いずれも胎土に少量の粗砂を含み、焼成やや良好で、茶褐色を呈する。4は、脚部が充実して裾が内湾気味に広がる器形をなす。高杯というよりも、台付碗或いは台付壺の類に入るのかもしれない。脚部中ほどがややふくらみを見せ、磨滅しているため器表の調整は不明である。胎土に粗砂粒多く含み、焼成良好で白褐色を呈する。7は、脚部のかかなり下まで充実しており、脚部のやや裾寄りがふくらみをみせる。

## 手捏ね土器 (Fig. 15—9)

外面に指押圧痕を強く残す丸底の小壺状ミニチュア土器である。内面はわりと丁寧にナデしており、胎土に粗砂粒少量含む。焼成はやや良好で、内面は淡赤色、外面は淡黒色をなす。

以上、第2号住居跡床面及び覆土中出土の土器をみてきたが、床面の土器は、まず叩目を有するものは全くみられず、甕において内面にヘラ削りが行なわれるものも多く、口縁や胴部の形態からみて、畿内地方の布留期の特徴をもつものが多い。近くには、福岡市西区湯納遺跡(註1)出土の古式土師器群に酷似し、宮の前Ⅲ式(註2)より1段階下がる時期の所産であろう。覆土中出土の土器のうち、8・10は弥生式土器である。(中間研誌)

註1) 栗原和彦他「今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告第4集」1976

2) 下條信行・沢皇臣・高倉洋彰他「宮の前遺跡A~D地点」1971

## 3 第3号住居跡 (Fig. 16, P L. 12・13)

本住居跡は、予備調査の時にその一部が確認されていたものである。第2号住居跡の北西に近接して位置し、第14号土塚を切っている。

平面形は長辺約3.70m、短辺約3.50mの方形である。主軸方位はN63°E。竪穴の総面積(南西隅の排水溝は含まない)は約12.96㎡、床面積(周溝は含まない)は7.03㎡を計る。住居跡の当初の掘り方では、東・西・南壁側のみ周溝が掘られ、北壁側には掘られていない。床は張床で、地山上に約5cm程の厚さに土を張っており、その時に北壁側に周溝が作り出されている。尚、住居跡南西隅から台地の下方に延びる溝は、住居跡内の周溝底が南西部に向かって傾斜していることから、住居跡に伴う排水溝と考えられる。

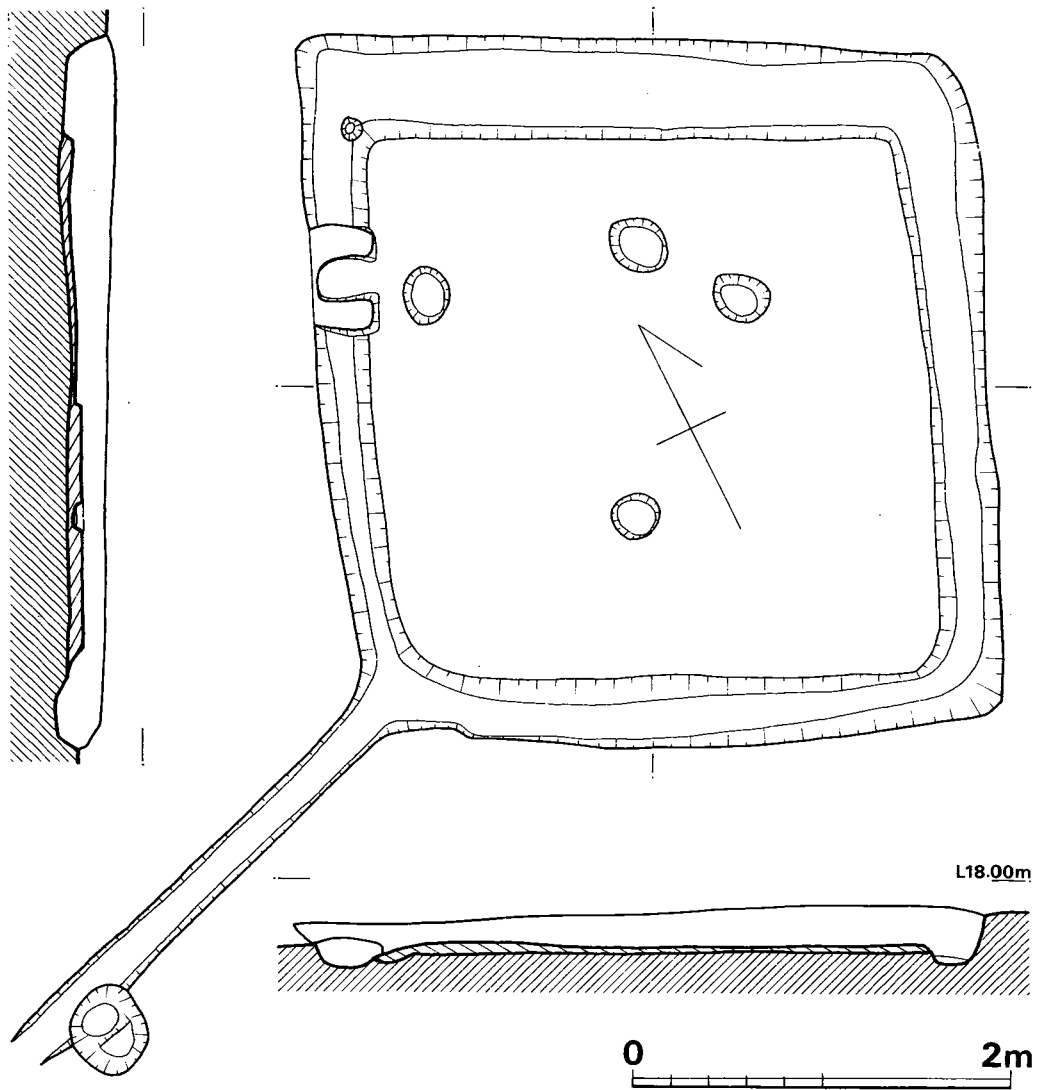


Fig. 16 向山第3号住居跡実測図 (縮尺 1/40)

住居内に小ピットは4個あるが、いずれも浅く、床面から約10cm程掘りこまれたものである。このうち1個は竈に近すぎるため柱穴とは考え難い。南北の2個が対になるものと思われる。

竈 (Fig. 17) は西壁の中央よりやや北寄りに作りつけられている。小型の竈で、黒褐色土の上に白色粘土を積み、補強材として甕の破片を埋め込んでいる。焚口部には焼土はほとんど見受けられず、竈自体もあまり熱を受けていない。煙出しはない。

床面上には、焼土と炭化材が散在し、特に北側と西側に多い。また完形の遺物が多く残っており、特に竈周辺と、

南東隅に集中して出土したが、住居跡の中央部では遺物の出土量は少なかった。南西隅からは滑石製の臼玉が連なった状態で出土した。焼土は所によっては7cm程あり、炭化材が散在することから本住居跡は火災によって廃棄されたものと思われる。(稲富裕和)

#### 遺物の出土状態 (Fig. 18・19・20)

第3号住居跡からは、特に床面からの豊富な遺物を得られた。前述の如く、焼失後そのまま廃棄せられたことによるのであろう。出土位置とその種類によって4つの群に大別できる。1は竈周辺に見られる煮沸用土師器群、2は、竈北側壁際に重ねられた状態で出土した須恵器杯群、3は、住居跡西南隅の滑石製臼玉群、4は東南隅付近にみられる須恵器杯・高杯、土師器壺・杯等である。

まず、竈周辺の土師器には、正面の把手付甕 (Fig. 23-1) と直口壺 (Fig. 24-8) とがあり、また竈北側には中に直口壺 (Fig. 24-7) がすっぽり中に入った把手付甕 (Fig. 23-2) が横転しており、更にその北に接してやや小型の把手付甕 (Fig. 23-3) が横転している。以上3種の把手付甕は各々は法量及び器形等も若干異なり、また直口壺もそれらのセットとして実際火にはかけていないが、生活容器として関係あるものなのであろう。3個の把手付甕はいずれも残る竈のふちにその把手部及びその基部がうまく懸る大きさで、実際に底部から胴部外面にかけて強く火を受けている。

西北隅の須恵器杯群は、須恵器杯身14個、杯蓋7個、土師器杯1個、盃状の短頸壺1個、滑石製管玉1点からなる。須恵器杯はかなり重なっている。明らかに重なり関係のわかるものを

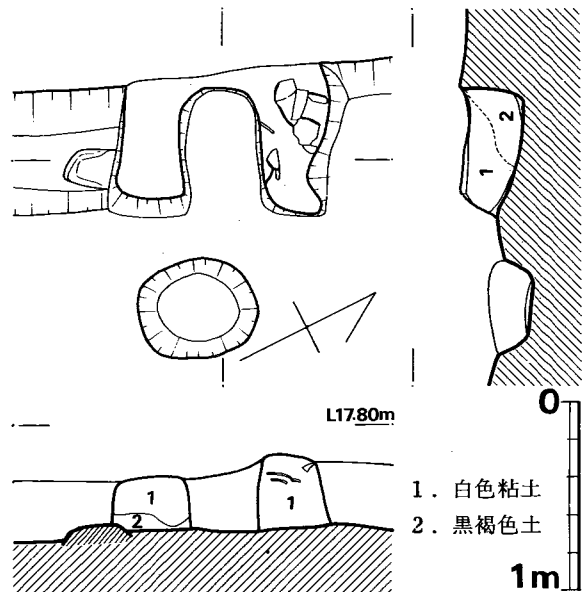


Fig. 17 向山第3号住居跡竈実測図 (縮尺 1/20)

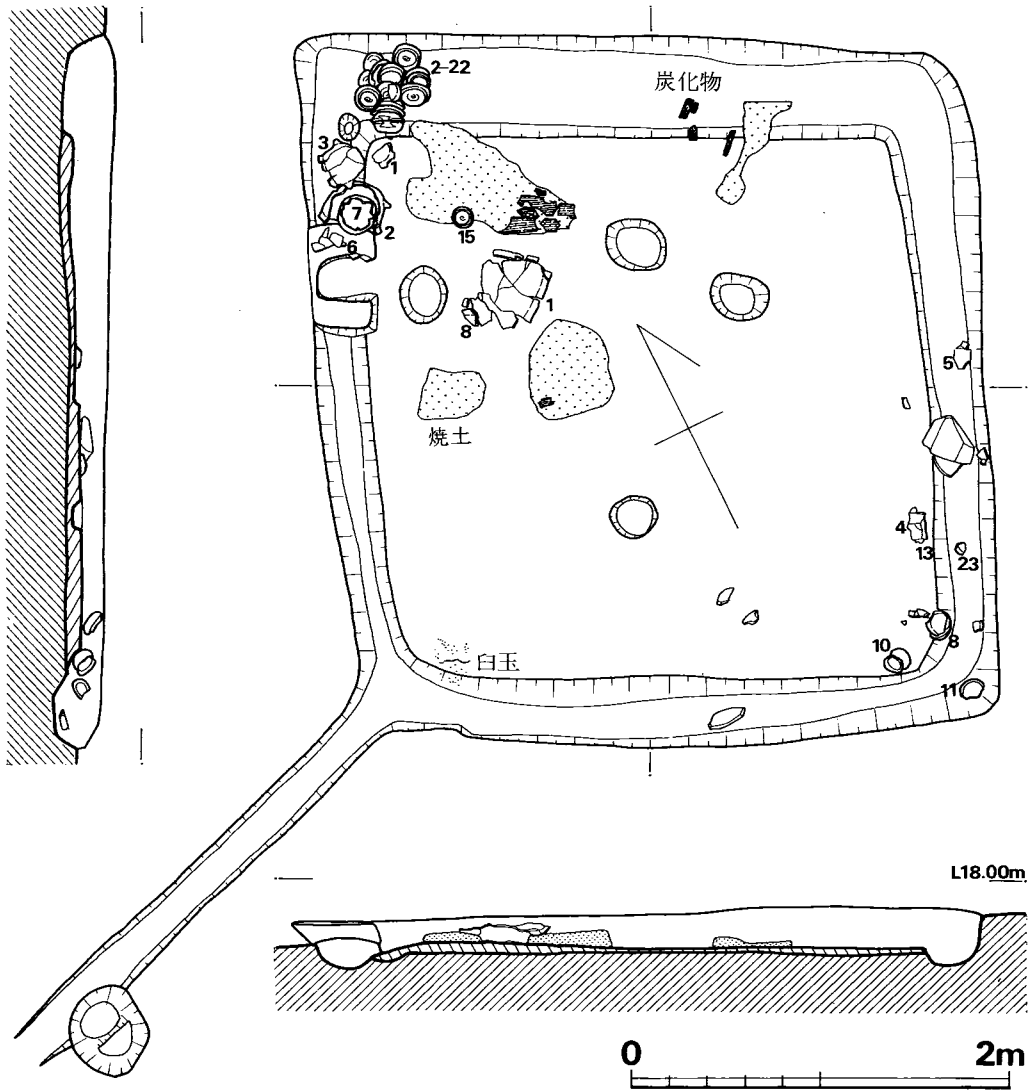


Fig. 18 向山第3号住居跡遺物出土状態実測図（縮尺 1/40）

呈示すると次のようになる。

- 5下（蓋）→6上（身）→19上（身）→18上（身）
- 2上（身）→11上（蓋）→3上（蓋）
- 13下（身）→9下（蓋）→12下（土師器）
- 7下（蓋）→10下（蓋）
- 4下（身）→16上（身）→22上（身）



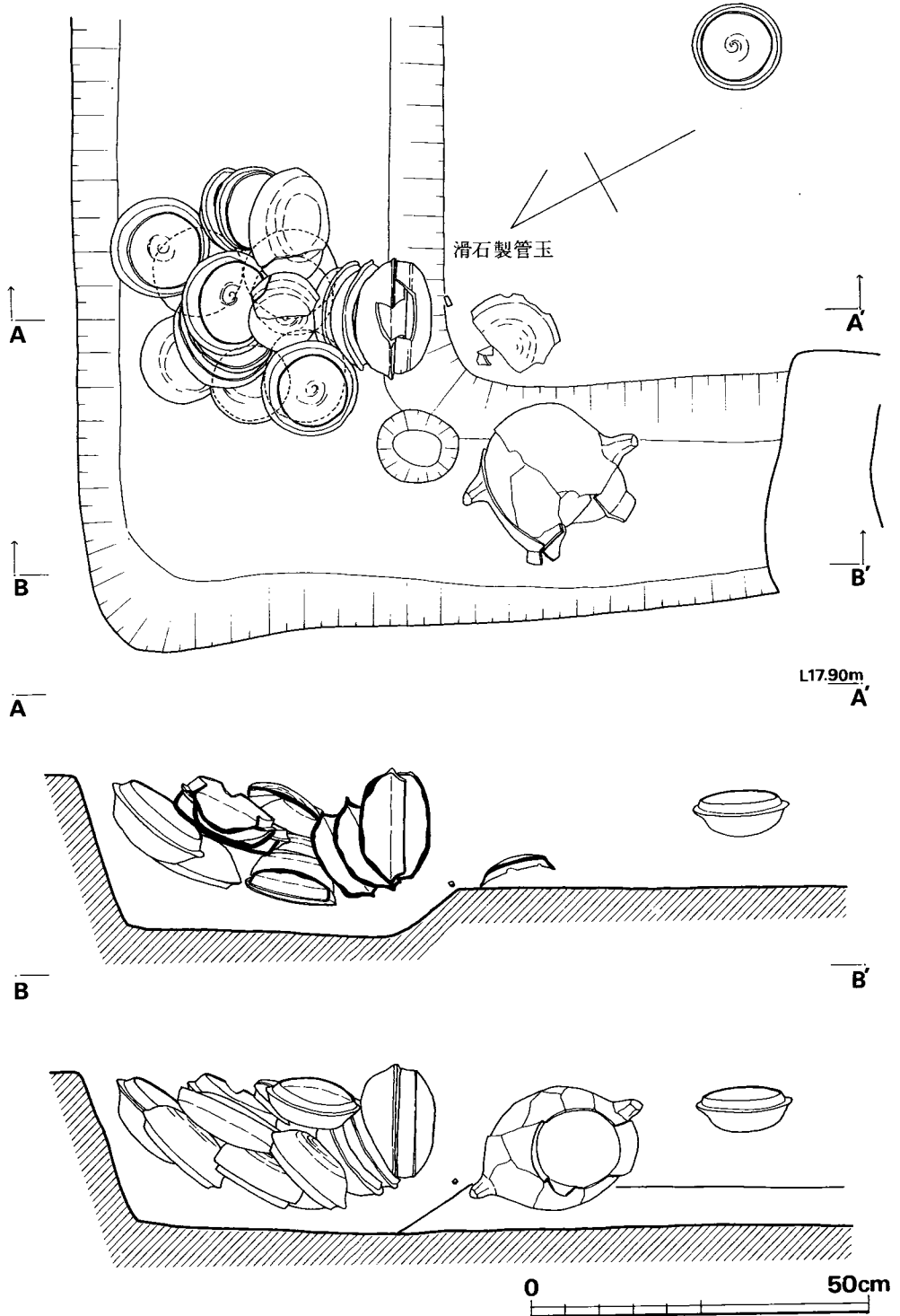


Fig. 19 向山第3号住居跡須惠器出土状態実測図 (縮尺 1/10)

数字はFig. 21・22（土師器はFig. 24）の番号を示し，上・下は口縁が上を向くか下を向けて伏せているかを示し，矢印は上から順序を表わす。これでもわかるように，身と蓋とセットになっているものは5下（蓋）と6上（身）だけであり，身と身を重ねたり，蓋と蓋を重ねたり，蓋を二枚重ねにしその上に身を重ねたりしている。これらは，中に何かを入れた状態ではなく，明らかに整理して積んで置いた状態である。また，これら杯群の最下位のものの出土状態をみると，そのすべてが斜めになっており，水平を保つものは無い。これではその上に何枚も重ね置くことは不可能である。恐らく，住居跡壁外方の上面に置かれたものが，その直下にくずれ落ちたものであろうと推定できる。壁上面の空間の物置場としての機能が考えられる一証左となろう。この群とわずかに離れて出土する杯もころげ落ちたものと考えれば，同一群としてとらえられよう。また，この群の下に盃状の土師器短頸壺（Fig. 24-9）が縦半分に割れ押しひしがれた状態で出土している。この土師器直上に水平に置かれる状態で出土した杯はみられず，杯の下に敷かれたものとは考え難い。この他に滑石製管玉1点もこの群の南側の隣脇に出土している。

次に，南東隅の1群をみると，須恵器杯蓋・高杯，土師器小壺・杯などがみられる。うち小壺は横転したとして原位置を保つと考えてもよいが，他は，一部分は床面に接地しているにも拘らず，壁斜面や周溝壁などに斜めに出土し，原位置に置かれたままの状態とは考えられず，

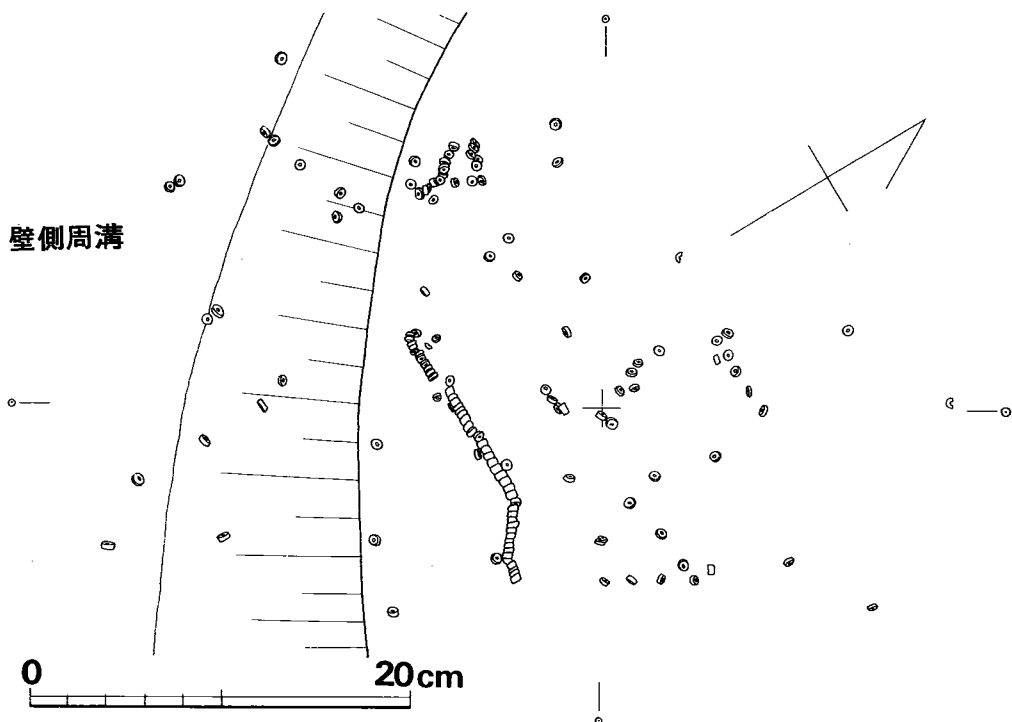


Fig. 20 向山第3号住居跡白玉出土状態実測図（縮尺 1/4）

これも壁上外面の空間の使用が推定できる。

西南隅床面に出土した滑石製白玉は、計141個が、45×30cmの範囲内に出土した。中央に線状に48個が一行に連なっている。この西側にも連なっていたと思われる一群がみられる。全部が一重の輪に糸で通されていたものと考えられ、それが上方に懸けられていたものが糸が切れて落ちたような散乱状態である。(中間研志)

### 出土遺物

#### a) 床面出土の遺物

#### 須恵器杯 (Fig. 21・22・PL. 26・27)

前記の如く一括品であり、同時期に用いられたことは疑う余地もないが、径の大小・細部の技法などのバラエティーに富む。杯蓋・身それぞれV類に分類される。

#### 杯蓋 (Fig. 21-1・3・5・7~11)

**I類**(1) 天井部・体部の境に稜をつくり、口唇部に明瞭な段を有し、全体的にシャープなつくりである。口径14.0cm、器高4.5cmを測り、胎土に粗砂かなり含み、黒灰色を呈し焼成やや軟質である。天井部外面は内から外との左廻りヘラ削り調整を行ない、他は回転ナデを施す。天井部内面には、当て台のものと思われる同心円文叩目を残したままであり、これはセットになる2の杯身内面と同様である。

**II類**(7・8) 体部と天井の境に稜を有し、口唇部に段を有するが、I類に比べ、稜がそれほど明瞭でなく、口唇部も丸味をもち、全体的にシャープさを欠く。7は、口縁直立し、8はやや開く。7は、天井部外面に内から外への左廻りヘラ削りを施し、他は回転ナデ調整・天井部内面には仕上げの一方指ナデがみられる。口径14.0cm、器高4.5cmを測り、胎土に粗砂かなり含み、焼成堅緻で灰白色を呈する。8は、口縁円周がかなり歪み、天井部外面に内から外への左廻りヘラ削りが施され、他は回転ナデを行なう。天井部内面は一方指への仕上げ指ナデを施す。口径15.2cm、器高4.2cmを測り、外表面に粗砂粒かなりみられ、焼きは全体として堅緻であるが口辺部にやや軟質部がみられる。外面は黒灰色～灰色、内面は灰色を呈する。

**III類**(3・5) 口径大きく、体部・天井部境に鋭い稜をつくるが、口唇部には段を有せずやや平坦面が斜めに内傾するもので、3は身4と、5は身6とそれぞれセット関係をみせるものである。3は、鋭い稜を有し、直立する口縁に、やや丸みを帯びてわずかに内傾する口唇部を有する。口縁一部が焼き歪んで内側へへこむ。天井部外面には内から外への左廻りヘラ削りが行なわれ、他は回転ナデ調整を施し、天井部内面には一方指への指仕上げナデを施す。口径16.2cm、器高5.0cmを測り、焼きは堅く内面青灰色・外面黒色乃至灰色を呈する。胎土には細(石英)粒を多く含み、粗砂も若干含む。5は、3と略同器形であるが、稜がやや丸味をもち口唇部がかなり内傾する。天井部外面は内から外への左廻りヘラ削りがみられ、他は回転ナデ調整で、天井部内面は一方指による仕上げナデを施す。胎土・焼成ともに3と同様である。

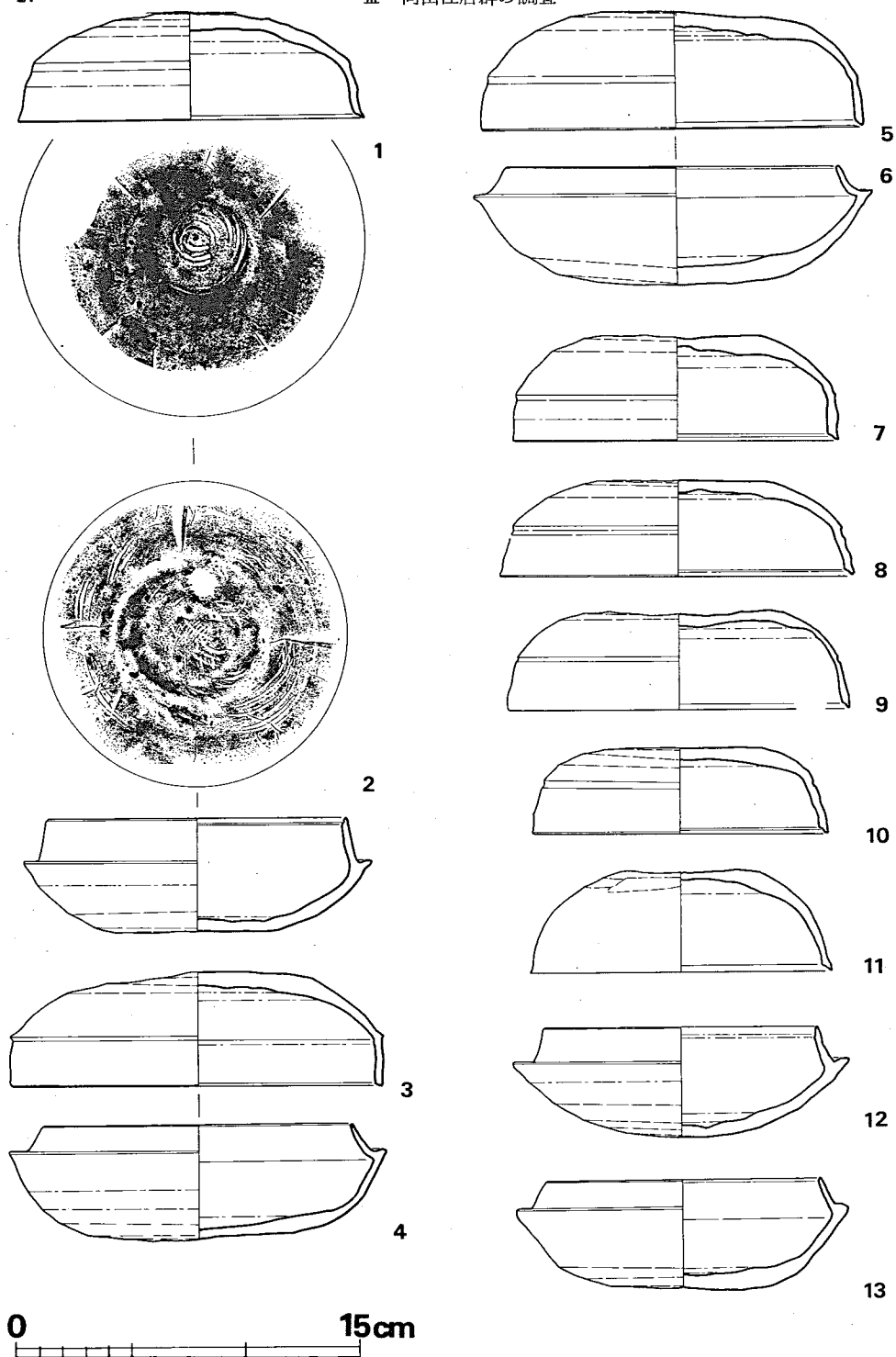


Fig. 21 向山第3号住居跡床面出土須恵器実測図(その1) (縮尺 1/3)

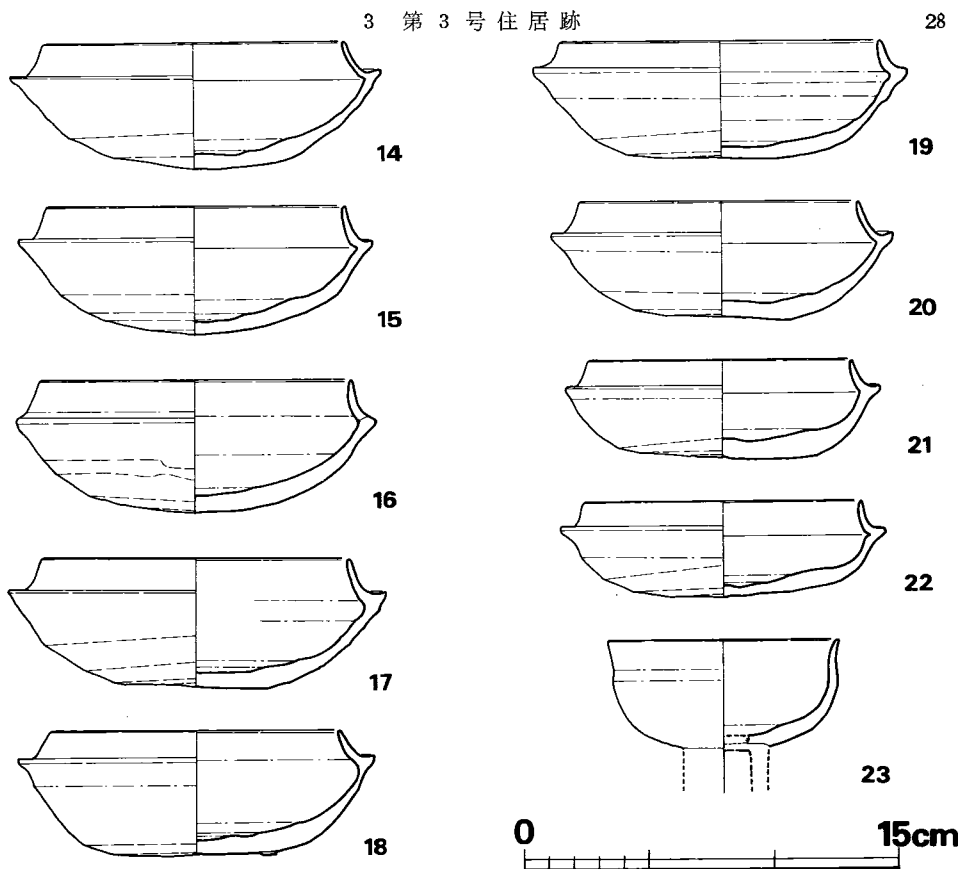


Fig. 22 向山第 3 号住居跡床面出土須恵器実測図 (その 2) (縮尺 1/3)

口径 16.5 cm, 器高 5.1 cm を測る。

**IV 類** (9・10) 口唇部に段を有し乍らも、肩部の稜は、稜として作られるのではなく、一条の沈線でもって簡略化されている類でやや小型となるものである。9 は、口辺部にかかり焼き歪みをみせ、全体的に薄手である。口径は 14.7 cm, 器高 4.3 cm を測り、天井外面に内から外への右廻りヘラ削りをみせ、他は回転ナデ、天井部内面には一方向の指仕上げナデがみられる。胎土に細砂粒多く含み、焼成堅緻で外面灰色、内面青灰色を呈する。10 は、9 と同様に口唇部に明瞭な段を有し乍ら、肩部の稜は沈線でもって簡略化される器形である。口径 12.8 cm, 器高 3.7 cm を測りかなり小型である。天井部外面に内から外への右廻りヘラ削りが施され、他は回転ナデ調整を行ない、天井部内面に一方向の指による仕上げナデがみられる。胎土に粗砂粒を幾分含み、焼成堅緻で黒色～黒灰色を呈する。

**V 類** (11) 非常に鋭い口唇端部と段を有し乍ら、肩部に段(稜)も、沈線もつくられず丸く天井へ昇る器形をなす。口径 13.1 cm, 器高 4.4 cm を測り、天井部外面に内から外への右廻りヘラ削りを行ない、他は回転ナデを施す。天井部内面には一方向の指仕上げナデがみられる。胎

土は精製されているが、粗大礫が少量混入しており、焼成堅く、外面灰黒色・内面淡青灰色を呈する。

杯身 (Fig. 21—2・4・6・12・13, Fig. 22—14~22)

**I類** (2) 蓋1とセットになるもので、立ち上がり端部に段を有し、立ち上がりは高く傾きの少ない端正な器形である。口径13.1cm, 器高4.9cm, 立ち上がりの高さ1.9cmを測る。底部外面に内から外への左廻りが行なわれ、他は回転ナデにより、底部内面にはいくらかナデで消されてはいるが、蓋と同じく同心円文叩目が残る。胎土及び焼成ともに1と同様である。

**II類** (12・13) 前段階の特徴を残し乍ら、簡略化が進んでいるものである。特に13は著しく変化して、**III類**・**IV類**に近いものである。12は、口径12.0cm, 器高4.8cm, 立ち上がりは1.5cmを測る。口唇部内側の段は、部分的に不明瞭になりかけながらも一応全周に巡っている。受け部上面は外側が平坦面をなし、先端部は稜をなす。体部から底部へと屈曲させずに丸くつくる。底面に内から外への左廻りへラ削りを残し、他は回転ナデを行なうが、底部内面に一方の荒い指仕上げナデを施す。外面に粗石英粒かなりみられ、1cm大の粗大礫も2ヶ所にみられる。焼成堅緻で、内面濃青灰色、外面青灰色乃至黒色を呈する。13は、直線的に内傾して伸びる立ち上りの上端面と内面が平坦に面取りされ、2・12等の簡略化されたものと観察できる。受け部は外方へ伸びず、その上面は平坦に、更にその外側は斜めに面取りされ、先端は稜をなす。この形態は、**III**・**IV類**にも例がない。底部外面は内から外への左廻りへラ削りがみられ、他は回転ナデによるが、底部内面には一方向の2本指による仕上げナデ調整がみられる。胎土に粗砂がかなり含まれ、数ヶ所に粗大礫混入もみられる。焼成堅緻で、受け部上面より内面にかけては青黒色を呈し、受け部以下外面は灰色乃至灰黒色をみせる。この色調の部分的変化により、蓋と合わせて焼かれたものと推定できよう。口径11.9cm, 器高4.9cmを測る。

**III類** (4・6) 口径大きく、立ち上がり等に前段階の特徴を認めず、それぞれ蓋3・蓋5とセットになるものである。4は、口径13.5cm, 器高5.0cmを測り、内傾する薄手の立ち上がりを有する。焼き歪みが幾らかみられ、胎土に細石英粒を多く含み、焼成堅緻で灰色乃至淡青灰色を呈する。底部外面に内から外への左廻りへラ削りがみられ、他は回転ナデを行なうが、内面には一方向の指仕上げナデがみられる。6は、4とほとんど同器形で手法・焼成・胎土とも同様である。口径14.1cm, 器高5.2cmを測る。

**IV類** (14~20) 器高は深いが口径が中型で、立ち上がり外湾しながら内傾する器形である。底部外面は、内から外へのへラ削りを行ない、14・19・20が右廻りで他は左廻り方向である。他部は回転ナデ調整で、底部内面に一方向への指仕上げナデが施されている。14は、細く長い立ち上がりがかかなり内傾する。受け部は伸びて丸くおさめる。先端は上方へ上がる。口径11.9cm, 器高5.0cmを測り、胎土精良で極く少量粗砂をみる。焼成は堅く、内面淡青灰色・外面淡灰黒色を呈し、体部外面一部に自然釉がみられる。15は、口径11.9cm, 器高5.1cmを測り、

胎土には粗砂が目立ち、焼成堅く、青灰色を呈する。底部外面の削りが荒く目立つ。16は、厚い立ち上がり基部から細く立ち上がる。受け部上面は凹状をなさず、短かく丸い受け部先端からそのまま立ち上がる。全体的に厚手で、口径12.4cm、器高5.3cmを測り、胎土に粗砂少量含む。焼成やや軟質で、内外ともに灰色を呈する。17は、口径12.1cm、器高5.3cmを測り、外面ヘラ削りは荒く、稜が明確に残る。胎土精良で焼成堅緻で青灰色を呈する。18は、口径11.5cm、器高5.0cmを測り、かなり内傾する立ち上がりを有する。立ち上がり基部内面は指オサエナデで丸く湾曲し、器壁が極めて薄くなっている。胎土に細石英粒を極めて多く含み、粗砂粒もかなり含む。焼成は堅緻で灰色を呈し、外面にひろく濃緑色の自然釉をみる。外面一部に他個体片の付着もみられる。19は、口径12.8cm、器高4.7cmを測り、胎土に粗砂細砂粒を幾分含む、焼成堅く、内面淡青灰色・外面は黒色乃至灰黒色を呈する。外面に自然釉がみられ、凹部をもたない受け部には杯蓋口縁片付着がみられ、色調の変化ともあわせて、蓋と身をセットにして焼いたものと考えられる。20は、14～19と異なりやや小型となる。口径11.1cm、器高4.7cmを測り、立ち上がりは薄手で長く、かなり内傾する。胎土に細砂粒を幾分含むが、焼成堅緻で青灰色を呈する。

**V類** (21・22) 5類中口径が最も小さく、器高も浅い器形をこれに含めるが、後段階にみられるような立ち上がりの傾きはここではみられず、IV類と同様な、或いは22などはそれ以上に直立に近い立ち上がりを有する類である。21は、口径10.5cm、器高4.0cmを測り、短かく外湾して内傾する立ち上がりに、厚い底部を有する。底部外面は内から外への右廻りのヘラ削りがみられ、他は回転ナデを行ない、底内面は一方向への指仕上げナデを施す。細砂粒を胎土に幾分含む、焼成堅く、内面青灰色、外面灰色を呈する。受け部には蓋口縁部片が付着している。22は、強く外湾し先端ではほぼ直立になる立ち上がり部を有し、受け部は先端部が丸味をもち横へ張り出す。口径11.0cm、器高3.9cmを測り、小型で浅い器形である。底部外面に内から外へ右廻りにヘラ削りが施され、他は回転ナデを行なうが、底部内面は一方向への指仕上げナデ調整がみられる。胎土に粗砂多くみられ、焼成堅緻で暗灰色を呈する。

#### 須恵器高杯 (Fig. 22—23)

小さく丸い体部にわずかにひらく口縁を有する。小型の台付の器形である。体部外面下半は、ヘラ削りの上に回転ナデを施し、他面は回転ナデによる。胎土に少量の粗砂含む、焼成堅緻で黒灰色を呈する。

以上の須恵器群は、先学の須恵器編年(註1)によると、ⅢA期からⅢB期に近いものまで含まれる。杯蓋Ⅰ類と身Ⅰ類はセットであり、この群中最古に位置し、蓋Ⅲ類と身Ⅲ類もセットであり、蓋Ⅱ類・Ⅲ類・身Ⅱ類とともにⅢA期に属し、蓋Ⅳ・Ⅴ類と身Ⅳ・Ⅴ類は、前段階の特徴を退化させ新しい規格品の器形への移行の萌芽をみせている。ただ、この群のうちでは法量の大小によって編年を明確に断定することは困難である。というよりもまず、同時期存在

・使用の一括品であるという観点から、若干の伝世的要素があったとしても、その使い分けの可能性をも考えなければならない。杯身は14個体、蓋は7個体現存し、その量の多さから、この住居跡自体の特殊さは考えられるとしても、家族人員等を推定し得る性格ではない。しかし、みかけの法量の大小をみってみると大別して3種に分かれる。即ち、極大2セット、中程度大が身で10個、小型が2個である。実際の使用にあたって容器の使い分けがあったとすれば、この杯群の大小が、即年代的差を示すものでなく、大中小の用途上のセットとしてとらえることも可能であろう。(中間研志)

註 1) 小田富士夫氏編年による。

#### 土師器 (Fig. 23・24)

**把手付甕 (1・2・3)** 大小の3種の器形がみられる。1は、内面に稜を有して外反する口縁を有し、長い胴に、不明瞭な稜を有する丸底をつける器形で、全体的に器壁は厚い。口径24.2cm、器高27.1cmで、胴最大径は口径と同じである。胴部下寄りに把手のとれた痕がみられその面には外面調整と同じ縦ハケが行なわれている。内面は上部が横方向へラ削り、以下は上方向へラ削りと考えられ、底部内面には指オサエ痕が残る。胴部外面は、縦或いは斜め方向の粗い杓目のハケ調整が行なわれる。底部から胴部にかけて二次焼成を受け、黒色～暗灰褐色変している。焼成良好で赤茶色を呈し、胎土に粗砂粒多量を含む。2は、わずかに口縁開き、丸底の鉢状の器形に把手がつくものである。口径30.2cm、器高20.8cmを測る。器壁は厚く、胴外面に粗いハケがわずかに残り、内面は上縁が左方向へ、以下が斜め上方へのへラ削りのようである。胎土は粗く、焼成良好で黄褐色を呈する。3は、胴部が幾分張り、口縁はくの字状に外反する。底部はやや安定した丸底をなし、1・2に比べてかなり小型の把手付甕である。口径16.9cm、器高19.4cmを測り、胴外面には縦方向の粗い杓目のハケ調整がみられる。内面には斜め上方へのへラ削りが認められ、底部には指オサエ痕が残る。底部～胴部は二次焼成を受けて赤乃至灰褐色変している。把手のハゲた部分の接着面には、胴外面と同じ縦ハケ調整がみられる。胎土は粗く、焼成良好で黄褐色を呈する。

**甕 (4・5・6)** 4は、強く外反する口縁部と張る胴部をなす器形で、内面には左方向へのへラ削りがみられる。胎土に粗砂粒を多く含み、焼成やや不良で暗茶色を呈する。外面は二次焼成を受けている。5は、器壁の厚い胴部を有する小型の甕である。内面は左へのへラ削りが施され、胎土粗く、焼成はやや不良で暗茶色をみせる。外面は二次焼成を受けて赤・黒変している。6は、竈の袖内に補強材として割り込まれていたものを復元したものである。頸部内面に稜をなし外反した口縁に、丸く張る胴部を有する器形をなす。口縁内面から頸部外面にかけて横ナデが行なわれ、胴内面は左方向へのへラ削り調整のまま、外面にわずかに細かいハケがみられる。胎土に粗砂多く含み、焼成は良好で暗褐色を呈するが、二次焼成を受けて外面は赤変している。



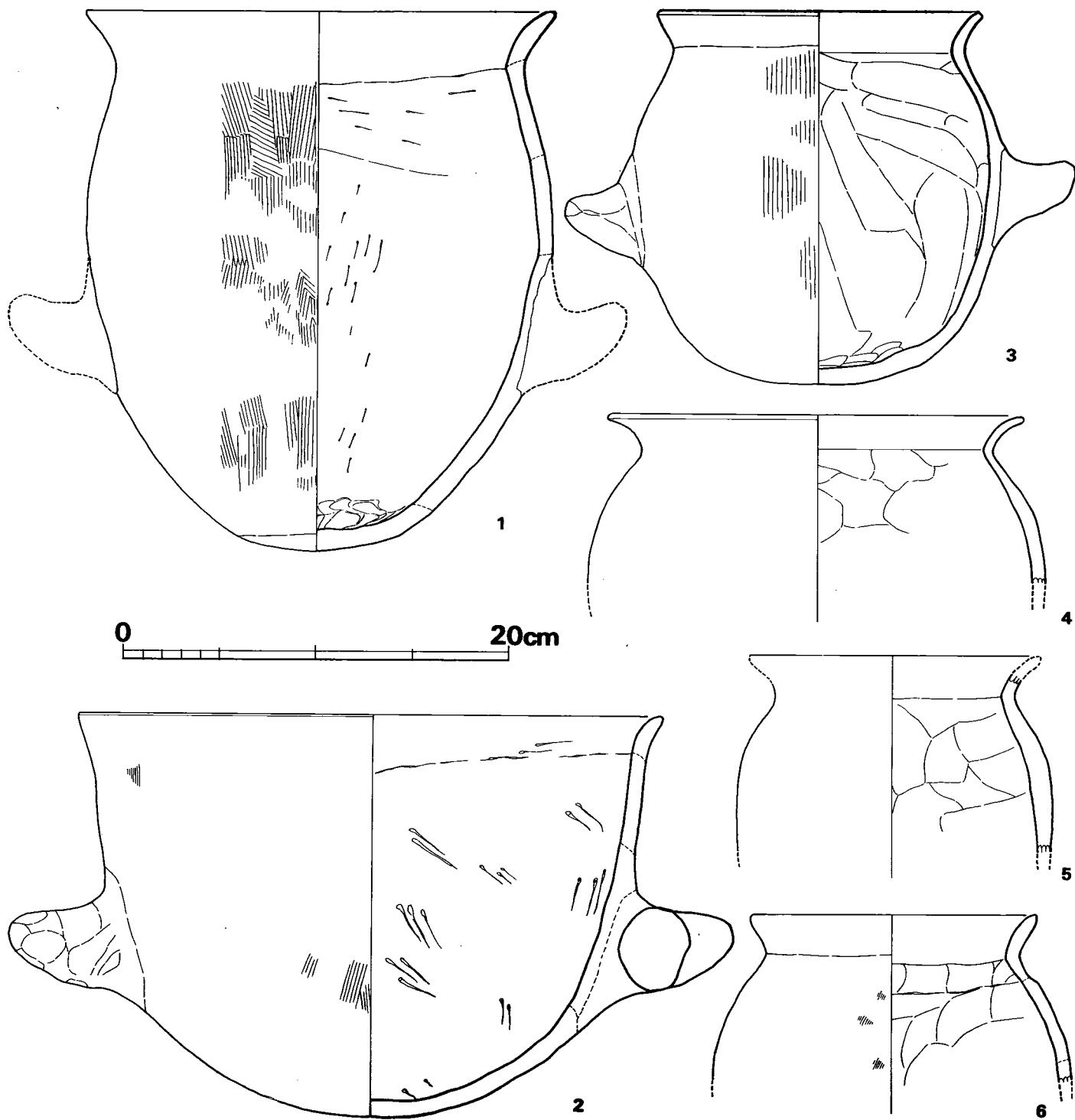


Fig. 23 向山第3号住居跡床面出土土師器実測図(その1) (縮尺 1/3)

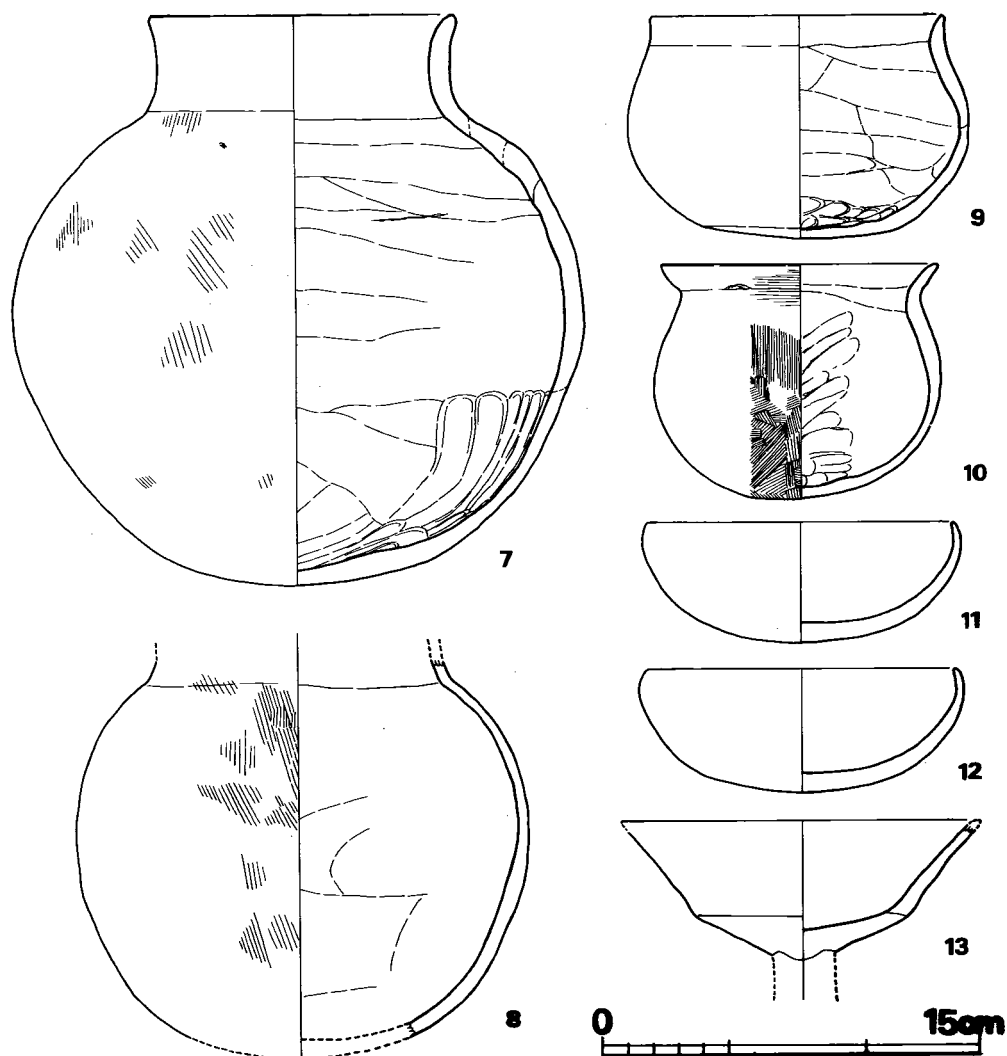


Fig. 24 向山住居跡床面出土土師器実測図(その2) (縮尺 1/3)

壺(7・8) 7は、把手付甕(2)の中に入って出土したもので、収納され甕の横に置かれていたものであろう。口縁短かくほぼ直立する直口壺で、丸底の球形の胴部を有する。胴部内面上半は左方向へのヘラ削りを行ない、下半は指の強いナデ上げが明瞭に残る。口縁部内外面は横ナデ、胴部には各所に粗い杵目の斜めハケ調整が残るが、その上をヘラで消している模様である。胎土には細砂粒多く含むが、わりと精製された感じで、焼成良好で赤褐色をみせる。口径12.1cm、胴最大径22.7cm、器高22.8cmを測る。8は球形の胴部におそらく直立する口縁をもつ7に類した器形をなす。器壁は薄く、外面に粗い杵目の縦・斜めハケ調整が施され、内面は左方向にヘラ削りを行なう。胎土に粗砂少量含むが、焼成良好で、外面淡赤色乃至黄褐色、

内面は淡褐色を呈する。

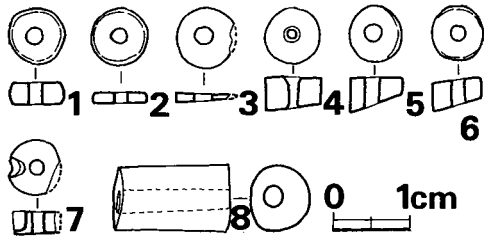
小壺（9・10）9は平底風に面をなす安定した器形で、短い口縁が外観からは無頸壺様に見え、盥型の壺である。口縁内面から外面は横ナデ調整を行ない、内面上半は横方向のヘラ削りを施し、底部内面は指オサエ痕が強く残る。胎土は粗く、焼成良好で、外面赤褐色、内面は褐色を呈する。10は、口縁が丸く外反し丸底の不安定な小壺である。外面に細かいハケ目調整が行なわれる。口縁部内外面は横ナデ調整が行なわれ、胴内面は、ナデの上に指或いはヘラによるナデ上げで斜め上方に荒い条線が刻まれる。胎土はかなり精良であるが、粗石英粒も幾分みられる。焼成良好で、外面暗褐色・内面淡褐色を呈し、外面全体に二次焼成による煤が付着している。

杯（11・12）口縁やや内湾し丸底の盥状の器形をなす。両者ともにほぼ同規格品で、11は、口径12.1cm、器高4.8cm、12は、口径12.2cm、器高5.0cmを測る。いずれも胎土に少量の細砂粒含むが全体としては精製されており、焼成良好で赤茶褐色呈し、内外面ともに丁寧なヘラ磨きを行なっている。

高杯（13）体部で屈曲し、口縁に大きく開く器形である。脚部との接着部はうまくはげて、へそ状突起を押し込む型であることがわかる。内外面ともに横方向のヘラ磨き調整を行なう。胎土には粗砂少量含み、焼成やや不良で暗赤褐色を呈する。

#### 滑石製白玉・管玉 (Fig. 25, Tab. 1, PL. 29)

白玉は、計141個を数え、平均直径7.104mm、厚さ3.02mm、孔径1.747mmの大きさに、平均重量0.27gを量る。直径は最大8.0mm、最小6.2mmのものがあり、ほとんど円形をなし、明瞭な多



角形を示すものはない。厚さは、最大4.9mm、最小0.5mmの値を示し、かなり幅がある。これは、その断面形に様々な形態があることを示す。(Fig. 25) 両面水平で臼状を呈するもの(1)や、その薄いもの(2)は全体的には少ない。斜めに切断され断面が梯形をなすものがそ

Fig. 25 向山第3号住居跡床面出土玉類実測図(実大)のほとんどであり、そのうちでも極く薄いもの

(3)や、厚いもの(4)、また片方に著しく斜めに切断されたもの(5)、両面ともに斜めに切断されたもの(6)などがある。7は略同径の孔が二孔あり、うち一孔は貫通していないものである。管玉は、長さ1.455cm、径8.65mm、孔径2.45mm~2.85mmを測り、断面は正円形ではなく、やや長円形をなし、孔は中心部よりずれている。管玉と白玉は用いる石材が異なる。即ち、白玉は灰色のものが圧倒的に多く乳白色のものが少量含まれるのに対し、管玉は深い緑色を呈する。出土位置が全く異なる点も含めて、両者はどういう関係にあるのか興味深い問題である。(中間研志)

Tab. 1 向山3号住居跡出土滑石製白玉計測表

(単位は mm)

番号	直径	厚さ	孔径	備考	番号	直径	厚さ	孔径	備考
1	7.35	4.2	2.0		31	8.0	4.0 3.5	2.05	
2	6.8	4.7 3.6	1.95		32	7.05	3.5 3.2	1.65	
3	7.65	4.0 3.45	2.0		33	7.55	3.6 3.1	1.7	
4	7.65	3.6	1.8		34	7.15	3.85 3.2	1.75	
5	7.5	3.95	1.95		35	7.4	3.7 3.2	1.65	
6	7.15	3.85	1.75		36	6.75	3.1 1.9	1.95	
7	7.3	3.35	1.8		37	6.95	4.55 4.0	1.7	
8	6.8	3.1	1.5		38	7.3	3.65 3.3	1.95	
9	6.9	4.1 3.7	1.9		39	7.15	3.45 3.1	1.75	
10	7.1	4.0 2.85	1.8		40	7.0	4.75 2.6	1.7	
11	7.2	2.7 2.05	1.7		41	6.8	3.2 2.2	1.8	
12	7.1	3.85 3.35	1.8		42	7.5	3.05 2.05	1.6	
13	7.35	3.85 3.45	1.8		43	7.25	3.85 3.2	1.7	
14	6.95	4.1 3.8	1.7		44	7.3	4.9 3.5	1.65	
15	7.15	4.3	1.8		45	7.15	2.35 2.0	1.6	
16	7.35	3.85 3.25	1.8		46	7.55	3.0	1.65	
17	7.05	4.8 4.05	1.8		47	7.85	2.95	1.6	
18	6.9	3.45 3.05	1.55		48	7.4	4.05 1.7	1.55	
19	7.8	3.05 2.25	1.65		49	6.65	2.15	1.75	1/4 欠損
20	6.75	3.1 2.55	1.95		50	7.45	4.6 4.3	1.85	
21	7.0	2.95	2.05		51	7.45	2.85 2.3	1.5	
22	6.95	3.35 2.8	1.8		52	7.4	4.3 4.0	1.8	
23	7.4	2.5 1.8	1.85		53	6.95	3.05 2.0	1.65	
24	7.0	3.35 2.35	1.8		54	6.85	5.0 4.55	1.95	
25	7.15	3.6 3.15	1.8		55	7.35	4.05	1.6	
26	7.2	3.75 2.65	1.8		56	7.3	3.35 2.95	1.7	
27	7.6	4.0 3.3	1.7		57	7.25	3.4	1.45	
28	7.15	3.35	1.7	1/3 斜めにはげる	58	7.25	3.65 3.35	1.75	
29	7.35	3.45 2.8	1.6		59	7.25	3.45	2.0	
30	7.65	3.35 2.3	1.7		60	7.35	3.65 1.8	1.75	

番号	直径	厚さ	孔径	備考	番号	直径	厚さ	孔径	備考
61	6.8	2.25 1.5	1.65		92	6.8	4.15 3.7	1.95	
62	7.3	3.7 3.45	1.75		93	7.1	2.0 3.5	1.95	
63	7.45	2.1 2.3	1.6		94	7.2	4.05	1.95	
64	6.8	2.8 2.4	1.45		95	6.95	3.0 2.45	1.6	
65	7.15	4.7 3.6	1.55		96	7.15	3.8 3.0	1.7	
66	6.95	2.3	1.65		97	7.25	4.2 2.05	1.85	
67	7.3	2.3 1.95	1.75		98	7.0	3.5 2.1	1.9	
68	7.35	3.1 3.0	1.6		99	6.85	4.0 3.3	1.9	
69	7.3	3.05 2.35	1.65		100	6.2	4.2 3.35	1.95	1/4 欠損
70	7.3	3.75+ $\alpha$	1.7	上面はげる	101	7.35	2.0 1.1	1.5	
71	7.3	3.35 2.6	1.9		102	6.9	3.5	1.8	
72	7.15	3.3 3.0	1.85		103	6.9	2.55 2.1	1.65	
73	6.8	4.05 3.65	1.8		104	7.0	3.9 2.65	1.8	
74	7.05	3.05	1.7		105	7.3	2.7 1.7	1.7	
75	7.2	4.6 4.15	1.7		106	7.0	2.65 1.25	1.9	
76	7.6	4.3 3.85	1.8		107	6.75	2.85 2.4	1.55	
77	7.2	4.5 3.0	1.8		108	6.8	2.65 2.2	1.5	
78	7.0	4.6+ $\alpha$	1.95	上面はげる	109	7.4	3.95 3.65	1.8	
79	6.75	3.15	1.6		110	7.95	4.1	1.45	1/4 欠損
80	7.4	3.3	1.7		111	6.85	3.05 2.4	1.45	
81	7.45	3.05 2.05	1.7		112	6.9	2.2 1.35	1.75	
82	6.8	2.65 1.4	1.8		113	7.35	1.4	1.6	
83	6.5	2.9 1.7	1.7		114	7.2	3.6 2.0	1.6	
84	7.3	3.4 2.9	1.95		115	6.7	1.95 0.95	1.7	
85	7.35	3.35 2.5	1.8		116	7.0	2.55 1.55	1.7	
86	7.2	2.8 1.45	1.6		117	7.25	3.45+ $\alpha$	1.6	上面はげる
87	6.85	2.4 2.05	1.7		118	7.15	2.0 1.5	1.7	
88	6.8	3.6 3.4	1.5		119	6.8	2.25+ $\alpha$	1.75	上面はげる
89	7.3	4.5 4.05	1.9		120	7.1	2.3 1.3	1.5	
90	7.3	3.3 2.65	1.95		121	7.25	2.9 2.1	1.65	
91	7.35	3.35 2.95	1.8		122	7.0	3.0 1.0	1.5	

番号	直径	厚さ	孔径	備考	番号	直径	厚さ	孔径	備考
123	7.2	2.8 1.5	1.7		133	7.05	3.1 0.95	1.8	1/5 欠損
124	6.75	3.4 2.85	1.75		134	6.9	2.2 1.3	1.8	
125	6.95	3.0 2.15	1.75		135	6.7	1.4	1.7	
126	7.15	3.45 2.8	1.9	1/5 欠損	136	7.05	3.15	1.8	
127	7.3	2.95 2.1	1.7		137	6.9	2.65	1.75	
128	7.0	2.2	1.55		138	7.65	2.3 1.85	1.7	
129	7.0	2.05 1.25	1.7		139	7.3	2.6	1.85	1/3 斜め欠除
130	7.05	3.0	1.7	普通しない 他1孔あり	140	7.6	1.6 + $\alpha$	約2.0	上半ハゲ, 半欠
131	6.6	3.0 1.0	1.55		141	約7.3	1.8 + $\alpha$	約1.8	上半ハゲ, 半欠
132	7.4	2.2 0.5	1.7	1/5 欠損	平均	7.104	3.33 2.71	3.02	1.737 平均 0.27 g

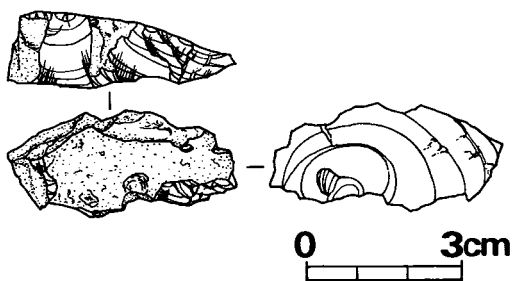


Fig. 26 向山第3号住居跡床面出土石器 (縮尺 2/3) する。(稲富裕和)

石器 (Fig. 26) 床面より出土した石器は石核調整剥片 1 点のみである。黒曜石で中に不純物を含む。角礫状の原石の自然面をそのまま打面とし、数回の剥離を行ない、その後、横位より打撃を加え、石核の打面を作出したものと思われる。その際に剥離された剥片である。

b) 覆土中出土の遺物

須恵器 (Fig. 27) 覆土中出土品として上げたが、削平された掘方上面にあったことや、器形等を見ると、床面出土須恵器群の一部であった可能性も強い。既述の床面出土須恵器杯蓋IV類に含まれるものである。即ち、口唇部に段を有し前段階の特徴を残しながらも肩部の段(稜)を一沈線に簡略した型式である。胎土精良ではあるが、極く少量の細砂粒を含み、焼成やや軟質で、外面黒灰色、内面淡青灰色を呈する。円周の1/3

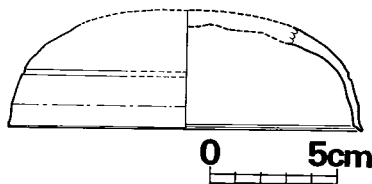


Fig. 27 向山第3号住居跡覆土内出土須恵器 (1/3)

が残存したものである。

土師器 (Fig. 28) 1 は、強く屈曲し外反する口縁部にかなり張る胴部を有する甕である。口縁内面から胴外面にかけては横ナデ調整を行ない、胴内面は、上半で右方向へのヘラ削り、下半部は、左上方向へのヘラ削りを施し、所々に指オサエ痕を残す。胎土に、粗大石英粒数個を

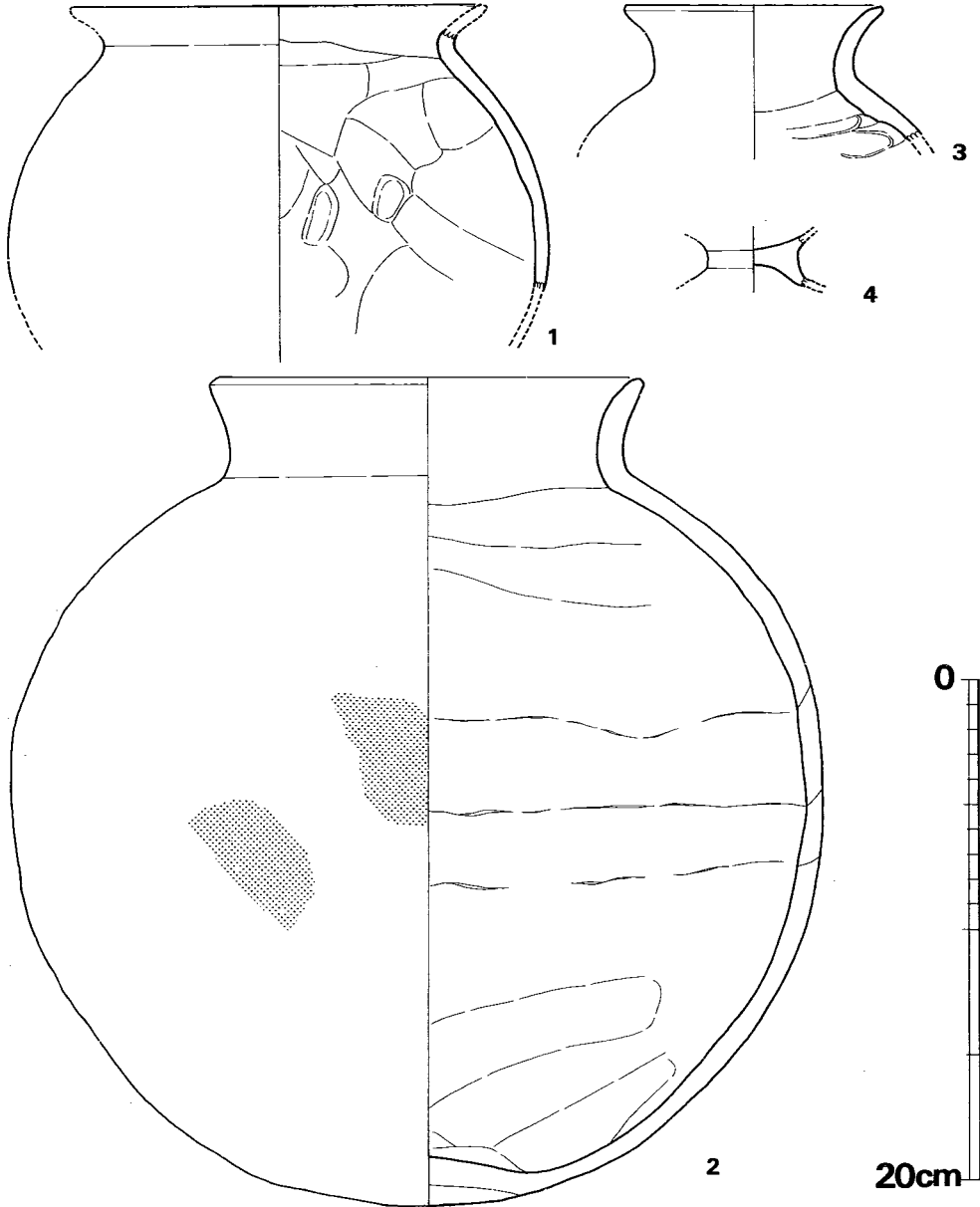


Fig. 28 向山第3号住居跡覆土内出土土師器実測図 (縮尺 1/3)

含み、粗砂粒もかなりみられる。焼成不良で黒褐色を呈する。

2は短かい口縁がわずかに開き、球形の胴部を持つ壺形土器である。復元口径17.3cm、器高33.0cm、胴部最大径32.2cmを測る。器壁厚く、特に底部には、外面から更に別の粘土を貼りつけて、内面を隆起させ、全体の重量に耐えられるよう工夫してある。胴外面には丹塗り痕が数ヶ

所残るが、範囲がせまい為に全面丹塗り磨研であると断定できにくい。胴内面は頸部下上縁が右方向へのヘラ削り、下半が右上がりのヘラ削り調整をみせる。胴内面中程には輪積み痕が明瞭である。胎土に粗砂をかなり含み、焼成良好で白褐色を呈する。

3は、やや開く口縁を有する小型の壺である。口縁内外面は横ナデ、胴内面は、右方向への指オサエナデ痕が明瞭である。胎土に粗砂粒多く含み、焼成良好で、淡黄赤色を呈する。

4は、脚の広がる台付壺状の器形であろう。胎土に粗砂多く含み、焼成良好で赤褐色呈し、器面はナデ調整を行なっている。全体的に薄手で、年代的に当住居跡より遡る土師器であろう。(中間研志)

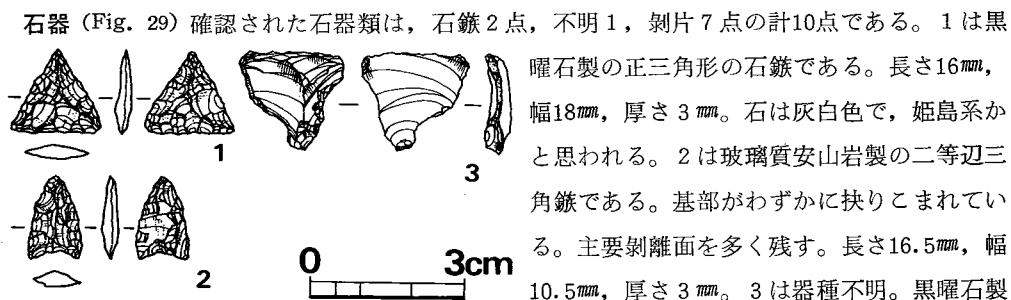


Fig. 29 向山第3号住居跡覆土内出土石器実測図  
(縮尺 2/3)

で、打面郭が両側より抉り込まれている。左側の抉り込み加工は主要剥離面側から90°に加工されている。ドリルかとも思われるが、打面が残っており、先端部に微細な加工が認められない。剥片はすべて黒曜石である。このうち1点は色調灰色で姫島系と思われる。(稲富裕和)

#### 4 第4・6号住居跡 (Fig. 30, P L. 16)

住居群台地の最西南端に位置する。後述するU字溝に東北隅を一部切られている。西半部は後世に斜めに削平されている。当初1軒分と考えて掘り下げたが、掘り上げてみると、ベッドを有した方形住居跡の内側に、西斜面方向に伸びる排水溝と続いた略方形にめぐる周溝が検出された。ベッドを有する方形住居跡の東壁際大ピットが、この周溝を明らかに切った状況が観察された為、この周溝は住居跡と同時にあったものではないとの確認を行なって、周溝の推定住居跡を第6号住居跡、上のベッドを持った方形住居跡を第4号住居跡と称して区別した。更にこの両住居内には、中世掘立柱建物の柱穴列が並んでいる。

4号住居跡は、一辺5.16mで正方形と推定して、26.63m<sup>2</sup>の床面積となる。壁は最も残りの良い所で深さ34cmを測る。南北の両壁に沿って巾1m前後、高さ約10cmのベッド状遺構を削り出している。



柱穴は、後世のものもいくらか在り、それを整理すると、中央炉をはさんで南北に並ぶ2つのピットが2本柱の主柱となると考えられる。

炉は、床面中央に断面レンズ状に、上部に焼土、下部に炭化物多量がつまって検出された。また、東壁際中央に大きく浅いピットがみられるが、これは第1号住居跡のそれと同位置・同規模であり同様の性格の遺構と考えられる。しかし、第1号住居跡で焼土・炭化物等多量につまっていた状況と比較すると、こちらはそういうものは検出されず、解釈を困難にする。

東・北壁際に細かい溝状の遺構が切れぎれになって検出された。これは、第1号住居跡の例と同様と考えられる。(PL. 17)

なお、この住居跡は、第1号・第3号住居跡とともに焼失による廃棄が考えられる。床面には赤く焼けた焼土と炭化材の一部がかなり検出されている。炭化材の出土状態をみると、主柱のものと推定できるものは確認できない。炭化材のすべてが概略中心部へ向かっているようにもみられるので、垂木の焼け落ちたものとも解釈できる。

遺物の出土状態をみると、他住居跡と異なり、焼失家屋と推定されるにも拘らず、床面からは土器類は全く出土せず、ただ炉中から1片の甕口縁片がみられたのみである。ただ、中央よりやや北寄りの床面に2ヶ所に分かれて、粘土塊の固く焼けたものを見出した。(PL. 31)これは、粘土塊を平らに伸ばしたようなもので、厚さ5cm～3cm、長さ36cm～42cm、幅20cm～24cmで、いづれも上面の中央のやや高い部分が赤～黄色に焼け、周縁部が白褐色～灰褐色に変化している。下面は黒色変しており、床面に密着していたにも拘らず、うち1つには凹凸の激しい木片或いは藁束様の条線様の圧痕が残っていた。この焼土塊には表面に若干の粗石英粒等の付着をみるが、全体としては、かなり精製された粘土塊で、その焼け方の状況をもても、家屋焼失の際に焼け落ちた残り火の中で固く焼けたものと推定される。推測するに精製した粘土塊を家屋内に持ち込み(おそらくは、土器等を作るために)、下に藁束等のものを敷き置いていたものであろう。このような時期のこのような例を未だ聴かないが、諸学の御教示を仰ぎたいと切に思う次第である。

第6号住居跡は、周溝のみの検出であるが、前述の如く、第4号住居跡東壁中央大ピットによって、溝が切られ、更に、東側ベッドを設ける際の削り出し部分の観察、及び、床面焼土等が溝中に入らないことなどから、明らかに両遺構の新旧の差は認められる。しかもそれは、溝が完全に埋まってしまってから4号住居が構築されている。しかし、第4号住居跡の南壁と周溝とが同一線上にあることをみると、全くの偶然とは考えられず、第6号住居南壁をそのまま生かして、4号住居が拡張して建てられたと考える方が妥当であろう。周溝内の埋土の状況からみて、周溝を人為的に埋めた後拡張したとは考え難く、自然に溝が埋まった後、ある程度の期間をおいて拡張されたものと考えられる。ただ、南壁がそれほど崩壊していないことを考えると、それほど時間的差があるとは思えない。

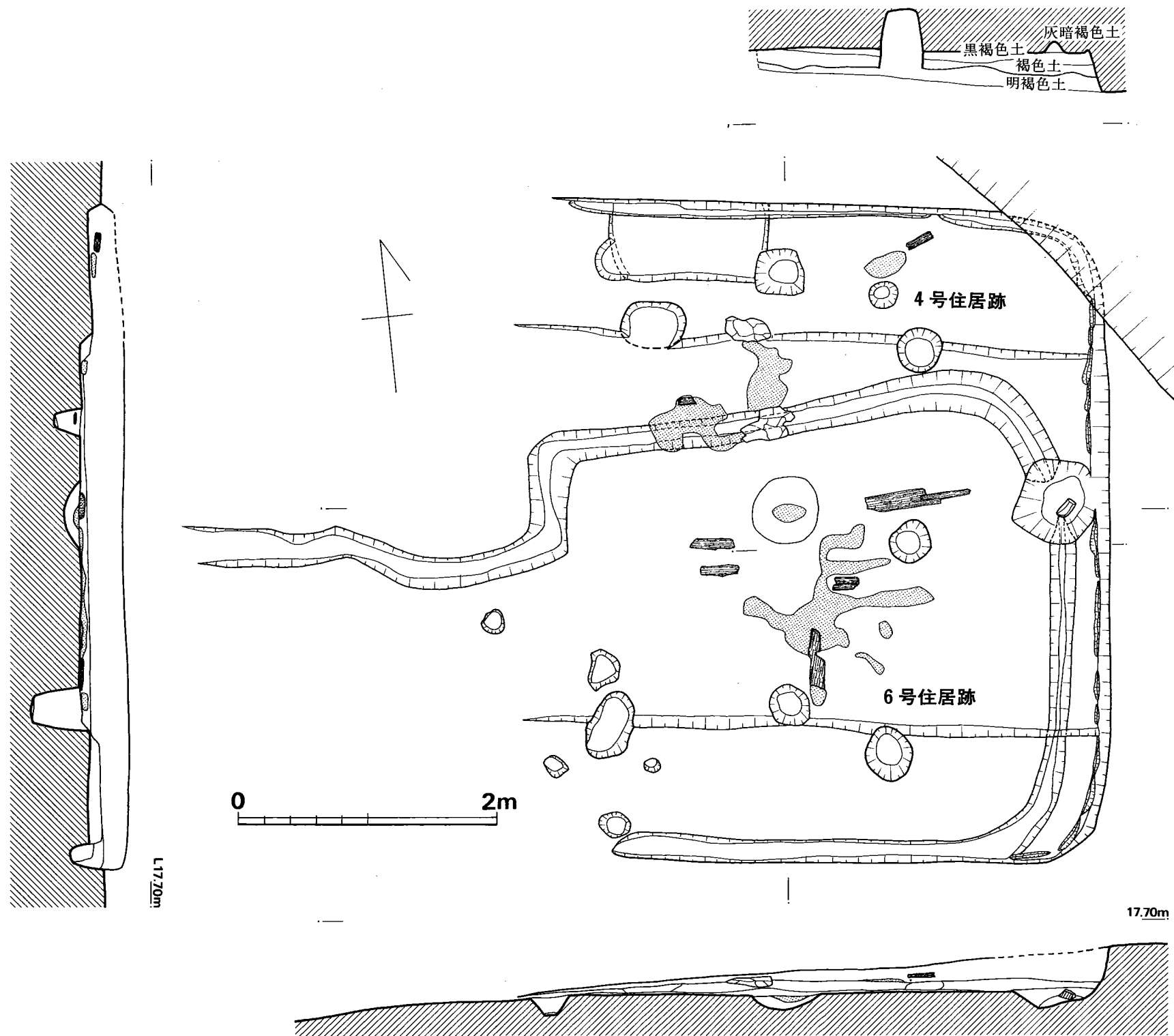


Fig. 30 向山第4号・第6号住居跡実測図(縮尺 1/40)

第6号住居跡は、その周溝が壁際にあったと仮定すると、 $4.25 \times 3.85m$ の略方形プランとなり、その床面積は $16.36m^2$ となる。周溝底のレベルをみてゆくと、北壁際の方から排水溝と考えられる西側斜面方向へと低くなっており、一方向へ流れる排水用の溝として充分役に立つ状況である。この住居跡の他の施設と考えられるものは何ら見当たらない。柱穴も同じで、該当するものは無い。第4号住居構築時に削除されたものであろう。

#### 出土遺物 (Fig. 31, P L. 30)

土器類は、床面からは炉中より1片出土したのみで、他は覆土内より出土したものである。

#### 甕 (Fig. 31-1~6)

1は、炉中より出土した口縁片である。それほど張らない胴部に、丸く外反する短かい口縁を有する器形である。口縁は丸くおさめ、頸部内面にへら削りによるものか、不明瞭な稜が数本見られる。胎土は、細砂粒多く含むがかなり精製され、焼成やや不良で、淡褐色を呈する。器表は磨滅して調整不明である。2は、張らない胴部に、軽く開く口縁をもち、口唇部下端に刻目を施し、更に胴部上半外面に一条の浅い沈線をめぐらす。内面と口縁外面は横ナデ調整を行ない、胴部外面には縦方向ハケ調整を施す。胎土に粗砂粒を少量含み、焼成良好で、内面は暗褐色を呈し、外面は煤付着により黒変している。3・4は、くの字状に強く屈曲する口縁片である。いずれも口縁内面がわずかにへこむ。いずれも胎土に少量の粗砂含み、焼成良好で、黄褐色・暗褐色を呈する。5は、平坦面をなす口唇部を有する、くの字状屈曲の口縁片である。焼成不良で磨滅著しく、淡白褐色を呈する。6は、やや上げ底気味の底部片である。底部内面に指圧痕がみられ、外面には幾分粗い縦方向ハケ調整がみられる。胎土には粗砂多く、内面褐色、外面赤茶色を呈し、焼きは良い。

#### 壺 (Fig. 31-7~11)

7・8は二条の断面三角凸帯を有する胴部片であるが、8は、口唇状凸帯の幅を広くして、

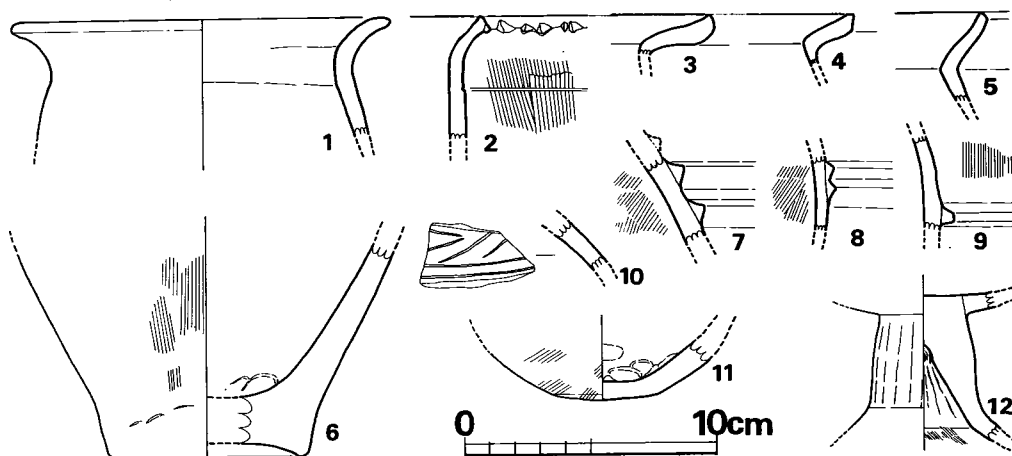


Fig. 31 向山第4号住居跡床面・覆土内出土土器実測図 (縮尺 1/3)

二条の三角凸帯にみせかけたものであろう。いずれも内面にやや細かいハケ調整を施す。7は粗砂かなり含み、焼成良好で黄褐色をなし、8は細砂かなり含み、焼きもやや悪く、黄白色を呈する。9は、断面コの字状凸帯の胴部片で、外面に縦ハケを施す。胎土は粗く、赤褐色をなす。10は、肩にヘラによる横位羽状文を施した小壺片である。二条の沈線の上に羽状文が残っている。焼きは良いが胎土に粗砂をかなり含む。11は、小型の壺の底部であろう。底面と胴部との境に不明瞭な稜が残るが、不安定な丸底である。底部内面に指オサエ痕がみられ、外面にはやや粗い斜めハケがいくらか残る。粗砂少量含み、焼成良好にて暗赤褐色を呈する。

#### 高杯 (Fig. 30—12)

脚中ほどにふくらみをみせる低い脚部を有する器形である。内面にはシボリ痕がみられ、開いた裾部内面には細かいハケ調整が残る。脚部外面は縦方向のヘラ削り痕が残る。細砂粒少量含むが胎土は良い。

以上、第4号住居跡炉中・覆土中出土の土器を述べたが、2, 10は板付Ⅱ式に、3・4・7・8・9は中期の間に、1・5・11は後期後半代に比定されよう。(中間研志)

## 5 第5号住居跡 (Fig. 32, PL. 3)

1号住居跡と同じ最上段台地上に、明らかに1号住居跡に西半を切られて検出された。一辺

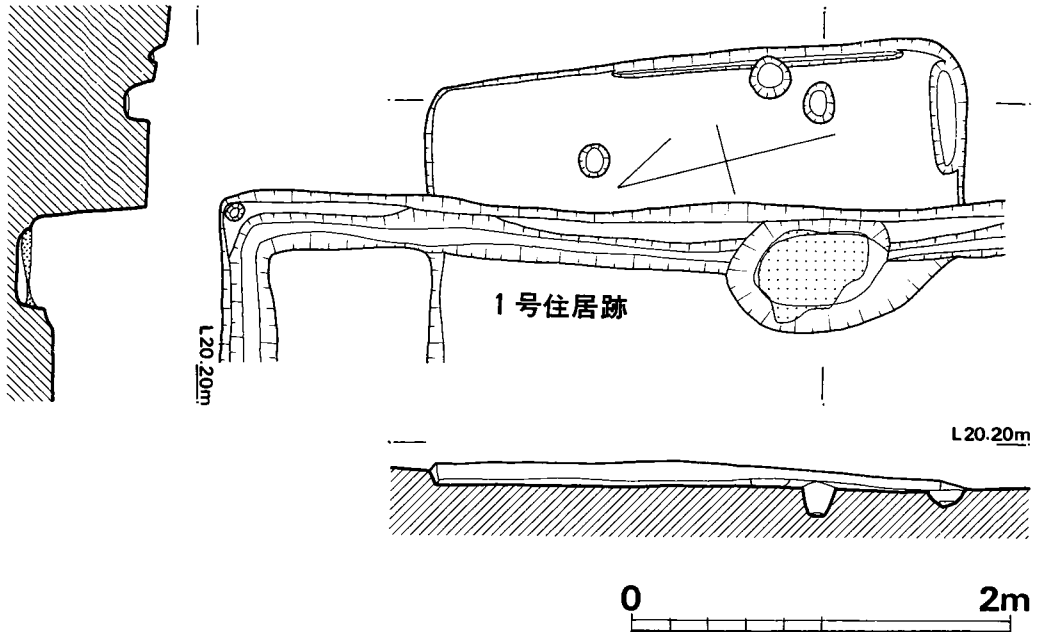


Fig. 32 向山第5号住居跡実測図 (縮尺 1/40)

2.86mの方形プランと考えられ、正方形と考えると8.18㎡の面積を有することになり、竪穴住居跡と考えるにはあまりにも狭い。掘り下げてみると、深さ15~10cmのピット3個と、南と東の壁際に細い溝状の遺構が1号住居跡と同様に検出された。最も残りの良い壁は高さ10cmを測り、この遺構を切る1号住居跡の深さとはかなりの差がある。壁際の細い溝を、組合わせ木棺の板材差し込み跡と考えると、長さがあまりにも長く、通例の弥生木棺と深さもあまりにも差があり、ピットも検出されており、やはり、極めて小規模の物置小屋風の遺構と考えた方がよさそうに思える。

なお、この竪穴からは、弥生式土器小片数片が発見されただけで、時期を断定できるものではないが、第1号竪穴住居跡より古く、弥生時代中期より新しいことから弥生後期代と想像できようか。(中間研志)

## 6 第7号住居跡 (Fig. 34, PL. 17)

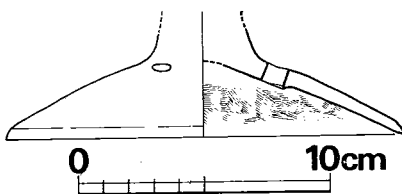
住居群の西北端、3号住居跡の西側に位置する。西半部及び上面をほとんど削除されており、壁際内側の周溝がコの字状に東半部のみ残存していた。東側の残った一辺が3.26mあり、正方形プランと仮定すると10.63㎡の床面積を有することとなる。

柱穴は、床面に大小6個みられるが、うまくつながる柱穴はなく、また、残る東半部の南北南両隅に近い所に対応するピットもみられないことなどから、四隅に支柱を据える4本柱ではないことは確かで、おそらくは、床面中央東寄りの深いピットと、西半部の既に削除されて残っていない他の1柱穴との2本柱の建物であったろうと考えたい。

壁内側の周溝は、壁下がそのまま溝底となり、幅15~25cm、深さ5~8cmで、残っている部分ではすべて周っている。炉跡と考えられる遺構及び焼土・炭化物は検出されていない。既に削平されたものであろう。

### 出土遺物 (Fig. 33, PL. 30)

住居跡壁際周溝内の東壁側のやや中央寄りより1点出土している。大きく内ぞり様に開く器台或いは高杯の脚部である。充実した脚柱より大きく開き、上部に3個の円孔を配し、底部下縁は尖り気味におさめる。内面は横位或いは右下がり斜め方向の細かいハケ調整が行なわれ、



下縁辺内外を横ナデし、外面はへら磨きを施している。胎土精良で焼成良好、淡茶褐色を呈する。全体的に丁寧で精製な感じを与える。第2号住居跡床面出土土器とほぼ同時期に比定されよう。

(中間研志)

Fig. 33 向山第7号住居跡床面出土土器実測図(縮尺 1/3)

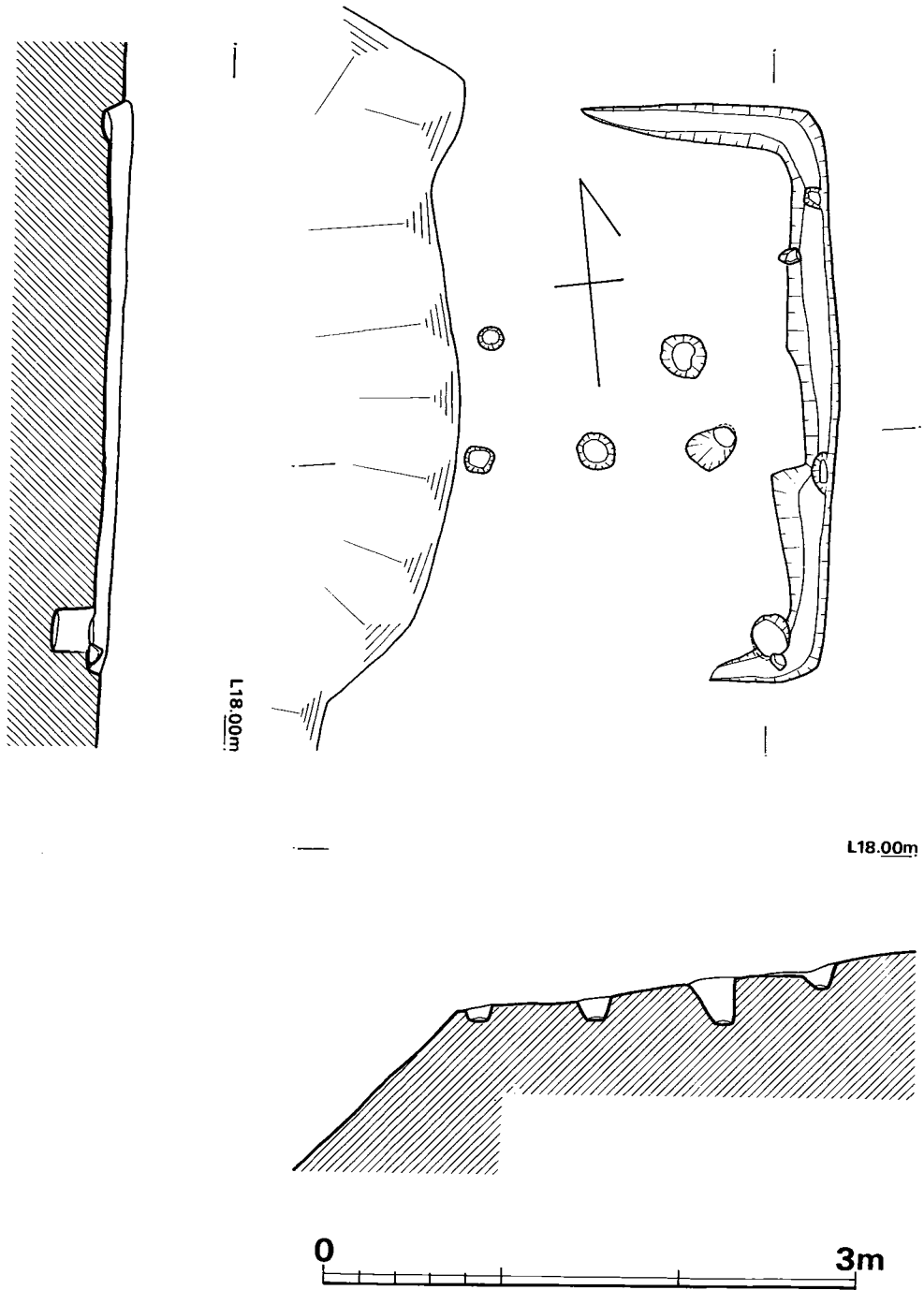


Fig. 34 向山第7号住居跡実測図 (縮尺 1/40)

Tab. 2 向山住居跡一覽表

	平面形	内 法 (m) たて×よこ×深さ	床面積 (㎡)	施 設	出 土 遺 物	時 期
1号住居跡	方 形	5.75×残4.2×0.47	33.2 (推定)	ベ ッ ド 2 本 柱	壺・甕・器台・石包 丁	弥生後期後半
2号住居跡	長方形	4.17×3.5×0.32	14.7	ベ ッ ド (?) 4 本 柱	甕・高杯・器台・手 捏ね・土玉	古墳初頭
3号住居跡	方 形	3.75×3.75×0.22	14.06	カ マ ド 2 本 柱 (?)	須恵器杯・土師器甕 滑石臼玉・管玉	古墳後期
4号住居跡	方 形	5.16×残4.6×0.32	26.63 (推定)	ベ ッ ド 2 本 柱	甕	弥生後期後半(?)
5号住居跡	方 形	2.85×残0.85×0.12	8.18	2 本 柱 (?)	弥生式土器片少量	1号より古い
6号住居跡	略方形	4.25×3.85×?	16.36		弥生式土器片少量	4号より古い
7号住居跡	方 形	3.28×残1.45×0.08	10.63 (推定)	2 本 柱 (?)	土師器器台	古墳初頭

## 7 土 塚 群 (Fig. 35・36)

住居群台地上に、8基の土塚が検出されている。プラン等形態もそれぞれ定まらず、各々の性格・年代を示すものと考えられるが、不明なものが多い。うち第1・5号住居跡のをせる台地上に3基がみられる。東より11・12・13号と称し、いずれも弥生式土器小片数片のみを覆土中に含む土塚である。11号は、80×70cmの略方形に近いプランを呈し、深さ10cmの浅い形態をなし、性格を示す積極的手掛りはない。12は、80×77cmの円形プランをなし、深さ40cmを測り、壁がほぼ垂直に立ち、一部ではオーバーハングしたりして、規模は小さいが、弥生期の袋状竪穴の類に入れてよかろう。13は、70×60cmの不整長方形のプランをなすが、その規模、形態からみて、柱穴のやや大きなものとしてもおかしくはない。

第2～7号住居跡のをせる台地上の住居跡近辺に散在して14～18号の土塚がある。14号は、255×122cmの長方形プランをなし、深さ20cm程度の浅い土塚である。その西南隅を3号住居に切られる。中に5個の小ピットがみられるが、うち東南隅の1個はこの土塚を切るピットであり、他ピットをみてもまとまりをみせるものではない。遺物は、弥生式土器小片が数片覆土中に見出されるのみである。15号土塚は、第4号住居北壁内側に沿って、ベッド状遺構上面でその掘方線を確認し、上半部を第4号住居跡に切られている。125×60cmの長方形プランを呈し、深さ10cmと残りは浅い。これも弥生式土器片少量を含むのみで年代の決め手はない。16号土塚は、U字溝に上半を切られ、発掘区の南側壁に検出された。未調査部分があるので全容は不明であるが、不整形の浅い土塚である。遺物は、土師器片少量と床面よりわずかに浮いて鉄製鋤先が出土している。鋤先は出土遺物の項で後述する。17号・18号土塚は不整形プランで、遺物なく、性格不明である。

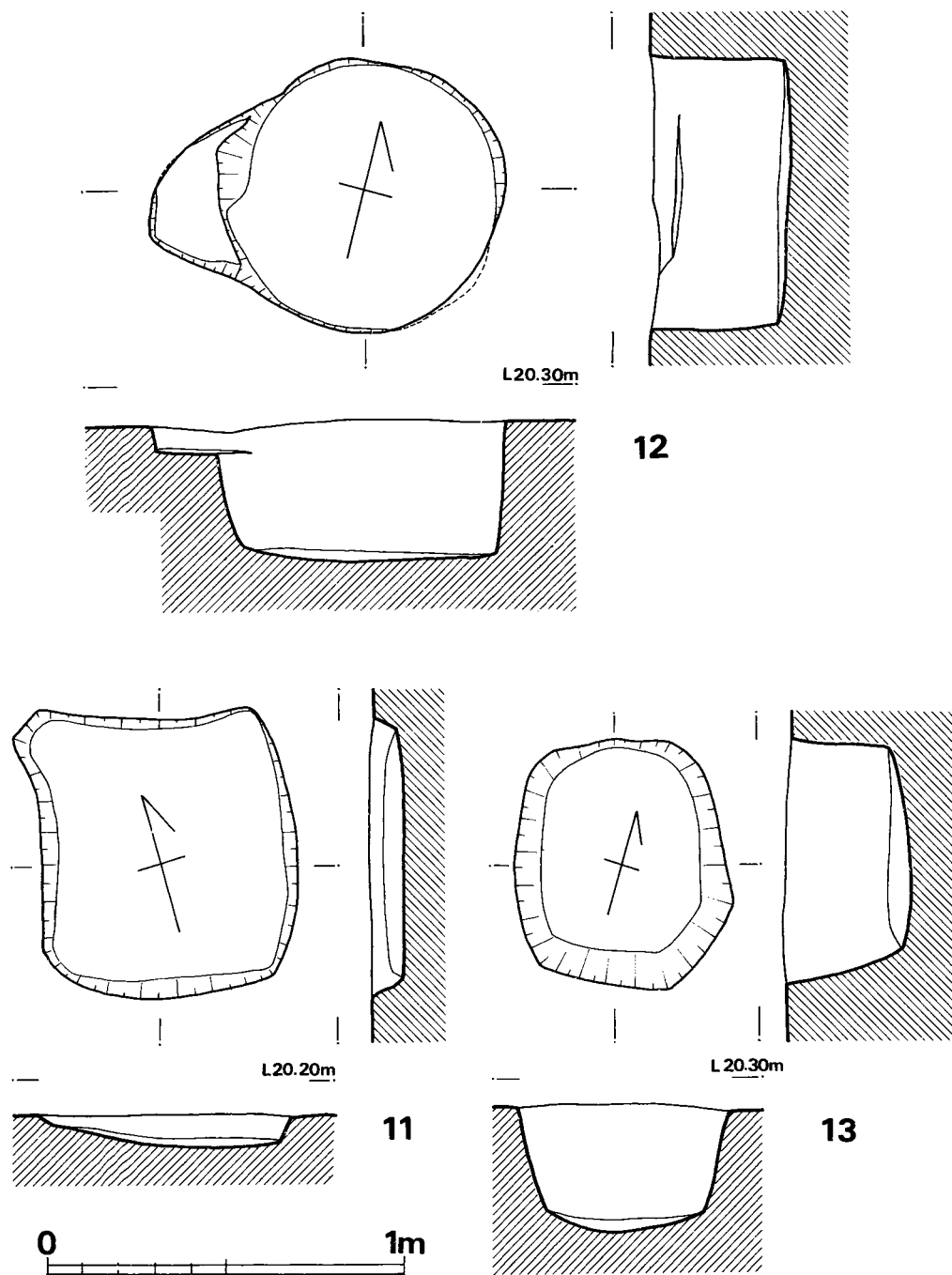


Fig. 35 向山第11~13号土坑実測図 (縮尺 1/20)



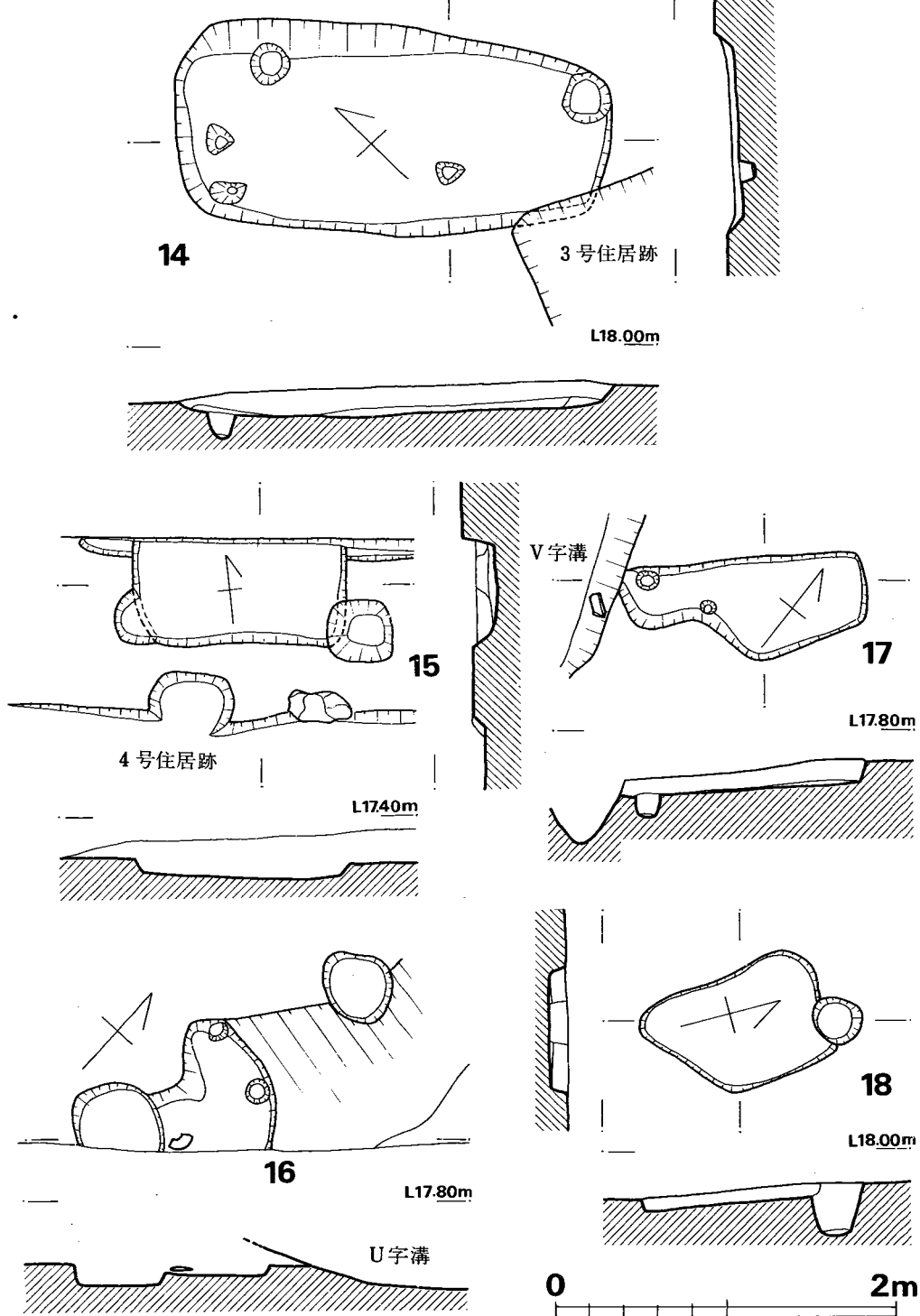
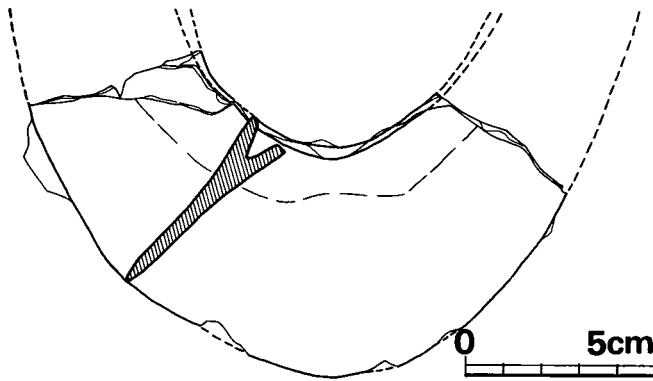


Fig. 36 向山第14~18号土塚実測図 (縮尺 1/40)

以上の住居群近辺の土坑のうち、12号は袋状堅穴に、11・14・15号は土坑墓に一応推定はできるが、より積極的な証拠に欠ける。

**出土遺物** (Fig. 37, P.L. 32) 第16号土坑内より出土した鉄製U字形鋤先である。最大幅6



cmで、両端にゆくに従ってややせばまる。両端は欠損しており全容を知ることはいないが、先端がやや尖り気味になる小型のものである。木柄差込み部はY字状に分かれるが、その中には木質は見出せなかった。刃部は数ヶ所に刃こぼれがみられる。

Fig. 37 向山第16号土坑内出土鋤先実測図 (縮尺 1/2)

(中間研志)

## 8 溝状遺構 (Fig. 38, PL. 18)

住居群の南西隅に、第4・6号住居跡をとりかこむように半円周のU字溝・V字溝が検出された。大きなU字周溝は小さなV字溝と外縁を共有し、V字溝の上部を切って設けられる。正円形にめぐるとして復元半径約6m、幅2~2.6m、深さ30~40cmを測り、溝底レベルをみると4号住居跡東側が最も高く、西側に傾斜している。4号住居跡の北東隅を切り、16号土坑を切り、後述する掘立柱建物の2柱穴に切られている。

V字溝は、幅60~24cm、深さ40~60cmと狭いわりに深く、U字溝と切り合い関係は明瞭ではあるが、外縁をU字溝と共有することから、U字溝と全く無関係ではなく、当初のV字溝が埋まったため、改めてU字溝を掘り下げたものかと考えられ、両者にそれほどの時間的差はないものと考えられよう。U字溝・V字溝からは、床面に密着した遺物はみられず、時期的断定の証拠に欠けるが、覆土中の遺物はかなりみられ時期推定を行ないたい。

**出土遺物** (Fig. 39・40・41・42, PL. 32)

**弥生式土器** (Fig. 39-1~3)

1は、上げ底気味の甕形土器底部片である。内面に指オサエ痕を残し、胎土に粗砂多く含み、焼きは良く赤褐色を呈する。2は、胎土の粗い高杯形土器である。器壁厚く、長い脚部と、大きい杯部を有するやや大型の類であろう。脚内面にシボリ痕残し、焼成良好で淡茶色呈する。3は、平底気味の丸底を有する壺形土器底部である。底部は1.5cmと厚く、胴下半部へ

1. 耕土
2. 床土
3. 床土(酸化鉄を多く含む)
4. 黒色土
5. 黒褐色粘質土
6. 暗褐色粘質土
7. 黒褐色粘質土
8. 褐色土

8 溝状遺構

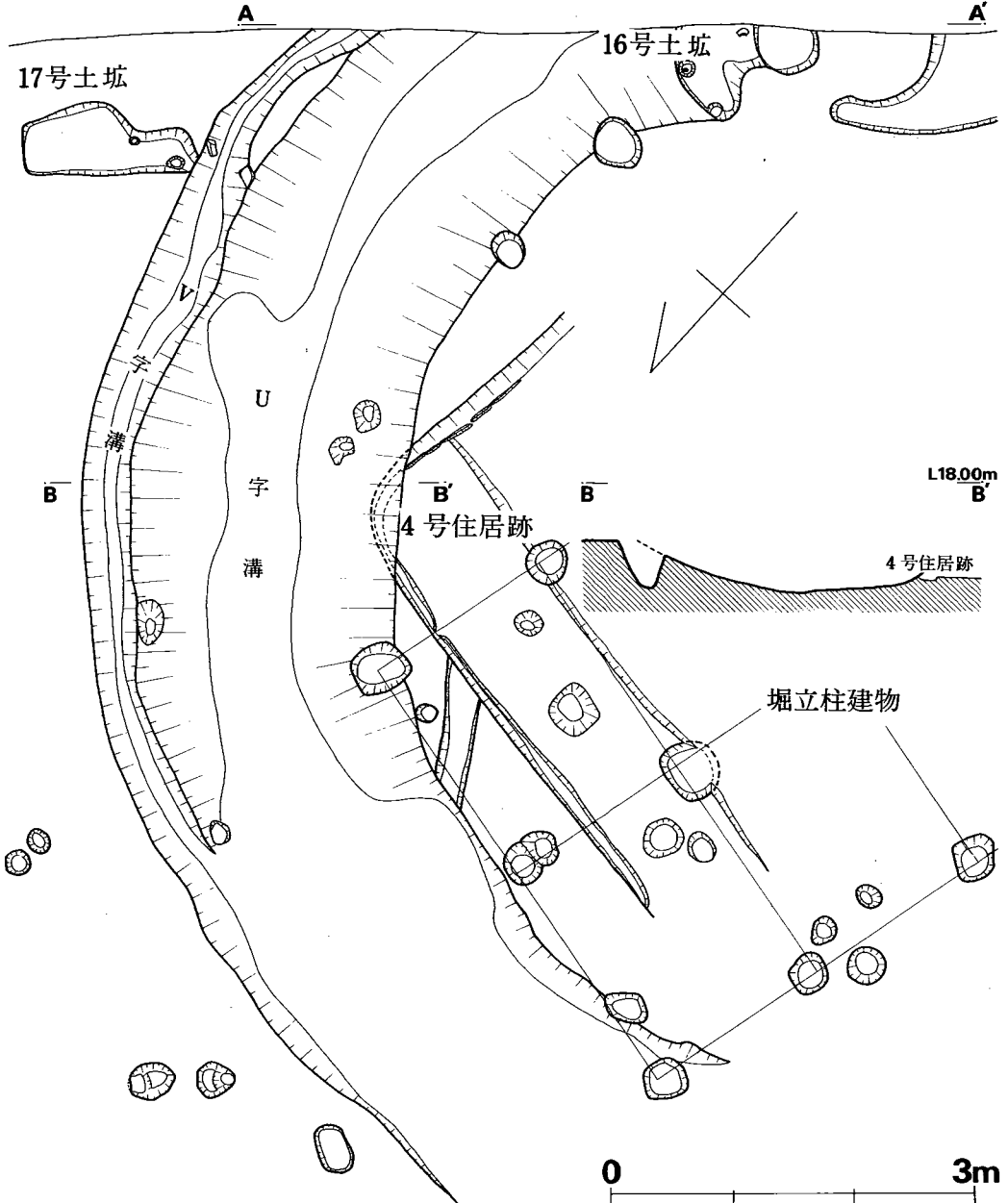
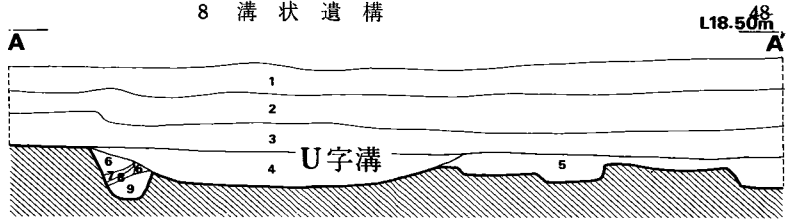


Fig. 38 U字溝・V字溝実測図 (縮尺 1/60)

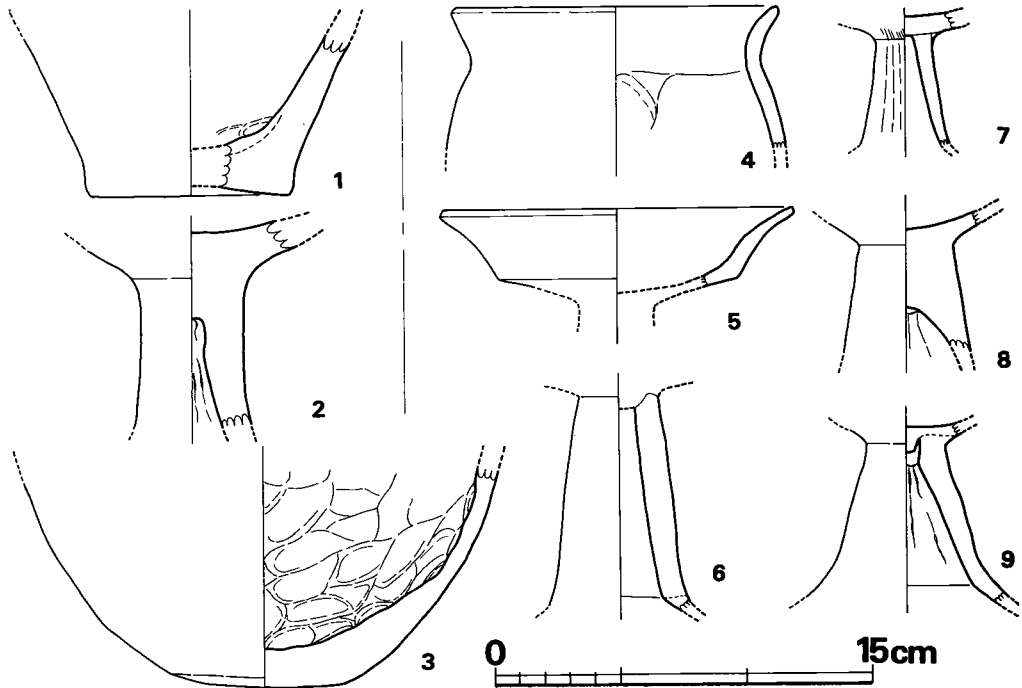


Fig. 39 U字溝内出土弥生式土器・土師器実測図（縮尺 1/3）

と急に器壁が薄くなる。底部内面は指オサエ痕著しく、上部ではオサエナデ上げている。焼きはやや不良で、淡褐色～黒色をみせ、胎土に少量の粗砂を含む。

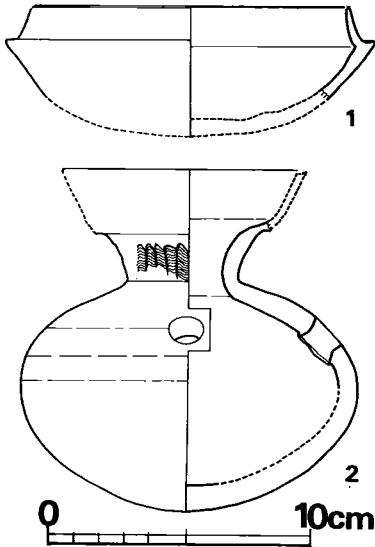
#### 土師器 (Fig. 39-4~9)

4は、あまり張らない胴部にゆるく外反する口縁を有する小型の甕形土器である。口縁内外面は横ナデ調整を行ない、胴内面はヘラ削りの上を一部オサエナデ上げを行なっている。わりと精製された胎土を用い、焼きはやや悪く、外面赤茶色、内面暗褐色呈する。

5~9は、高杯形土器であるが、脚部では、7の如く小型のものと、8のようないくらか充実しているものなど各種ある。5は、体部外面に明瞭な稜を持つ屈曲をみせ、口唇部が平坦になるやや小ぶり（口径14cm）の杯部である。焼きは悪く、外面黒褐色、内面暗褐色をなす。6は、器表の磨滅著しく、焼きはやや良く、黄褐色を呈する。7は、かなり小ぶりで丁寧な作りである。脚部と杯部をそのまま貼りつけたもので、杯部底近辺に僅かに粗いハケ調整が残る、脚部外面は縦方向のヘラ削りでその稜が僅かに残る。焼きは良く、褐色の色調をなす。8は、杯部内面にヘラ磨きが施され、脚部内部はかなり充実するが、内面には、回転方向の粗いヘラ削りによる稜がみられる。焼きは良く、淡褐色をなす。以上の高杯はいずれも胎土に僅かに細砂粒を含む。

## 須恵器 (Fig. 40)

1 は、体部上半～口縁片で、復元口径12.5cm、立ち上がり高1.4cmを測る杯身である。残存部は内外面ともに回転ナデ調整を行ない、立ち上がりはやや内傾し端部は丸くおさめる。胎土には細砂少量含むが全体的には精良である。焼成やや軟質で灰色を呈する。



2 は、口縁部を欠いた甕で、胴径13.5cm、頸径4.4cmと、やや扁平に張った胴部に比べて頸部の小さい器形である。胴部最大径部の上方に一孔を穿ち、口縁部頸部の境は、シャープな稜をなして屈曲する。頸部外面には櫛描波状文をめぐらし、胴部上半にはヘラ削りによる稜線を残す。胴部外面下半は回転ナデ、底部は縦方向ナデを施し、頸部内面はナデ上げの上を回転ナデ、胴部内面は、荒い指横ナデを行なう。胎土に少量粗砂を含むが、焼成堅緻、灰色～灰黒色を呈する。

Fig. 40 U字溝内出土須恵器実測図 (縮尺 1/3)

鉄器 (Fig. 41) U字溝底部より20cm浮いて出土した長さ7.5cm鉄片である。鋒部は1.9cm

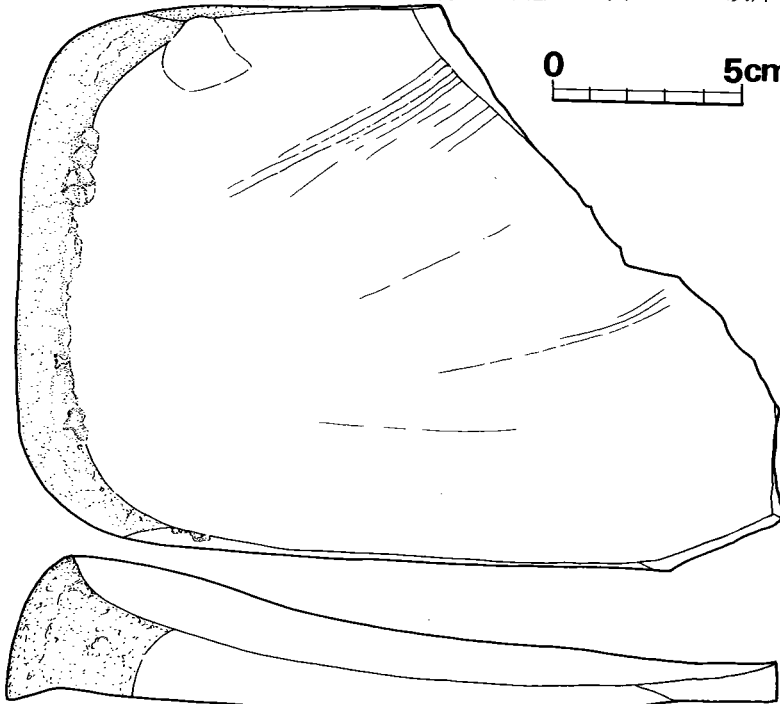


Fig. 42 V字溝内出土砥石実測図 (縮尺 1/2)

と短かく、鋒断面は片面丸く、茎部は長方形の断面をなし、棘筈被等の有無は不明である片丸造鑿箭式鉄鏃になるものであろう。

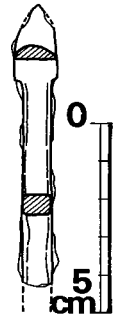


Fig. 41 U字溝内出土鉄鏃実測図 (縮尺1/2)

## 砥石 (Fig. 42)

幅14.5cm, 長さ現存長20cm (推定約25cm), 厚さ現存4.0~0.5cmを測る。下半部は節理面より割れて欠損している。短側面には自然面を残すが, 上面と両長側面は使用され研磨面をなす。特に上面は鞍状をなすほどまでに使用している。上面には数条の線状の擦痕がみられる。砂岩質の石材で, 粗砥として用いられたものであろう。V字溝壁に貼りついたような状態で出土している。(中間研志)

## 9 中世掘立柱建物 (Fig. 44, P L. 18)

第4号住居跡内外に重複して, 2間×3間の掘立柱建物が検出された。南北4.80m, 東西4.10mを測り, 桁行1.60m等間, 梁行2.05m等間で, 主軸は12°58'20" 東にふれている。北東隅と北西隅の柱穴はU字溝を切り, 他は, 第4号住居跡を切っている。柱穴の径は30~45cmの円形プランで, 柱根及び抜き痕等は見られない。個々の深さをみると, その底部レベルが, 東側の南北列と西側の南北列では標高16.90~16.75mとほぼ同じレベルであるのに対し, 中央南北列は標高17.10~17.13mと浅い。この柱穴群からは, 中から瓦器・土師器小片がかなり出土しているが, 図示できるものはない。また, 確認した建物の北・東・南へは精査したが延びる可能性はなく, 西側へは後世の削除により延びるかもしれない。しかし, 下の段の火葬墓の位置から考えると, 当時の段がそれほど張り出していたとは考えられず, この建物が延びたとしても西へ一間分程度であろう。切妻の掘立小屋程度の建物になるのであろうか。

また, この建物の他にも, 中に土師器・瓦器細片を含むピットも数多く検出されている。特に, 第2号住居跡及び第3号住居跡の西側斜面に多く, 約50個の多きを数える。現在の遺構面はゆるやかな傾斜をもっており, 後世の削除を考えると, うまく並ぶ柱穴はないが, 他に数棟の建物の存在を考えてもよいのではなかろうか。このことは, 西下の段の黒色土包含層の中に多量の古代中世遺物が流れ込んでいることから充分推定できよう。(中間研志)

## 出土遺物 (Fig. 43, P L. 32)

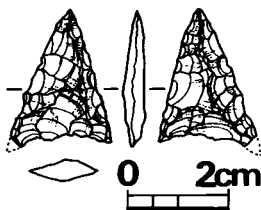


Fig. 43 柱穴群P33出土石器実測図 (縮尺2/3)

柱穴群の柱穴埋土中からは, 土師器片, 弥生片, 瓦器片などがかなり出土したが, 復元できるものもなく, 石鏃1点のみをここに示す。第4号住居跡に切られる Pit 中より出土した。石質は安山岩である。両面とも全面にわたって加工されている。基部の一端がわずかに欠損する。長さ推定27mm, 幅推定20.5mm, 厚さ3.5mmを測るものである。(稲富裕和)

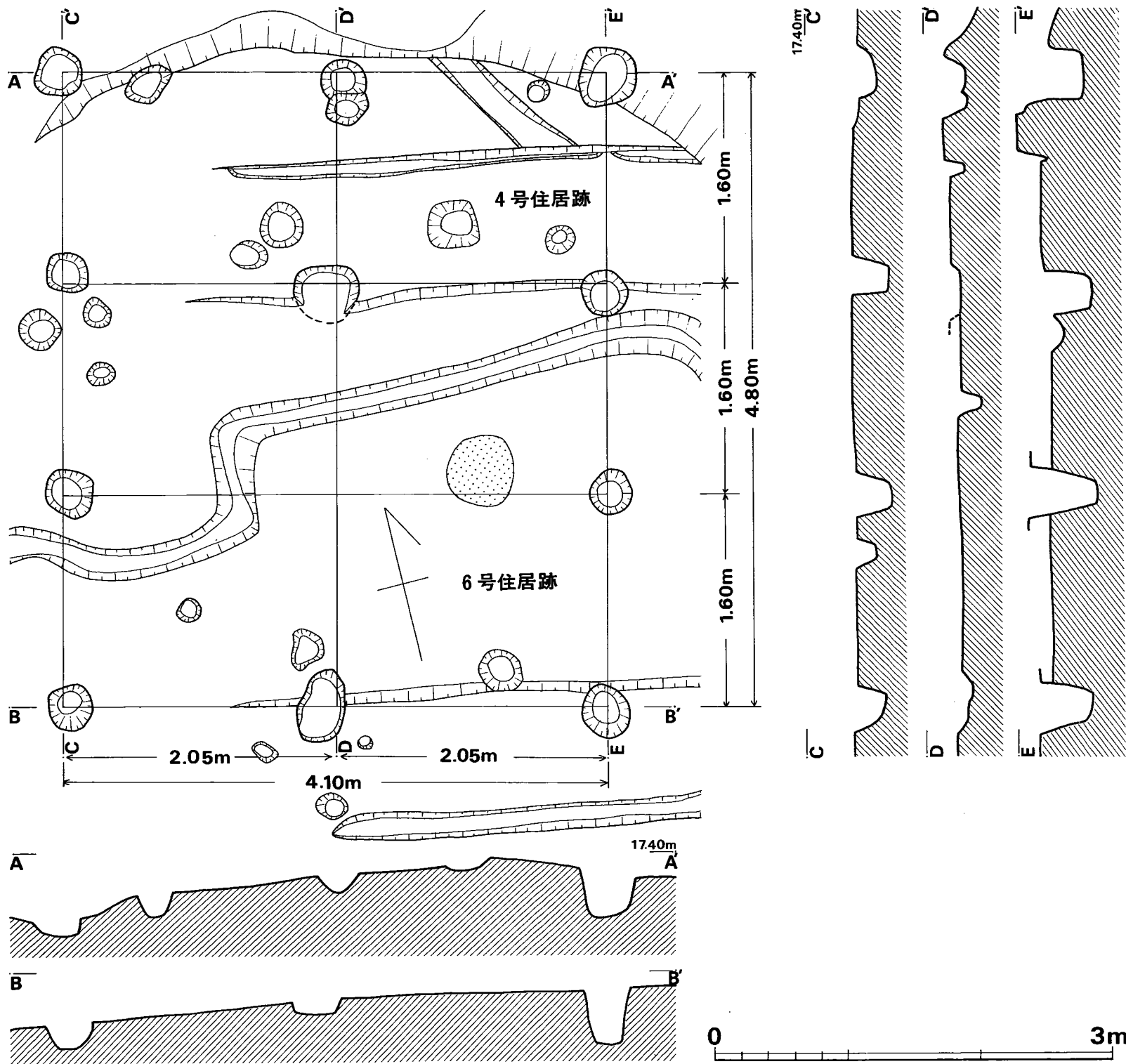


Fig. 44 掘立柱建物実測図 (縮尺 1/40)

## 10 中世火葬墓 (Fig. 45, P L. 20)

住居群のある台地の西側下段中央附近に発見された。南北径74cm, 東西径50cmの不整楕円形プランの深さ8cmと浅い土塚状の中に, 焼土・炭とともに人骨の焼けた骨片状になったものが検出されたもので, 所謂蔵骨器ではない。この土塚は, 西下段に西方へ傾斜する黒色の中世遺物包含層に掘り込まれ, 上半は, かなり削平されている。土塚内の縁に沿った部分は真赤に焼けた土がひろがり, それより内側は炭や灰そのものの層となっており, 炭層を中心として焼骨の細片がみられ, 骨粉状になったものも広くひろがる。人骨はこのように細片で, 頭部位置等を知ることはできない。土塚の北東四半に底部糸切り土師器皿3個体分が副葬されていた。

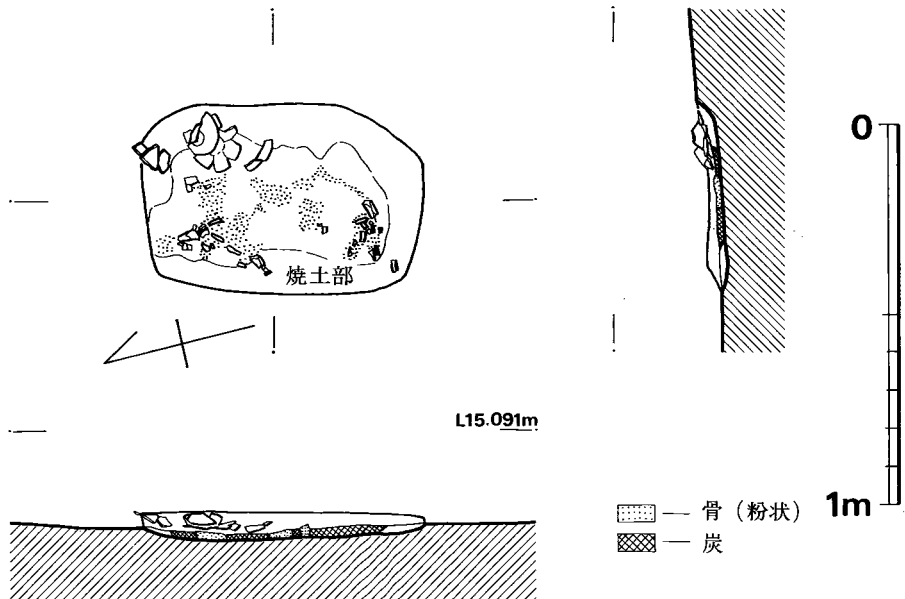


Fig. 45 向山第1号火葬墓実測図 (縮尺 1/20)

## 副葬土師器 (Fig. 46)

3個体ともに底部糸切りの土師器皿で, 器形・胎土・焼成等もほとんど同様である。口径11.7~12cm, 底部径5.4~5.2cm, 器高3.1cmを測る。底部からはほぼ直線的に体部開き, 口縁外面はわずかに丸みをもって先端に鋭角にとがる。内外面にやや強いナデによる稜がみられる。胎土には細砂粒少量含むがかなり精良であり, 焼成良好で暗茶褐色を呈する。(中間研志)

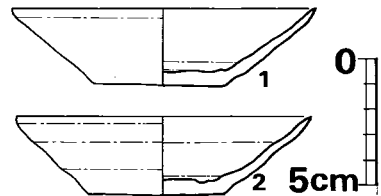


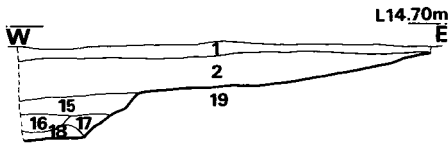
Fig. 46 向山第1号火葬墓副葬土師器実測図 (縮尺 1/3)



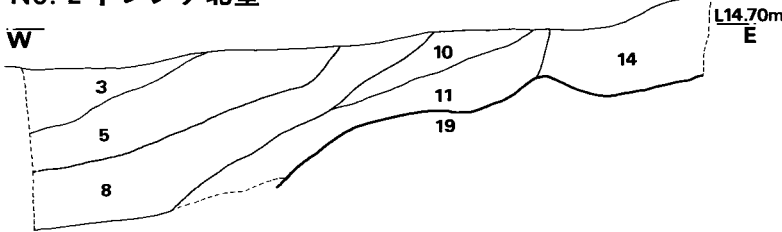
## 11 西下段歴史時代遺物包含層 (Fig. 47, P L. 21)

住居群をのせる台地の西側下段の中央に中世火葬墓を検出したので、火葬墓上部のこの段全域にかぶっていた灰褐色粘質土（床土）を除いて他遺構の確認を試みたが、何ら発見出来ず、その後斜面に直角に5本のトレンチを入れた。その層位は、大別すると、西方へ急に落ちてゆく黒褐色土層と、その上部にのる暗い粘質土と、地山の花崗岩培乱土と黒褐色土層にはさまれる真砂土系土層との3層に区分される。地山は、住居群台地の西縁部段落ちからほぼそのまま落ちて、現水田下部へと崖状をなす。黒褐色土層には、歴史時代遺物を中心に、弥生・土師器・須恵器片をも含む包含層となり、その上層では少なく、下層では出土していない。このこと

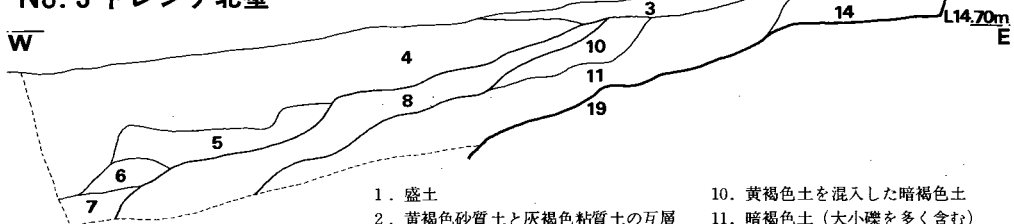
## No. 1 トレンチ北壁



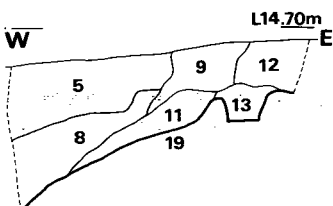
## No. 2 トレンチ北壁



## No. 3 トレンチ北壁



## No. 4 トレンチ南壁



- |                     |                      |
|---------------------|----------------------|
| 1. 盛土               | 10. 黄褐色土を混入した暗褐色土    |
| 2. 黄褐色砂質土と灰褐色粘質土の互層 | 11. 暗褐色土（大小礫を多く含む）   |
| 3. 灰褐色粘質土           | 12. 暗褐色真砂土           |
| 4. 暗灰褐色粘質土          | 13. 褐色真砂土            |
| 5. 暗褐色粘質土           | 14. 黄褐色軟質岩層          |
| 6. 暗褐色土             | 15. 灰褐色粘質土を多く含む真砂土   |
| 7. 灰褐色粘質土           | 16. 15と同じ            |
| 8. 黒褐色土（中世遺物包含層）    | 17. 真砂土に灰色粘質土を部分的に含む |
| 9. 黒褐色土（小礫多く含む）     | 18. 灰黒色粘質土           |
|                     | 19. 花崗岩培乱土           |

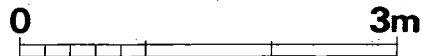


Fig. 47 西下段トレンチ土層実測図 (縮尺 1/60)

から、黒色土層を追って中央部分を拡張して掘り下げたが、遺構確認できなかった。

#### 出土遺物 (Fig. 48・49・50)

#### 土師器 (Fig. 48—4・5・6)

4は、張った胴に、くの字に屈曲した口縁をなす。復元口径17.3cmを測り、口唇外縁にわずかな張り出しをめぐらす。薄手で、細砂多く含み、焼きはやや不良で、暗褐色乃至明褐色を呈する。5は脚部中ほどにふくらみをみせる高杯脚部である。胎土に細砂多量含み、焼成良く淡茶褐色をなす。6は、手捏ね土器底部で、内外面に強い指オサエ痕残す。ややいびつな平底で、焼きは良く赤茶色をなし、粗砂粒を多く含む。以上の土師器は、第2号住居跡出土遺物と同時期に比定される。

#### 須恵器 (Fig. 48—1・2・3)

1は、杯蓋で、扁平な体部に短かく尖ったかえりを貼りつけた器形である。体部天井外面はヘラ削り調整を施し、外面縁辺と内面は回転ナデによる。受け部先端は鋭角にとがり、細砂粒多く含み、焼きは堅く青黒色を呈する。2は、復元径14.7cmを測り、口縁部は短く凹線を有して下り、端部は丸味を持った嘴状口縁である。天井部外面はヘラ削りの上をナデており、内面及び外面縁辺部は回転ナデ調整を行なう。粗砂少量含み、焼成堅く青灰黒色をみせる。3は、器台脚部である。小片であり全容は窺い知れないが、三角形スカシを配し、洗面器状の受け台部を有する類であろう。広がってきた脚下端はやや内湾して、先端はやや凹み尖った外端が接地する。スカシの下方に2条の沈線をめぐらし、その間にカキ目調整を行ない、その上にヘラによる荒い斜線を施す。内外面ともに回転ナデ調整を行なう。胎土に細砂少量含むが精良で焼きはやや甘く、灰白褐色を呈する。

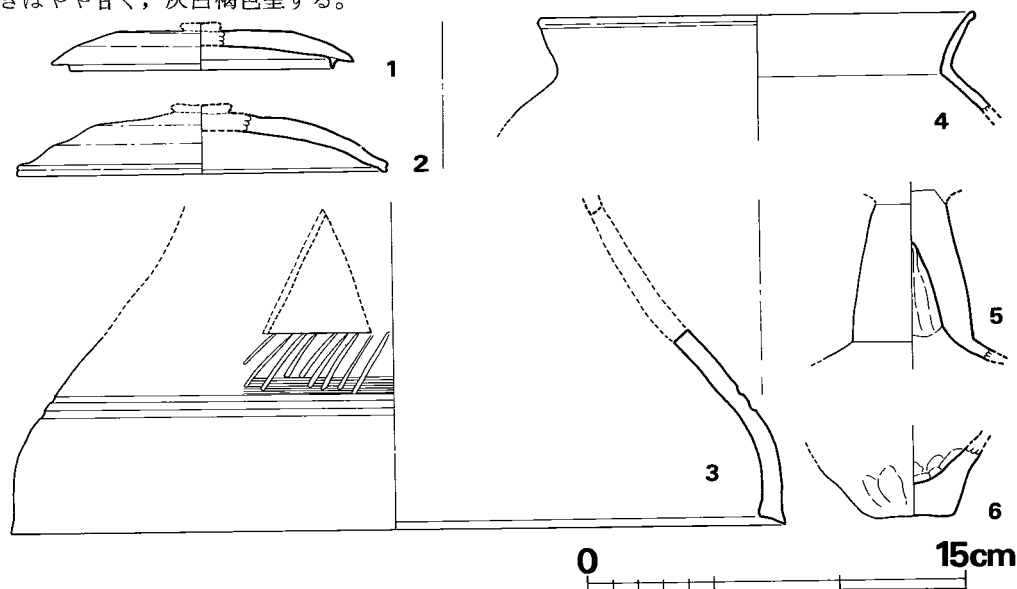


Fig. 48 西下段黒色土層中出土須恵器・土師器実測図 (縮尺 1/3)

## 歴史時代土師器 (Fig. 49-1~8)

1~3は、底部糸切りの小皿で、1は、口径9.8cm、底径5.0cm、器高2.4cmを測る。2は、口径9.9cm、底径6.4cm、器高1.3cmを測り、底部糸切りの上にスノコ痕が残る。3は、口径8.1cm、底径5.6cm、器高1.9cmを測り、底部縁辺に粘土はみ出しがみえる。4は、内面黒色土器で、高く、やや張り出す高台を有する。磨滅著しく調整不明であるが胎土は良好である。5は、底部ヘラ切り離し土師器で、体部最下部もヘラ削りを施す。6は、大きく張り出す高い高台を有する器形である。7は、短かくやや張り出す高台を有し、底部中心附近に糸切り痕が残る。8は、短かく削り出し状の高台を有し、厚く丸くおさめる口縁へと内湾気味に開く器形である。口径16.8cm、器高5.8cmを測り、焼きは明らかに土師質で淡褐色を呈するが、器形としては瓦器の特徴を示す。底部外面中央部に糸切り痕残し、外面と口縁内面は回転ナデで、凹凸が著しい。外面から内面口縁辺にかけては、部分的に煤付着状に暗褐色変している。

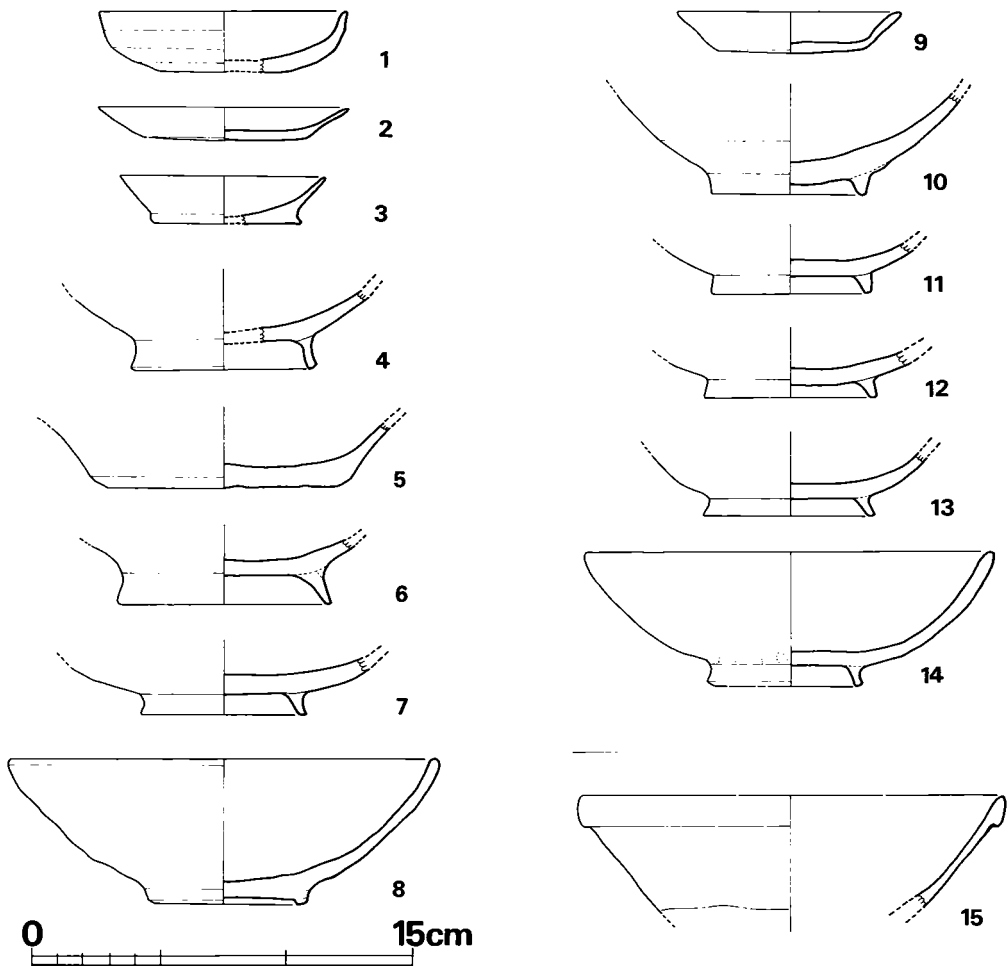


Fig. 49 西下段黒色土層中出土土師器・白磁実測図 (縮尺 1/3)

**瓦器** (Fig. 49—9~14)

9は、口径8.9cm、器高1.6cm、底径5.9cmの小皿で、底部糸切り、焼成やや軟質で、黒～灰黒色呈する。10・11・12は、低くやや外へ張り出す高台を有する。外面はわりと粗く磨き、内面は丁寧に磨き、一部に光沢をみせる。10は、内面中心部に正円形に灰白部がみられ、同規格品の重ね焼きによるものかと考えられる。12の高台縁に対応する二か所に、幅の広いスノコあるいは半裁した竹の上に載せたような痕跡がみられる。13は、端部が平坦でやや細身の高台を有する。高台の内側底部面には糸切りの上にスノコ痕が残る。14は、口径16.2cm、器高5.4cmを測り、丸く厚い口縁部を有する。外面は横方向のヘラ磨きを行ない、内面は丁寧に磨いている。内面中央部に10と同様に丸く白い部分を残し、高台接着部に、指オサエ痕残し、その上をナデている。

**磁器** (Fig. 49—15)

口縁を折りまげた玉縁状をなす白磁である。乳白色釉をなし外面下半には釉がかからない。胎土は良好で白色を呈する。図示したもの以外にも、口縁薄く端部短かく折れて外反する白磁片や、龍泉窯系の鎗蓮弁青磁碗や、珠光青磁等の小破片が7～8片出土している。(中間研志)

**石器** (Fig. 50)

黒曜石製の石鏃1点で、先端部 $\frac{1}{3}$ を欠損する。主要剝離面を残す。幅19.5mm、厚さ3mm。(稲富裕和)

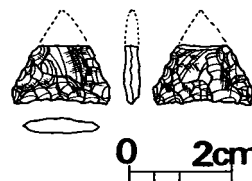


Fig. 50 西下段黒色土層  
中出土石器実測図  
(縮尺  $\frac{2}{3}$ )

## IV 向山古墳群の調査

昭和50年度に第一次調査として1号墳・2号墳を調査し、翌年に第二次調査として3～6号墳を調査した。水田面との比高18mの丘陵上西縁部に、6基が群集する。発掘前は上下二段の畑地であり、その西端縁が土採りによって崖となり、その南端部崖面に4号墳石室石材が露出しており、これが発見の端緒となった。墳丘は、この4号墳がかろうじて $\frac{1}{3}$ を残し、他はすべて削平されており、6基もの数が検出されるなど予想だにされぬ状態であった。

### 1 向山1号墳

#### 墳丘の構造 (Fig. 53・54)

盛土は、石室上面まですべて削平されており、全く残らない。ただ、東半分の奥壁側の周溝が残っており、その規模等推定できる。周溝は地山を掘り下げて、奥壁側で幅1.5m、深さ50cmで断面V字形をなす。周溝北側はその底部付近が残り、2号墳の東南側周溝に切られる。周溝内埋土からは弥生式土器小片・土師器小片がかなりみられる。周溝の廻り具合から墳丘径を推定すると、直径約12m前後となる。

#### 内部主体の構造 (Fig. 55)

主軸をN86°Wにとり、略西向きに墓道をつくる単室両袖横穴式石室を主体とする。袖石両方と南壁腰石の一部が抜かれ、墓道前半が削られ、石室上半部を削平されている。

墓壇は4.3m×3.3mの略長方形プランをなし、中軸にあわせて下底部幅0.65mの墓道がつく。玄室は、右壁の1腰石と両袖石の抜き跡が明確で当初掘り方との差が判明したのでそのプランを充分復元することが可能である。玄室各部の計測値は

長さ	(	左	—	2.66m	幅	(	奥壁	—	1.58m
		右	—	2.45m			中央	—	1.83m
		仕切石端	—	2.65m			前壁	—	1.45m

で、やや胴張りの長方形プランを呈する。現存する高さは1.36mを測る。腰石は、奥壁で大小2個を据え、左右両壁は3個ずつを据える。両袖石下部は特に深く掘り下げ、壇壁と石材の間に角礫を込めている。腰石に外接して裏込め石が、各腰石に対して2～3個ずつみられる。腰

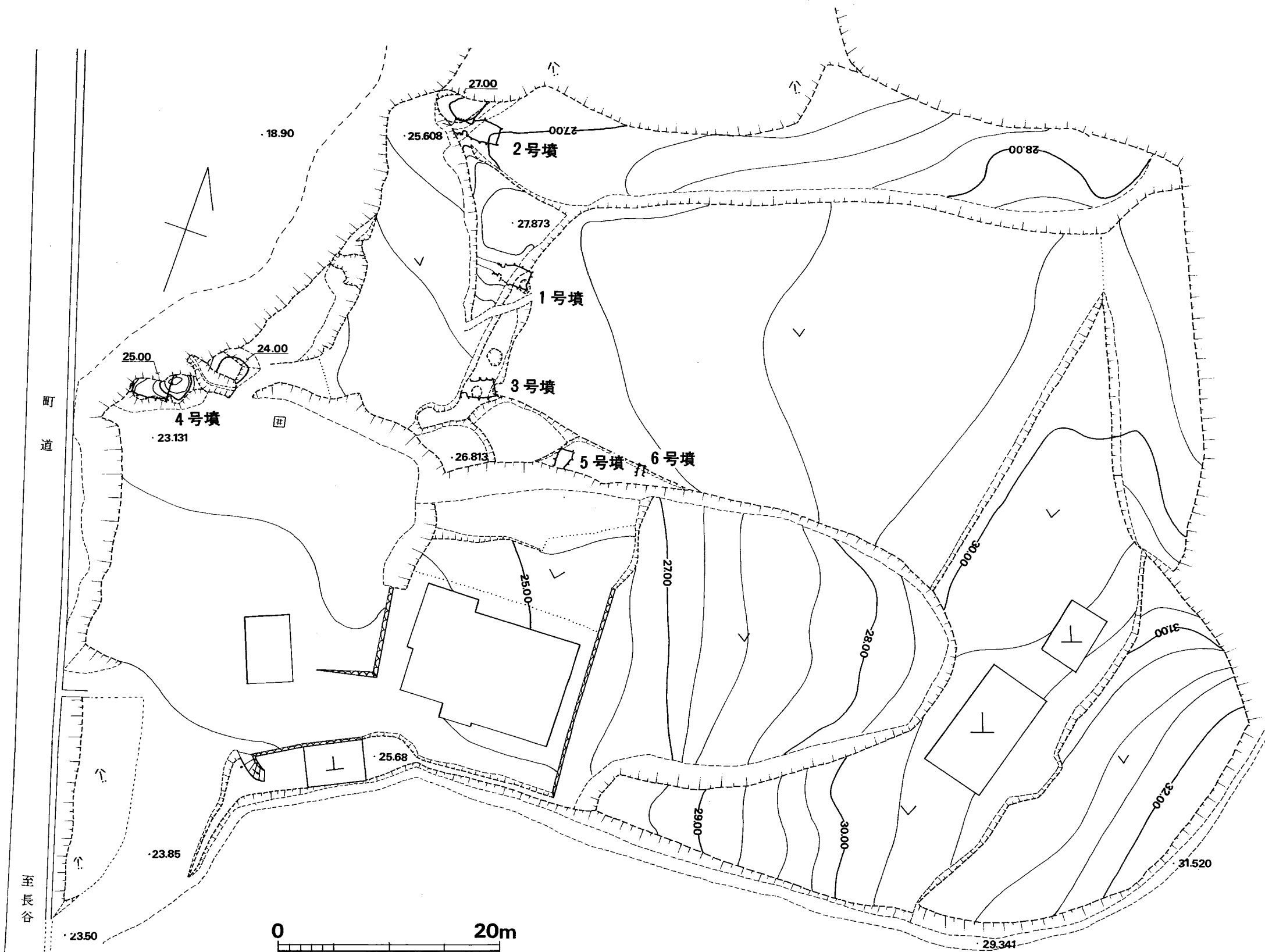


Fig. 51 向山古墳群周辺地形図 (縮尺 1/400)

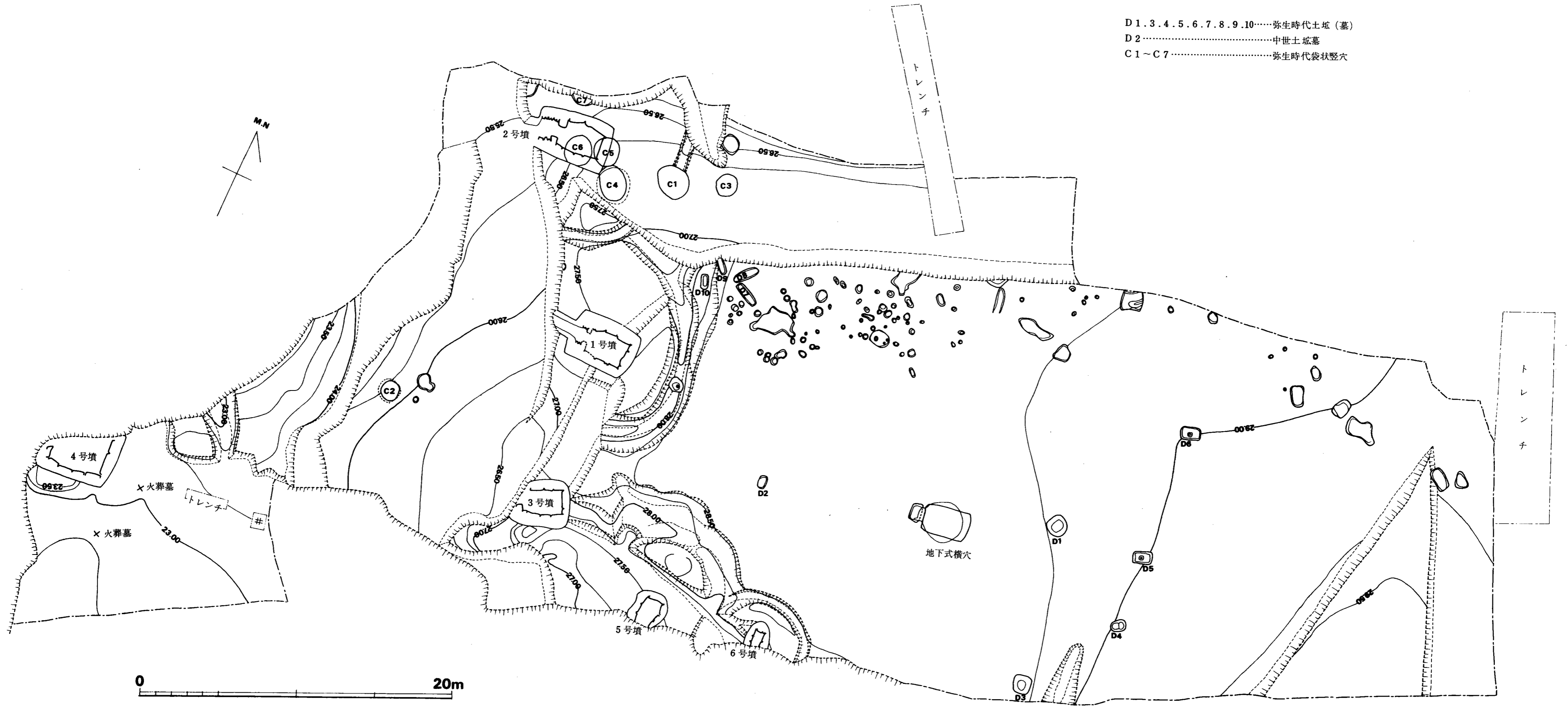


Fig. 52 向山古墳群及び周辺遺構全体図 (縮尺 1/200)

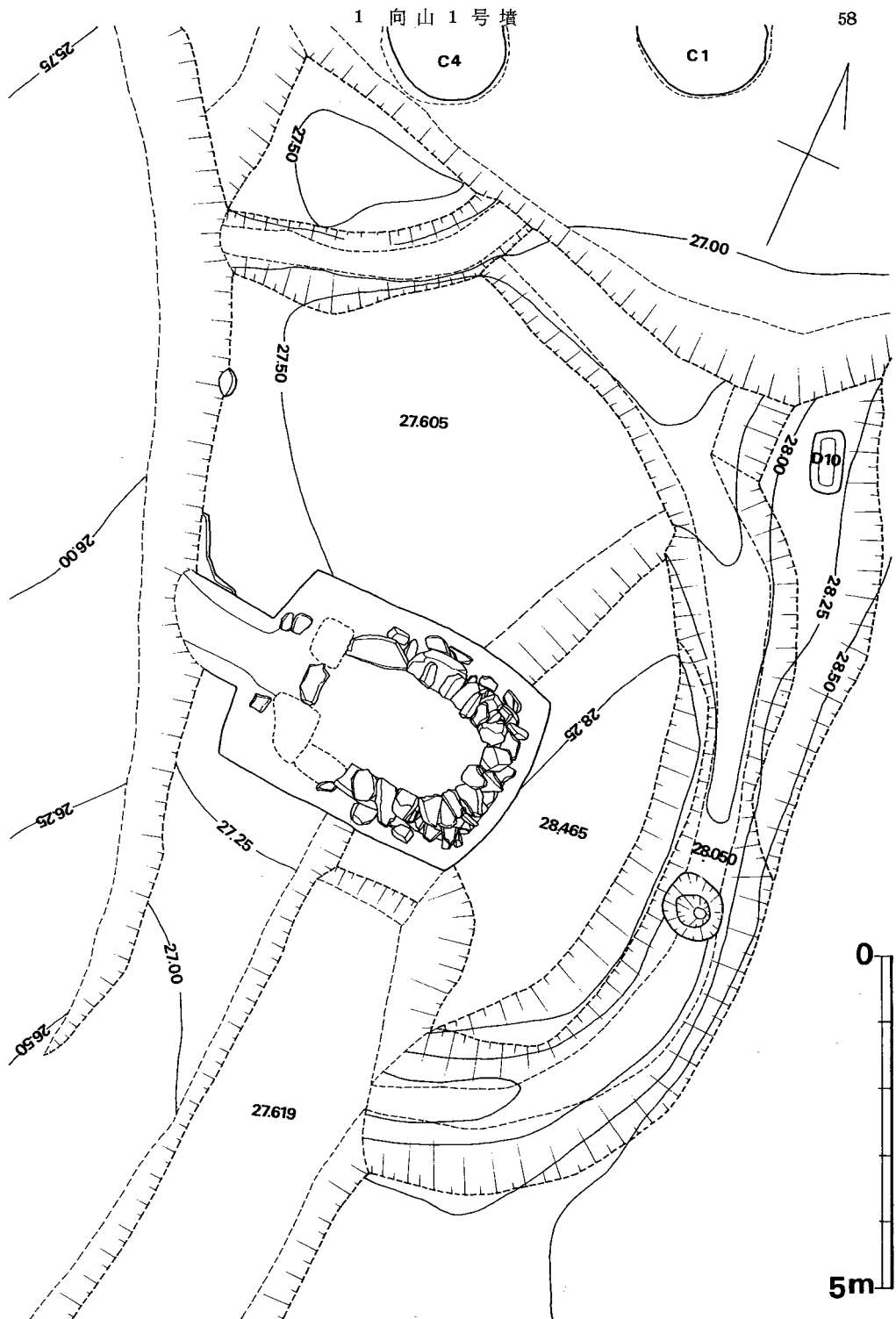


Fig. 53 向山 1 号墳周溝及び石室測量図 (縮尺 1/100)



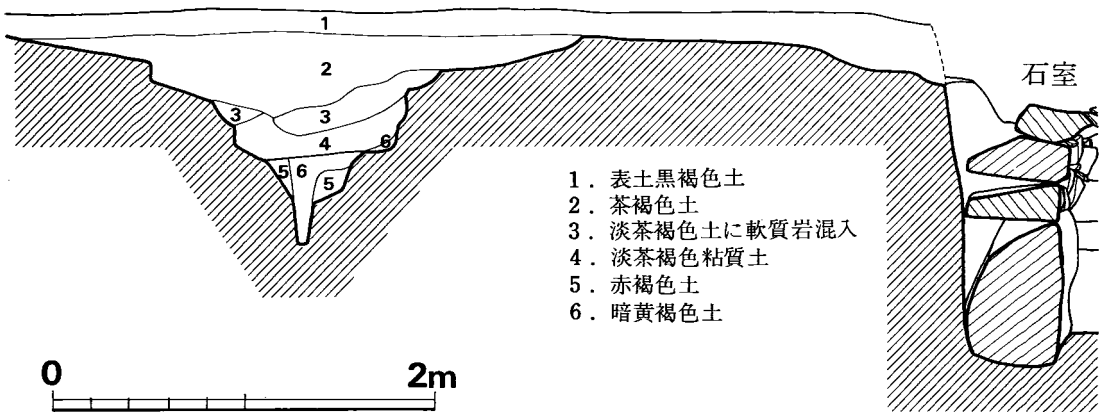


Fig. 54 向山1号墳周溝土層実測図 (縮尺 1/40)

石上面は各々凹凸があるが、奥壁腰石上面にそろえてならすように石材を積み、それ以上の2段目3段目もかなり丁寧にそろえている。腰石以上の石材は縦長石材の小口面をそろえて使用し、その間隙には小礫を充填している。上部にゆく程持ち送りが急になる傾向をみせる。

床面の敷石は、殆んど浮いた状態で、厚位置を保つものは少ない。ただ、各腰石際にやや大きな扁平な石が置かれ、これらは原位置を動かない。羨道部は、左壁で最下部石が2個、右壁が1個残り、原位置を保つものと思われ、袖石抜き跡の大きさを考えると、せいぜい最下部で3個の石を据え、その上に積んだと考えられ、石室堀内に納まる約60cm内外の極く短い長さのものであったと推定できよう。仕切り石は玄門部に一ヶ所みられ、堀を掘った当初より計画されており石自体よりも幅広く深い掘り方を有する。手前の羨道部のその他の仕切り石は抜き跡等の検出されないことから、存在を推定することはできない。墓道は現存長1.5m、下底部幅0.64~0.7mを測るが、前面を削除されていることを考慮するとまだ伸びる可能性は強い。

石材は、その殆んどが地山中にみられる花崗岩の割石を用いている。殊に腰石においては、花崗岩の楕球形の大石を縦に半裁して、奥壁大石及び左壁腰石に用いており、他の腰石にも個別の関係は明確ではないが、そのような用法をとり入れている。

#### 遺物出土状況 (Fig. 55)

前記の如く、敷石は多く浮いており、後世の攪乱に会ったことは確実に、遺物もその殆んどが浮いており、床面に検出されたものも確実に原位置を保ったものとは言いがたい出土状況である。鉄器類・銀環等の小型破片のみが多量に出土しており、かなり多量の副葬は考えられる。玉類は、後述の2号墳と同様、精査したが全く検出できなかった。

#### 遺物 (Fig. 56・57, P.L. 44)

出土遺物は下記のとおりである。

L 28.500

L=28.500

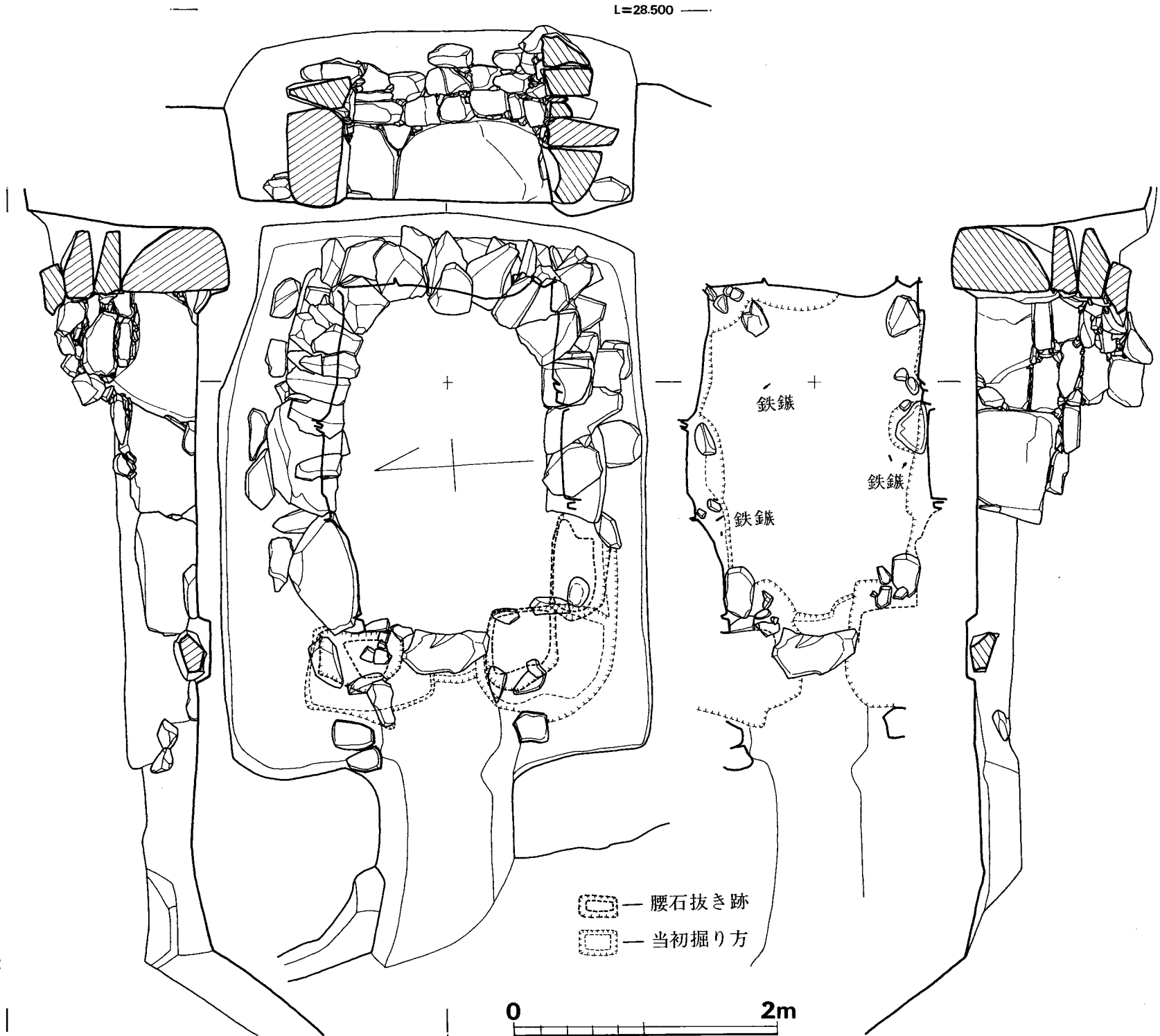


Fig. 55 向山1号墳石室実測図 (縮尺 1/40)

- (1) 装身具
  - 銀製耳環 1
- (2) 武器
  - 刀片 1
  - 鉄鏃 21+α
- (3) 工具
  - 刀子片 1
- (4) 馬具
  - 鉸具 1
  - 留金具 1
  - 不明鉄器 1
- (5) 打製石器（攪乱土中） 1

耳環 (Fig. 51-31) 中実の銀胎で、極めて細身の形態を示す。径は18.5×17.5mm，断面は1.8mmの円形をなす。

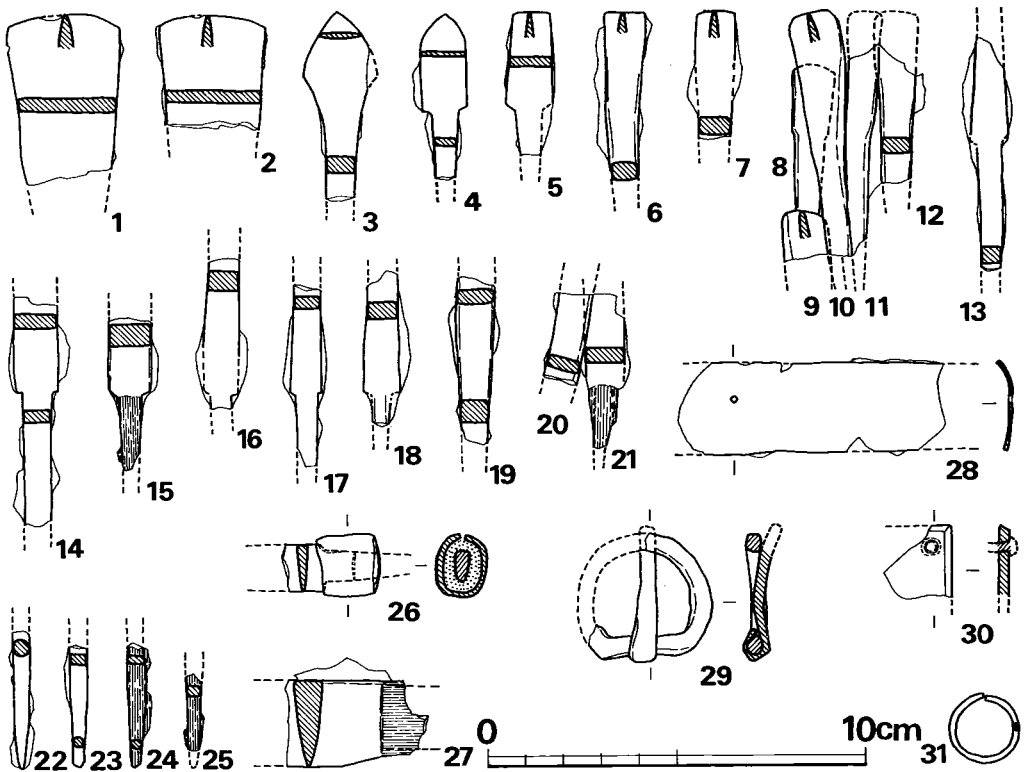


Fig. 56 向山1号墳石室内出土鉄器・耳環実測図 (縮尺 1/2)

刀片(27) 関部の両側僅かのみを残片である。身幅23mm, 身厚8mm, 茎の身厚17mmを測り, 茎部には木質が残る。関部は刃部側のみが片削ぎ関となる。

鉄鏃(1~25) 形態により5類に分類される。

I類(1・2) 円頭広根斧箭式に属するもので, 最大幅30~28mmをなし, 基部から基部にかけては欠損して不明である。

II類(3) 両丸造変形斧箭式丸変形広根定角式の類で, 最大幅19mmを測る。

III類(4) 鋒部は薄手で, 柳葉形をなす。両関を造り, 鑿箭式に属する。

IV類(5・8・11) 両関の鑿箭形式となるものである。14・15・20・21もこの類に属するものであろうか。

V類(6・7・10) 関無平造鑿箭式に属するものである。12・19もこの類に入るものかと考えられる。

鈹具(29) は, 断面略円形の環状部に, 先端を折り曲げて巻き込んだ舌部をつける。長さ3.3cmを測る。

留金具(30) 正方形の鉄板の縁辺を斜めに削ぎ, その一隅を紙で留めている。恐らく, 辻金具の留金具であろう。

不明鉄器(28) 幅24mm, 厚さ1mm弱の薄い鉄板で, 両端が内湾している。内面には木質付着痕はみられない。中心寄りに一孔を穿つ。

石器(Fig. 57)

安山岩製のスクレーパー状打製石器である。端部に原材粗面を残し, 裏面には原剝離面を残したまま, 片辺部2縁辺の表面に細加工を施す。

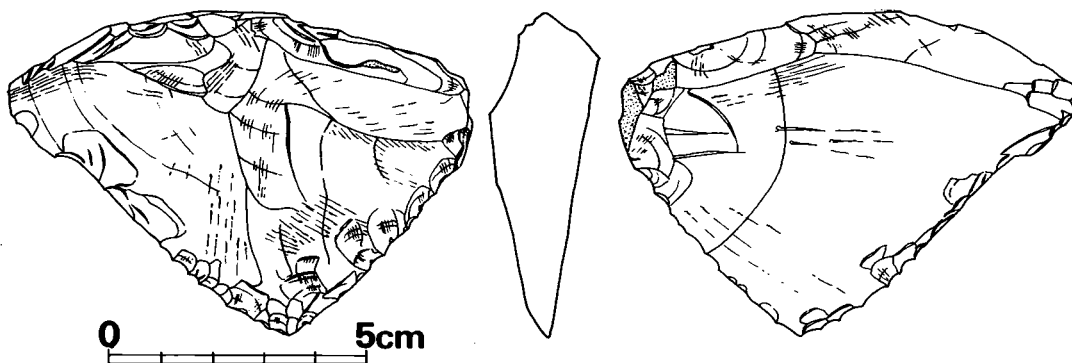


Fig. 57 向山1号墳石室内覆土中出土石器実測図(縮尺 2/3)

### 葬法

本石室への埋葬遺体は, 遺骨全く残らず, また床面敷石まで完全に攪乱されており, 鉄器類等の出土状態等で葬法は全く不明である。追葬等の可能性も不明である。(中間研志)

2 向山 2 号墳

62

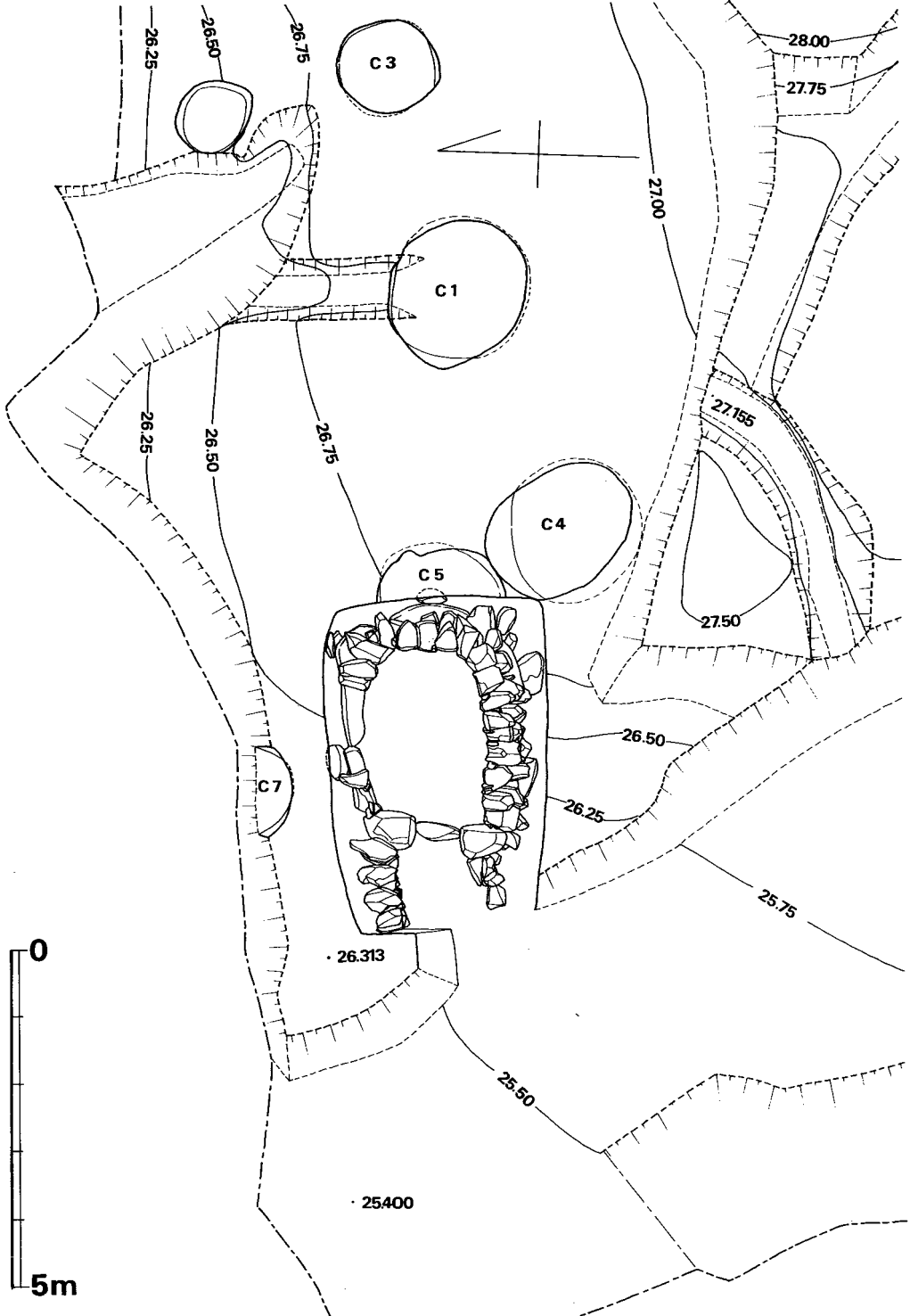


Fig. 58 向山 2 号墳周溝及び石室測量図 (縮尺 1/100)

## 2 向山 2 号 墳

### 墳丘の構造 (Fig. 58)

既述の如く、2号墳盛土も畑開墾により全く削平され残らない。ただ、周溝が部分的に残っており、その規模等を推定し得る。石室の東南側周溝が長さ4.5m、幅幅1.3m、深さ35cm、前後のみ残っており、これは1号墳周溝を切って掘られている。また、東側にも長さ2.2m分だけ周溝の一部が残る。これらより墳丘径を推定すると、直径約12m前後となる。

### 内部主体の構造 (Fig. 59・60)

主軸をN88°Eにとり、略西向きに墓道をつくる単室両袖横穴式石室を主体とする。上半部と墓道前半部が削除されている。

墓壇は、4.95×3.24mの略長方形プランをなし、中軸より南に著しく寄った墓道部をつける。墓壇は北辺、南辺の一部にオーバーハングの状態をみせる。

玄室各部の計測値は

長 さ	(	左		2.56 m	)	幅	(	奥 壁		1.64 m
		右		2.78 m				中 央		1.96 m
		仕切石端		2.78 m				前 壁		1.60 m

で、やや三味胴張りの長方形プランを呈するが、右側のみ長く歪になっている。腰石は墓底を更に20~50cm掘り窪め、奥壁寄から順次据えつけている。腰石の下及び外際には、根石及び裏込め状の石が積み込まれている。腰石は奥壁に鏡石状に1個、右側壁で4個、左に長短の2個を据え、羨道部には腰石状のものはみられない。腰石以上の積石は、1号墳と同様、腰石上面の凹凸をならすための第1段目を積み、残る第3段目まで略水平を保つように積むが、1号墳のもの程注意が払われておらず、かなり荒い。腰石以上の石材はやや縦長の小口面をそろえ、その間隙には小礫を充填している。持ち送りは、腰石がすでに内傾しており少しづつせり出ししている。

床面は、やや大きめの角礫を略全面に敷き詰め、玄門近くに幾らか空間がみられる。奥壁際より敷かれたらしく、やや大きめの大きさの揃った石を敷き、玄門近くになると小礫が多く荒い敷き方がみられる。断面図上で敷石が浮いた様にみえるのは、弥生袋状堅穴上半を削って墓壇を掘っているためである。

羨道部は、袖石から墓壇西際まで長さ約1.1mに荒く石が積み込まれ、右側は外へ開く。墓道部は右部分のみ残るが、著しく南へ曲がり、1号墳・3号墳のそれと途中で継がることを示唆させる。

石材は花崗岩と青みを帯びた水成岩その他をやや多様に用いるが奥壁鏡石及び右奥寄りの腰

L26900

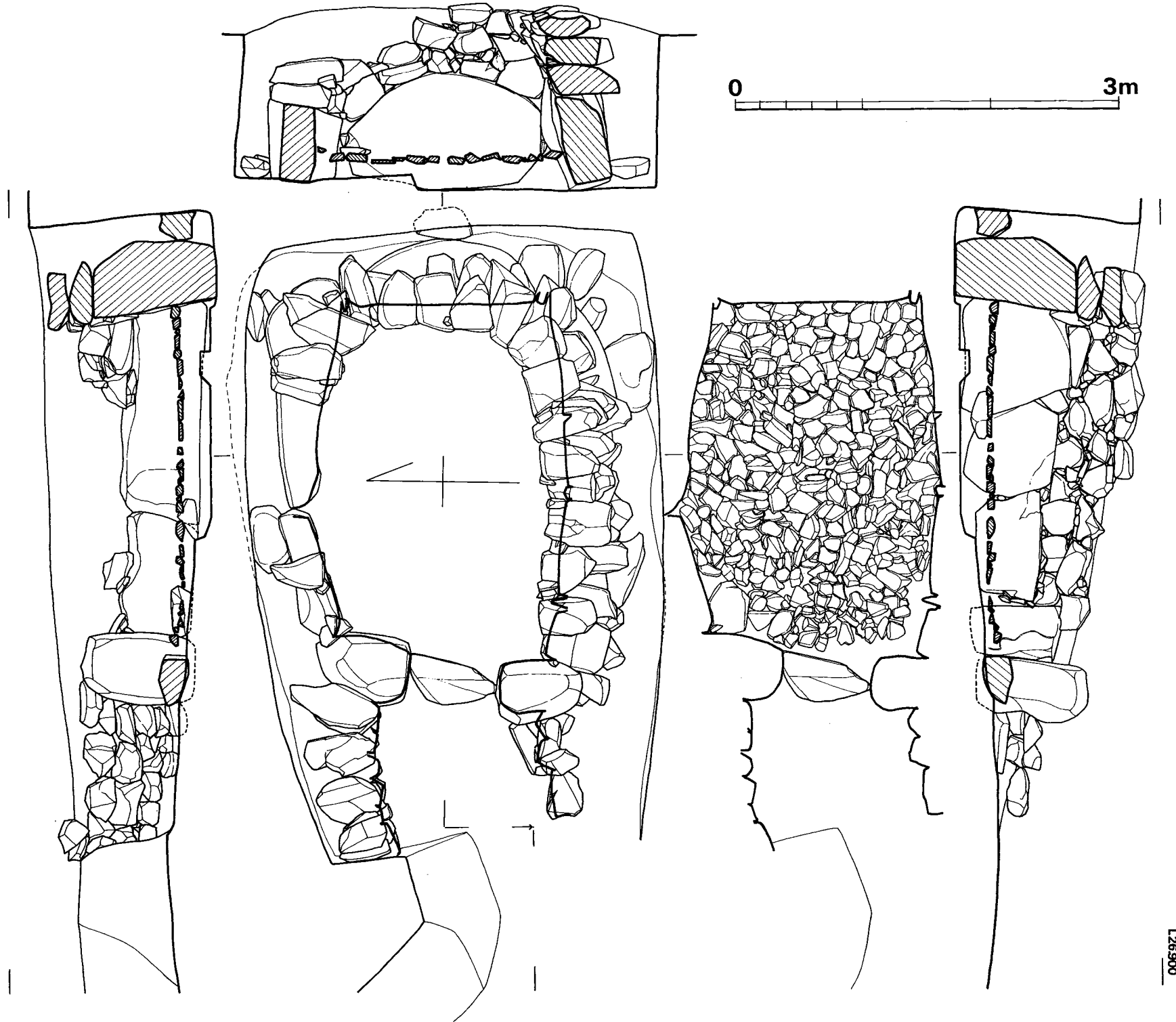


Fig. 59 向山2号墳石室実測図(縮尺1/40)

L26900

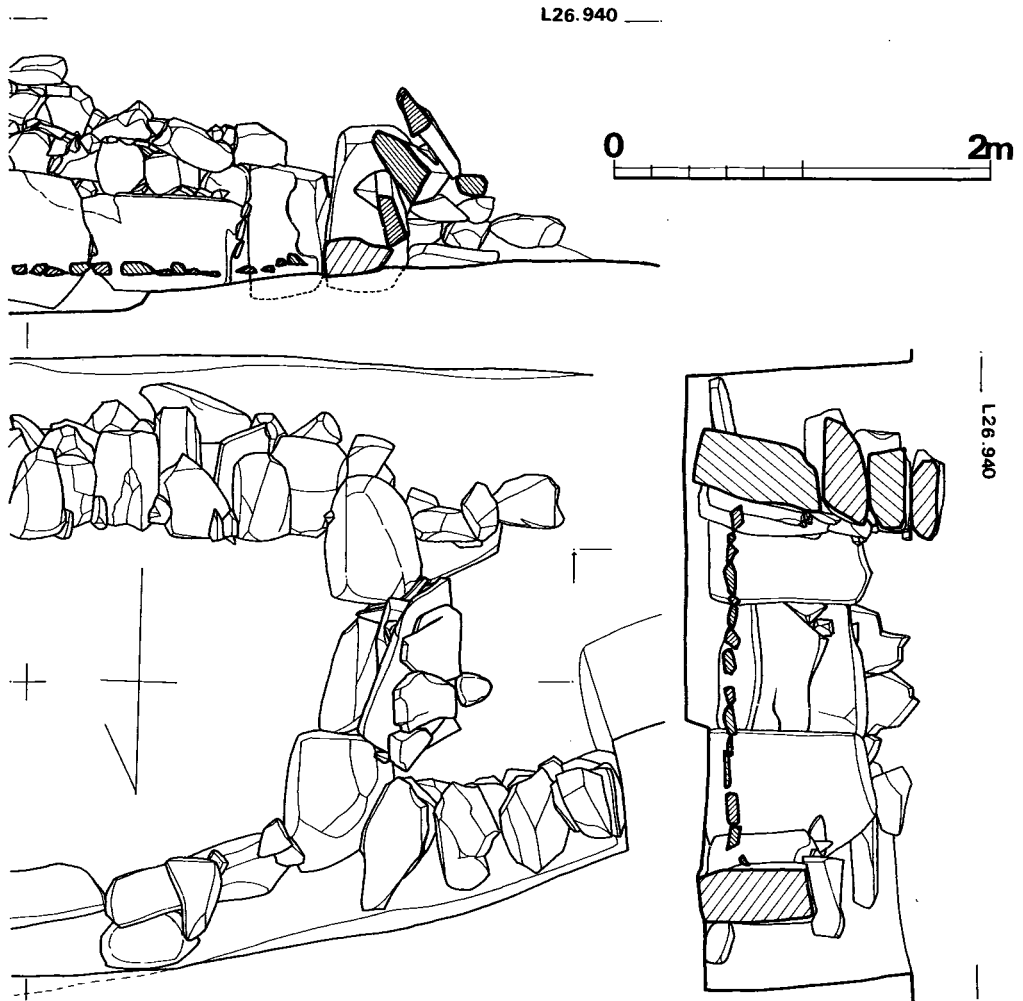


Fig. 60 向山2号墳玄門部閉塞状況実測図(縮尺 1/40)

石は、楕球形の花崗岩の大石を半截したものをを用いている。

玄門部には、閉塞がみられた。(Fig. 60) 閉塞法は、基本的には3枚の板状石を横長に前下部から後上部へ順次送り重ねてその裏側に若干の大円礫と土を充填する。その板石の間隙に数個の小礫を込めてはいるが、墓道側にも込め石は少なく、全体的に簡素な閉塞であるといえよう。

#### 遺物出土状況 (PL. 41)

奥壁寄り南隅附近敷石上に、鉄鎌5本、刀子1口が、ほぼ原位置を保って出土した。玄室内からはその他には何ら発見されない。

東南側周溝内より、須恵器片が多量に出土している。上部は削平されて全容は知り得ない

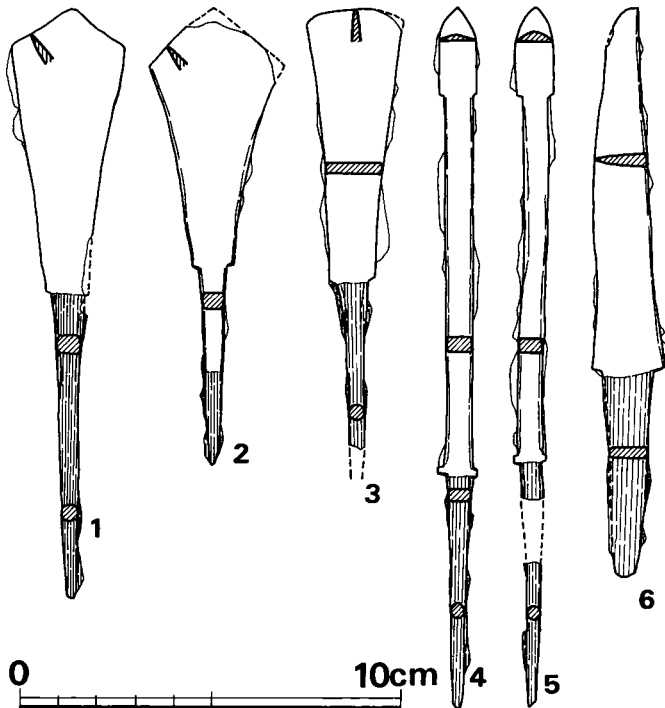


が、残る状態では、すべて細かく破碎されて、底部の据えられたものは全くみられない。

遺物 (Fig. 61・62, P.L. 44・45)

出土遺物は下記のとおりである。

(1) 武器		
鉄 鏃		5
(2) 工具		
刀 子		1
(3) 須恵器		
杯 蓋		1
杯身片		2
碗 片		1
高 杯		2
壺		2



鉄鏃 (Fig. 61, P.L. 44) 形式により3種に分類できる。

I類(1・2)広根定角式に属するものである。1は鋒幅2.9cm, 全長15.5cm, 2は鋒幅3.6cm, 全長12.1cmを測り, 2の方が, 特に茎部がかなり短い。1は茎部全体に木質をみるが, 2は下半部のみ認める。

II類(3)円頭広根斧箭式に属し, 鋒幅2.6cmを測る。茎部下端は欠損するが全体に木質を認める。

III類(4・5)片丸造棘被鎧鑿箭式に属し, 4・5はほぼ同規格品で, 全長18.4cm,

Fig. 61 向山2号墳石室床面出土鉄器実測図 (縮尺 1/2)  
鋒幅1.0cmを測る。

刀子 (Fig. 61—6, P.L. 44) 両関を有し, 背部が僅かに反る形式で, 鋒先へと幅が細くなる。茎部には木質が残る。全長15.0cm, 身長9.6cm, 身最大幅1.9cm, 身厚さ0.4cmを測る。

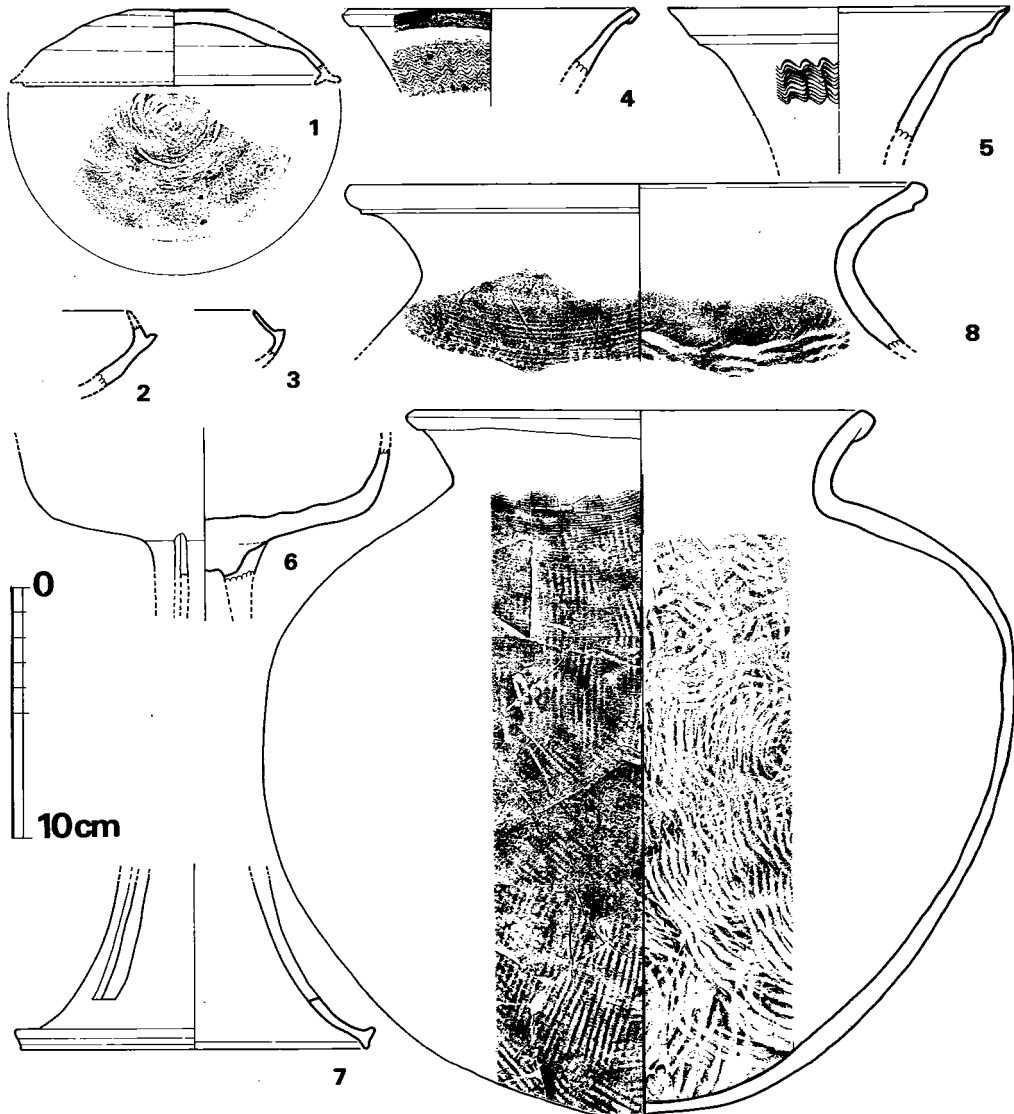


Fig. 62 向山 2 号墳南側周溝内出土須恵器実測図 (縮尺 1/3)

須恵器 (Fig. 62, P.L. 45)

杯蓋 (1) 体部から天井部のみ残るが、器高低く短い返りを有する器形であろう。径も小さく 11.5cm 程と推定され、外面は体部下辺まで内から外への左廻りヘラ削りが行なわれる。内面は回転ナデの上に天井部に、当て具による同心円文叩き目が残る。胎土に粗砂少量含み、焼成堅緻で灰黒色を呈する。

杯身 (2・3) 2 は、受け部上面がヘラにより凹線をなし、立ち上がり基部内面は丸味を持

って先端部へと内湾する。3は、薄手の立ち上がりが直線的にかなり内傾し、受け部先端は稜をなす。いずれも胎土に粗砂を少量含み、焼成堅く、灰黒色を呈する。

**小壺（4）** 広く口縁先端を外へ折り曲げた形の口縁部で、小壺の口縁部であろうか。器表は回転ナデで調整し、外面に密な櫛描波状文を施す。胎土精良で焼成堅く、外面黒色、内面灰色を呈する。

**甕（5）** 強く広がる頸部が、口縁辺でゆるく屈曲し、薄い口縁が開く器形である。口唇部内面で段をつくり、屈曲部外面に凹線を入れる。器表は回転ナデを行ない、外面に櫛描波状文を施す。胎土精良で焼成堅緻、青灰色を呈する。

**高杯（6・7）** 脚にスカシをつくる高杯2個体分である。6は、3本の縦長スカシを有し、その上端に鋭利な工具の切り出し痕がみえる。器壁は回転ナデ調整を施し、杯部内面は凹凸著しい。7は脚部片で、3本の幅1cmの縦長スカシをつくる。その脚端面は凹線をめぐらし、その下端のみが接地する。いずれも胎土に少量の粗砂粒を含み、焼成堅く青黒色を呈する。

**壺（8・9）** 8は、丸くおさめる口唇部外面に凹線をめぐらし下端を稜にみせ、頸部で丸く外反する器形である。胴部外面には格子目ふう叩目を、内面には青海波文叩目を入れる。胎土精良で、焼成堅緻、暗灰色～灰黒色呈する。9は、やや肩の張った球形の胴部に、短かく外反する口縁を有する器形で、口径18.7cm、胴部径29.9cm、器高28.0cmを測る。口縁端を外へ折り曲げており、胴部内面にやや太めの青海波文叩目を全面にわたって密に施し、外面には、格子ふう叩目文の上をカキ目調整で仕上げている。カキ目は下方にゆくに従って間隔がすいてきたり、粗になって底部近く $\frac{1}{3}$ 程には施されない。胎土に少量の粗砂を含み、焼成は片半分と底部がやや甘く、他は堅緻で、灰黒褐色～灰白色呈する。

以上の須恵器は、ⅢB期からⅣ期にわたるもので、6C末～7C初頭頃の当古墳築造を推定させる。

### 葬法

鉄器類が奥壁寄りにかたまって出土してはいるが、遺骨及び葬法を示すような他の遺物・施設がみられず、また、盗掘等も考えられるので、不明な点が多い。閉塞も開けられた痕跡もなく追葬を示す状況も確認されない。ただ、前記の周溝内出土須恵器がⅢB期～Ⅳ期にわたるものであるが、それが直ちに追葬を示すものとも断定はできない。（中間研志）

## 3 向山3号墳

### 墳丘の構造 (Fig. 63)

東より西に延びる舌状尾根上に位置する古墳である。ほとんど削平され、判然としなが、径約12～13mの円墳になるものと推定される。盛土もほとんど失われ、墳丘東側に一部周溝を

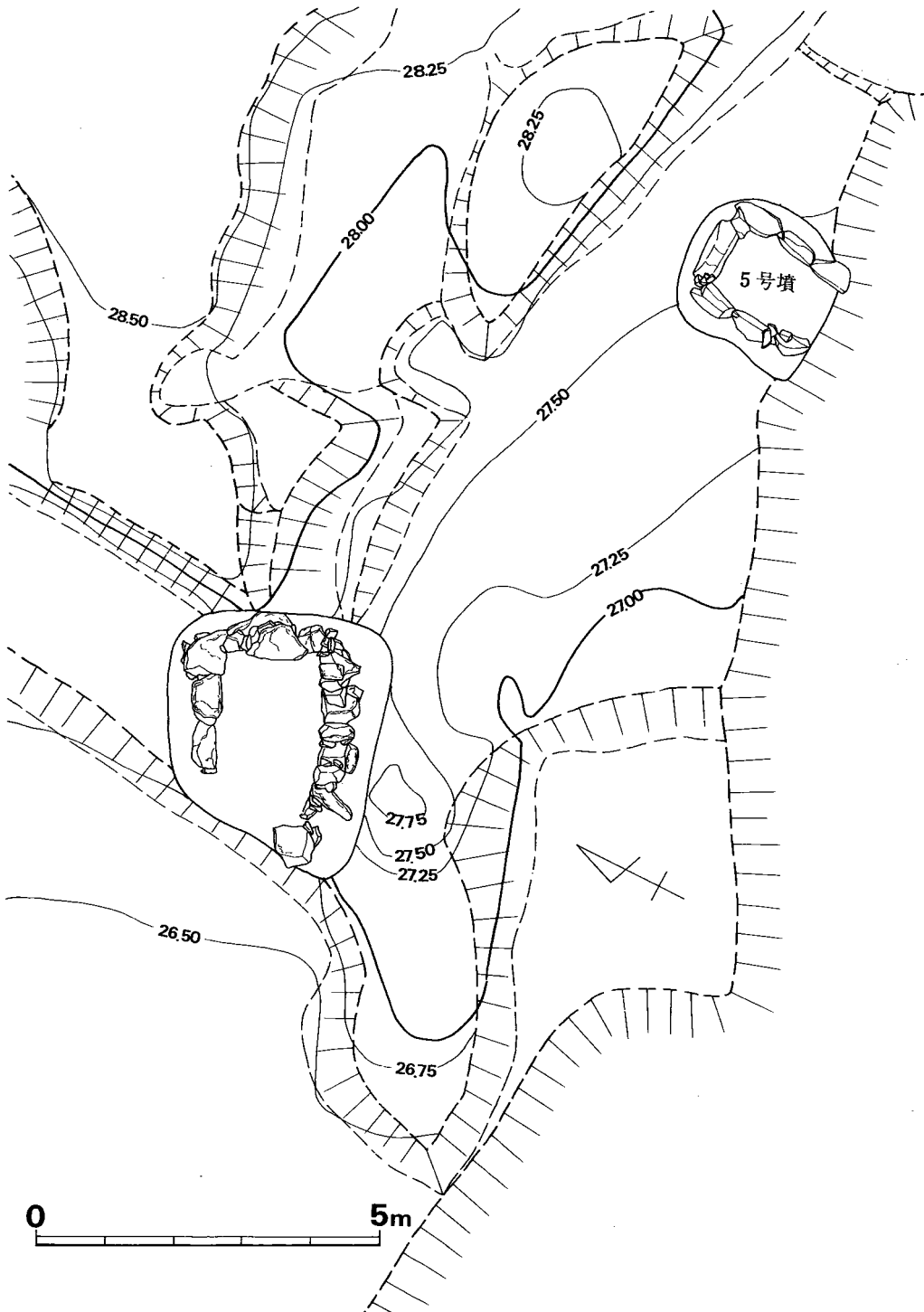


Fig. 63 向山 3 号墳周溝及び石室測量図 (縮尺 1/100)

残すのみである。掘り方は、残存高 1.1 m を測り、壁の状態などからみて、盛土は少ないものと考えられる。

L 3900

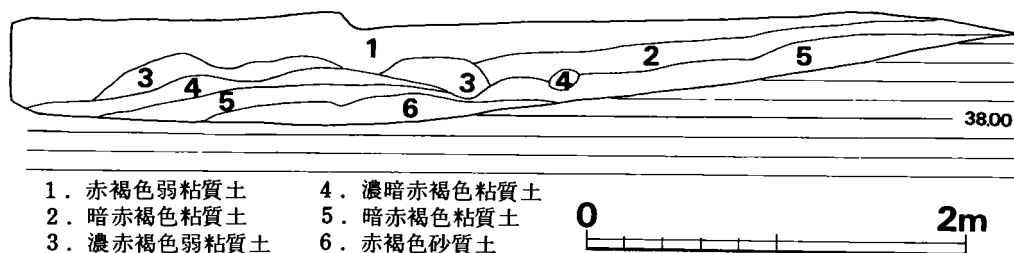


Fig. 64 向山3号墳周溝断面実測図 (縮尺 1/40)

#### 内部主体の構造 (Fig. 65・66)

主軸を N65°E の南西方開口の横穴式石室である。側壁と右袖石を残すのみであるが、根固め石の状態から、単室の可能性が強い。玄室長さ約 2.60 m、幅約 1.60 m である。壁の構築は、接続状況から、奥壁より羨道へと腰石を認置した後、石を積んでいったものと推定される。奥壁は、標高 27.80 m で高さを調整し、右壁は、腰石で一旦揃え、次に 27.80 m で調整している。左壁は、石を欠失しているため不明である。腰石を安定させるために、根固め石を数多く使用し、その間に、ジャリと粘質土をつめている。敷石は 10~20 cm 位の石を敷きつめている。奥壁部の敷石は比較的大きいが、羨道へと向かうにつれ、石が小さくなっている。奥壁より順に羨道へと敷いていったものと推定される。

#### 遺物出土状態 (P.L. 48)

ほとんど盗掘により紛失していた。奥壁中心部にガラス小玉 4 個、右壁やや中心部に鉄鏃 3 個を検出したのみである。敷石直上の土を篩にかけ、鉄鏃 4 個、ガラス小玉を 23 個検出した。ほぼ完掘されていた。また、周溝中層より、鎌を検出したが、本墳の築造時のものか否かは明らかでない。

#### 出土遺物

##### 装身具

**ガラス玉** (Fig. 67, P.L. 65) 27 個検出した。総て径 0.3~0.4 cm 位のガラス小玉である。緑黄色のみで、紺色のガラス小玉はなかった。孔径は 0.75 cm~1.25 cm である。総て保存状態は良好である。

##### 武器

**鉄鏃** (Fig. 67) 7 個体検出したが、形式のわかるものは 3 個体のみである。2 は方頭広根斧箭式、3 は、片丸造鑿箭式、4 は、変形広根定角式である。5 は、鑿箭式かあるいは、片刃

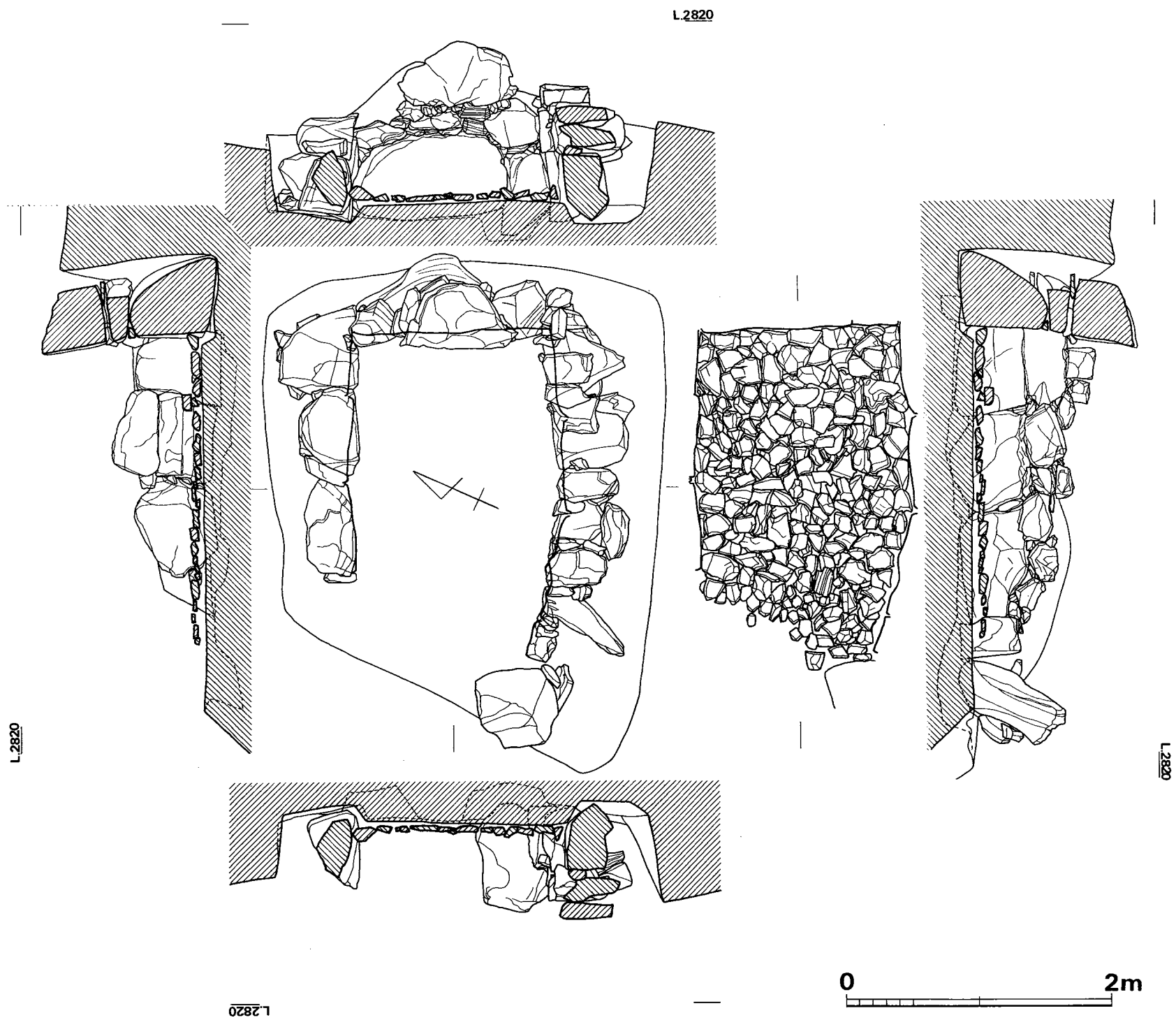


Fig. 65 向山3号墳石室実測図 (縮尺 1/40)

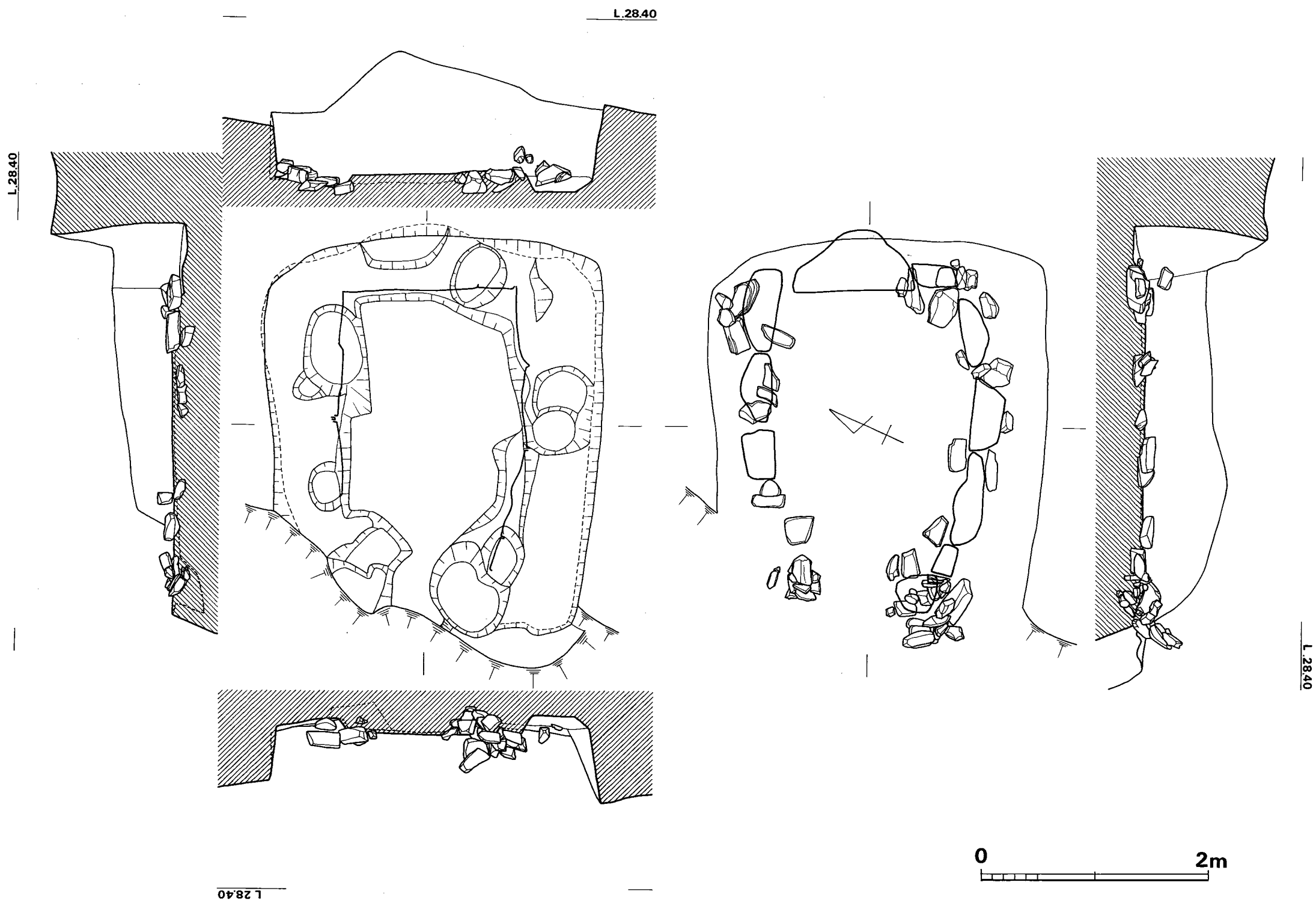


Fig. 66 向山3号墳石室掘り方実測図 (縮尺 1/40)

箭式のものとは推定される。6は、広根式のものとは推定される。

### 農具

鎌 (Fig. 67) 1 個体検出したが、保存状態が悪い。曲刃鎌である。使用による磨滅はない。

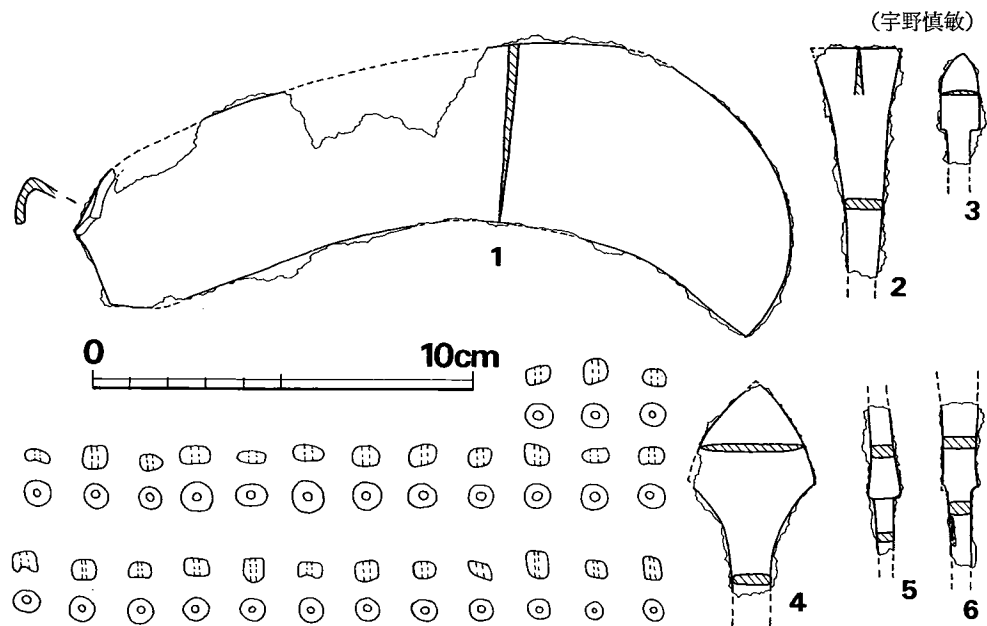


Fig. 67 向山3号墳石室内出土鉄器・玉類実測図 (縮尺 1/2, 玉は実大)

## 4 向山4号墳

### 墳丘の構造 (Fig. 68・69)

北側および西側を道路により削平されているが、墳丘東側に一部周溝らしきものを検出し、径約14~15m、高さ約3~4mの円墳と推定される。石室構築の際、若干の整地作業を行なっているものと推定されるが、東側より西側に延びる舌状尾根の突端に位置する本墳は、地形を有効的に利用しているものと思われる。また、石室東側の土層断面より、地山直上に、一部2~3cmの黒褐色土層がみられ、墳丘中心部はあまり整地作業を行っていないものと考えられる。裾部は、芥溜などにより、すでに削平され判然としないが、長さ約3m、深さ約0.5m、幅約1mの周溝を検出した。周溝内からは、弥生式土器を一片検出した。墳丘中心部の盛土は、粘質土と砂質土を交互に、少量ずつ細く盛られており、その後、土層中間部に砂質土を盛り、その上に粘質土で覆って、盛土の流失を防いでいるものと思われる。



IV 向山古墳群の調査

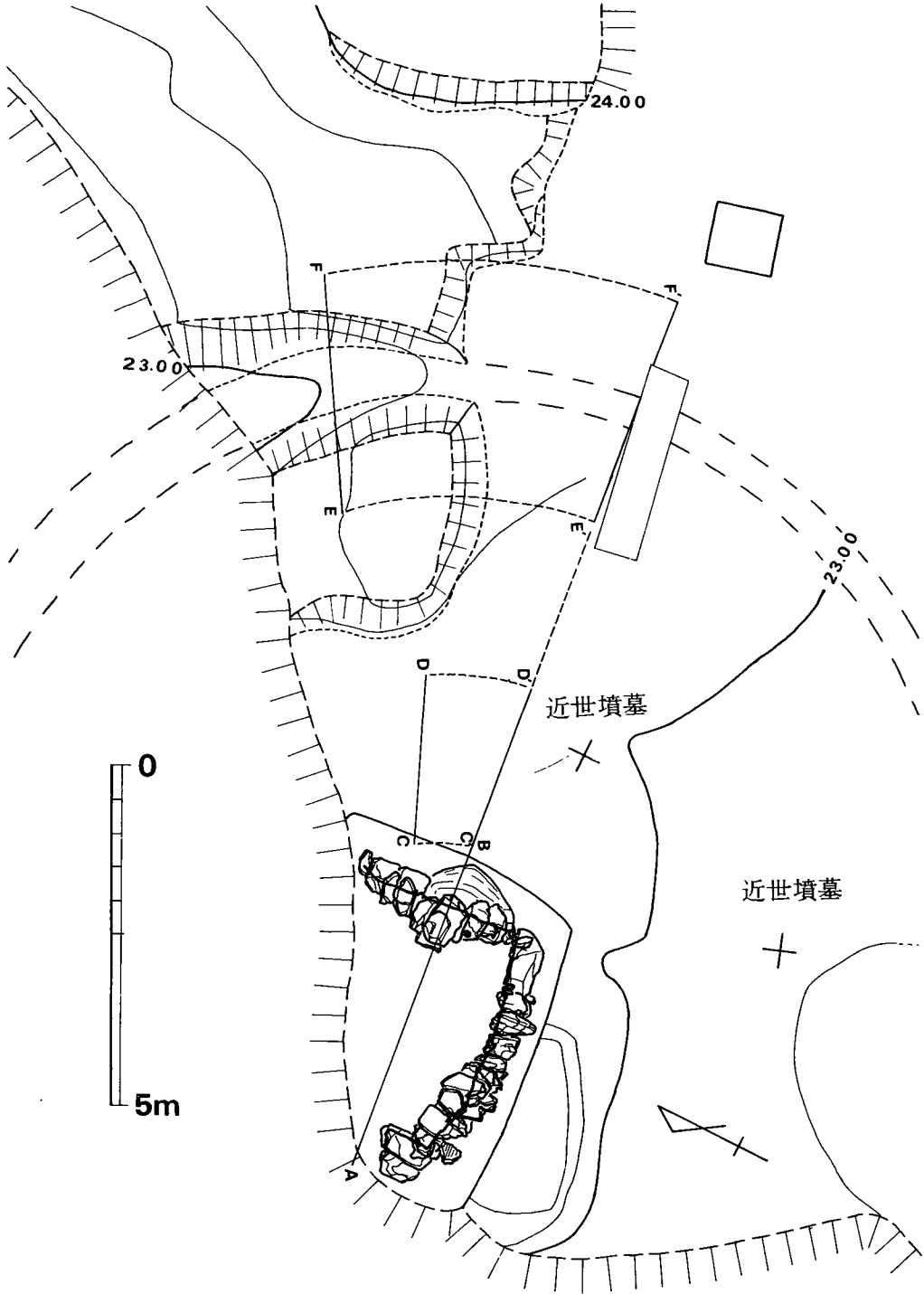


Fig. 68 向山4号墳周溝及び石室測量図 (縮尺 1/100)

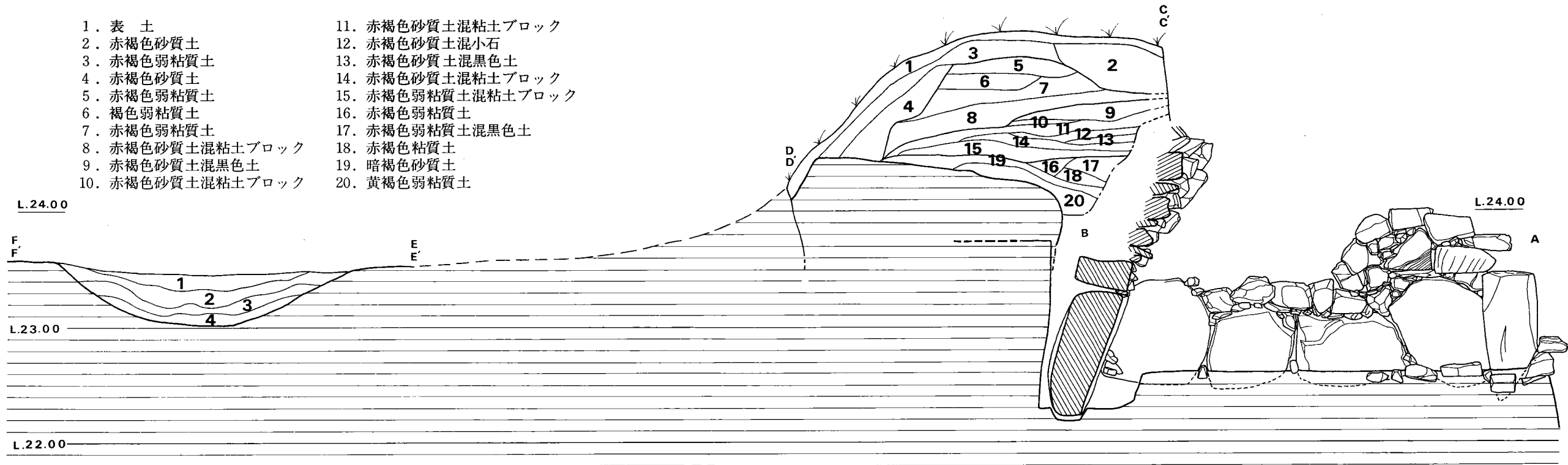


Fig. 69 向山4号墳丘東西断面実測図 (縮尺 1/40)

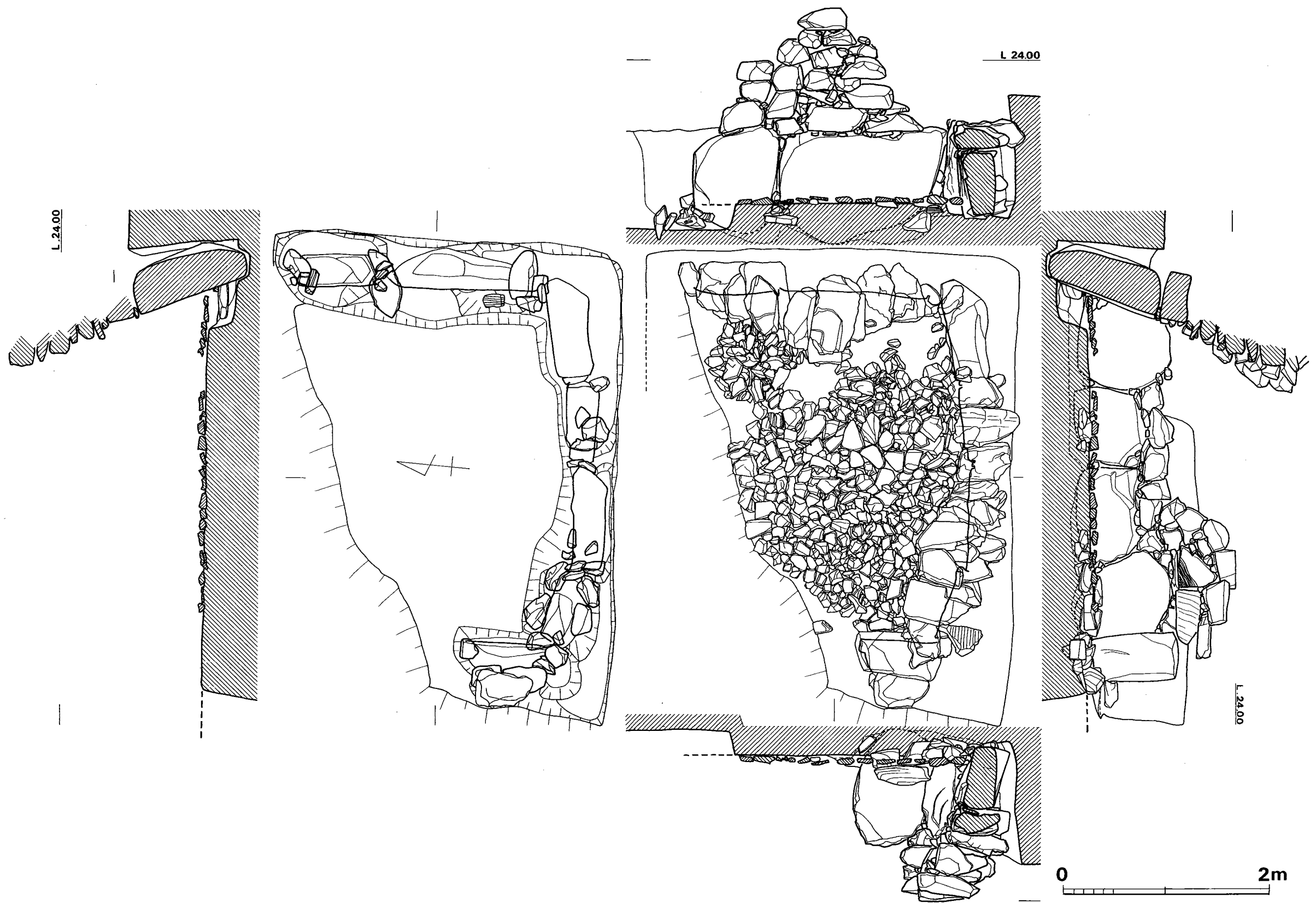


Fig. 70 向山4号墳石室実測図(縮尺 1/40)

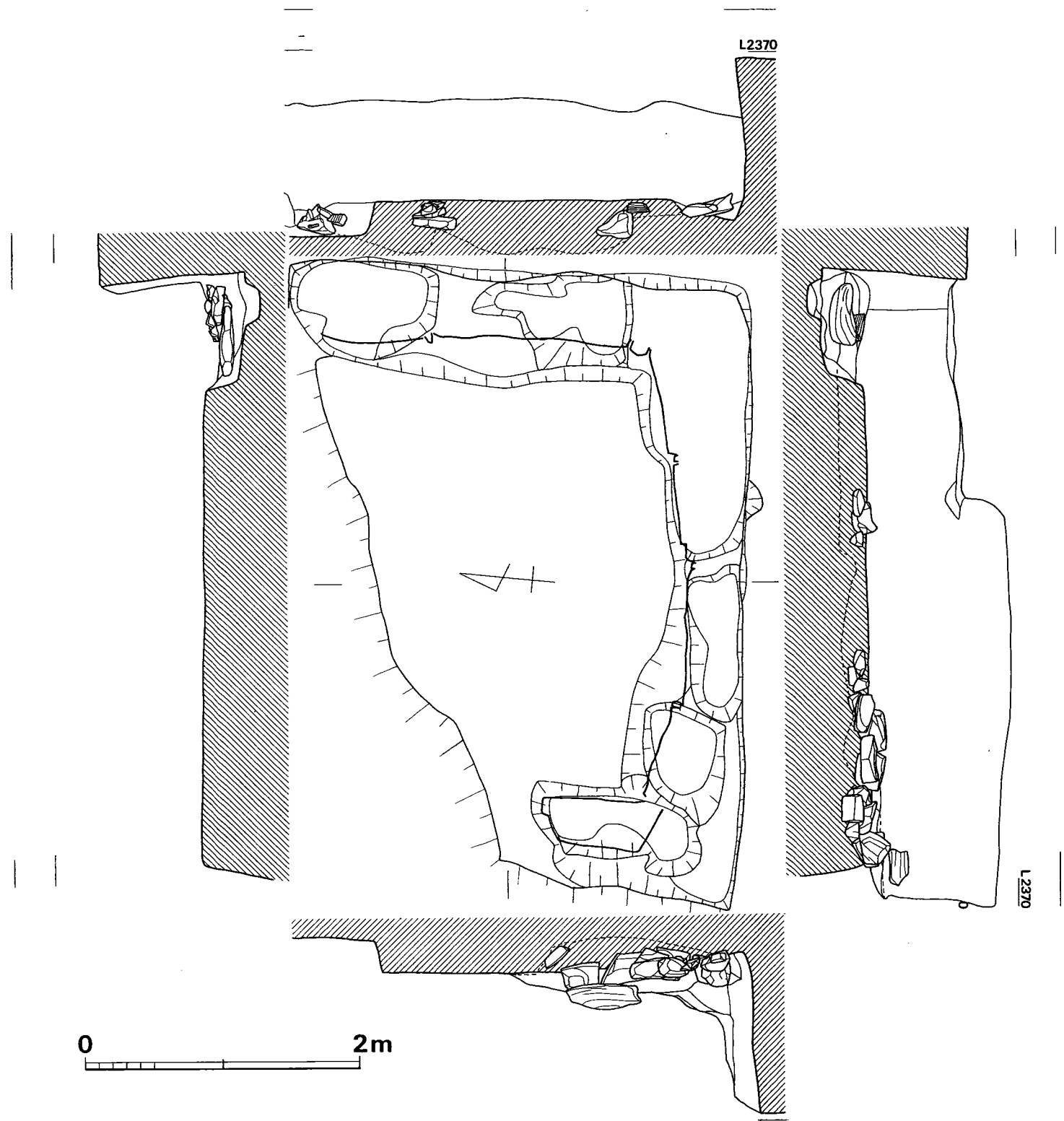


Fig. 71 向山4号墳掘り方実測図 (縮尺 1/40)

### 内部主体の構造 (Fig. 70・71)

主体は、西方開口の主軸をN85°Eをとる横穴式石室である。玄室のみを残存するが、掘り方、袖石に続く石等から、単室になるものと推定される。石室規模は、玄室長さ約3.40m、幅2.5mになるものと思われる。腰石の接続状況から腰石のみを、奥壁より羨道部へと設置したのち、壁石を積んでいったものと推定される。敷石は奥壁部を盗掘により欠失していた。石は10~20cm位の石を用い、中心部の石に、比較的大きな石を用いている。大きな石の間に、小さい石をつめ、隙間をなるべくつくらないようにしている。壁側より、石を敷いていき、玄室中心部へと、敷いていったものと推定される。掘り方は、腰石より内へ10~20cmほど掘り根固め石を、壁の内外、両側に設置している。根固め石を安定させるために、根固め石の間に粘質土をつめたりしているところもあった。

### 遺物出土状況 (Fig. 73)

遺物は、3群、奥壁部、側壁部、袖石部に分かれる。奥壁部は、玉類がほとんどで、左壁部には、管玉、ガラス玉など及び鉄鏃が2片出土した。奥壁部では、勾玉、水晶切子玉、埋木製切子玉、ガラス玉など100個あまり検出した。右壁部より、鉄鏃数片を検出したが、ほとんど盗掘により、欠失している。側壁部からは、遺体に沿って、直刀、その下に小刀を検出した。袖石部からは、須恵器提瓶、鉄鏃、馬具を多数検出した。鉄鏃は束になっていたものと思われるが、若干、向きが反対になっていたものもある。この袖石部の遺物はほぼ原位置を保っていたものと思われる。墳丘南側裾部より蔵骨器が3点、芥溜の中より、寛永通宝を2枚検出した。

### 出土遺物

#### 須恵器

**提瓶 (Fig. 75)** 1は、口径10.4cm、10.0cmの楕円形、胴部幅18.5cm、13cm、高さ22.3cmを測る。長軸に平行する細かいカキ目が施されている。胎土は、小砂粒を混入している。色は灰白色である。焼成は良好である。

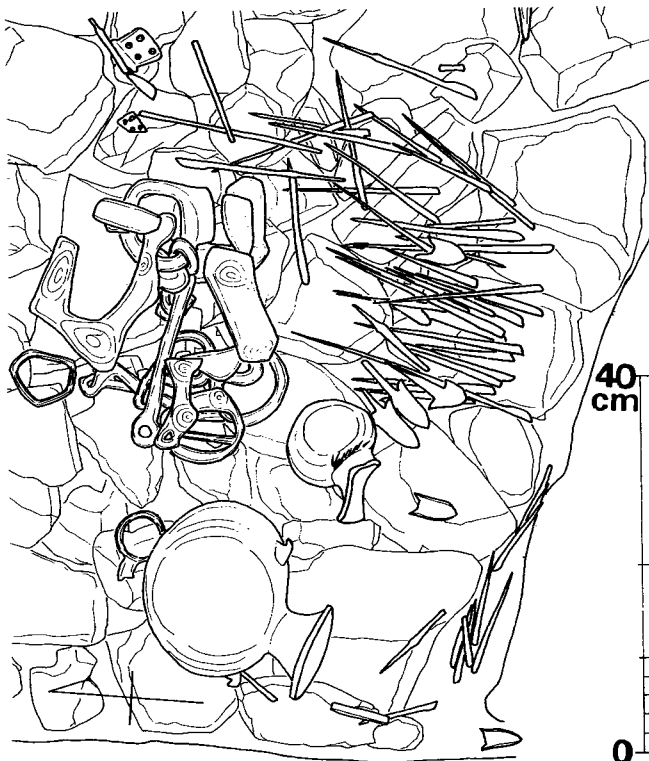


Fig. 72 向山4号墳鉄器出土状態実測図

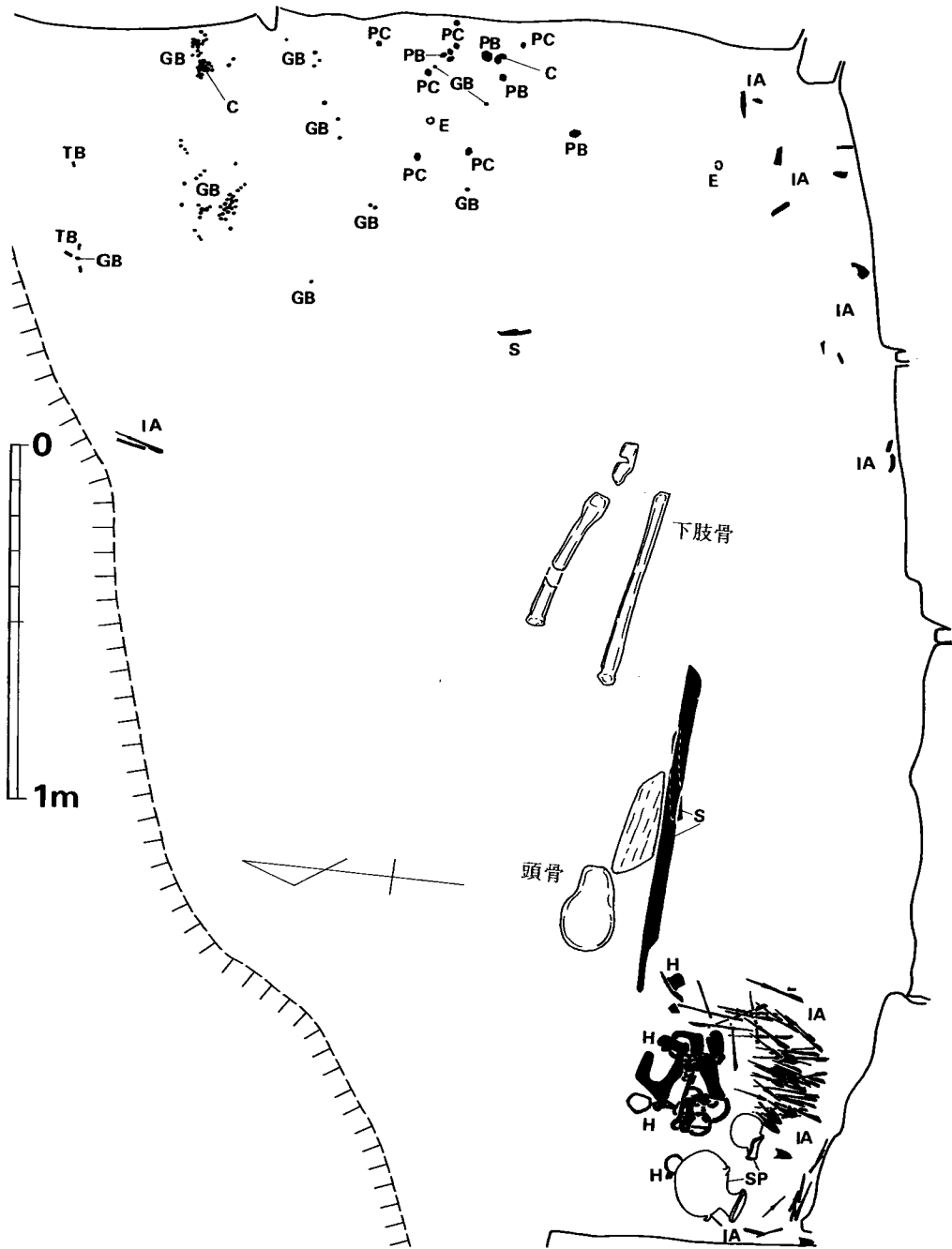


Fig. 73 向山4号墳玄室内遺物出土状態実測図(縮尺1/20)

水晶切子玉 (polyhedric crystal bead)—P C  
 埋木切子玉 (polyhedric beads made of fossil wood)—P B  
 管玉 (tubular bead)—T B  
 勾玉 (comma-shaped bead or gem with a hole on one side)—C  
 ガラス小玉 (globular bead)—G B

耳環 (earring)—E  
 馬具 (harness)—H  
 須恵器 (sue pottery)—S P  
 鉄鏃 (iron arrowhead)—I A  
 刀・刀子 (sword)—S

2は、口径8.3cm~8.4cm、  
胴部幅10.2cm~9.4cm、  
高さ13.8cmを測る。胎土  
は、砂粒が少し混入して  
おり、色は灰白色である。  
焼成は良好である。

#### 装身具

**耳環** (Fig. 78-6) 3  
個体検出したが、2個体  
紛失した。いずれも銅製  
で、細作りである。径2.  
1cm、厚さ1.5cmである。  
2個体は同大であるが、  
1個体は1まわり小さい。

**ガラス小玉** (Fig. 76,  
Tab. 3) 総数176個検出  
した。ほとんど紺色であ  
るが、径0.2~0.5cmま  
では、緑、淡紫、淡緑色を  
少し検出した。

**ガラス丸玉** (Fig. 76・  
77-175~205, Tab. 3)  
30個検出した。径0.8~  
1.4cmで、比較的大さい。  
色彩は紺色がほとんどで  
あるが、1個のみ灰緑色  
がある。

**土製小玉** (Fig. 77-206  
・207, Tab. 3) 2個検出  
した。暗褐色で、保存状  
態は良好である。中に石  
英粒子が混入している。

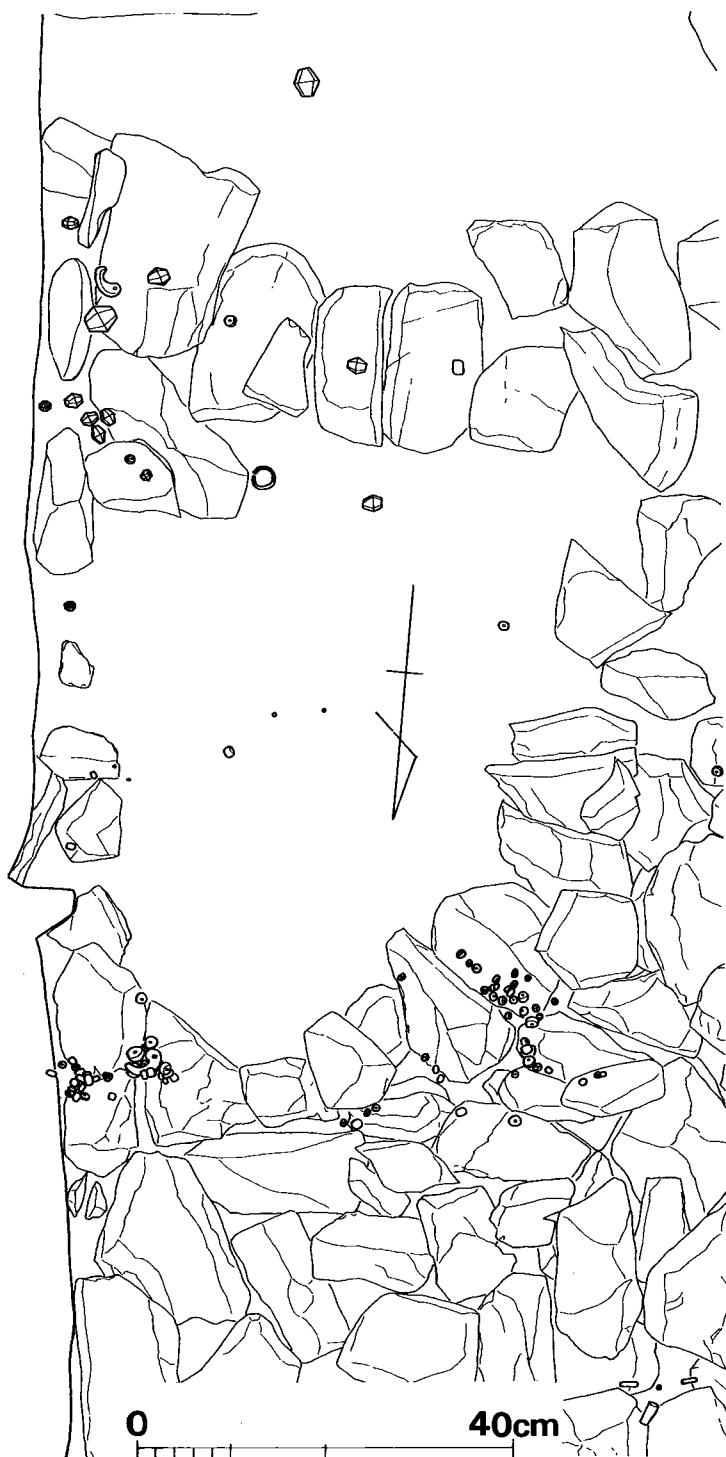


Fig. 74 向山 4 号墳石室床面装身具出土状態実測図 (縮尺 1/8)

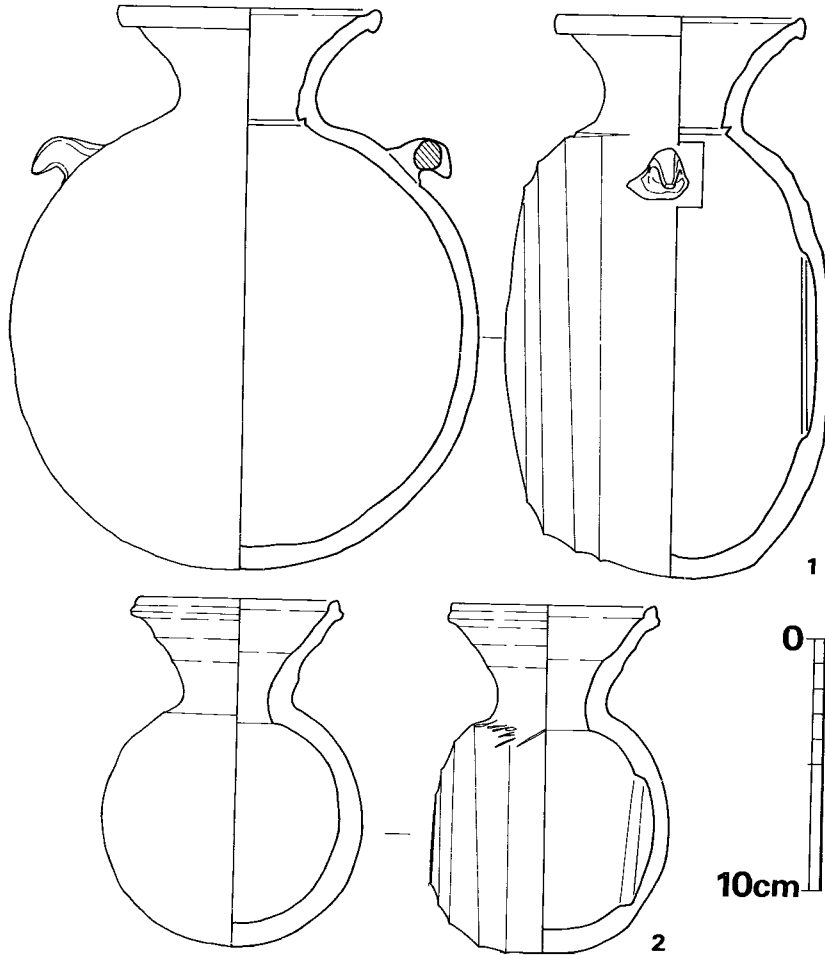


Fig. 75 向山4号墳出土須恵器実測図(縮尺 1/3)

感じを受ける。

**埋れ木製切子玉** (Fig. 77-221~227, Tab. 3) 7個検出した。いずれも不整形で、稜がはっきりとみえない。扁平になるものもある。孔は両方から開けている。

**ガラス製管玉** (Fig. 77-228~230, Tab. 3) 3個検出した。1個は他の2個のちょうど半分の長さである。片方は研磨の跡がみられる。他の2個は、両側丸くなっており、孔のところだけ研磨の跡がみられる。

**碧玉製管玉** (Fig. 77-231~234, Tab. 3) 4個検出した。1個は短かく、径も小さい。孔は片方から開けており、端よっている。他の3個は、比較的太目のものである。233は、もう一方には開け口がある。

**瑪瑙製勾玉** (Fig. 77-235・236) 235は紅色で、比較的細目のものである。頭部腹部、尾部とも丸味を帯び、明確な稜はみられない。孔は右から左へ開けているが、左側にも開け口がある。

### 水晶製丸玉

(Fig. 77-208・209, Tab. 3)

2個検出した。成形は丁寧である。孔は一方向から開けている

### 水晶製切子玉

(Fig. 77-210~220, Tab. 3)

11個検出した。大きさはまちまちで、稜がみえないものもある。成形は、あまり丁寧にされていないが、六角も不揃いであり、孔も斜めに入っているものもある全体的にずんぐりとした



4 向山 4 号墳

76

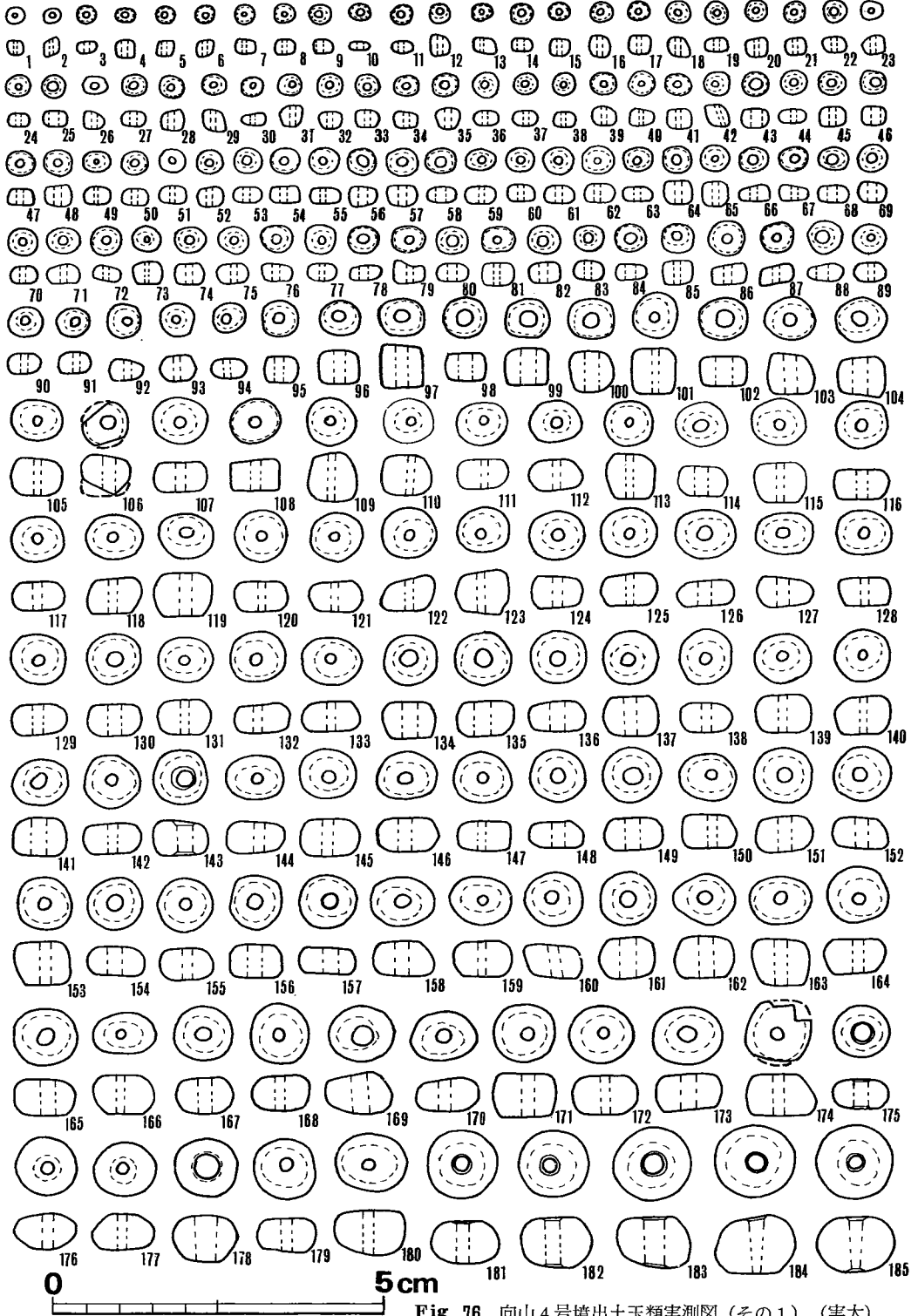


Fig. 76 向山 4 号墳出土玉類実測図 (その 1) (実大)

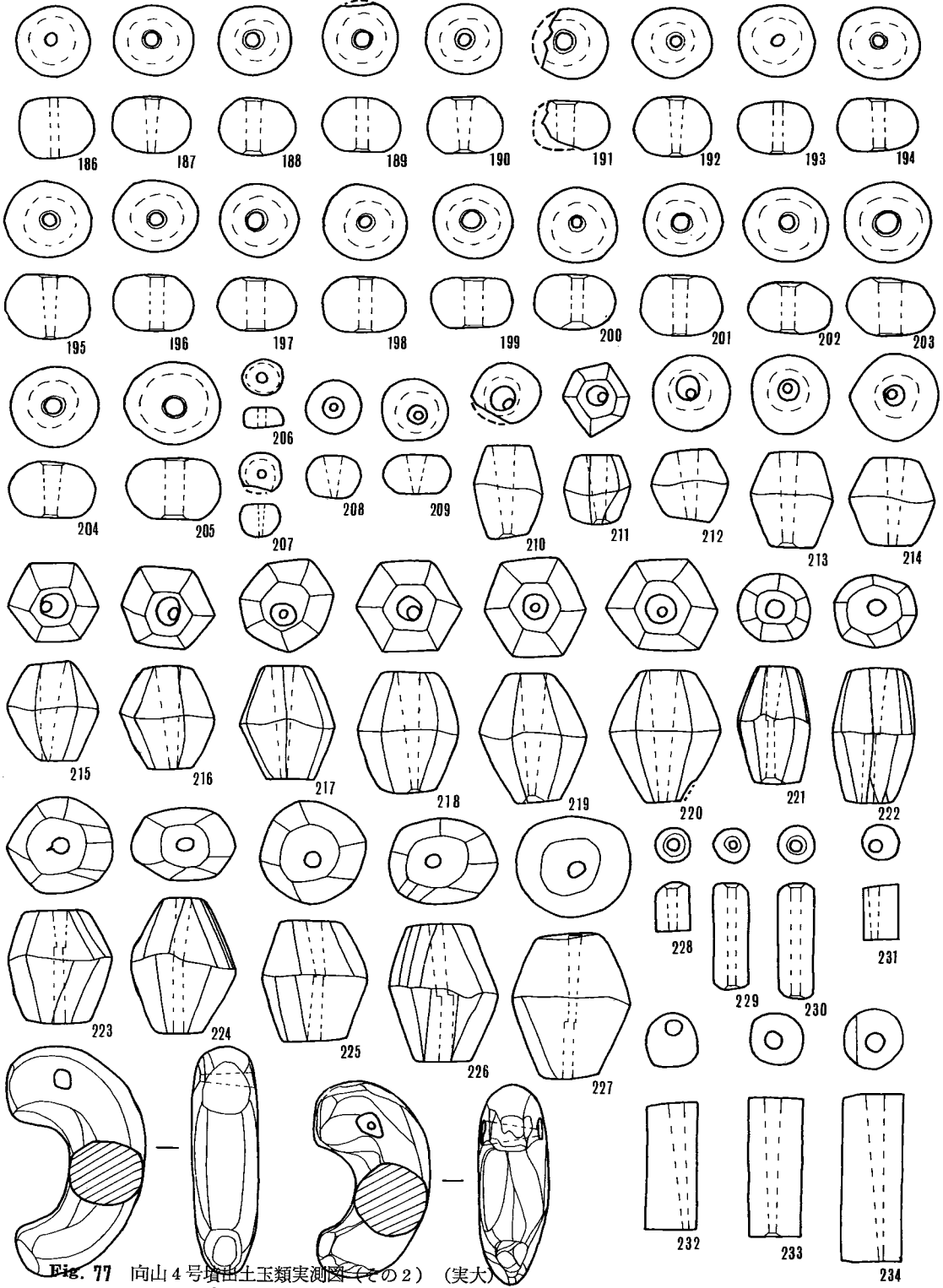
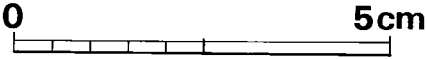


Fig. 77 向山4号墳出土玉類実測図(その2) (実大)



Tab. 3 向山 4 号 墳出土玉類計測表

(単位 mm)

番号	径	厚さ	孔径	材質	色	備考	番号	径	厚さ	孔径	材質	色	備考
1	2.75	2.20	0.50	ガラス	緑色	ガラス小玉	31	3.80	3.00	0.80	ガラス	紺色	ガラス小玉
2	2.75	2.40	0.75	"	"	"	32	3.80	2.60	1.00	"	"	"
3	3.00	1.70	0.85	"	淡紫色	"	33	3.80	2.20	0.80	"	"	"
4	3.00	3.10	0.75	"	緑色	"	34	3.80	2.40	0.90	"	"	"
5	3.00	2.20	0.75	"	紺色	"	35	3.80	3.00	0.80	"	"	"
6	3.00	2.40	0.65	"	淡緑色	"	36	3.85	2.35	1.00	"	緑色	"
7	3.00	2.30	0.50	"	緑色	"	37	3.85	2.35	1.00	"	紺色	"
8	3.00	2.25	0.75	"	淡紫色	"	38	3.85	2.40	1.30	"	淡紫色	"
9	3.10	2.10	0.90	"	緑色	"	39	3.85	2.60	0.75	"	紺色	"
10	3.10	1.55	1.00	"	紺色	"	40	3.90	2.55	0.75	"	"	"
11	3.20	1.60	0.75	"	緑色	"	41	3.95	2.75	0.90	"	"	"
12	3.20	3.70	0.75	"	"	"	42	4.00	3.05	0.80	"	"	"
13	3.25	2.30	0.75	"	"	"	43	4.00	3.15	1.70	"	淡緑色	"
14	3.30	1.95	1.00	"	紺色	"	44	4.00	2.15	1.20	"	紺色	"
15	3.35	2.45	0.75	"	緑色	"	45	4.00	3.00	0.90	"	"	"
16	3.35	3.10	0.75	"	淡紫色	"	46	4.00	2.60	1.40	"	"	"
17	3.40	2.70	0.90	"	紺色	"	47	4.00	2.25	0.80	"	"	"
18	3.45	2.75	0.80	"	緑色	"	48	4.00	2.75	1.00	"	"	"
19	3.50	2.00	0.75	"	緑色	"	49	4.00	2.65	0.75	"	"	"
20	3.55	2.80	0.75	"	紺色	"	50	4.10	2.60	1.05	"	"	"
21	3.60	2.40	0.75	"	"	"	51	4.10	2.45	0.85	"	"	"
22	3.70	2.20	1.05	"	"	"	52	4.10	3.00	1.00	"	"	"
23	3.70	2.75	0.80	"	淡緑色	"	53	4.15	2.20	1.20	"	"	"
24	3.75	2.00	1.10	"	紺色	"	54	4.15	2.45	1.10	"	"	"
25	3.75	2.30	1.70	"	淡紫色	"	55	4.20	2.50	1.00	"	"	"
26	3.75	2.75	0.85	"	紺色	"	56	4.20	2.80	1.60	"	緑色	"
27	3.75	2.10	0.75	"	紺色	"	57	4.25	2.90	1.05	"	紺色	"
28	3.75	3.10	1.30	"	"	"	58	4.25	2.10	1.60	"	"	"
29	3.75	3.10	0.70	"	"	"	59	4.30	2.50	1.00	"	"	"
30	3.75	2.00	0.90	"	"	"	60	4.30	2.50	1.05	"	"	"

番号	径	厚さ	孔径	材質	色	備考	番号	径	厚さ	孔径	材質	色	備考
61	4.30	2.70	0.85	ガラス	紺色	ガラス小玉	92	5.35	3.75	1.20	ガラス	紺色	ガラス小玉
62	4.30	2.75	0.75	"	"	"	93	5.40	3.70	1.00	"	"	"
63	4.30	2.05	1.00	"	"	"	94	5.45	3.45	1.40	"	"	"
64	4.30	3.10	1.10	"	"	"	95	6.00	4.00	1.55	"	"	"
65	4.35	3.60	1.70	"	"	"	96	6.10	4.80	1.90	"	"	"
66	4.35	2.20	1.20	"	"	"	97	6.20	6.50	1.90	"	"	"
67	4.35	2.40	1.20	"	"	"	98	6.25	4.00	2.25	"	"	"
68	4.40	2.50	1.30	"	"	"	99	6.50	5.80	2.20	"	"	"
69	4.40	3.10	1.05	"	"	"	100	6.70	6.50	2.25	"	"	"
70	4.40	2.55	1.20	"	"	"	101	6.70	7.30	1.30	"	"	"
71	4.40	3.00	1.20	"	"	"	102	7.20	4.40	2.60	"	"	"
72	4.40	2.35	1.15	"	"	"	103	7.20	6.40	2.00	"	"	"
73	4.45	3.15	0.85	"	"	"	104	7.35	6.70	2.10	"	"	"
74	4.45	3.40	1.20	"	"	"	105	7.40	5.80	1.35	"	"	"
75	4.55	2.75	1.00	"	"	"	106	7.50	5.60	2.00	"	"	"
76	4.55	2.50	1.50	"	"	"	107	7.60	5.50	1.80	"	"	"
77	4.55	2.50	1.10	"	"	"	108	7.65	4.80	1.40	"	"	"
78	4.55	2.25	1.75	"	"	"	109	7.65	7.80	1.50	"	"	"
79	4.65	3.35	1.00	"	"	"	110	7.65	6.80	1.40	"	"	"
80	4.65	2.75	1.60	"	"	"	111	7.65	5.35	1.50	"	"	"
81	4.70	3.50	1.00	"	"	"	112	7.70	5.65	1.45	"	"	"
82	4.75	2.80	1.10	"	"	"	113	7.70	7.45	1.30	"	"	"
83	4.75	3.00	1.25	"	"	"	114	7.75	5.45	2.00	"	"	"
84	4.75	2.10	1.80	"	"	"	115	7.80	6.45	1.60	"	"	"
85	4.80	3.55	1.50	"	"	"	116	7.85	5.45	1.85	"	"	"
86	5.00	2.50	1.75	"	"	"	117	7.90	5.40	1.40	"	"	"
87	5.00	2.40	1.10	"	淡紫色	"	118	7.90	5.75	1.40	"	"	"
88	5.10	3.10	1.40	"	紺色	"	119	7.90	7.30	2.05	"	"	"
89	9.25	3.10	0.75	"	"	"	120	8.00	5.00	1.45	"	"	"
90	5.25	3.00	0.75	"	"	"	121	8.00	5.25	1.40	"	"	"
91	5.25	3.15	1.20	"	淡緑色	"	122	8.10	5.80	1.45	"	"	"

番号	径	厚さ	孔径	材質	色	備考	番号	径	厚さ	孔径	材質	色	備考
123	8.10	7.10	1.50	ガラス	紺色	ガラス小玉	154	8.75	5.00	2.10	ガラス	紺色	ガラス小玉
124	8.15	6.00	1.75	"	"	"	155	8.80	5.70	1.80	"	"	"
125	8.20	5.50	1.20	"	"	"	156	8.80	5.10	2.40	"	"	"
126	8.20	4.60	2.15	"	"	"	157	8.80	5.00	2.50	"	"	"
127	8.25	5.30	2.00	"	"	"	158	8.85	6.00	2.00	"	"	"
128	8.25	4.85	1.75	"	"	"	159	8.90	6.10	1.65	"	"	"
129	8.30	5.50	1.80	"	"	"	160	8.90	5.75	1.90	"	"	"
130	8.30	5.45	2.15	"	"	"	161	9.00	7.25	2.40	"	"	"
131	8.30	6.00	1.05	"	"	"	162	9.00	7.00	2.15	"	"	"
132	8.35	5.40	1.60	"	"	"	163	9.00	7.30	2.00	"	"	"
133	8.35	5.15	1.50	"	"	"	164	9.00	6.85	1.70	"	"	"
134	8.35	6.65	2.50	"	"	"	165	9.05	6.25	2.40	"	"	"
135	8.40	6.00	2.40	"	"	"	166	9.15	6.50	1.50	"	"	"
136	8.40	5.40	2.20	"	"	"	167	9.20	6.75	2.00	"	"	"
137	8.40	6.70	2.00	"	"	"	168	9.40	6.00	1.75	"	"	"
138	8.45	5.30	1.95	"	"	"	169	9.40	6.70	3.40	"	"	"
139	8.45	6.40	1.60	"	"	"	170	9.40	5.90	2.00	"	"	"
140	8.55	6.85	1.45	"	"	"	171	9.55	6.35	2.00	"	"	"
141	8.55	6.35	2.40	"	"	"	172	9.85	6.70	1.60	"	"	"
142	8.60	5.30	1.50	"	"	"	173	10.45	7.15	2.60	"	"	"
143	8.60	6.00	2.25	"	"	"	174	11.10	7.30	1.80	"	"	"
144	8.60	5.35	1.75	"	"	"	175	8.15	5.30	2.30	"	"	ガラス丸玉
145	8.65	6.30	1.90	"	"	"	176	8.85	6.40	1.90	"	"	"
146	8.65	5.80	2.00	"	"	"	177	9.25	6.35	1.70	"	"	"
147	8.70	5.40	1.70	"	"	"	178	9.35	7.40	3.50	"	"	"
148	8.70	4.20	2.10	"	"	"	179	9.50	6.40	1.90	"	灰緑色	"
149	8.70	6.00	2.30	"	"	"	180	10.15	7.80	1.50	"	紺色	"
150	8.70	5.75	1.60	"	"	"	181	10.55	7.40	2.15	"	"	"
151	8.70	6.00	2.10	"	"	"	182	10.75	8.90	2.25	"	"	"
152	8.70	5.30	2.00	"	"	"	183	11.40	8.80	3.25	"	"	"
153	8.75	7.40	1.75	"	"	"	184	11.55	9.85	2.30	"	"	"

番号	径	厚さ	孔径	材質	色	備考	番号	径	厚さ	孔径	材質	色	備考
185	11.75	9.45	2.00	ガラス	紺色	ガラス丸玉	212	11.90	11.20	3.85 1.75	水晶		切子玉
186	11.80	10.55	1.75	"	"	"	213	12.70	14.80	3.15 1.00	"		"
187	11.80	9.70	2.15	"	"	"	214	14.00	13.95	3.00 1.15	"		"
188	11.90	9.30	2.50	"	"	"	215	14.30	15.50	4.00 1.40	"		"
189	12.00	9.75	2.10	"	"	"	216	14.50	16.85	4.30 1.70	"		"
190	12.00	9.55	2.40	"	"	"	217	15.10	18.00	3.60 1.45	"		"
191	12.00	9.00	2.90	"	"	"	218	16.65	18.90	3.75 1.30	"		"
192	12.15	10.10	2.25	"	"	"	219	16.75	20.00	4.00 1.00	"		"
193	12.20	9.25	1.80	"	"	"	220	17.20	20.75	4.20 1.60	"		"
194	12.20	9.55	1.80	"	"	"	221	11.70	18.40	2.40 2.70	埋れ木製	黒色	"
195	12.40	11.55	2.10	"	"	"	222	12.70	21.00	2.10 2.15	"	"	"
196	12.55	10.00	2.00	"	"	"	223	16.30	17.80	2.65 2.45	"	"	"
197	12.55	9.00	2.90	"	"	"	224	16.40	21.50	2.35 2.20	"	"	"
198	12.65	10.20	2.00	"	"	"	225	16.85	18.60	2.50 2.40	"	"	"
199	12.65	9.15	2.90	"	"	"	226	17.00	21.60	2.00 2.30	"	"	"
200	12.75	9.65	1.90	"	"	"	227	18.60	22.65	2.50 2.10	"	"	"
201	12.75	10.65	2.65	"	"	"	228	5.60	7.75	1.90 1.50	ガラス	紺色	管玉
202	13.25	9.30	2.25	"	"	"	229	5.50	16.80	1.60 1.40	"	"	"
203	13.30	9.65	3.70	"	"	"	230	5.80	18.15	1.90 1.70	"	"	"
204	13.70	9.75	2.75	"	"	"	231	5.70	8.50	1.90 0.85	碧玉	緑色	"
205	14.50	10.75	3.10	"	"	"	232	8.00	19.90	2.50 1.30	"	"	"
206	6.15	3.10	1.45	土製	暗褐色	土製小玉	233	8.15	21.75	2.50 0.85	"	"	"
207	6.35	5.00	1.00	"	"	"	234	9.40	26.40	2.80 0.80	"	"	"
208	8.70	7.65	3.00 0.80	水晶		丸玉	235				瑪瑙	紅色	勾玉
209	10.10	7.30	3.00 1.20	"		"	236				"	淡黄	"
210	10.45	14.20	4.30 1.60	"		切子玉	237	8.40	6.40	1.70	ガラス	紺色	ガラス小玉
211	10.75	11.60	3.30 1.25	"		"	238	8.95	4.30	2.00	"	"	"

236は淡黄色で、小型のものである。頭部、尾部、背部とも丸味を帯びている。尾部は少しはね上がっている。腹部に少し稜がみられるが、全体的に丸味を帯びているものである。孔は左から右へと開けており、右側にも開け口がみられる。2個とも整形は丁寧であり、保存状態も良好である。

## 武器

直刀 (Fig. 79) 1振検出した。全長90cm, 最大身幅3.6cm, 棟幅0.8cmを測る。刀装具の装備はみられない。刃毀れはみられない。棟のところに木質が錆着している。

鐙 (Fig. 78-7) 1個検出した。倒卵形の無窓のものである。縁が一段高くなる。直刀のものか否かは不明である。

鞘口金具 (Fig. 78-5) 1個体分検出した。幅2cmのもので、厚手のものである。内外両面に木質が錆着している。直刀のものではない。刀子のものと思われる。

鉄鏃 (Fig. 80・81) 総数60本以上検出した。原数はもっと多いものと思わ

れる。1~22は平造腸挟片刃箭式で、23~36は平造片関片刃箭式であるが、23~27は関が棟に斜めに入るもので、28~36は関が棟に直角に入るものである。37は平造関無片刃箭式である。38・39は片丸造両関鑿箭式、40~46は篋被平造腸挟柳葉式である。44は厚手のもので、47・48は平造片刃箭式の束である。

鹿角製鏃 (Fig. 78-3・4) 2個体分検出した。鉄鏃群中に混入していたもので、保存状態は悪い。1本の長さが15cm位になるものと推定される。茎に木質或いは樹皮の錆着はみられない。

## 工具

刀子 (Fig. 78-1・2) 2口分検出した。1は、長さ17.4cm, 身幅1.5cm, 棟幅0.4cm, 重さ39.3gを測る。両面に木質が錆着している。2は長さ13.4cm, 身幅1.1cm, 棟幅0.3cm, 重さ19.7gを測る。茎に木質が錆着する。

## 馬具

轡 (Fig. 82-2・5・6・7・8) 2具以上あるものと思われる。2は、3連式の銜である。一連長さ8.4cmを測る。5は、引手である。6は素環の鏡板に、銜・引手・鐙それに素環の鉄器が錆着したものである。この鏡板は立間がついているもので、7・8のものとは別具であるが、対になる鏡板は検出していな

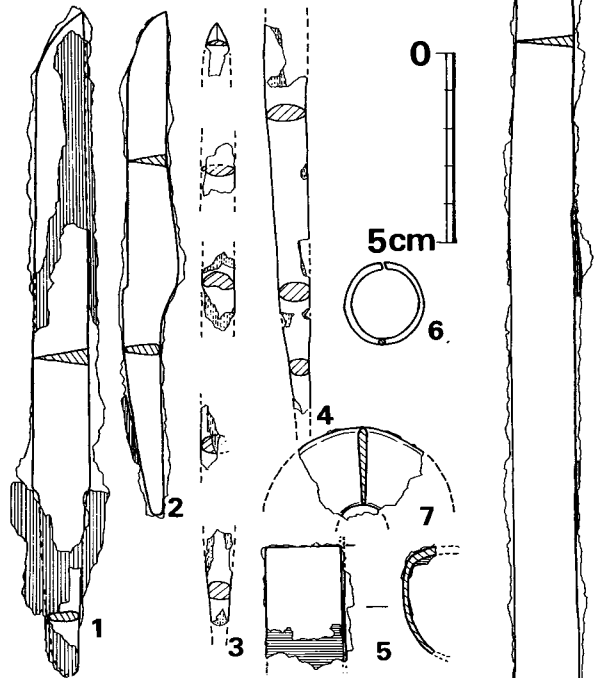


Fig. 78 向山4号墳出土刀子・鹿角鏃・耳環類実測図 (縮尺 1/2)

Fig. 79 向山4号墳出土太刀実測図 (縮尺 1/4)

IV 向山古墳群の調査

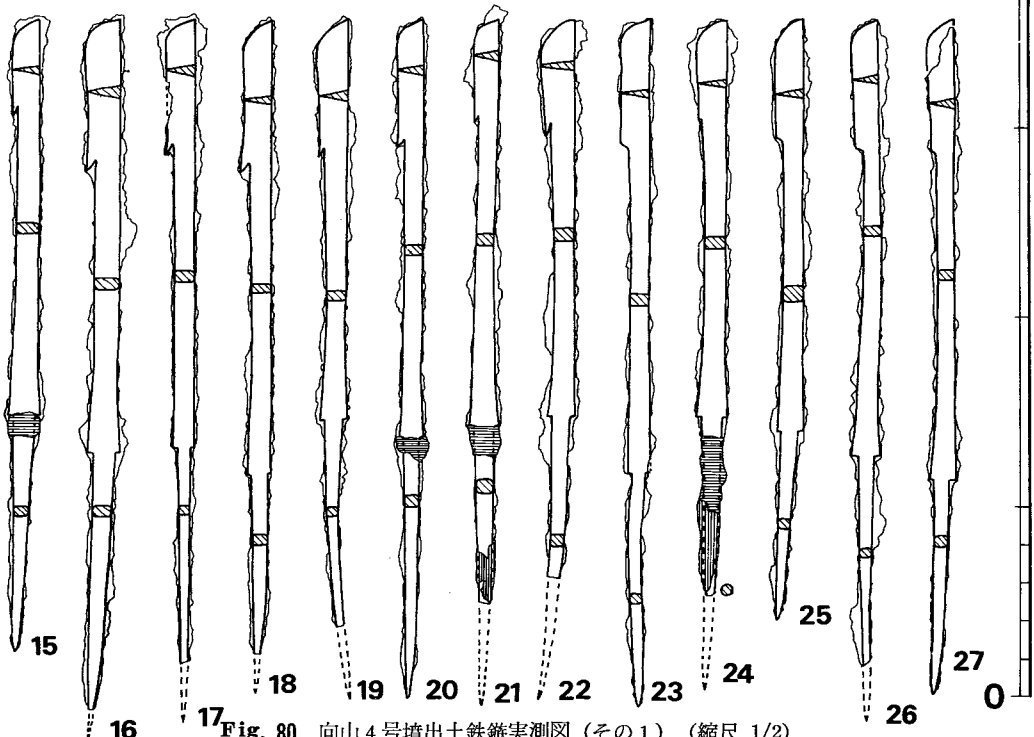
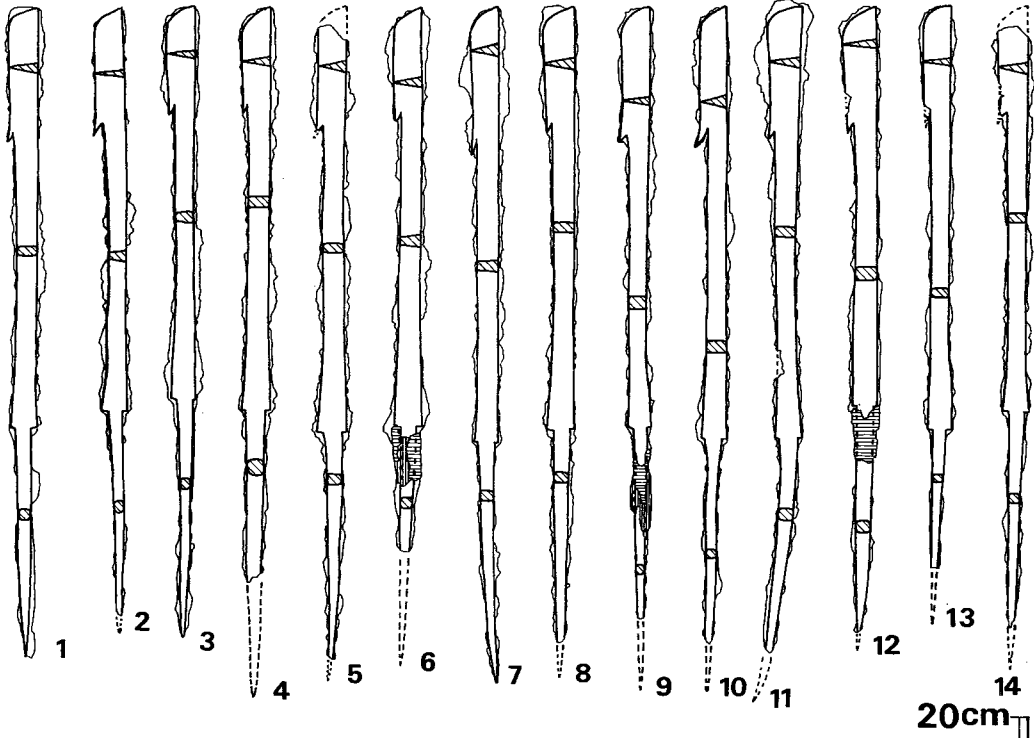


Fig. 80 向山4号墳出土鉄鏃実測図(その1) (縮尺 1/2)



4 向山 4 号墳

84

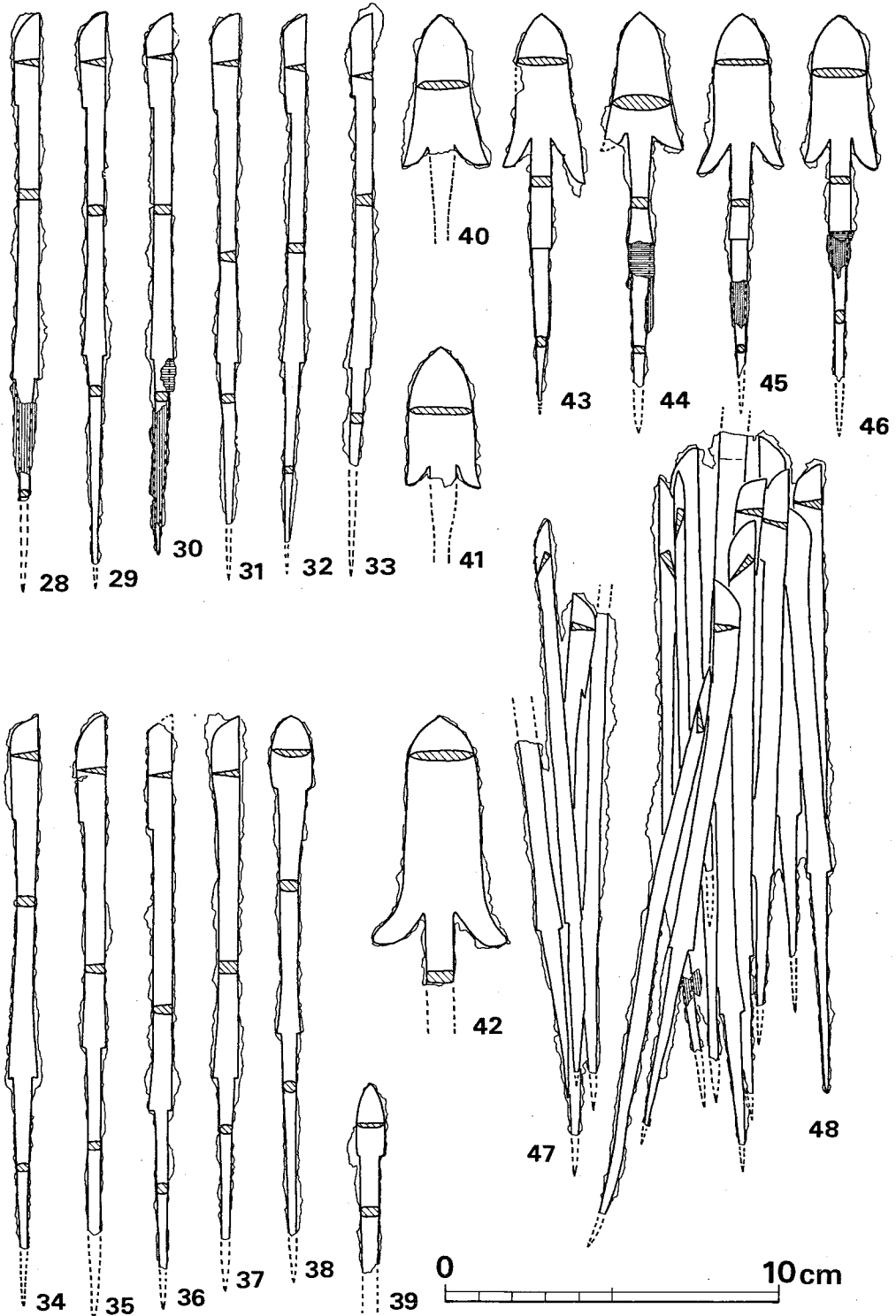


Fig. 81 向山 4 号墳出土鉄鏃実測図 (その 2) (縮尺 1/2)

Tab. 4 向山4号墳出土鉄鏃計測表

(単位 cm)

番号	全長	身長	筈被長	茎長	身幅	重さ(g)	形 式	番号	全長	身長	筈被長	茎長	身幅	重さ(g)	形 式
1	17.2	3.3	7.9	6.0	0.75	11	細根式平造 腸挟片刃箭式	24	15.2	2.6	7.9	4.7	0.8	12	(関が斜め)
2	16.1	3.1	7.6	5.4	0.7	9	"	25	15.8	3.2	7.7	4.9	0.75	14	"
3	16.7	2.7	7.7	6.3	0.8	11.5	"	26	17.1	3.5	8.1	5.5	0.7	11	"
4	15.2	2.7	8.0	4.5	0.8	14	"	27	12.15	\	8.6	5.65	0.65	12.5	"
5	16.8	\	7.1	6.0	0.8	12.5	"	28	14.6	2.8	8.2	3.6	0.75	15	(関が直角)
6	14.4	2.8	8.3	3.3	0.8	14.5	"	29	16.55	2.9	7.4	6.25	0.8	11	"
7	17.9	3.5	8.1	6.3	0.75	11.5	"	30	16.2	2.8	7.5	5.9	0.8	12	"
8	16.8	3.1	8.1	5.6	0.85	11.5	"	31	15.3	2.9	7.6	4.85	0.85	12	"
9	16.2	3.4	7.8	5.0	0.8	9	"	32	15.8	3.0	7.45	5.35	0.7	12	"
10	16.7	3.2	8.2	5.4	0.7	11	"	33	13.7	2.5	8.1	3.0	0.7	12.5	"
11	17.1	3.4	8.0	5.6	0.9	12.5	"	34	15.95	3.1	7.7	5.15	0.85	14.5	"
12	16.6	3.2	7.5	5.9	0.95	14	"	35	15.6	3.3	6.7	5.6	0.9	14	"
13	14.9	2.7	8.6	3.7	0.7	9.5	"	36	16.3	\	8.4	4.7	0.7	13.5	"
14	15.9	\	7.9	5.7	0.7	11.5	"	37	15.6	3.5	7.3	4.8	0.85	15.5	細根式平造 関無片刃箭式
15	16.7	2.3	8.2	6.2	0.7	12.5	"	38	15.5	2.2	7.3	6.0	1.25	16	細根式片丸造 両関鑿箭式
16	18.3	3.8	7.7	6.8	0.85	14.5	"	39	5.7	2.2	\	\	0.85	\	"
17	17.1	3.4	7.9	5.7	0.8	9.5	"	40	4.5	4.5	\	\	2.6	\	広根式筈被 平造腸挟柳葉式
18	16.7	3.8	8.2	4.7	0.8	11	"	41	4.2	4.2	\	\	2.2	\	"
19	16.00	3.4	7.15	5.50	0.85	14	"	42	8.1	6.95	\	\	3.9	\	"
20	17.9	3.3	7.8	6.8	0.7	12.5	"	43	11.6	5.05	3.3	4.6	2.4	9	"
21	15.5	2.6	8.2	4.7	0.65	14	"	44	11.2	4.1	3.3	4.3	2.4	14	"
22	14.8	2.7	7.8	4.3	0.9	16	"	45	10.8	4.75	2.9	4.1	2.6	9.5	"
23	18.2	3.4	8.6	6.2	0.75	13.5	細根式平造 片関片刃箭式	46	10.9	4.6	2.9	4.4	2.2	10	"

い。長径7.2cm, 短径5.6cmを測る楕円状の鏡板である。素環の鉄器は, 径3.1cmを測る。丸造ではなく, 扁平である。7は, 立間のない素環の鏡板に, 銜・引手それに鉸具の一部が錆着したものである。鏡板は径5.7cmを測る。8の素環鏡板に, 銜とV字状鉄器が錆着したものである。V字状鉄器の用途不明である。

木心鉄張壺鏃 (Fig. 82-1・3・4) 1は3連の兵庫鎖と鏃上部の金具と引手の一部が錆着している。兵庫鎖の1単位は, 径0.7cmの鉄棒を曲げげたもので, 10cm前後の長さである。鏃上

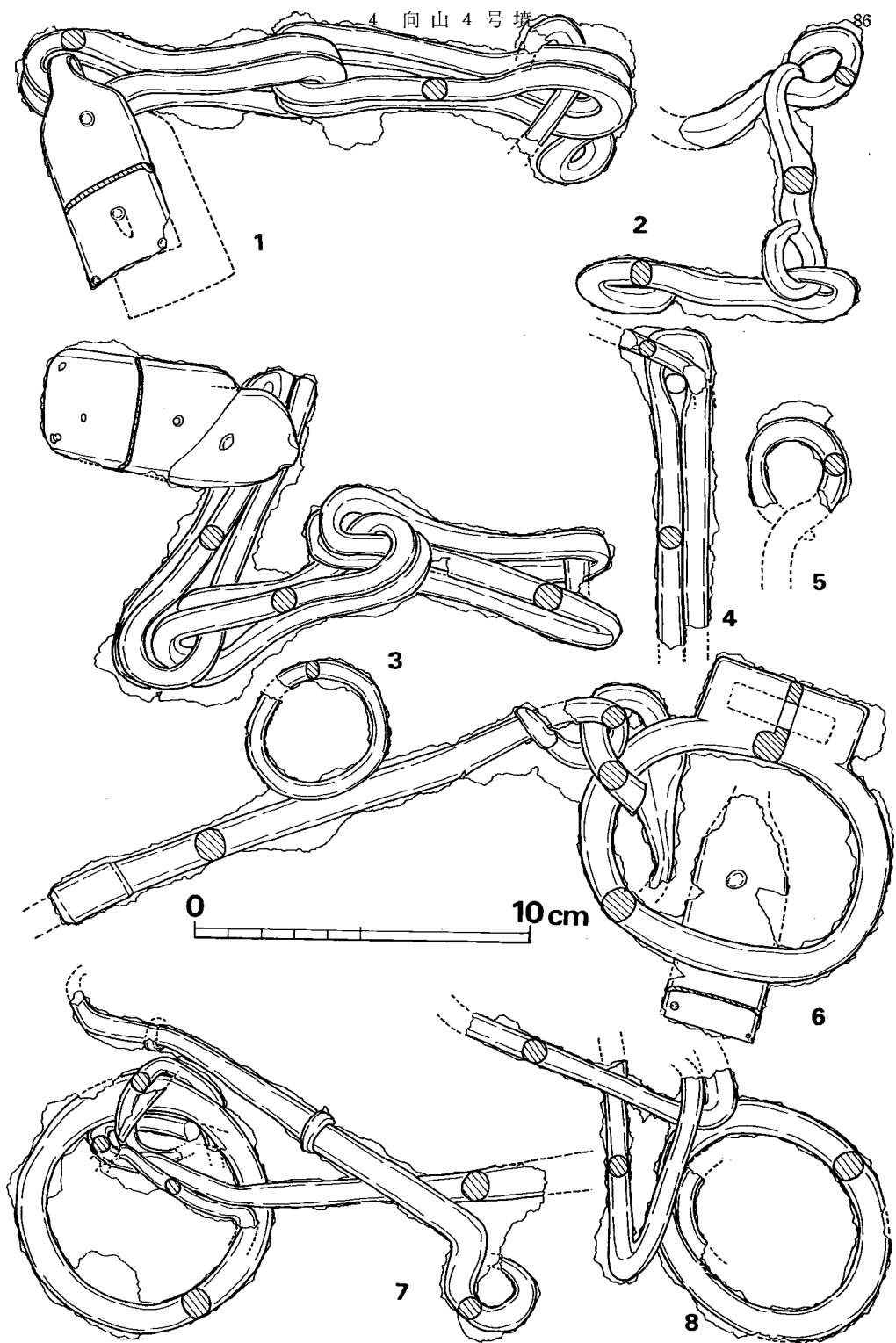


Fig. 82 向山 4 号墳出土馬具実測図 (縮尺 1/2)

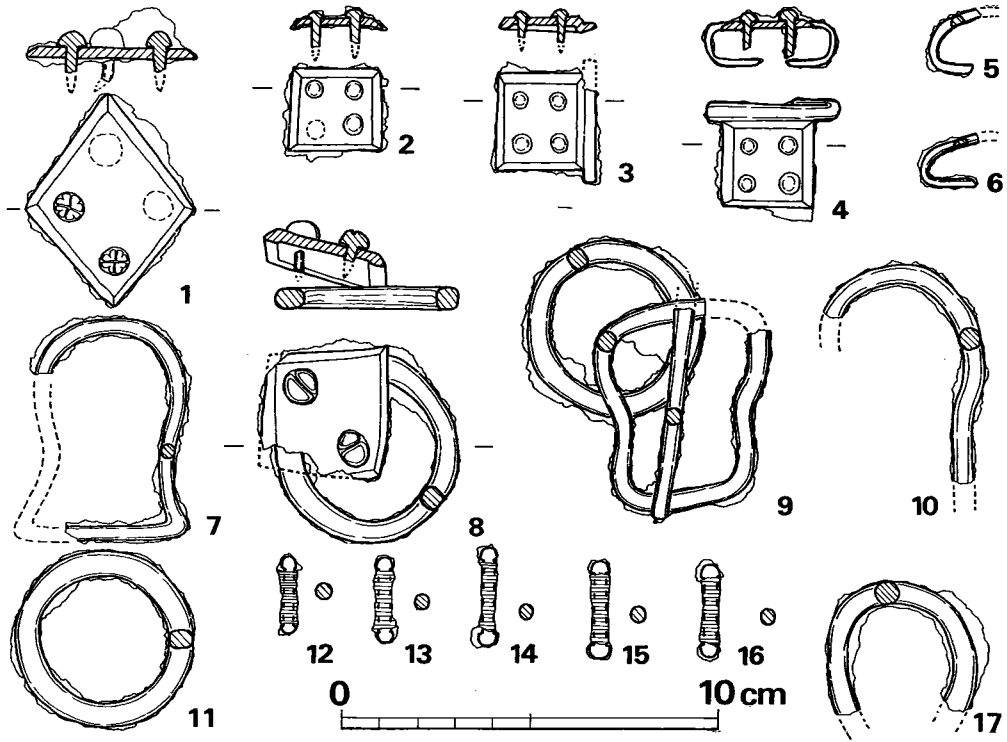


Fig. 83 向山4号墳出土鉄器実測図 (縮尺 1/2)

部金具は4鈇のもので高さ7.4cmを測る。内面に一部布が錆着している。3は、3連の兵庫鎖と鑑上部金具である。1の対になるものである。鑑上部金具の内面に木質を錆着している。4は兵庫鎖の一部に鈇が錆着したもので1の兵庫鎖の片割れである。

留金具 (Fig. 83-1~6・8) 1は菱形のもので4鈇である。鈇頭に刻みをつけている。用途不明である。2は一辺2.2~2.4cmのほぼ正方形のもので、帯締めのないものである。4鈇である。3・4は帯締めのあるもので、一辺2.4cmのほぼ正方形のものである。どちらも4鈇である。5・6は帯締め金具で、3の付くものか否かは不明である。8は、留金具と素環の鉄器が錆着したものである。留金具は一辺3cm位の略正方形のもので、2鈇のものである。鈇頭は刻みをつけている。素環の鉄器は用途不明である。

鈇具 (Fig. 83-7・8・9) 7は全長5.9cm, 9は全長5.7cm, 最大幅4.6cmを測る。9は刺金を底辺の横棒に折り曲げてとめている。

鉄鈇 (Fig. 83-12~16) 長さ2.0~2.6cm, 径0.4cm, 重さ1~1.5gを測る。両端は丸くなっており、頭のところに薄い鉄片をつけている。総て長軸に対して直角方向の木質を錆着している。

(宇野慎敏)

## 5 向山 5 号 墳

向山5号墳は3号墳の東方，6号墳の西方で両古墳にほとんど接して存在していたと思われる。他の古墳と同じように近世の開墾を受けている。墳丘は全く消失しており丘陵斜面の上位方向の北側に地山掘削の結果である溝の地山墳丘裾が約 $\frac{1}{4}$ 残っている。石室は天井石はなく，奥壁，両側壁の最下部の腰石を残すのみで，その腰石の高さまで閉塞石が残っている。石室前方部は崖面となっており墳丘，掘り方と共に失なわれている。

## 墳丘の構造

墳丘は全部削平されていて見ることができない。しかし，墳丘を造り出すための地山整形による溝が深さ約10cm程，墳丘径にして $\frac{1}{4}$ 程遺存しており，円墳で墳丘径は復元可能であり約10mであろう。

地山整形面の溝裾の径は，ほぼ10mでありこの地山整形面を土台として墳丘が築かれていた

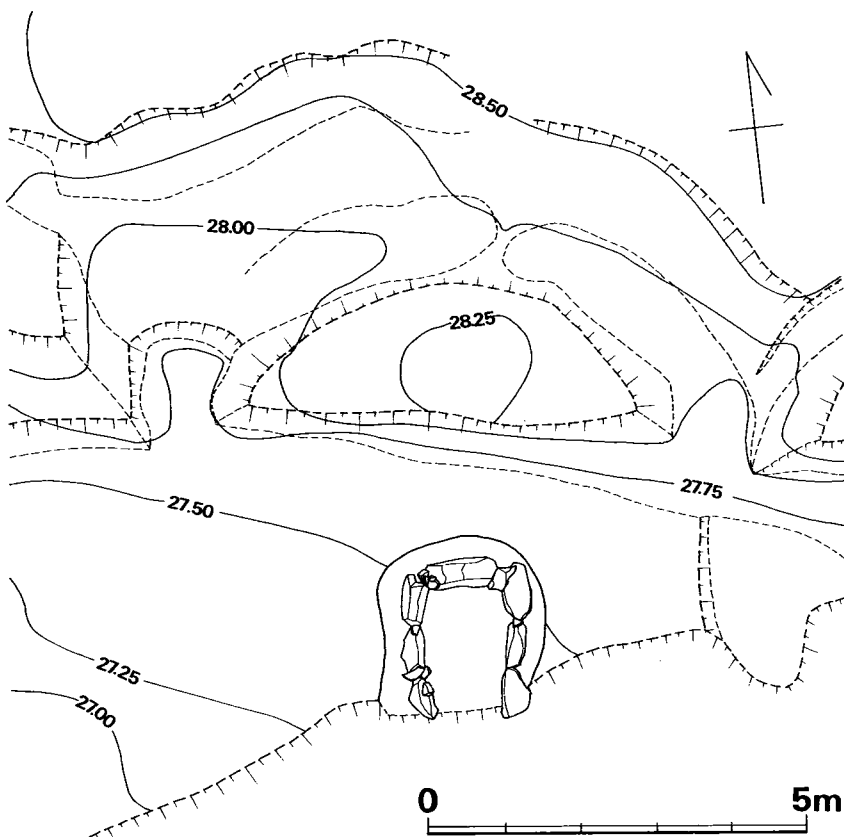


Fig. 84 向山5号墳周溝及び石室測量図 (縮尺 1/100)

と思われる。なお，地山整形面の溝であるが，いわゆる墳丘全体に巡る周溝ではなく，後期古墳によく見られるもので，石室を丘陵斜面に構築するために墳丘が斜めになる。すなわち丘陵斜面のために，斜面上方の墳丘裾と斜面下方（5号墳では羨道部）とが同一の高さでなく斜面上方が高くなる。そこで同一の高さにするため，又斜面上方は，ほとんど盛土を行なわなく逆に地山を掘り下げて削りとり墳丘を造り出す方法で墳丘の範囲を明確にしている。おそらく，

5号墳はこの方法を取って、墳丘を造り出していると思われる。地山整形面の溝は、切断溝とも言われていて、切断溝の下部は幅0.9～1.1m、深さは現状で10～40cmを測り、溝の南肩から3.40m南に離れて石室の掘り方を掘っている。

石室の掘り方(墓壇)も削平により掘り方上端面はすでに失なわれており、掘り方途中からしか残っていない。北方(奥壁側)が丘陵斜面の高位置にあり、南方(羨道部側)が丘陵斜面の低位置にあり、掘り方床面を平坦に掘っているため高位置の北方(奥壁側)が深く、現状では60cm、低位置の南方(羨道側)は低く30cmを測り、現状では北方側の壁が30cmほど深くなっておそらく掘り方上端においても同様な事と思われる。幅は掘り方奥壁で1.80m、石室横断面を測った部分の掘り方のほぼ中央で2mを測る。平面形は奥壁側が丸く、両側壁は平行で羨道側は失なわれており不明である。壁の立ち上がりは全体的に約10度に立ち上がる。

石室腰石と掘り方壁の間の埋土状況は現状で4層にしか区別できず土は掘り方を掘った土を埋め戻したようで地山と同様の花崗岩ばいらん土とやや粘土質の混入土で埋めている。床面については石室の項でのべる。

#### 内部主体の構造 (Fig. 85・86)

すでに天井石は無く腰石のみの状態であるが、内部主体は横穴式石室で南方向に開口する。石室主軸はN7°Eで、羨道部が破壊されているため現状では長さ1.90mである。

石室は閉塞石が両側壁の間にあることや、石室の大きさ、形からして無袖式の単室である。玄室は、袖石で区別するものでなく直接閉塞石でもって区別される。玄室の大きさは長さが主軸で1.35m、幅は奥壁で1.05m、石室のほぼ中央部の石室横断面で1.20m、玄室入口部で1.05mを測り中央部がややふくらむが胴張り石室ではない。閉塞石が両側壁の間にあり羨道へと続くと思われるが墳丘の径や、石室の形態から推測して、おそらく両側壁は現状の左右3個の腰石よりは続かず、当初よりこの石室の大きさを呈していたと思われる。奥壁の鏡石は一枚石で下部の最大幅約1.20m、床面での幅1.06m、上部幅約80cm、高さ約60cm、床面から約50cm、厚さ約40cmの石を立てていて、床面より掘り方の下に約15cm程埋もれている。中央が高い山形を呈しているため両端に小さい手ごろな石を用い、二段目の石を安定に架構するため積んでいる。

側壁は左右とも基部(腰石)に3石ずつ長方形の石材を横長に立てていて、右側壁腰石は奥壁方向より長さ60、50cmと5cmの小さな間石があり60cmの石と続き、左側壁腰石は長さ60、60、60cmの三石よりなる。二段目石は現状では存在せず、わずかに腰石と二段目の石の間にくる小石材が約10個程残っているのみである。

床面は玄室内と閉塞石の下、さらにその外方と続き一律に敷石が存在したと思われるが、現状では、玄室内にわずかと閉塞石の下は当初の状態、その外は一部破壊された状態で遺存している。敷石は比較的小さなやや角のある5cmから20cm、厚さ約5cmから10cmの自然石を用い

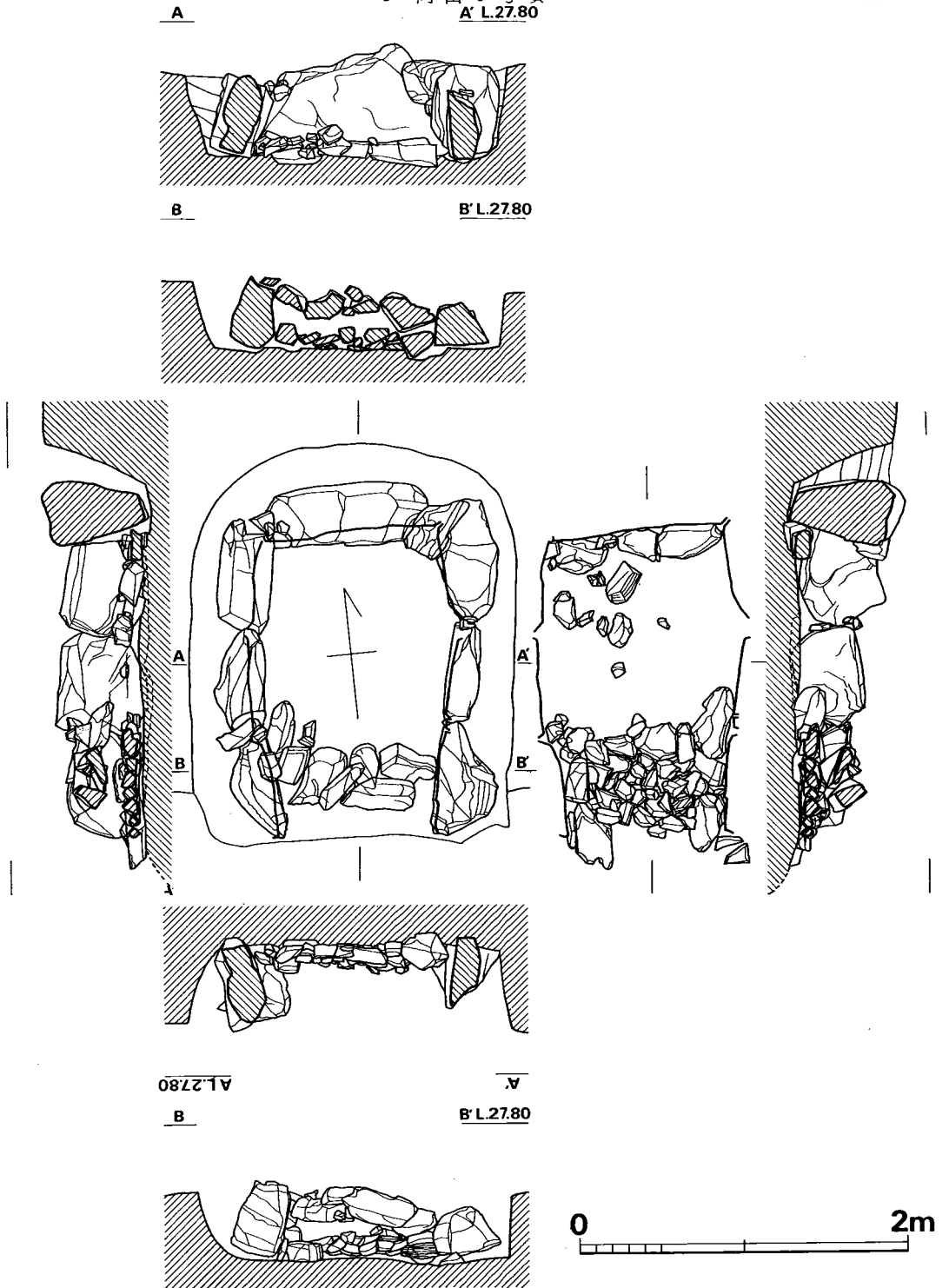


Fig. 85 向山 5 号墳石室実測図 (縮尺 1/40)

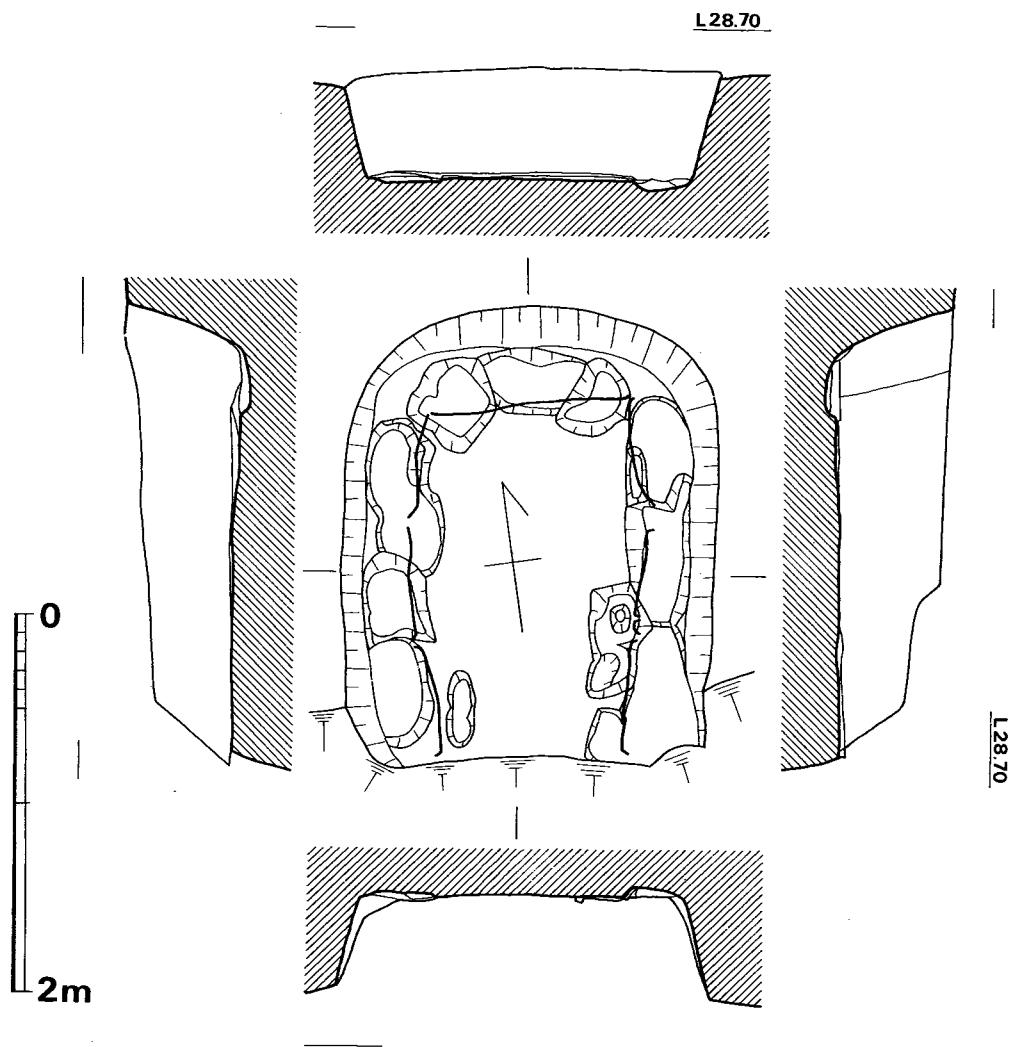


Fig. 86 向山5号墳掘り方実測図 (縮尺 1/40)

ている。なお奥壁及び両側壁直下は腰石の根石をそのまま敷石として利用しているようであり石室内側の根石上に敷石は見あたらないようである。

墓道は開墾による破壊により一切不明であるが、他の同形態の石室より推定すると両側壁の墓道側腰石よりはば石室の幅と同じような広さで墳丘裾まで続き、墳丘裾にて大きく「ハの字」に開くものと思われる。

閉塞は両側壁間にて行なわれており敷石の上に、敷石よりは大きく石室床面根石と同じぐらいの大きさの自然石をよこ、たてと乱雑に積み上げていて、敷石との間にやや間隔があり、又閉塞石と閉塞石の間にもすき間がみられる。



石室床面及び腰石下の掘り方であるが、各々の腰石の下には安定を期するための掘り込みがあり、その面に若干の土を埋め腰石を積んでいる。腰石の外側には根石、裏込め石はなく、腰石の内側（石室床面方）には6から7個の根石がみられる。この根石は腰石の下敷にはしておらず、床面を根石に合わせて若干掘り込み腰石下に置き各腰石を支えているものであり、根石の上面は敷石にも利用されている。

### 出土遺物

石室内はすでに荒されておりわずかに埋土中よりガラス小玉1個が出土したにすぎない。

ガラス小玉 (Fig. 87) 淡緑色のガラス製小玉で、径0.34cm、厚さ0.21cm、孔径0.15 cmを測り、比較的整っている。保存状態は良好である。 (上野精志)

Fig. 87 向山5号墳石室内  
出土玉実測図 (実大)

## 6 向山 6 号 墳

6号墳は5号墳の東方にはほぼ接して、丘陵斜面に存在したと思われるが、現状では丘陵は平坦に削平され墳丘の半分南方が壊され崖となっている。1次調査においては丘陵平坦部のみを調査したため、丘陵上位の高位置にある5号墳と同様な溝、石室側は墳丘裾が検出されたが、その時には古墳として確認されていなかった。5号墳を発見した結果、上述の溝内にも石室の存在がうかがわれ、調査したものである。墳丘は全く消失しており、石室の天井石はなく、石室前方部は崖面となっており側石はくずれ落ち、掘り方も破壊されている。

### 墳丘の構造

墳丘は開墾による破壊をうけており全くない。しかし各古墳と同じように地山整形による溝が丘陵上位の高位置である斜面上方が約2分の1残っている。この溝はやはり墳丘裾を形成していると思われ石室方向の溝下部の径を復元すると約5mの円となり、6号墳は

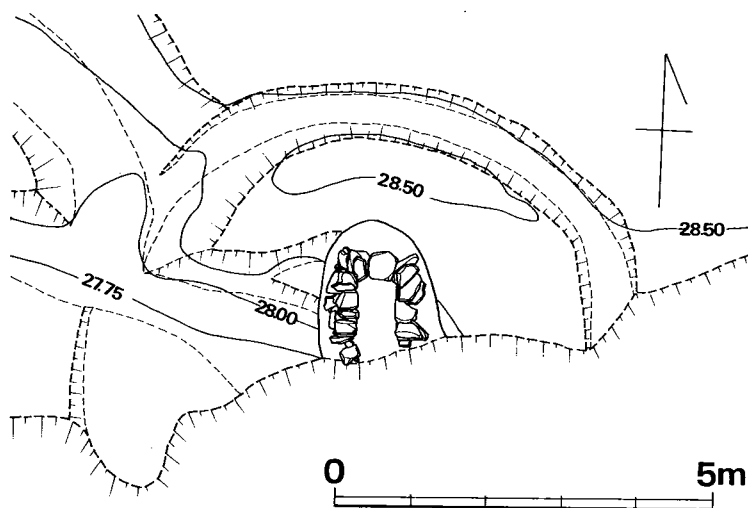


Fig. 88 向山6号墳周溝及び石室測量図 (縮尺 1/100)

約5mの円墳と推定される。溝は下部の幅30から60cmで、深さは上端が削平されていて現状で

は20~40cmを測り、溝の南肩から1.10m南に離れて石室の掘り方を掘っている。なお、この6号墳の溝は3号、4号、5号墳の溝とは若干違っており、一番高いと思われる丘陵斜面も4号、5号墳等に見られる分水嶺的な1地点より左右に掘り込み下げるようなものではなく分水嶺的な高まりがなく周溝的に様に掘り下げている点である。しかし、この溝は墳丘が丘陵斜面に築造されているためおそらく全周してはなく、1号から5号墳と同様に丘陵斜面の低位置までは続かないものと思われる。

石室の掘り方(墓坑)は地山を深く掘り下げたもので掘り方上端部はすでになく、掘り方途中から残っており南方の壁はないが、北方が丸味を帯び、東西方は平行的で長方形とはいえないが、丸味を帯びた長方形である。深さは、北方で1.10m、東西方で1.10から0.50mを測り、現状では北方が深く南方が浅い。幅は北方で1.20m、石室横断面を測った部分で最大幅の1.40mを測り、立ち上がりは約10度である。掘り方と石室外面の構築石との間が狭く、埋土土層が図面化出来ない。観察によると掘り方掘削の際の土を逆に埋め戻している。

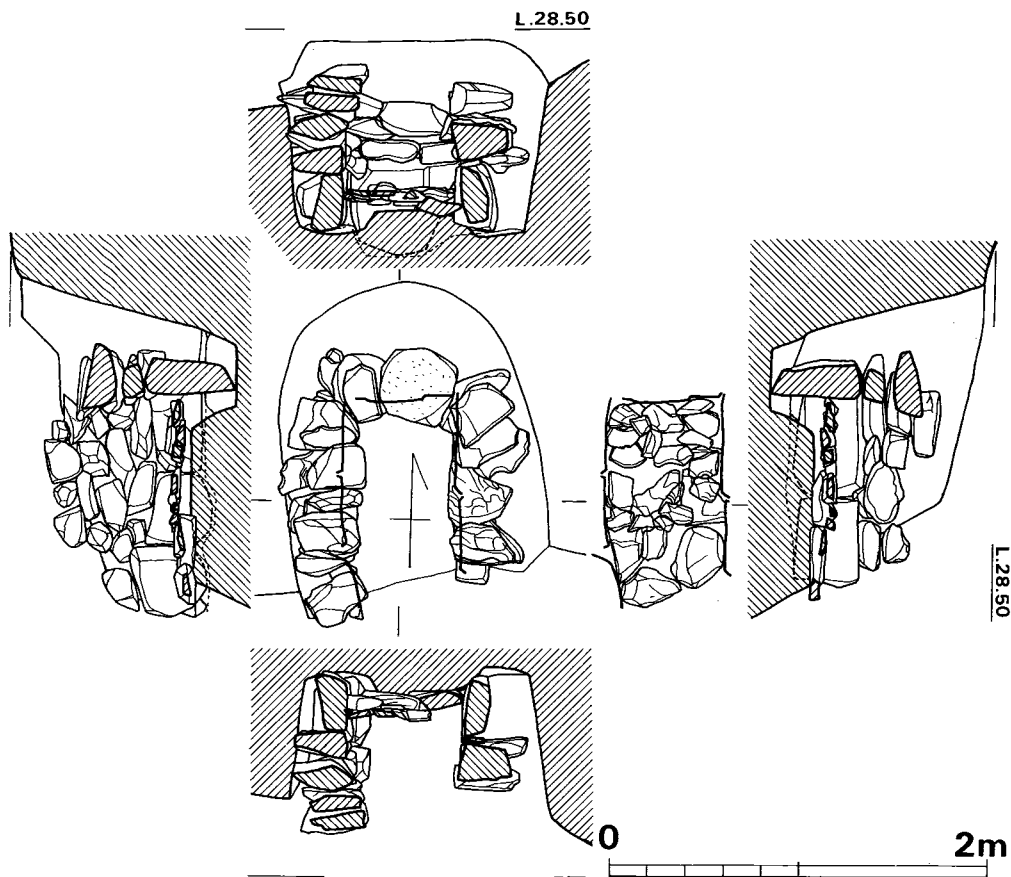


Fig. 89 向山6号墳石室実測図(縮尺 1/40)

## 内部主体の構造

内部主体は横穴式石室と思われるが、南方の壁（羨門部）が崖下にくずれ落ち、現状ではくずれ落ちた石が閉塞石かそれとも竪穴式石室や石棺のように四壁共に存在する石室であるかどうか判断ができない。しかし石室の形や大きさ、そして側壁の形状よりして広義の横穴式石室であろう。北方の短側壁を便宜上奥壁とする。

石室主軸はほぼ南北で長方形を呈している。残存長さ1.10m、幅約0.6mで側石は床面より0.60m残る。

奥壁の鏡石は一枚石で床面での幅55cm、最下部約35cm、上部幅60cmと逆三角形を呈し床面より35cm程埋めており床面より上へは15cmしかなく、掘り方の見えない部分の方が長い。厚さは約17cmで直立している。鏡石の上には扁平な自然石が二個つつ小口積みしてあり、それが二段みられる。

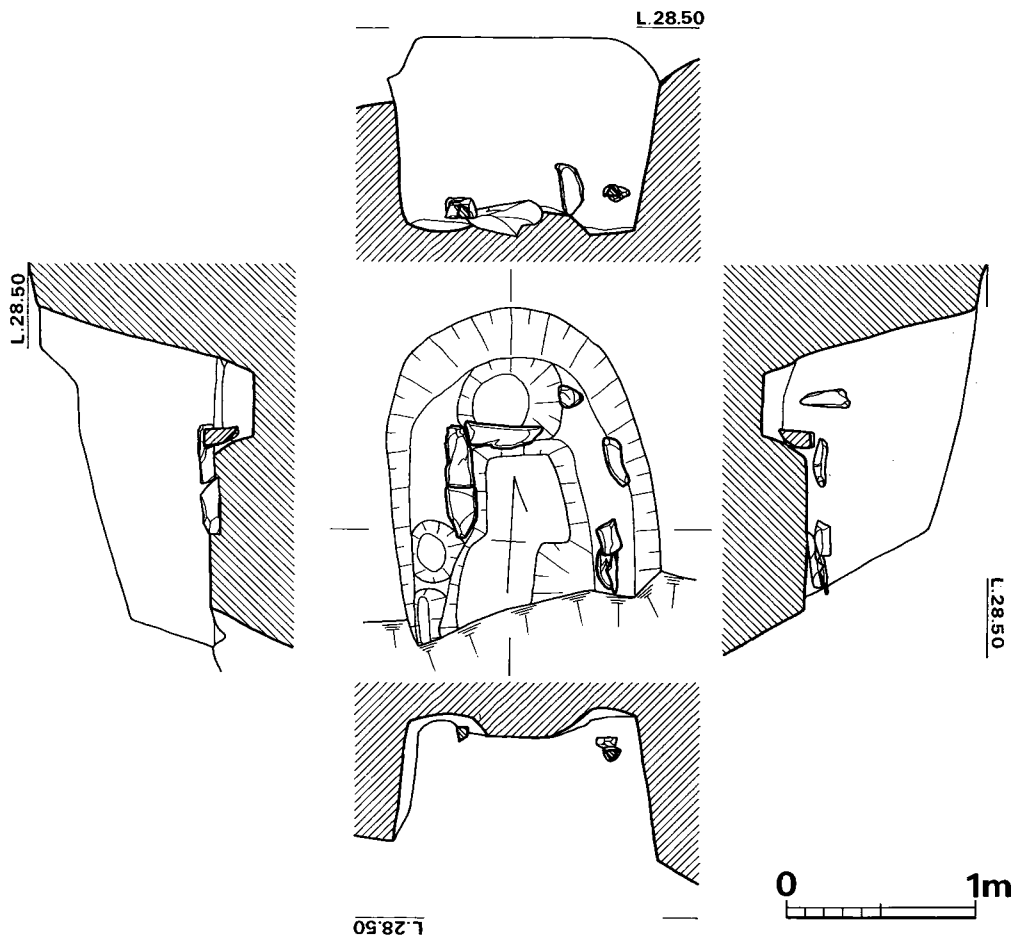


Fig. 90 向山 6 号墳石室掘り方実測図（縮尺 1/40）

側壁は現状で右側が2個、左側が3個である。右側壁の奥壁方の腰石は長さ60cm、幅35cm、厚さ25cmで横長に立ててあり、床面が幅35cmのほぼ中央にある。羨門方の腰石は長さ45cm、幅35cm、厚さ15cmで横長に立て、掘り方に埋まる方が多い。左側壁の奥壁方の腰石は長さ50cm、幅25cm、横長に立てていて、掘り方の方が長く床面上の方が短い。中間の腰石は長さ40cm、幅30cm、厚さ15cmで縦長に立てたように見える。この腰石は $\frac{2}{3}$ が掘り方に埋っている。羨門方の腰石は長さ35cm、幅40cm、厚さ15cmで縦長に立てている。掘り方に約半分埋めており、いずれの腰石又奥壁もかなり掘り方に深く埋めてあり、腰石の下部には根石が存在している。腰石より上部の側壁は左右ともに長さ10~30cm、幅30~40cm、厚さ10~20cmの扁平な自然石を小口積みして、天井部に近くなるにつれてやや内傾しており持ち送りのみ見える。右側石は腰石を含めて4段、左側石は5段まで遺存しており天井部は不明である。

床面は扁平な石を敷石とし、奥壁の方が小さく、羨門の方が大きな石を用いていて、羨門の方がやや低く床面が水平でなく傾斜している。敷石は小さいもので約10cm正方形大きいもので25×30cmの長方形で厚さ5~10cm程である。

羨門はくずれ落ちており、復元するために意識して残して調査したが羨門となる「小横穴式石室」か、それとも終末期古墳の内部主体の1つで、外観は竪穴式石室に似ている「横穴式小石室又は横穴式石室系小石室」か判断が出来ない。

石室床面及び奥壁、両側壁下の掘り方は、奥壁と左中間の腰石及び羨門方の腰の縦長に立ててある石の下には、ピット状の掘り方があり先尖りの石を入れている。横長の腰石下はピット状の掘り方はなく、石室掘り方が平らに整形してあるのみである。石室床面の敷石下面と掘り方の床面上面とは若干の差があり、敷石を安定させるために土を敷き、その上に敷石を置いている。根石は奥壁では石室床面側にあり、左側壁では床面側 $\frac{2}{3}$ で腰石下 $\frac{1}{4}$ 、右側壁では腰石の下と、各腰石によって違っている。これは扁平な長方形の石を、縦長と横長に立てて使用している差であるかもしれない。奥壁の裏側に裏込め石が1石みられる。

なお出土遺物は見出せない。

(上野精志)

## V 古墳群周囲の調査

昭和50年秋の第一次調査の際、1・2号墳とともに、同丘陵上面に弥生式土器片等がみられたので、平地になっていた上段部と古墳周辺を全面発掘し、弥生時代袋状堅穴・土塚群、地下式横穴、中世土塚墓、柱穴群を検出した。また、51年夏の調査で4号墳南裾に発見された近世蔵骨器もここに収める。

### 1 袋状堅穴

#### 第1号袋状堅穴 (Fig. 91, P.L. 72)

2号墳の東側に周溝に切られて営なまれる。直径1.8mの略円形プランの底部に、中ぶくらの形状をなす。現存深さ1.3mを測り、底面は水平ではなく中央部が下がる。上半部にはレンズ状に小単位に有機質の暗色系埋土がみられ、下半は真砂土系の明るい土が塊状に大きく落ち込んでいる。恐らく、せり出し部等の壁が崩れ落ち、使用に耐えぬ状態になった後、ごみ捨て場等として埋められたものと考えられる。

#### 出土遺物 (Fig. 92・93, P.L. 74)

甕・壺の土器と石斧1点が出土している。うち、壺7は下半部やや上層から、石斧は底部近くの最下層から、他はすべて上半部の暗色系土層中から出土したものである。

甕 (Fig. 92-1・2・3) 1は、焼成不良で磨滅著しく形状不明瞭な点が多いが、ほとんど張らない胴部に外反する口縁部を有する器形であろう。胴部上半に断面三角凸帯を貼り付け、そのはげた胴部面に縦ハケ調整がみられ、他外面にもハケが施されていたと思われる。2・3は充実する脚台に僅かな上げ底をみせる底部片である。2は、外面に粗い杢目の縦ハケ調整を施し、内面は暗褐色変してザラついている。3は、外面に粗い縦ハケが残るが、全体的にはハケの上をナデで消している。いずれも、胎土に粗砂多く含み、焼成良好で黄茶色を呈する。

壺 (4~7) 4は、小壺胴部片で、鋭利な工具で細い沈線の文様を入れる。三条の平行する沈線を巡らし、その下位に下向きの半円周の2本の重弧文を連続して巡らすものであろう。胎土わりと良く、焼きは甘く、外面黒色内面淡褐色を呈する。5は、円盤貼り付けによる壺底部である。内面には指オサエナデ痕が明瞭で、外面はヘラ磨きしているようである。胎土に粗砂

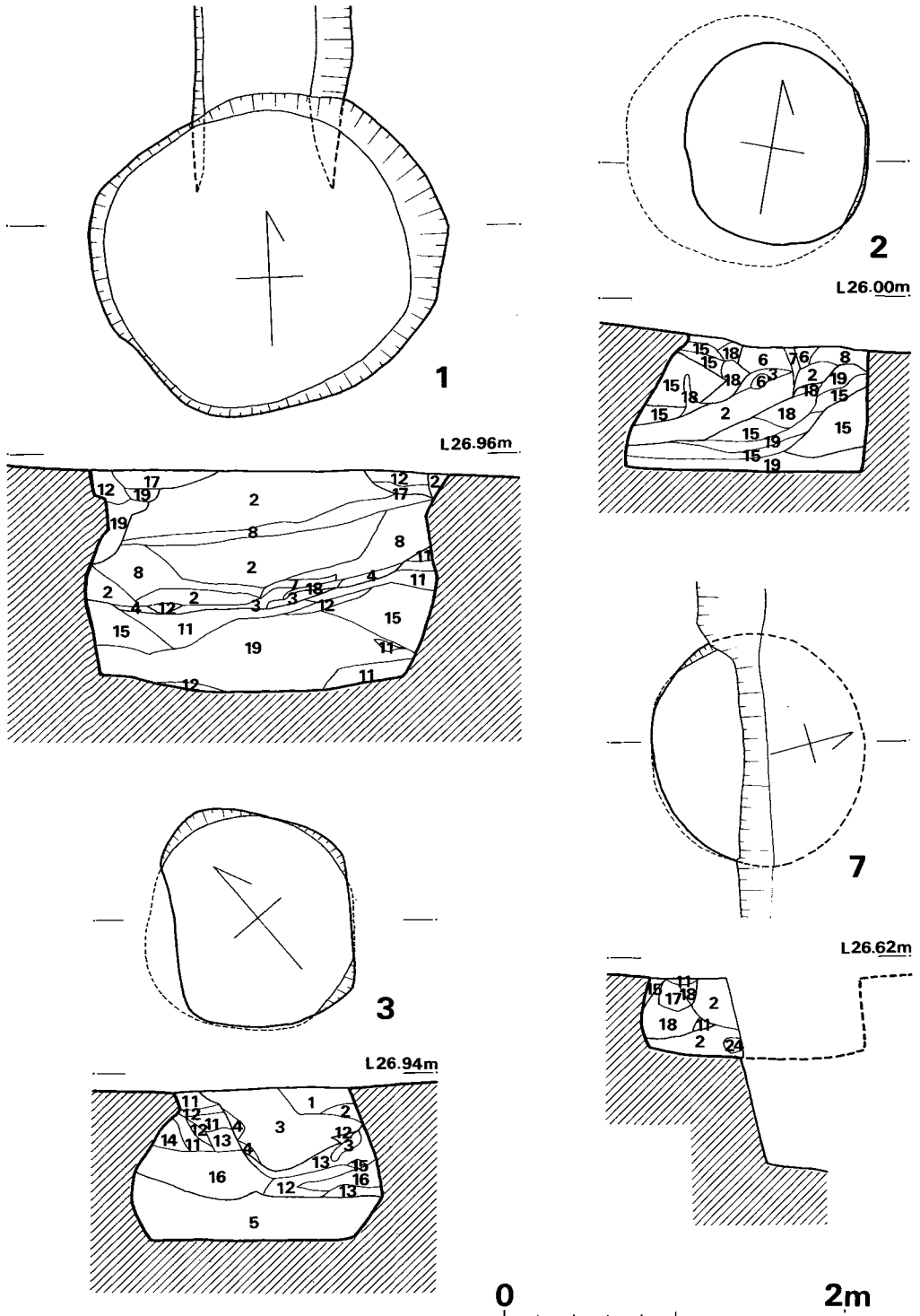


Fig. 91 第1・2・3・7号袋状竪穴実測図 (縮尺 1/40)

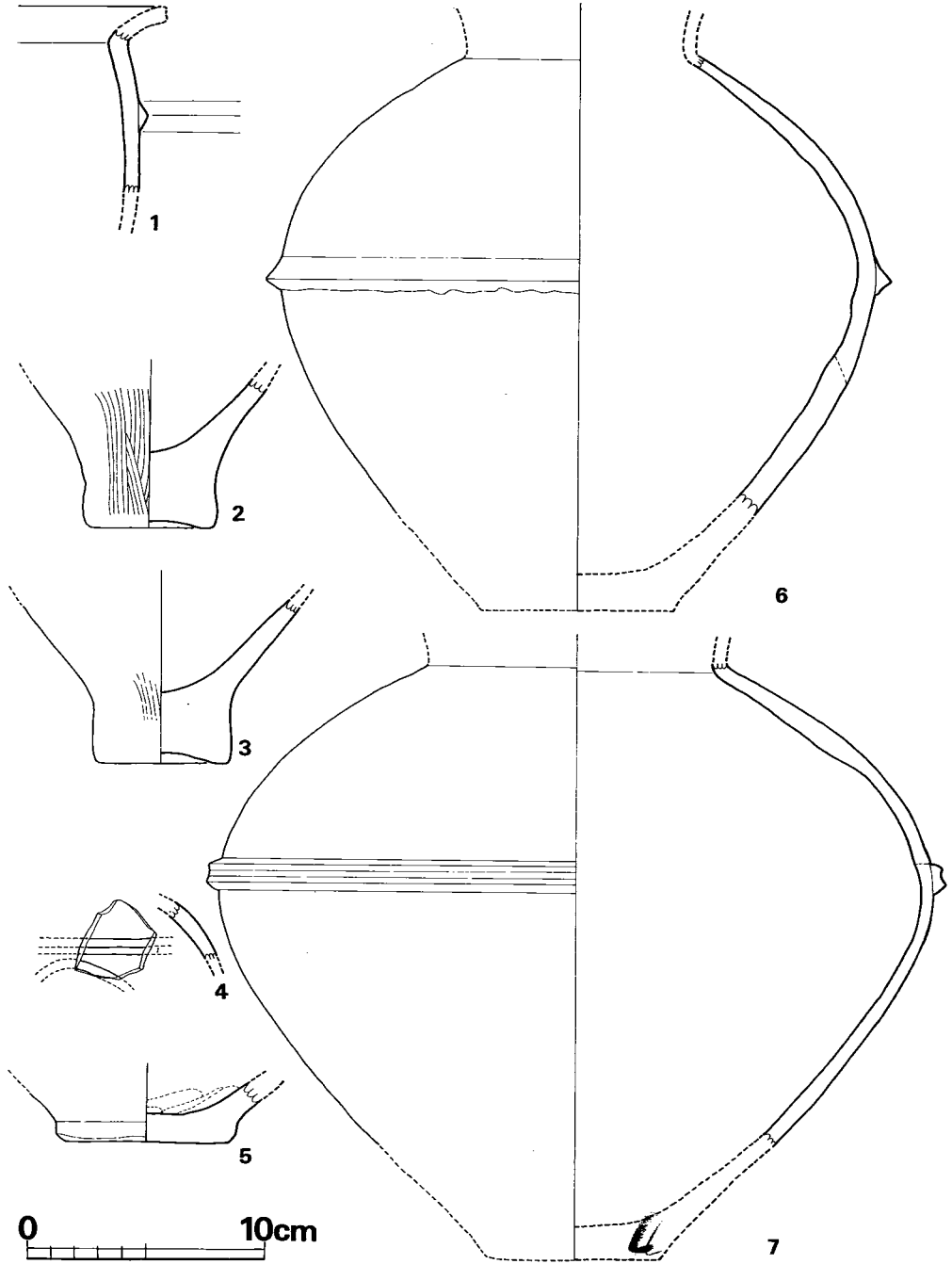


Fig. 92 第1号袋状竖穴出土土器实测图 (縮尺 1/3)

少量含み、焼成やや不良で、黄褐色乃至淡赤色をなす。6は、胴最大径を中ほどに有し、そこに一条の三角凸帯を貼り付ける広口壺である。凸帯は下から指でオサエて下縁が波状となる。外面ヘラ磨き、内面は荒い横ナデで凹凸が著しい。粗砂多く含み、焼きはやや不良で淡赤褐色をなす。7も同じく開口壺であるが、胴最大径をやや上位に有し口唇状凸帯を貼り付ける器形である。焼成極めて不良で淡褐色を呈し、調整不明である。

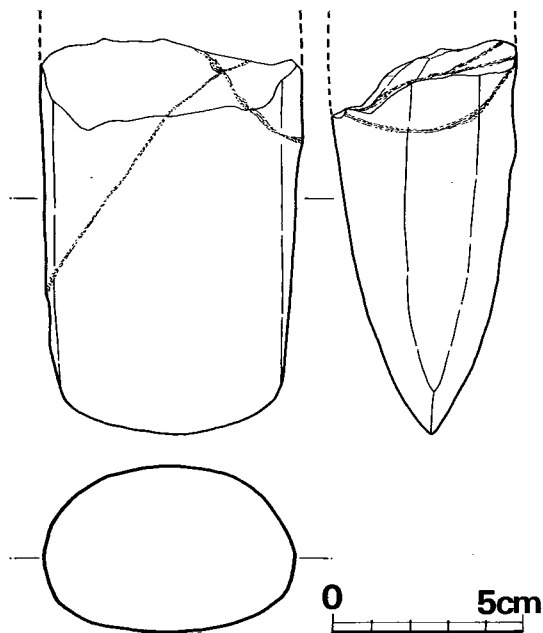


Fig. 93 第1号袋状竖穴出土石器実測図 (縮尺 1/2)

#### 第2号袋状竖穴 (Fig. 91, P L. 72)

1号墳西側の下段に位置する。径1.4 cmの円形プランの底部をなし、上面はかなりせり出す。東側は上部が崩れた為か直立した壁をなす。埋土を観察すると東側に厚く真砂土系の土が斜めに入り、その上部に有機質の暗色系の土が斜めに入り込む。西側上位には再び明色系の土が落ち込む。これらを推測するに、かなり口の狭いフラスコ状の形状をなしたものと思われる。第1号袋状竖穴と同様、片壁の崩壊後、ごみ捨て場等となり埋没したと考えられる。深さは現在0.8 mを測るが、その小規模さ、埋没状況等をみるとそれ程深いものではなかったと推定される。遺物は、甕底部片と小壺が出土しており、前者は下半部真砂土系土層から、後者は中層の有機質土中から検出された。

#### 出土遺物 (Fig. 94, P L. 74)

甕(1)は充実する脚台を持つ底部片である。器壁剥落して調整不明であるが、胎土に粗砂多く含み、焼成不良で暗茶色を呈する。

壺(2)胴部最大径をやや上位に有し、ゆるく外反し立ち上がる口縁をなす器形である。底

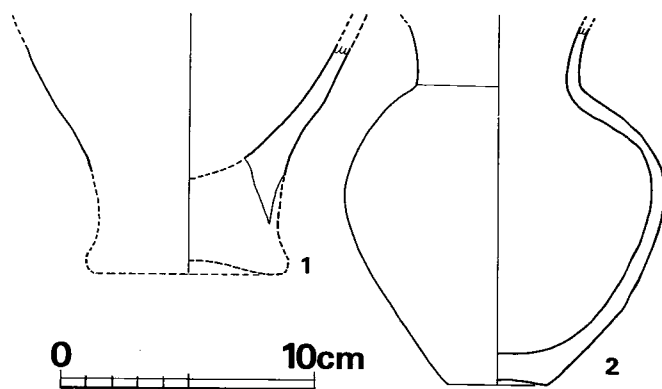
大型蛤刃石斧 (Fig. 93, P L. 74) 基部は欠失し、幅6.7 cm、最大厚さ5.0 cmを測り、横断面は裏面のやや平たい楕円形をなす。刃部はやや裏面寄りに作られる。一部で節理脈が突出する程表面の風化著しく、使用痕等不明である。石材として玄武岩を用いる。

以上の第1号袋状竖穴出土遺物は、4・5の如く前期に比定できるものや、7のように中期前半の特徴を示すものもあるが、他は中期初頭城之越期に比定されるものであり、竖穴の造営もこの時期に求めめるのが妥当であろう。



部はわずかに上がり、全体に縦長の小壺である。胎土に少量の粗砂を含むが、焼成極めて不良で明黄白色を呈し、器壁剝落著しく調整不明である。

以上の遺物は、中期初頭に比定され、当堅穴の造営もこの時期に考えられる。



第3号袋状堅穴 (Fig. 91, P L. 71)

Fig. 94 第2号袋状堅穴出土土器実測図 (縮尺 1/3)

第2号袋状堅穴の東に位置する小規模堅穴である。径1.2mの円形プラン底部に中ふくらみのフラスコ形態をなす。深さ0.9mを測り、浅い。埋没状況は、使用中旧表土等が入り20~30cm埋まった後、せり出した壁が崩壊し、その後、廃棄されたものと考えられる。土器小片が崩壊土中にいくらかみられるが、形態を知り得るものはない。

#### 第4号袋状堅穴 (Fig. 95, P L. 73)

2号墳周辺に群集する3基のうち東南の2号墳墓外に接する深い堅穴である。径2.3mの円形プランを呈する底面に、南半分はかなりせり出し、北側はほぼ直立する壁を有する。現存の深さは1.8mあり、当袋状堅穴群中最も深く大きい。最下部に暗褐色土が25cm厚さにつもり、その後、北側を主として真砂土系塊が大きく落ち込んで下半は殆んど埋って後廃棄され、ごみ捨場として有機質土が層をなし、その後南側せり出し部も大きく落ち込んでいることが観察される。遺物は小片のみで形状復元されるものはない。

#### 第5号袋状堅穴 (Fig. 95, P L. 73)

前述の第4号袋状堅穴の北に接して、その西半部を2号墳墓外掘下げの際削平されている。西半部は玄室床面下にその下底部が残る。径1.85mの略円形プランの底部をなし、残る東側はかなりせり出し、フラスコ状をなす。現存深さは1.4mを測る。この堅穴は、暗色系土が20~30cm程度埋まった後、壁がいくらか崩れ埋まり廃棄されたものと考えられる。

#### 第6号袋状堅穴 (Fig. 95, P L. 73)

第5号袋状堅穴の西に隣接し、2号墳墓外掘下げの際、上部殆んど南半部を削除され、かろうじて、その底部片北半を玄室床面下に残すのみである。底径1.6mを測り円形プランをなすと推定され、隣接する第5号堅穴と底面レベルが略同じであることなどから袋状堅穴とし

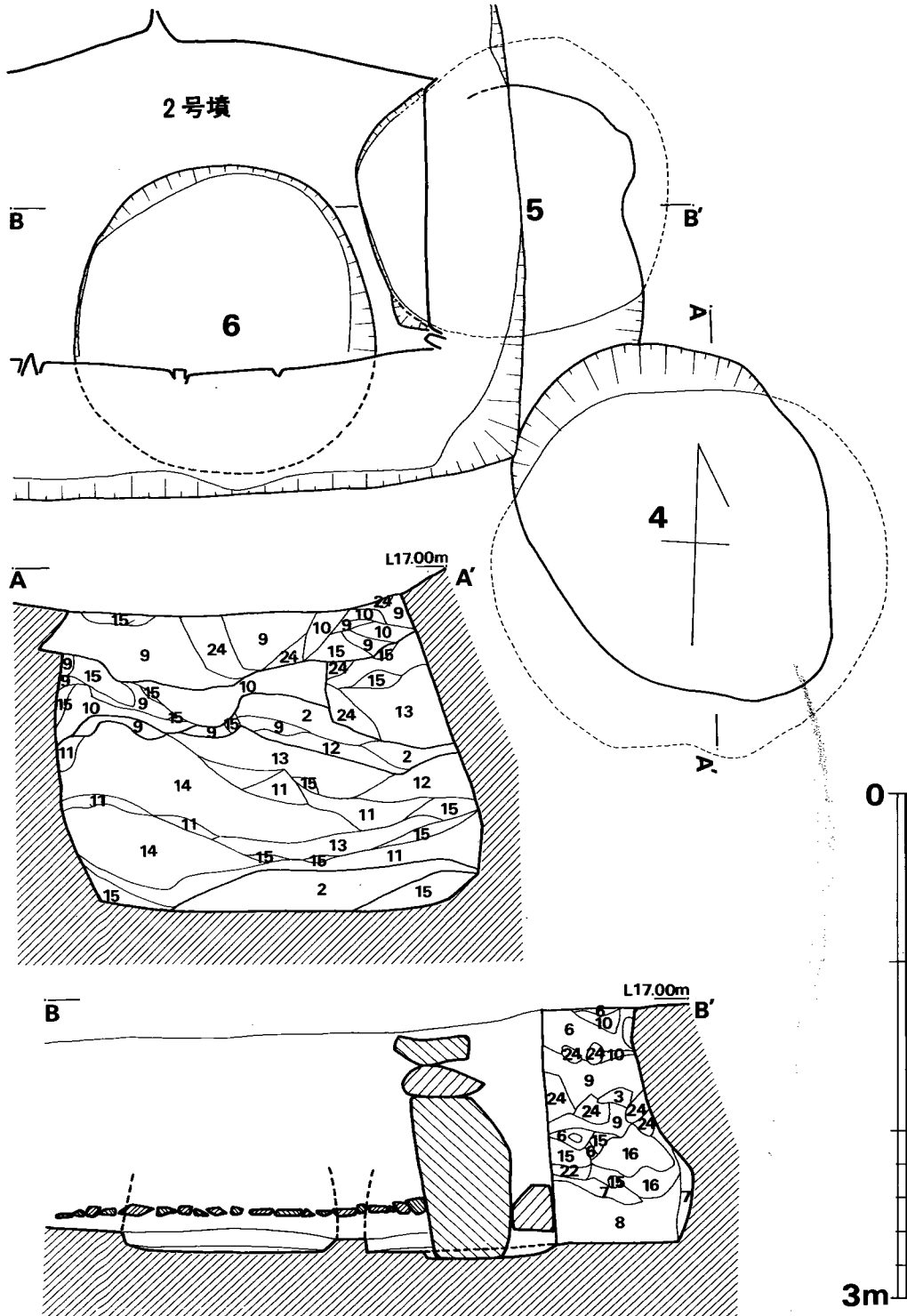


Fig. 95 第4・5・6号袋状竪穴実測図 (縮尺 1/40)

暗色系	0	暗褐色土 > 軟質岩	17	茶褐色土 (赤褐色混入)	
1	暗灰茶褐色土 (炭混入)	10	暗褐色土 < 軟質岩	18	淡褐色土
2	暗褐色土 (炭混入)	明色系		19	真砂に砂含む
3	暗灰褐色土 (炭混入)	11	赤褐色粘質土	20	真砂 > 軟質岩
4	暗赤灰褐色土 (炭混入)	12	暗赤褐色粘質土	21	暗黄褐色土 > 軟質岩
5	暗灰褐色土 (やや粘質)	13	暗赤褐色土	22	暗黄褐色土
6	暗茶褐色土	14	黄赤褐色土		
7	暗赤茶褐色粘質土	15	黄褐色砂質土 (真砂土)	23	花崗岩
8	暗褐色土 (砂質)	16	暗黄茶褐色土 (炭混入)	24	軟質岩

袋状堅穴土層図の土層名 (Fig. 91, Fig. 95共通)

た。遺物、形状等、全く不明であるが、5号と同様のものと考えられる。

#### 第7号袋状堅穴 (Fig. 91, P.L. 73)

2号墳の北側崖縁にあり、南半部のみ残る。径1.3mの円形プランをもつ底部と推定され、現存深さ0.46mと極めて浅い。壁は中ぶくらみをみせ、上部はかなりせり出すと考えられる。底付近から壺口縁部が出土している。

#### 出土遺物 (Fig. 96, P.L. 74)

開口壺の頸部以上破片である。復元口径23.5cmを測り、頸部が直立しながら立ち上がり、外反する口縁上面に粘土を貼り付けて肥厚させる。口縁上面はわずかに外傾し、頸部屈曲部外面には太いへら沈線がみられ、三角凸帯を上貼りつけていたもの

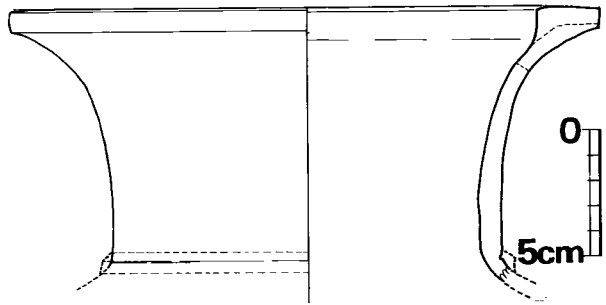


Fig. 96 第7号袋状堅穴出土土器実測図 (縮尺 1/3)

と推定される。胎土に粗砂をかなり含み、焼成良好で淡黄褐色を呈する。

この土器は中期初頭に比定され、当堅穴の造営時期を示すものであろう。 (中間研志)

## 2 弥生時代土坑群

#### 第1号土坑 (Fig. 97, P.L. 75)

1号墳の東方約30mの台地中央部に位置する。底面プランは略方形をなし、上面は1.21m × 1.16m、深さ32cmを測る。主軸はN14°Eをとり、中に大小の角礫5個を数える。遺物は全く

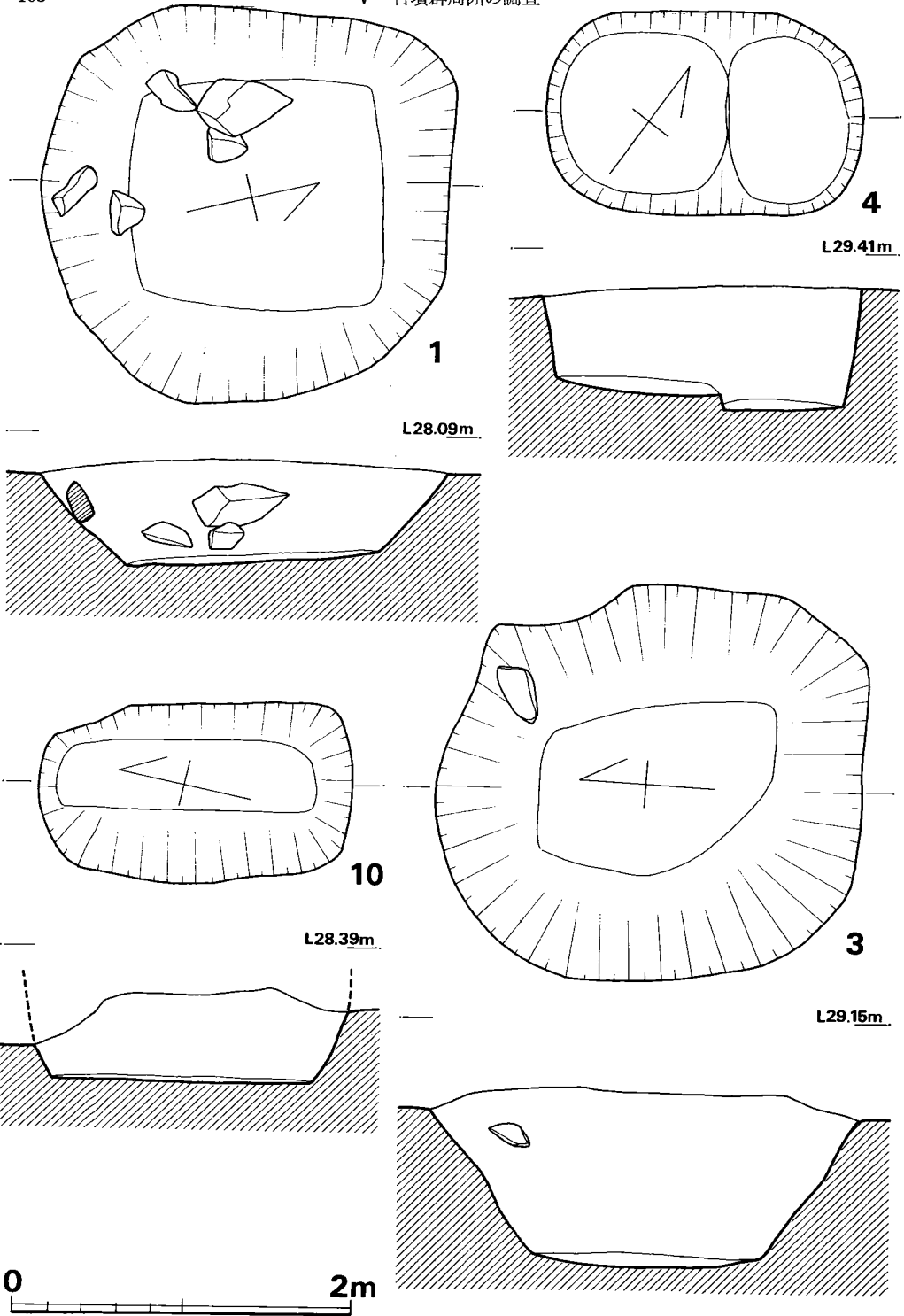


Fig. 97 第1・3・4・10号土塚実測図 (縮尺 1/20)

みられない。

### 第3号土壇 (Fig. 97, P L. 75)

上面径 $1.26\text{m} \times 1.18\text{m}$ の不整形プランをなし、底部も整わない。中途に浮いた石1個がみられる。遺物等全くみられない。

### 第4号土壇 (Fig. 97, P L. 76)

上面径 $94 \times 60\text{cm}$ の長円形プランをなす。N $53^\circ\text{E}$ に主軸をとり、1号土壇の東南7mに位置する。床面は東北部で一段下がり、上段で深さ32cm、下段で37cmを測る。壁は1・3号と異なりほぼ直立する。出土遺物は皆無である。

### 第5号土壇 (Fig. 98, P L. 76)

第1号土壇の東側5mの位置にあり、N $64^\circ\text{E}$ に主軸をとる。 $1.19 \times 0.8\text{m}$ の略長方形プランをなし、床面中央に径 $35 \times 28\text{cm}$ の深いピットを有する。床面までの深さ50cm、ピット底部まで1mの深さである。床面は角をもった長方形プランをなし、壁はほぼ直立する。遺物は全くみられない。

### 第6号土壇 (Fig. 98, P L. 78)

第1号土壇の北東10mにある。主軸をN $72^\circ\text{E}$ にとり、 $1.1 \times 0.7\text{m}$ の略方形プランをなし、第5号土壇と同様、床面中央に深いピットを有する。床面までの深さ72cm、ピット底部まで118cmを測り、壁はほぼ直立する。遺物は全くみられない。

### 第7号土壇 (Fig. 98, P L. 77)

7～10号土壇は、1号墳の北東5mの位置に群在する。N $64^\circ\text{W}$ に主軸をとり、 $1.64 \times 0.55\text{m}$ の略長方形をなす。底部は $1.53 \times 0.40\text{m}$ を測り、床断面は両壁寄りにせり上がる丸底状をなし、35cmの深さをなす。壁は南西側はほぼ直立し、北東側はやや傾斜する。弥生式土器片少量が混入していたが、形状を知り得るものはない。

### 第8号土壇 (Fig. 99, P L. 77)

7号土壇に隣接するが、主軸は大きく偏してN $42^\circ\text{E}$ にとる。 $1.53 \times 0.62\text{m}$ の片端が丸くなる略長方形プランをなす。床面は $1.49 \times 0.49\text{m}$ で上面プランとほぼ同形をなす。壁は東南側がやや傾斜をもつが、他はほぼ直立する。埋土中に弥生式土器小片をみるが、復元できるものはない。

105

V 古墳群周囲の調査

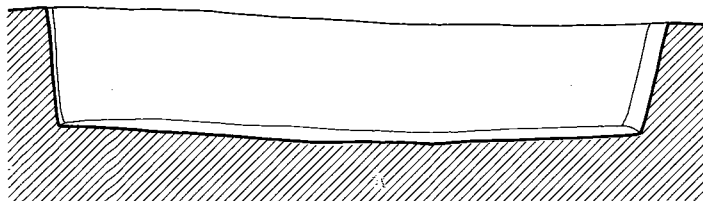
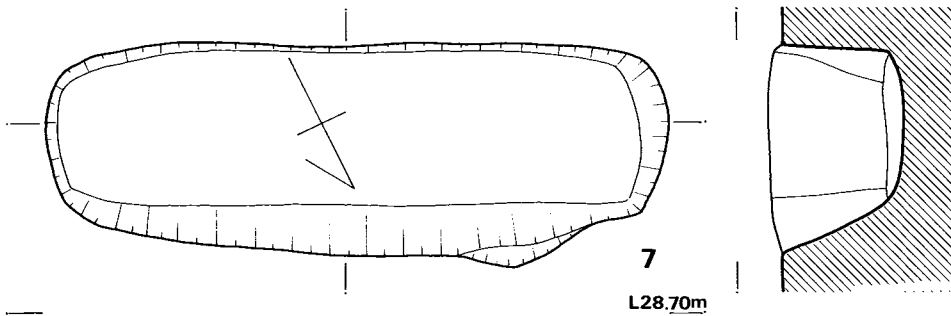
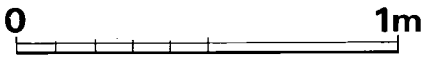
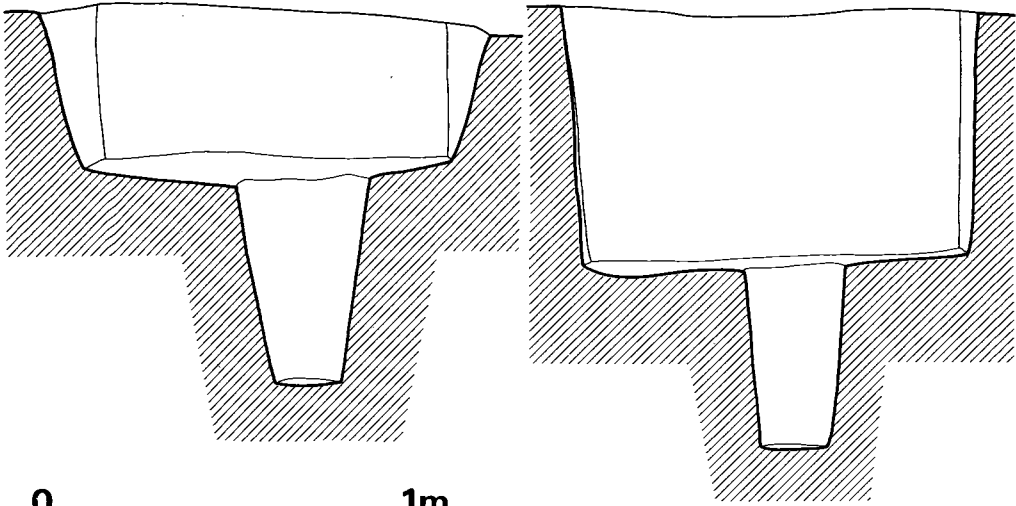
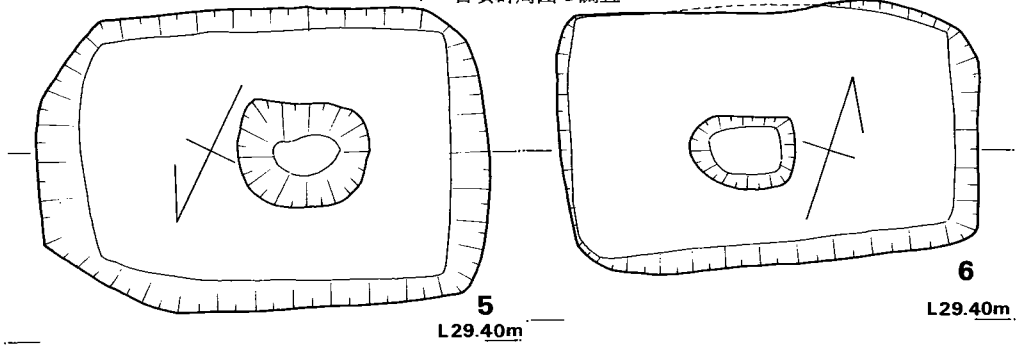


Fig. 98 第5・6・7号土塚実測図 (縮尺 1/20)

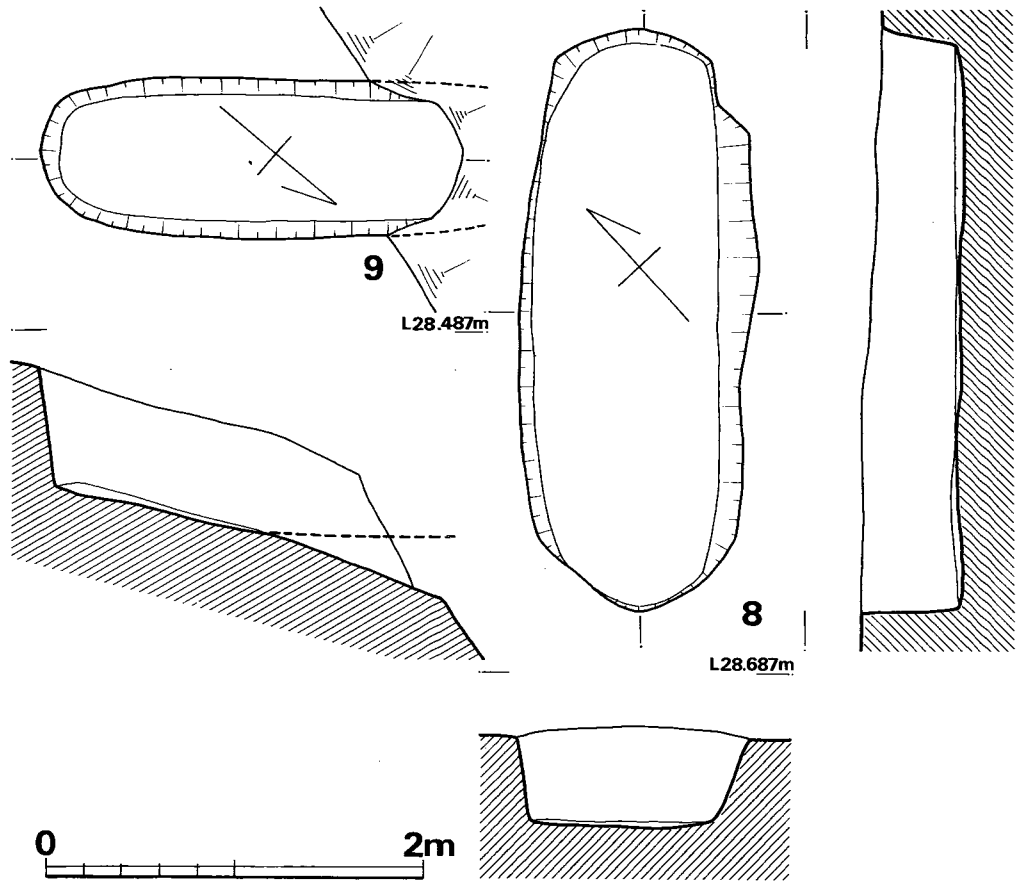


Fig. 99 第8・9号土坑実測図 (縮尺 1/20)

#### 第9号土坑 (Fig. 99, P.L. 77)

7号土坑の西側の崖端に北西半を削除されて残る。N40°Wに主軸をとり、現存長1.1m、幅0.42mを測る。壁はほぼ直立し、深さ35cmを残す。削除されて全容を知り得ないが、7・8・10号土坑と同種のものとして推定される。

#### 第10号土坑 (Fig. 97, P.L. 77)

上半を1号墳周溝に切られるが、小型の長方形土坑である。底部は77×20cmを測り、主軸をN12°Wにとり、壁はやや丸みを帯びて傾斜する。規模は小さいが、7～9号土坑と同種と思われる。弥生式土器片少量が混入するが形状を知り得るものはない。

以上9基の土坑は、その形状・位置より4類に大別できる。即ち、下記の如くである。

A類 (1・3号) 不整形平面形をなし、1.2m前後の径を測り、底面は方形・不整形をなし

壁が大きく開き、中に角礫をみる。

B類（4号）長円形プランをなし、底面が前後二段となる小型の土塚である。

C類（5・6号）長方形プランの床中央附近に深い小ピットを有し、壁は直立し深い。

D類（7・8・9・10号）長さの長短はあるが、幅50cm前後の長狭なプランのもので、弥生式土器片を混入する。

以上のうち、D類は、10号で1号墳周溝に切られ、弥生式土器片を混入し、弥生時代土塚墓と推定される。C類は、大野城市中・寺尾遺跡（註1）、筑紫野市剣塚遺跡（註2）等に類する遺構が検出されており、弥生前期後半期に比定され、当土塚も周辺の遺構状況等から推定して、袋状堅穴の中期初頭期と同時期に考えられようか。またB類は、小郡市ハサコの宮遺跡（註3）に類例がみられ、弥生前期末代に比定されている。（中間研志）

註 1) 浜田信也・酒井仁夫「中・寺尾遺跡」福岡県教育委員会 1971

2) 1973年福岡県教育委員会により調査された。

3) 上野精志「九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告V」福岡県教育委員会 1974

### 3 地下式横穴 (Fig. 100, P.L. 79・80)

台地上面の中央部、第1号土塚の西5mに位置する。玄室天井部は陥没しており、これは戦前に旧地主某氏が馬を落し込んだことがあるという話に符合し、円形の陥没孔は最下部まで表土で埋没し、近・現代遺物少量を含んでいた。堅塚部入口は、しまった土が下まで充填され、新しく埋まった様相は示していない。

堅塚は、1.1×0.85mの長方形プランで、現地表下1.45mで底面に至り、急斜面をなして玄室床面に降りる。この段差0.9mを測る。玄室各部の計測値は下記の如く

長 さ	(	左		2.80m	)	奥 壁		1.85m
		右		2.75m		中 央		1.80m
		中軸上		2.85m		前 壁		1.45m

で、平面形は奥壁側の広い羽子板状の整った形をなす。床面には周溝等の格別の施設はつくられない。

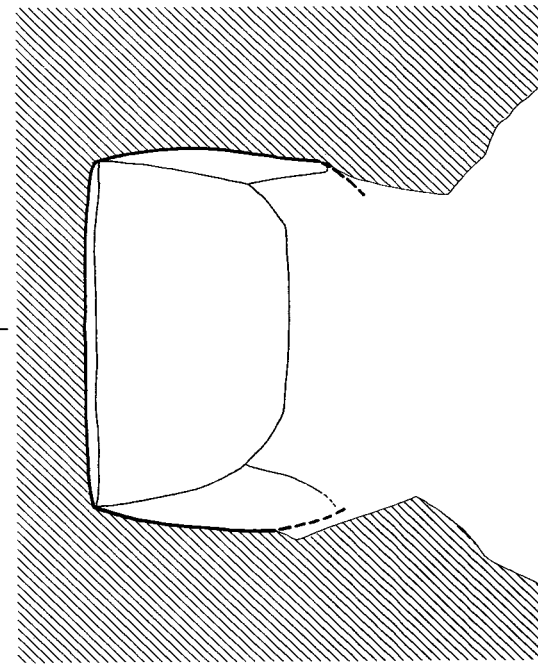
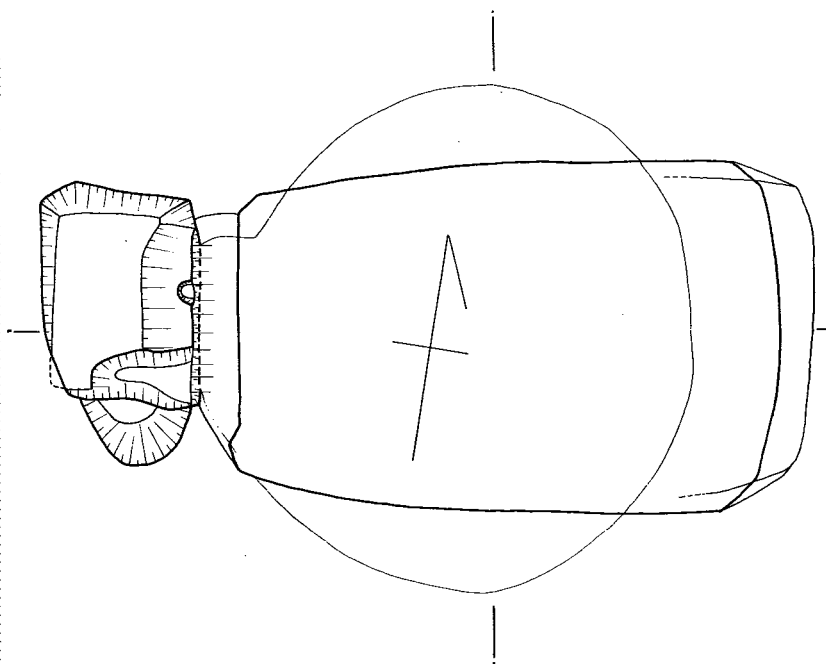
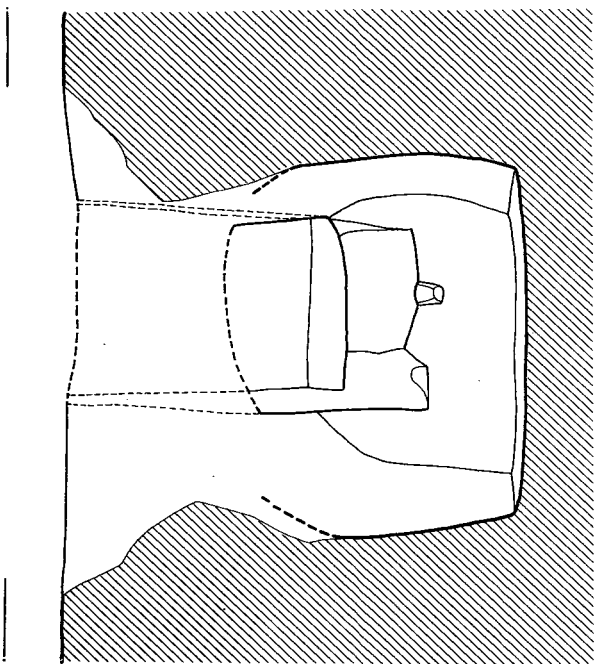
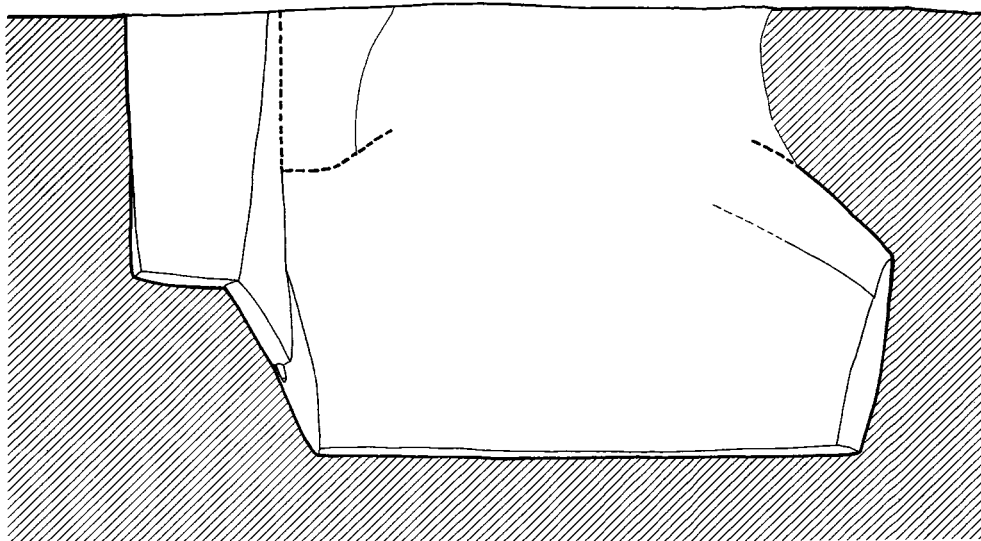
玄室天井部はその大半が前記の如く崩壊して残らないが、奥壁側で長さ50cm程度残り、中央部の高いややドーム状の形態をなすと推定される。推定高1.8mを測る。奥壁上部から左右とも各々稜1本が中央部へ上がりながら走る。

奥壁は、1mの高さに外傾し、天井面及び両側壁との境は明瞭に角をなし、略台形の平面をなし、鏡石を彷彿とさせる。両側壁は一旦わずかに外傾し、上部で屈曲し天井部へ続く。



L28748

0 2m



L28748

Fig. 100 向山地下式横穴実測図 (縮尺 1/40)

竪塚底部から玄門部斜面南壁に沿って、幅20~30cm、深さ35~45cmの細長い塚が掘られ、更に斜面中途に径13cmの半円形小ピットが穿たれている。玄門部は、左右両壁に残る痕跡により玄室床面より1.5m、竪塚底部より60cmの高さと推定され、かなり低い。

両側壁面には、工具痕がかなり荒く残り、それは殆んど上半部に限られる。下半は丁寧に調整している。(P.L. 81) 工具痕は、幅10cmで刃部がやや丸味を帯びたものが殆んどで、その他種はみられない。天井部近くまでみられることから、手鋏状の工具を用いたものと考えられる。また、奥壁中央部に指による強い圧痕がみられる。(P.L. 81) 横位の強いオサエナデで、横に30~10cm、幅20cmの間に記されたもので、精査したが、何らかの文様を描いたものではなく、意図したとするならば、奥壁中央部を示すものとも解釈されようか。

竪塚内及び玄室床面からの出土遺物は、崩壊埋土上層の近代磁器を除いて全く無く、年代・性格等の決め手に欠く。近辺に同種遺構の存在する事なども含めて、近刊予定の中屋敷遺跡報告書において若干の考察を加えてみたい。(中間研志)

## 4 中近世の土塚墓・墳墓

### 中世土塚墓 (Fig. 101, P.L. 78)

3号墳と地下式横穴の中間の台地平坦部に検出された。主軸をN4°Wにとり、96×51cmの不整略隅丸長方形プランをなし、残る深さは15cmと浅い。中央やや南寄りに土師器皿1点が副葬されている。遺骨等は全くみられない。

### 副葬品 (Fig. 102)

底部糸切の器壁の薄い土師器皿で、口縁は著しく楕円形に

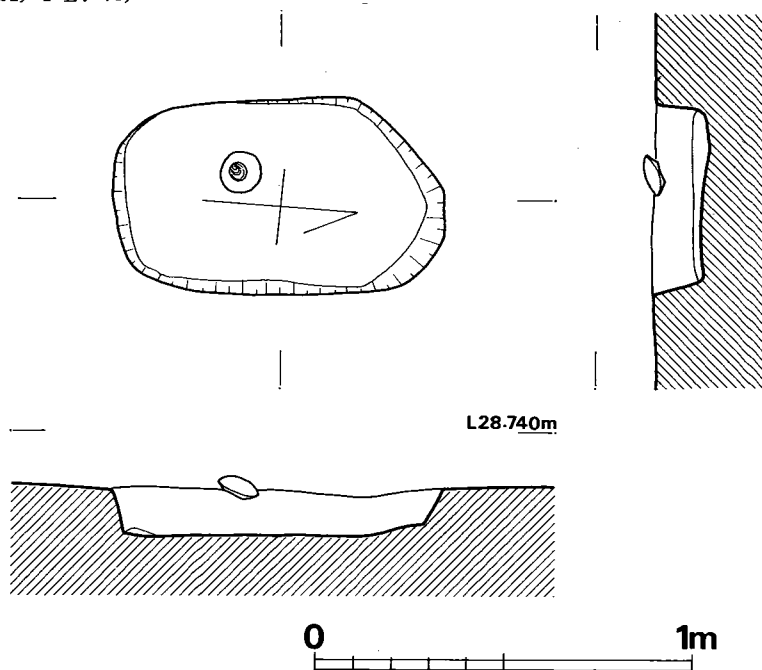


Fig. 101 中世土塚墓実測図 (縮尺 1/20)

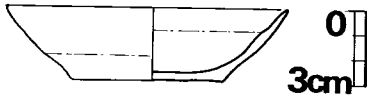


Fig. 102 中世土塚墓副葬土師器実測図  
(縮尺 1/3)

歪む。底部以外は横ナデ調整を行ない端部はやや鋭い。  
口径 11.0~12.1cm, 底径 5.8cm, 器高 2.9~2.3cm を測  
る。胎土に少量の粗砂粒含み, 焼成やや不良で淡褐色を  
呈する。 (中間研志)

### 近世墳墓

4号墳の西南部より2基の蔵骨器が検出された。西側のものを1号墳墓とし, 南側のものを2号墳墓とする。

#### 1号墳墓 (Fig. 103-1, P L. 83)

4号墳の西方墳丘内にある。墳丘の地山整形面と盛土との境付近に蔵骨器が底部が低位に口

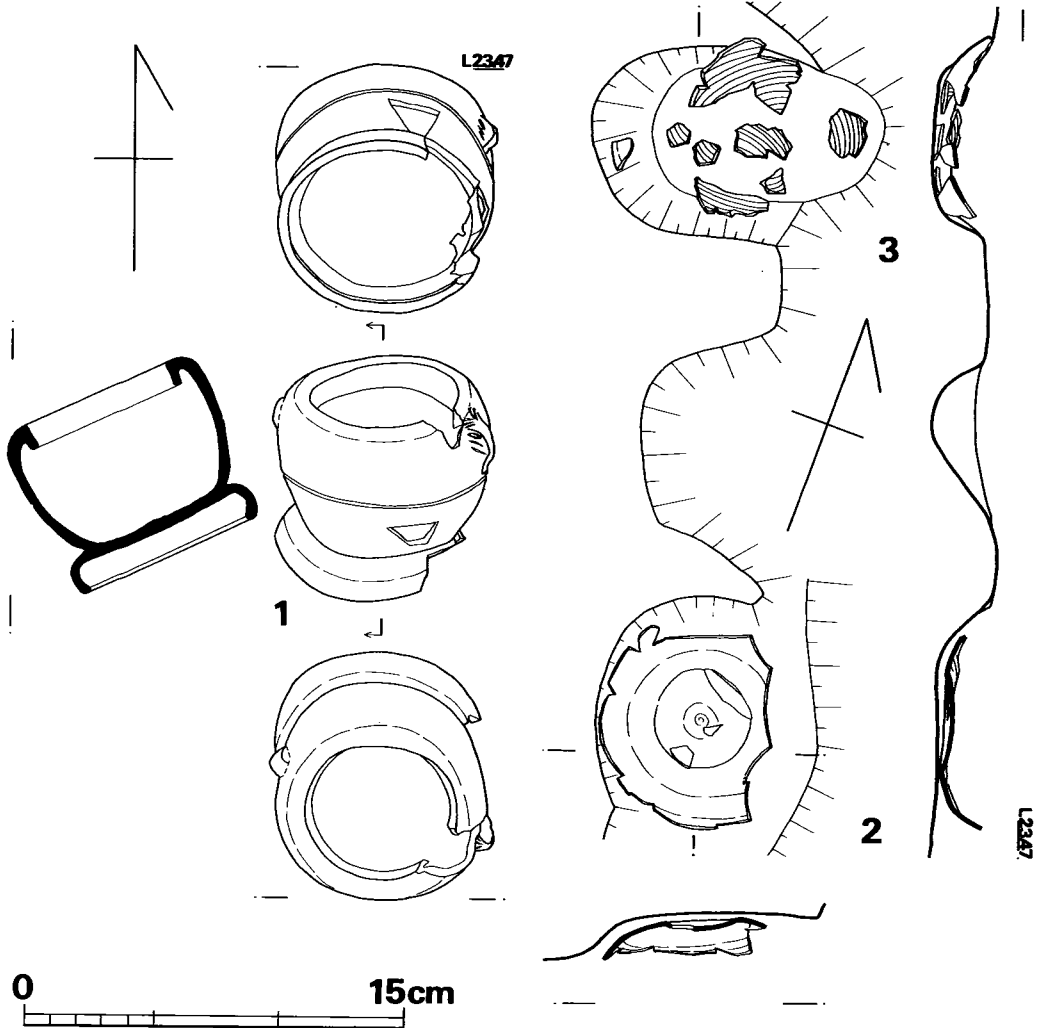


Fig. 103 近世墳墓出土状態実測図 (縮尺 1/6)

縁部が上部に傾斜した状態で検出された。蔵骨器の埋葬施設は4号墳々丘が大きく破壊されているため明確でなく検出することが出来ないが、状況からして簡単な土塚を掘りその内に蔵骨器を埋置したものと推定される。蔵骨器底部に火葬骨を認める。

#### 蔵骨器 (Fig. 104-1, P L. 84)

香炉形土器で器台が高く口縁端部がほぼ垂直に内面へ折れ曲り、口縁部のやや下に耳が左右に二つ付き把手としている。把手はそれほど明らかではないが、いずれも両目がみられ、その形態より動物の象の顔のようである。調整は回転ナデが主で胴部外面には全面に刺突が施文されている。内面には粗い工具によるカキ目状痕が強く残る。色調は全体的に黒色で、胎土に粗い石英粒をかなり含んでおり焼成は瓦質である。

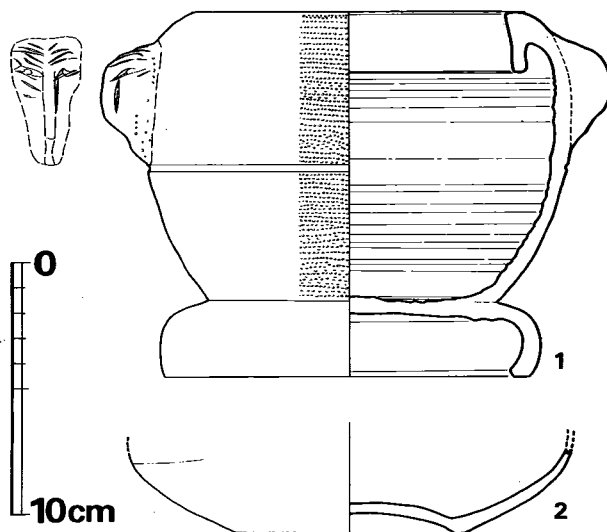


Fig. 104 蔵骨器実測図 (縮尺 1/3)

2号墳墓 (Fig. 103-2・104-2, P L. 83・84)

1号墳墓の南4m, 円形土塚の内に底部のみを残しその内に火葬骨が認められたものである。遺存している底部は高さ3cmのみで器形の復元は不可能である。底部は淡茶色で、胴部近くは茶色釉を呈し、胎土は良好で硬質の土師質である。

#### 3号墳墓 (Fig. 103-3, P L. 83)

2号墳墓に接近して検出されたもので、土器内より火葬骨の発見はないが、蔵骨器とした。蔵骨器は瓦器質で黒色を呈し焼成は良であり胎土は水砂粒を含むも密である。

以上3基の蔵骨器を伴う火葬墳墓は蔵骨器より近世のものと思われる。 (上野精志)

## 5 柱 穴 群

1号墳の東側、上段平坦部の北縁沿いに、大小のピット群が検出された。70余個を数え、その形状は、深いもので50cmの柱穴状をなすものが多い。これらは削平されている北側にも伸びていたと考えられるが、検出した分に関しては、うまく並ぶものもなく、年代・性格等知り得るものはない。

弥生式土器細片を混入する柱穴も数個みられるが、形状を知り得るものはない。なお、台地

上から、1・2号墳周辺に至る表土層中から若干の遺物を得ているので、掲げておく。

**弥生式土器片** (Fig. 105-1) 外反した口縁直下に三角凸帯をめぐらすもので、器壁厚く、大型の甕で甕棺墓に用いるものかもしれない。胎土に粗砂多く含み、焼成やや不良で外面暗褐色内面赤色を呈する。器表磨滅著しく調整不明。

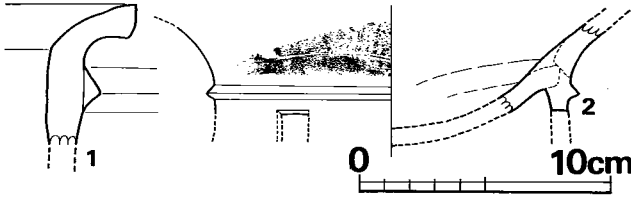


Fig. 105 古墳群表土出土土器実測図 (縮尺 1/3)

器台受け部と脚部の接合部分片で、幅 1.3 cm のスカシをつくり口縁大きく開く受け部を有する形状である。内面下半にヘラ削りが施され外面上端に条線様叩目がみられる。胎土に少量の砂粒を含み、焼成やや軟質で、内面灰白色、外面灰黒色を呈する。

**石戈未製品** (Fig. 106, P L. 84) 粘板岩質の石材を用い、胡の欠損したもので、内は欠損か

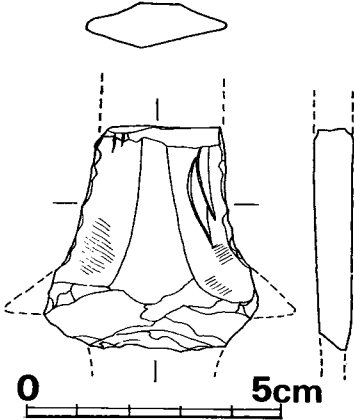


Fig. 106 古墳群表土出土石器実測図 (縮尺 2/3)

つくりえないのか不明である。研磨は全面に及ばず、粗く磨き各所に粗い擦痕を残す。孔も未だ穿たれていない。鑄は、表面で未だ2本あり、裏面の1本も中心ではなく片側に寄って作られる。以上により、形状を加味して石戈未製品と考えられる。ただ、石戈とすると余りに小型すぎるきらいもある。石戈としてその工程を考えると、ここでは研磨→穿孔という順序が示されよう。(中間研志)

**須恵器器台** (Fig. 105-2)

器台受け部と脚部の接合部分片で、幅 1.3 cm のスカシをつくり口縁大きく開く受け部を有する形状である。内面下半にヘラ削りが施され外面上端に条線様叩

## VI 総 括

### 1 住 居 群

#### a 住居跡の構造

住居群7軒の竪穴式住居は、年代及び形態等により以下の4類に大別できる。

I類 弥生時代後期後半以前 小型方形(?)……………(5号)

II類 弥生時代後期後半 大型方形・ベッド・2本柱……………(1・4号)

III類 古墳時代初頭 小型長方形・4本柱……………(2・7号)

IV類 古墳時代後期 小型方形・カマド……………(3号)

これらのうちI類は、本文中でも述べた如く、一辺2.86mとあまりにも小規模で、住居跡とするには否定的要素が強い。ただ、1号住居跡と同様の壁際の細い溝状遺構をみることができ、強いて言うならば、物置小屋風の遺構かとも考えられよう。

II類において特に注目すべきは、壁際の溝状遺構であろう。即ち1・4号住居跡でa)幅15~25cm、深さ10~15cmで東壁と北壁の東半及び南壁の内際に巡るもの、b)幅7~2cm、深さ5~2cmの細い溝状遺構で、a類が巡らない部分及び、4号住居跡の東壁際にみられるもの、の2種を検出した。

a類は、通有の住居跡にみられるもので、1号住居跡・6号住居跡ではその殆んどにみられ、特に1号ではa類のない部分にb類がみられる。1号住居跡においてこのa類溝は厳密には、壁際にぴったり沿ったものではなく、南北のコーナー部分ではそれが顕著にみられ、また南西隅のベッド状遺構部では内縁に沿っており、従来考えられてきたように単に壁側から漏ってきた雨水等を受ける遺構とは考え難い。また、この底部レベルを観察するに、東壁際中央部の土壇部にむかって、南北両方から傾斜している。これは、もし水等が流れると仮定すると、土壇部にすべて水が流れ込み溜るように意図された施設であると考えざるを得ない。この土壇内には上面が赤く固く焼けた粘土塊がみられ、床面中央炉と様相が異なる。この土壇部は当初、補助的な炉としても使用に供されたものかと推測したが、同様構造の4号住居跡のものに焼土・炭類が全くみられないことなども併せて顧みると、炉ではないと考えられる。4号住居跡床面二ヶ所に既述の如く焼粘土塊がみられることもあわせれば、土器製作の為の粘土塊を土壇部分に入れて置いたものが家屋焼失の際焼土化したものと推定できる。即ち、この土壇部分は、炉

ではなく、水が入り込む構造であることから、炊事場その他の工作用ピットの用途も考えられるが、粘土精製及び捏ねる場所としても使用されたと推定されはすまいか。

**b類**は、1号住居跡の北壁際西半部、4号住居跡の東壁及び北壁際にみられる。これは登呂遺跡(註1)の『羽目板』と称される、土留め用の板材を突っ込んだ痕跡と考えられる。都出比呂志氏は(註2)「登呂遺跡のような『特殊な』竪穴式住居ではない、『通常の』竪穴式住居における住居外周堤」の存在を強調し、その周堤と壁部を支えるものとして「周壁体」が「周壁溝」に埋置されているとしている。この「周壁溝」が我遺跡の**b類**にあたるものである。また、その「周壁体」の高さは、「竪穴を掘鑿した際に生じる排土」を「周堤の盛り土に利用した」として、その算出方法を示しており、それを1号住居跡に適用すると約1m強の高さを測ることができる。以上の同氏の観点は、近年いくらか想定されつつあることでもあり、実際に1m近い深い竪穴住居跡が県内でも小郡市津古内畑遺跡(註3)筑紫野市剣塚遺跡(註4)などで検出されており(註5)非常に今後ともに注目すべきことである。なお、**b類**の周壁溝は県内では、鞍手郡鞍手町中屋敷遺跡(後期・古墳前期)(註6)筑紫野市剣塚遺跡(後期)(註7)八女市室岡の諸遺跡(註8)などがみられる。

**Ⅲ類**の2号住居跡において、壁周辺に小ピットが並ぶ。即ち、南・西・北壁際に5~10cmの深さで、北壁際に80cm間隔で3個、西壁で5個、南壁に4個が対応して並ぶようで、それらの間にもいくらか認められる。これは前述の周壁に沿って垂直に打ち込まれた板材の場合と機能的には同一で、長い板材或いはしがらみ状に横位に組んだ細い小枝等の支えの柱痕、即ち、小柱と小柱にからませた横材が周壁体となる構造のものであろう。これは前述の都出氏論文にも触れられており、実際に県内八女市室岡道添12号住居跡(註9)南壁際において、壁際の小柱穴列及び小柱と横位に組んだシナノキ、エノキ等の小枝などの炭化材が検出され、また筑紫郡那珂川町門田遺跡辻田地区22号住居跡(註10)では、大型の小判形プランの壁際に密な小ピット列の検出が知られる。また朝倉郡三輪町栗田遺跡(註11)D区住居跡では、方形平面形を3つに間仕切りしており、壁際周溝部分に小柱穴列と板材差込み痕が検出されている。

(中間研志)

#### **b 竪穴住居跡における祭祀について**

本遺跡中祭祀に関連ありと考えられる遺物を伴う住居跡は2・3号に主にみられる。まず、古墳時代初期の2号住居跡では、小型丸底壺・高杯・器台・手捏ね土器・土製丸玉等の「祭祀遺物」が甕・鉢等の「生活土器」とともに床面に散在する。その分布は南半に集中するが、各々の有機的なつながりは認められない。同時期の住居跡で祭祀遺物出土例をみるに、春日市竹ヶ本6号住居跡(註12)の小型丸底壺3個、高杯2個、臼玉1個の例が知られる。弥生時代中期を頂点とする丹塗祭祀土器からの流れの中で、弥生終末期以降の小型丸底壺・手捏ね土器等への祭祀用品の転換の様相をみせ乍ら、滑石模造品等を組み込んだ新しい祭祀形態が発生

し、当2号住居跡の状態はその漸移的な様相を呈するものといえようか。土製丸玉については金子裕之氏によると(註13)、関東地方五領期の住居から発見される土玉は例も多く、1住居からの出土量も131個の例を最多としてまとめて出土する事が多く、立地などとの関係から魚網用の錘であろうとしている。また、福岡市板付遺跡台地上の第1区住居跡(5C初頭前後)(註14)から径2.4cmの土玉が出土しており、報告者は「土錘」に分類している。また、佐賀県基山町伊勢山1区2号、1区3号住居跡(註15)から、各々6個、2個出土しており、いづれも径2cm前後を測るものである。筑紫野市野黒坂遺跡3号住居跡(6C中葉)(註16)からも出土している。当向山2号住居跡の土製丸玉は径1.5cm前後を測るものであり、土錘に分類している関東五領期の例及び板付例とは大きさも異なり、共伴祭祀土器類とも考え合わせると、土製模造品としての丸玉の機能を有したものと考えたい。

古墳時代後期に属する3号住居跡では、前述の如く、滑石製の臼玉140個一連と管玉1個が出土した。滑石製臼玉類の出土例はかなりみられるとはいえ、製作工房址及び埋葬時副葬品等の場合を除き、一連となって出土例は寡聞であるといえよう。特に住居跡等における祭祀遺物として取り上げられる場合、数点のみの検出をもってその祭祀の全容を示そうとしていることもあるが、本来の姿を考えれば、当住居跡の状況の如く、一連として発見されるべき類のものではなかろうか。出土状況からみて、いくらか散在していることも考えると、屋内の何処か、及び賢木のようなものに掛けられていたものかと推定される。竪穴住居跡に付属して滑石製模造品が発見された例は少なく、九州においては本遺跡も含めて5遺跡、13例である。(Tab. 5)

遺跡・遺構	時期	規模 (m)	施設	土器	石器	土製模造品					滑石模造品				子有孔板玉	その他	文献 (註)
						丸玉	器台	器台玉	管玉	管玉	管玉	管玉	管玉	管玉			
福岡県春日市竹ヶ本6号	4C終末 ~5C前	5.5×5.5		土師：高杯・埴	砥石							1				蛇紋岩か?	12
"12号	5C前	6×6(?)	炉	土師：高杯・壺・埴	砥石							1				蛇紋岩か?	12
佐賀県基山町伊勢山1区2号	5C後	5.4×5.3	炉	須恵：杯・壺 土師：壺・甌	砥石 擦石	6	26	27				2000	9			ガラス小玉1 土錘	15
"1区3号	5C後	5.5×4.8	炉	須恵：壺 土師：高杯・杯・埴	擦石	2	4	2	1			5				鉄鏃5	15
"3区1号	5C後 ~6C	4.8×4.5	北壁竈	須恵：壺 土師：高杯・埴	砥石 擦石			17			2	4	2	1		鉄鏃1 紡錘車1	15
"5区住居	5C後 ~6C	5.7×5.4	炉 北壁竈	須恵：杯・高杯・壺 土師：杯・高杯・埴			有		有	1		3				紡錘車1	15
福岡県筑紫野市野黒坂13号	6C中	3.67×3.50	西壁竈	土師：杯・碗							有					紡錘車	16
"14号	6C中	6.68×6.55	北西竈	須恵：杯・高杯 土師：高杯・壺									1				16
"28号	6C中	5.72×5.19	南西壁竈	須恵：杯 土師：高杯								1	3				16
"41号	6C中	6.20×5.52	北壁竈	須恵：高杯・壺									1				16
福岡県鞍手町向山3号	6C中	3.80×3.60	西壁竈	須恵：杯・高杯 土師：杯・高杯・埴								1	140				—
福岡県太宰府町裏の田21号	6C後	4.8×4.6	西壁竈	須恵：杯 土師：杯・高杯・甌											1	紡錘車3	17
"6号	不明	3.3×3.3	北壁竈	土師：高杯											1	耳環1	17

Tab. 5 九州における滑石製模造品出土の住居跡一覧表



同時期の滑石製模造品を出土する例として、筑紫野市野黒坂遺跡を見てみたい。6世紀中葉の住居跡21軒が発見されたうち、土製・滑石製模造品を有するものが8軒、うち滑石製品を有するもの3軒のみである。このような総ての住居が祭祀用品を有するのではない、という状況に対して、佐田茂氏の(註18)「一住居址内における祭祀用品は非常に少な」く、附近から土製模造品が出土していることを考え合わせて、「この集落全体の祭祀が集落内のある地域で行なわれていたことも考えられ、それに対して各住居址が各々対応していたとみれないこともない。」と分析している。これに対して、小田富士雄氏(註19)は、「住居付属祭祀に単婚家族を単位とする各住宅における祭祀行為と、住居が集合して形成された集落の行事として行われる祭祀が考えられる。」と概説し、野黒坂遺跡における祭祀形態を「集落内あるいは家庭内において祭祀が行なわれた」としながら、古墳祭祀に比べて発見される量の少ないことについても伝統の古い祭祀遺物を有することも考慮して、「六世紀代には日常の家庭祭祀の状態まで考えてよいのではないか」と考える。

向山遺跡では3号住居跡と同時期の住居跡は発見されておらず、集落の中心は未調査の台地中央部にあると思われる。3号住居跡は、須恵器杯・土師器碗を含めて、身の数量から推測して16セットの所有が考えられる。同時期の前記野黒坂34号住居跡からは11セットの須恵器・土師器杯の所有がみられ、一軒の住居における所有量としてはいずれも異常に多い。しかし、野黒坂例では滑石製品を伴わず、1軒の住居跡において須恵器食器類の多量出土が以下の論文に述べるように即家父長的性格を示すものとも断定し難い。向山3号住居の場合、滑石製白玉の所有をも考慮するに、高橋一夫氏(註20)の「石製模造品を出土する住居址のあり方、また出土遺物などから見て、石製模造品出土の住居址は、まさにこの家父長制的世帯共同体の家父長の住居でないかと推察する」という見方もできよう。しかし、向山3号住居跡の規模は小型に属するものであり、単純に「家父長」の家とするには早計であろう。少なくとも、須恵器食器の多いことなどから、ここでは集団祭祀が行なわれ、その祭祀用品を集中管理するという何らかの形態が存在したということは言えよう。

1号住居跡において、床面の残留土器類とともに覆土中の土器類の存在については前に述べたとうりである。即ち、焼失した堅穴のある程度時間を経た埋没途中において、南半に礫群が集中し、その中に甕・壺・高杯等が完形に近い状態で検出されている。礫群及び周辺には火を受けた状態はみられない。特に複合口縁の壺は端麗な器形を呈し、「墳墓祭祀に使用したものを一括して処分した状況」(註21)と考える北九州市高島遺跡の出土例に類似し、祭祀的な性格が感じられる。それらが、埋没中途においてその窪みを利用して何らかの祭祀を行なった痕跡と仮定するならば、その様相は佐賀県伊勢山遺跡の床面に土盛りをして祭祀場としている例を彷彿とさせる。伊勢山例では基山を対象とする祭祀かとも考えられている。向山遺跡から望まれる山としては六ヶ岳があるが、いわゆる神南備型の山容ではない。山岳に対する祭祀でな

いにせよ、今後の類例の増加を待って検討すべき問題であろう。(中間研志・稲富裕和)

### ● 集落の構造

住居跡7軒及び掘立柱建物1棟を含む住居群をのせる台地は、古墳群丘陵より西へ張り出した台地であり、今回調査区域は南北100m、東西70mのその台地の北端約 $\frac{1}{4}$ のみである。よって台地中心部を含む南側の大半は調査しておらず、今回検出された各期の住居跡が各々構成したであろう集落の全容を知り得ない。しかし、残る台地の面積・形状等によりある程度の想定は可能であろう。

概略4,000 $m^2$ の台地の上に3期にわたって集落を構成したとすると、その中心部の密集度如何ではあるが、調査部分からみて各10軒内外の存在が推定される。1号・4号の弥生後期の住居跡は約20m離れており、しかも、両者床面は3mの比高差を測り、斜面の高位部から台地最縁辺部まで位置することから、同時設営とするならば、その配置はかなり余裕を持って広い範囲に集落を営んだと想像される。これに対して、2号・7号住居跡間は約5m強離れるのみで、かなり近い。古墳時代初期においてはやや密集して集落を形成するのかもしれない。集落構造を確認することはできないが、その生産基盤となる台地下沖積地の農耕を考えると、当台地面積は、「日本古代の水稲農耕社会の経営の最小の基本単位となる集落の面積」(註22)として「単位集団」のモデルとしての比恵遺跡、岡山県沼遺跡の面積1,000 $m^2$ 、2,700 $m^2$ と比較して恐らく同程度となり、「根拠地的な土塁環濠集落」の大規模集落の類ではなく、前記「単位集団」程度の構造を有するものと考えられる。

古墳群をのせる丘陵上に、袋状堅穴・土塚墓等の弥生中期初頭の遺構が存在する。まず、袋状堅穴の分布状態をみると、大別して3群に分けられる。即ち、2号の第1群と、4～7号の第2群、1・3号の第3群である。うち第2群と第3群は近接して同一群とすることも可能であろう。各群の構成をみると、第1群が小型で浅いものが1基、第2群が小型1基と大型3基、第3群が小型1基と大型1基で、各群は1基の小型のもの含むことがわかる。第1群はすぐ西側が土採りで削除されており、他に大型のものが数基あった可能性は充分にある。このように大小の異なるタイプのものが各グループをなすということは、両者間の中に貯蔵するもの等の区別があったとも想像させる。崩壊頻度の高い構造である事を考えるとき、勿論、これら3群或いは群内の個々が、全く同時に営まれたとは考え難く、地盤の弱い地域ではせいぞい四半年程度が使用可能期間であって、この3群が各々の異なる最小単位の生活共同体による構築であるとは言い得ない。この時期(弥生中期初頭)の住居跡は発見されていないが、この袋状堅穴群からそう遠くない同一丘陵上に位置したものと推測される。そして、検出された同時期の土塚墓3基(+4基か?)と袋状堅穴群とは、区域を画する溝等の施設は無いが、区域を別にしており、住居地区が調査範囲外にあるとすれば、集落における住居地区・貯蔵地区・墓地の3者の地区分けが行なわれていたということになる。(中間研志)

## 2 古 墳 群

## a 石室の構造

向山1～6号墳石室はその形態・規模によって4類に分けられよう。即ち、大型でおそらく両袖式横穴式石室となる4号墳，中型で両袖式単室横穴式石室の1・2・3号墳，無袖式横穴式石室の5号墳，特小型で横穴式の小石室或いは竪穴式石室様の石棺と推定される6号墳，に4大別される。

横穴式石室の構築において企画性が考えられることは，尾崎喜左雄氏を始め，かなりの先学の論争となるところである。九州においても，近年柳沢一男氏によって，福岡市西区相原古墳群（註23），同片江古墳群（註24）等において方眼を用いての石室平面形の操作が試みられ，更に，初期横穴式石室の使用尺度についても検討されている。（註25）以上の結果から，氏は6C後半以降の群集墳横穴式石室においては，高麗尺35cm使用を認め，それに先行する尺度として24～26cmを1尺とする結果を得ている。また，片江7号墳においては，唐尺（30cm）の使

		1号墳	2号墳	3号墳	4号墳	5号墳	6号墳	
主軸の方位		N86°W	N88°E	N66°E	N83°E	N6°E	N1°W	
石室の全長		3.69	4.25	3.17(+ $\alpha$ )	4.05(+ $\alpha$ )	1.87(+ $\alpha$ )	1.22(+ $\alpha$ )	
玄 室	長 さ	右側	2.45	2.78	2.47	3.34	1.87(+ $\alpha$ )	1.00(+ $\alpha$ )
		中央	2.65	2.78	2.58	3.37(+ $\alpha$ )	1.87(+ $\alpha$ )	1.15(+ $\alpha$ )
		左側	2.66	2.56	2.46(+ $\alpha$ )	不明	1.80(+ $\alpha$ )	1.15(+ $\alpha$ )
巾	奥壁側	1.58	1.64	1.52	2.53(+ $\alpha$ )	1.06	0.58	
	中央	1.83	1.96	1.65	不明	1.21	0.58	
	玄門側	1.45	1.60	約0.75	不明	0.94	約0.5	
敷石		有	有	有	有	有	有	
玄門間巾		0.67	0.68	不明	不明	不明	不明	
羨道	長さ	0.60	1.11	不明	不明	不明	不明	
	巾	1.50	1.21～1.35	不明	不明	不明	不明	
墓道長さ		1.5+ $\alpha$	1.5+ $\alpha$	不明	不明	不明	不明	
墓 壇	平面形	長方形	略長方形	長方形	長方形	隅丸長方形	楕円形	
	長さ	4.30	4.95	3.95(+ $\alpha$ )	4.63(+ $\alpha$ )	2.40(+ $\alpha$ )	1.84(+ $\alpha$ )	
巾	奥壁側	2.58	3.1	2.97	3.59	1.94	1.2	
	羨道側	3.15	3.15	不明	不明	不明	約1.34	

Tab. 6 各古墳石室法量一覧表（単位 m）

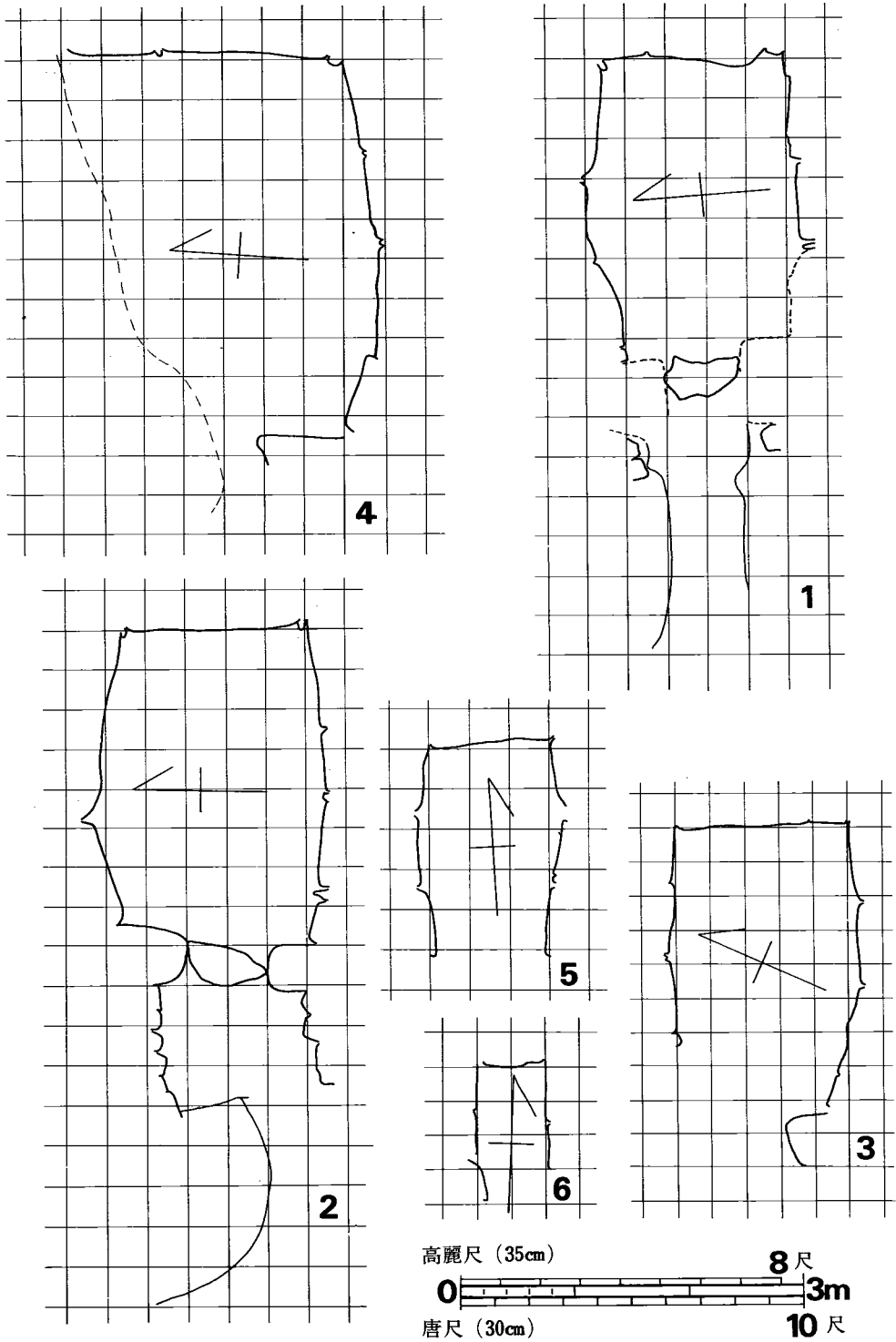


Fig. 107 向山1~6号墳石室平面形の方眼による操作結果 (縮尺 1/60)

用の可能性もほめかす。以上の観測は非常に興味深いものであり、その成果の集積作業によって今後その成否を論ずべきものであり、また、それが略定説化する時点において石室の年代を決定する際の強い要因ともなろう。ここでは、氏の研究成果に基き、同方法によって集積作業の一環と考えて、方眼操作を行なってみた。(Fig. 107)

1号墳石室においては、高麗尺で玄室長の右袖間が7尺、左袖までが7.5尺、玄門間が2尺玄室幅玄間側が4尺、奥壁側が4.5尺、墓道幅が2尺となる。

2号墳石室では、高麗尺で、石室全長12尺、玄室長8尺(右側)、玄門幅2尺、羨道部長3尺となるが、玄室幅等は中途の数字になる。

3号墳石室では、唐尺(30cm)で、玄室幅5尺、玄室長8.5尺となり、高麗尺を用いるといづれもうまくいかない。

4号墳石室では、高麗尺で、玄室幅7尺、胴張りの最大部では、9尺に近い数字を示すと推定される。玄室長は9.5尺となる。

5号墳石室では、高麗尺で玄室幅3尺、現存玄室長約5尺、閉塞部を除く玄室長を測り操作すると、約4尺となる。

6号墳石室においては、唐尺で幅2尺ちょうどを測り、現存長は、約4尺に近い。

以上の操作結果によってわかることは、もし尺度を用いているとすれば、後期群集墳において認められた高麗尺(1尺=35cm)の使用が、少なくとも、3号・6号墳石室において無理と考えられ、唐尺(1尺=30cm)ならば何とか数ヶ所の測定部分では合致するということである。このような操作結果は、前述の片江7号墳にも認められ、更に八隈古墳群(註26)においては8基の横穴式石室のうち、3・5・8号の3基だけが、唐尺を用いていると考えられている。特に5号墳においては副葬須恵器等との関係で、高麗尺→唐尺という変遷過程が成立するとすれば矛盾する点もあり、問題が残る。

当向山古墳群の操作結果は、石室の残りの悪いことも重なって、決定的に各々の尺度が合致すると断定し難い点もある。また、石室構造において、袖を有する横穴式石室である3号墳石室と、その衰退形態と考えられる袖を有さない所謂「風の字型」の5号墳石室との間に、前者は唐尺、後者は高麗尺という矛盾したような現象もみられる。操作段階での作業が安易にすぎたものか、構造上の変遷という点で異なる解釈を与えねばならないのか、諸学の御見解を仰ぎたい。

(中間研志)

## b 各古墳の年代等

**向山3号墳** 遺物は、盗掘によりほとんどなく、本墳の築造時期を判断する資料が全くないが、石室の構築法などからみて、4号、1号、2号に続くものと考えられ、7C前半頃と思われる。

**向山4号墳** 本墳は、東より西に下る舌状尾根線の突端に位置する古墳で、向山古墳群中、一番低い位置に築造されている。玄室は半壊され、また、盗掘にあっており、遺物は原数ではなく、もっと多数あったものと推定される。遺体は、右側壁よりに、頭を袖の方へ、足を奥壁側に向けている。この遺体に沿って、直刀1振と、刀子1振が検出した。装身具は、全て奥壁側で検出しており、追葬があったものと思われる。出土遺物は、提瓶2個、時期を示すが、他の遺物は幅があり、本墳築造時期あるいは追葬時期を明確にするものではない。提瓶は、第Ⅲ-B様式のものである。埋れ木製切子玉は、王塚古墳、日拝塚古墳からも出土している。ガラス小玉は、ほとんど紺色であり、緑・黄色のものは少ない。鹿角製鏃は、7C代横穴等に例がみられる。以上の遺物と石室の構築からみて、6C後半に築造され、ほとんど時期差なく追葬されたものと推定される。遺体の状態から、追葬時には、2体か、あるいは3体の同時埋葬か、または、時を経ずに、2度、3度と追葬されたことが考えられる。(宇野慎敏)

**向山5号墳** 本墳は石室の下半部を残すだけで墳丘などすでになく、又遺物もガラス小玉1個のみであるが、内部主体が横穴式石室でも無袖式の小横穴式石室である点に特徴があり無袖式小横穴式石室について少々ふれてみたい。

横穴式石室は5C代の初期横穴式石室より6C代に多く見られる両袖式の横穴式石室や複室構造を有する横穴式石室などいずれも大形から小形化して行く傾向にあり、両袖式・片袖式より無袖式に移行していく。無袖式には玄室の長い大形と、短かい小形があるようである。小横穴式石室は横穴式石室が小形化したもので、無袖式は「風の字型石室」とも呼ばれている。同時期には両袖式の小横穴式石室も存在しているが、両袖式も玄室が小さく、中には玄室幅が主軸長さより長い石室もあり全体的に小形化している。これらは7C代に盛行する。次の6号墳の項で述べる横穴式小石室(後述)は無袖式のもので小規模となり主軸長さに対して幅が狭く、袖石はなく一方向の短側壁が羨門となり、羨門前には墓道が附く。又横穴式石室系小石室(後述)は横穴式小石室の羨門がなくなり、竪穴式石室的な小石室であり、これには超小型の石室もある。横穴式小石室、横穴式石室系小石室は7C後半から8Cにかけて盛行したと思われる。

このように横穴式石室も時間により変化して行くが、当5号墳は無袖式の小横穴式石室であり、それは向山古墳群を見渡すと4号墳が6C後半で両袖式の横穴式石室であり、次に4号墳より谷奥で立地条件の悪いやや小形化した3号墳の両袖式の横穴式石室が出現する。この時期は6C末から7C初頭にかけてであろう。次に3号墳よりさらに谷奥の斜面に無袖式の小横穴式石室が築造される。この無袖式の小横穴式石室の検出は、鞍手町の西川流域では初めてであり遠賀川下流域でも鞍手郡若宮町と宮田町にまたがる汐井掛古墳群(註27)にて2基みられるだけであり、この地方では今日まであまり見られない石室形態である。汐井掛6号墳と同8号墳の無袖式の小横穴式石室から金環と向山5号墳と同じようなガラス小玉が出土したのみで時期の決定をみないが、古墳群の在り方や、全体の石室形態の多様性、さらに各古墳の出土遺物

などからして6号墳と8号墳は7C代に属すると思われる。

当5号墳は石室形態など1号・2号・3号墳の両袖式の横穴式石室と、6号墳の横穴式石室系小石室の間に位置しているものであり、当古墳の場合築成時期は7Cでも中葉頃と思われる。なお、この無袖式の横穴式石室や小横穴式石室は福岡県内でも報告例が少なく、福岡平野方面では7C末から8C初めにかけても両袖式小横穴式石室がほとんどであり、福岡市西区油山山麓の倉瀬戸古墳群(註28)や駄ヶ原古墳群(註28)同区今宿の相原古墳群(註23)さらに筑紫郡那珂川町中原の観音山古墳群(註29)など終末期の代表的群集墳内には、あまり見られないようであるが観音山古墳群中原支群では3基存在するようである。観音山古墳群中の3基の時期は7C後半から8C初頭にかけてのものである。

**向山6号墳** 5号墳の項で少しふれたように、石室の形態変化からして北九州地方にいくつみられる終末期の小横穴式石室と共に盛行する横穴式小石室か横穴式石室系小石室と思われる。本文では一応北方向の現存している短側壁を奥壁としたが、南方向の短側壁がくずれ落ち、意識的に残して調査を実施したものの横穴式小石室か横穴式石室系小石室か判断が下せない。そこでここでは当6号墳の内部主体と推定される横穴式小石室と横穴式石室系小石室について述べてみたい。

横穴式小石室についてであるが、墳丘は築造時の規模、盛土や墳丘裾部など不明確な点が多く石室掘り方の土を石室構造後に盛土にする程度のものである。石室は小形の横穴式石室であるが竪穴式石室的性格を有している。玄門部をみると高さ、幅ともに非常に小さく又、墓道についても形式的に付属している程度で、通有の横穴式石室のもつ機能を果たしたかどうか疑問であり、石室構築後に玄門を通して死体を埋葬する事が出来るかどうかを考えると、当6号墳のくずれ落ちている南方向の短側壁の空間は、敷石より残存長側壁までの高さ60cm、両長側壁間の幅は敷石上で50cmを測り、羨門からの埋葬も可能であるが、石室の長さが1.10mしかなく大変に小さいので、あるいは天井部からの埋葬も考えられる。掘り方内の埋め土や腰石下の根石、裏込め石の存在などは横穴式石室の構築法のそのままの続きである。このように石室自体はあくまでも横穴式石室の構築方法と共通するが、とにかく小石室内には天井部からしか埋葬出来ないように玄門が小さい石室もあり又、追葬は不可能であろう。以上のように墓道と玄門が付属する小形の横穴式石室を便宜上横穴式小石室としたい。

横穴式石室系小石室とは、上述の横穴式小石室の墓道、玄門がなくなり四側壁ともに玄門の機能を果さず箱式石棺と同様のなものであるが、石室の構築方法はあくまでも横穴式石室のそれと共通するものである。これに対して山中英彦氏の「石棺系石室」がある。(註30)「石棺系石室」は『箱式石棺を母胎に竪穴式石室の技法を導入した構造』又『九州の伝統的墓制たる箱式石棺を母胎としその系譜を引く事は構築法から認められる』としさらに『中原古墳群にみる如く、7C末まで末期的な石棺系石室が残ることを注意しておきたい』とされている。氏の

石棺系石室の集成にみる6基の中原古墳(註29)又2基の津古内畑石棺(註31)などは筆者の言う竪穴式石室の範疇には入らないもので(註32),ここで言う横穴式石室系小石室(註33)と思われる,古墳群中における各古墳の在り方,立地,位置など違い,又おのずと性格も違っているとされる。

山中氏の言われる石棺系石室に対して,終末期の石棺をあくまで構築方法が横穴式石室の特質を備え共通し退化形態であることより,横穴式石室系小石室と仮称するが,これには大小2つのタイプがある。小さな石室は長さ1m未満が多く,観音山古墳群中原支群16・30号墳(註29),津古内畑遺跡石棺群(註31),八隈9号古墳(註26)があり,近辺では汐井掛古墳群中に1基存在する。大きな石室は長さ1.5m前後で,中原古墳群や汐井掛古墳群にみられる。

以上当6号墳石室に関する幾つかの類例を挙げたが,種々の点より,玄門のある横穴式小石室或いは横穴式石室系小石室(小タイプ)のいずれかと推定されるが,どちらかというとならぬ6号石室の場合は比較的近距离に所在する汐井掛古墳群の横穴式小石室に類似し,又側壁の積み方高さ,腰石下の根石など横穴式石室系小石室よりもより小横穴式石室に近似していることから横穴式小石室と推定する。時期については5号墳より新しいとされる。なお,若宮町・宮田町にかけての汐井掛古墳群については報告会資料のみの発表であるが,現在報告書作成中であり,この種の石室についてはその中において詳述したい。(上野精志)

### c 群の構造 (Fig. 2 参照で○番号は同遺跡名)

当古墳群は今回調査分6基より構成されているとみてよいようであり,周辺分布調査では他に見当たらない。立地は,4号墳は長谷川に面した丘陵縁辺にあり,1~3号は丘陵上高位置に在り略一直線に並列する。更に丘陵に入り込んだ小さい谷の斜面上方高位置に5・6号墳が並ぶ。築造順序は,6C後半に4号墳,2号墳→1号墳→3号墳,そして,5号,6号となる。これは,石室形態の変化より導かれるもので,丘陵先端より谷奥へと占地を変えている。

内部主体はどれも単室横穴式石室であり,築造順に大→小へと変化している。無袖式小横穴式石室の5号墳,横穴式石室系小石室の6号墳など,鞍手地方で類例の少ないものが含まれている。鞍手町内,西川流域に於ける古い古墳は,⑯鏝塚古墳群(5基)(註35)があり,うち4号墳は小田富士雄氏を中心として調査されている。竪穴系横口式石室であり,円筒埴輪片が採集されている。盟主的な1号墳(鏝塚)は未調査のため詳細は不明であるが,空濠を有する二段築成の径38mの円墳で,幅6mの周溝と幅4mの外堤がつく。内部主体は竪穴式石室か4号墳と同じ竪穴系横口式石室と推定される。鏝塚古墳群は5C代の所産と思われる。立地は新延段丘先端近くにあり,同丘陵奥には⑭火の尾(新町)古墳群があり,6C後半のものである。鏝塚古墳群北方独立丘陵上には小形の前方後円墳1基を含む⑬京場山古墳群(7基)更にその北方には神崎古墳群(2基)。新町古墳群の南方の山奥方には複室構造の6C後半横穴式



石室の㊦新延大塚古墳。その南方には銀冠出土により命名された㊧銀冠塚（八尋）古墳群と八尋旭古墳群があり、2号墳は竪穴式石室と考えられているが小型であり遺存が悪いため詳細は不明であり、1号墳の銀冠塚は複室で7C前半の所産である。八尋旭古墳群は共に複室構造の横穴式石室で6C後半である。右岸では山奥より長目崎古墳群（2基）、1号は複室、2号は単室で6C末の㊨薄井古墳群（3基）、そして㊩円覚寺古墳群と続く。西川と長谷川に挟まれた丘陵先端部には銀冠塚古墳群と相対する㊪長家古墳群（7基）があり、その南方の長谷川左岸に㊫高木古墳群（4基）があり、6C後半の複室3基・単室1基である。これと相対する長谷川右岸に㊬証拠山古墳群（3基）、その北方に㊭向山古墳群があり長家古墳群と相対する。更に西川右岸北方には㊮殿原古墳群（12基）があり、6C後半～7Cの単室横穴式石室を有する。

これらの古墳群の在り方に2つのタイプがある。即ち、同時期の同じような石室形態の古墳が群を形成する場合と、時期が違い、石室形態も少しずつ変化して異なる古墳群とがある。銀冠塚・向山両古墳群の場合は後者の代表的なものである。前者は殿原古墳群がそうである。西川とその支流の長谷川流域の狭い範囲の丘陵に多くの古墳群が在るが、中でも鑑塚1号墳、新延大塚古墳、銀冠塚古墳は5C、6C、7Cの代表的古墳であり、下流から上流へ、山奥へと立地が変化している。

長谷川流域には、左右両岸合わせて4つの古墳群が在り、これらは6C後半～7C前半が主と思われる。対応する丘陵上の高木古墳群では古墳と略同時期の住居跡が至近距離に検出されている。長谷川流域の地形や各古墳群の位置及びその内容等の関係を考え合わせると、これら古墳群とその丘陵下台地（段丘）上に推定される集落遺跡とはスムーズに結合する可能性は大と見るべきであろう。被葬者の性格については小範囲の地域を基盤にしているに止める。

（上野精志）

- 註 1) 杉原荘介他「登呂（本篇）」1954
- 2) 都出比呂志『家とムラ』「日本生活文化史」第1巻 1975  
都出比呂志『竪穴式住居の周堤と壁体』考古学研究86 1975
- 3) 柳田康雄「津古内畑遺跡第5次（遺構篇）」福岡県教育委員会 1974
- 4) 福岡県教育委員が1974年、九州縦貫自動車道建設に伴って調査した。「祖先のあしあと」筑紫野市所在遺跡の調査報告会資料 1974
- 5) 以上2例は、各々弥生前期末円形、弥生後期前半方形の竪穴式住居跡で、残る深さは90cm近くと深いのは事実であるが、都出氏の想定されるような周堤の痕跡も何ら検出されず、周壁溝も認められない。更にこの2例に限って観るに、いずれも丘陵上面に位置し、旧地形から想定して地形の高い部分の壁のみ深く斜面低部位では浅かったと考えられ、深い理由が氏の所論の如く周堤を盛った結果ではなく、立地による強風等の影響への配慮の結果及び、緩斜面における

造営においての高位部側の必然的な深さの結果と考えられよう。

- 6) 福岡県教育委員会が1975年九州縦貫自動車道建設に伴って調査した。「くらでのむかし その2」九州縦貫自動車道関係鞍手町所在遺跡の調査報告会資料 1975
- 7) 前掲書(4)
- 8) 酒井仁夫・武末純一他「福岡県八女市室岡所在遺跡群調査概報」福岡県教育委員会 1972
- 9) 前掲書(8) 酒井仁夫『道添遺跡』
- 10) 井上裕弘「山陽新幹線関係埋蔵文化財調査概報 50年度」福岡県教育委員会 1975
- 11) 馬田弘稔「栗田遺跡」 1975
- 12) 渡辺正気「筑紫郡春日町竹ヶ本遺跡調査報告」福岡県文化財調査報告書第22輯 1961
- 13) 金子裕の『古墳時代屋内祭祀の一考察』国史学第84号 1971
- 14) 野尻雄三「板付」 1976
- 15) 木下之治・紫元静雄「基山町伊勢山・鳥栖市永吉遺跡」 1970
- 16) 松岡史・前川威洋・副島邦弘『野黒坂遺跡』「福岡南バイパス関係埋蔵文化財調査報告書第1集」 1970
- 17) 1972年九州縦貫自動車道建設に伴って福岡県教育委員会が調査した。
- 18) 佐田茂『九州の祭祀遺跡』「九州考古学の諸問題」福岡県考古学研究会編 1975
- 19) 小田富士雄『九州』「神道考古学講座第2巻」 1972
- 20) 高橋一夫『石製模造品出土の住居址とその性格』考古学研究71 1971
- 21) 小田富士雄『高島遺跡』「古文化談叢第3集」 1976
- 22) 都出比呂志『家とムラ』「日本生活文化史」第1巻 1975
- 23) 柳沢一男「相原古墳群」福岡市埋蔵文化財調査報告書第28集 1974
- 24) 柳沢一男「片江古墳群」福岡市埋蔵文化財調査報告書第24集 1973
- 25) 柳沢一男『北部九州における初期横穴式石室の展開』「九州考古学の諸問題」 1975
- 26) 酒井仁夫「九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告Ⅶ」福岡県教育委員会 1976
- 27) 福岡県教育委員会が1975年、1976年にかけて九州縦貫自動車道建設に伴って調査した。「くらでのむかし その3」九州縦貫自動車道関係若宮町所在遺跡の調査報告会資料 1976
- 28) 小田富士雄・真野和夫他「倉瀬戸古墳群+ 駄ヶ原古墳群」倉瀬戸古墳群調査団 1973
- 29) 井上裕弘他「山陽新幹線関係埋蔵文化財調査概報47年度」福岡県教育委員会 1973
- 30) 山中英彦「東宮ノ尾古墳群」北九州市文化財調査報告書第14集 1974
- 31) 西谷正・柳田康雄・副島邦弘他「津古内畑遺跡」小郡町教育委員会 1970
- 32) 上野精志「七夕池遺跡群」志免町文化財調査報告書第1集 1974
- 33) 山中英彦氏以後、竪穴式石室を扱ったものに木下修他「山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告第2集」福岡県教育委員会 1976と小田雅文他「柿原野田遺跡」柿原野田遺跡調査団 1976がある。木下氏の『原1号古墳』は別として、小田氏の『野田東部7号古墳』の「石棺」がある。竪穴式石室が本来棺の被覆施設=槨であり、箱式石棺は棺である。「石棺系石室」は箱式

石棺の棺を基本にしており、それに対してここで云う横穴式石室系小石室は室を基本にしたものである。槨、棺、室、の三つの構造が存在しておりこれらは、各々の古墳の主体部の構造に特徴が表われていると思われる。今後、竪穴式石室、小田富士雄氏の石棺系竪穴式石室＝山中英彦氏の石棺系石室＝小田雅文氏の石棺、ここで仮称する横穴式石室系小石室＝西谷正・柳田康雄・副島邦弘氏の小形石棺＝酒井仁夫氏の小石室(石棺)は区別されるべきものと思われる。

34) 註26に同じ

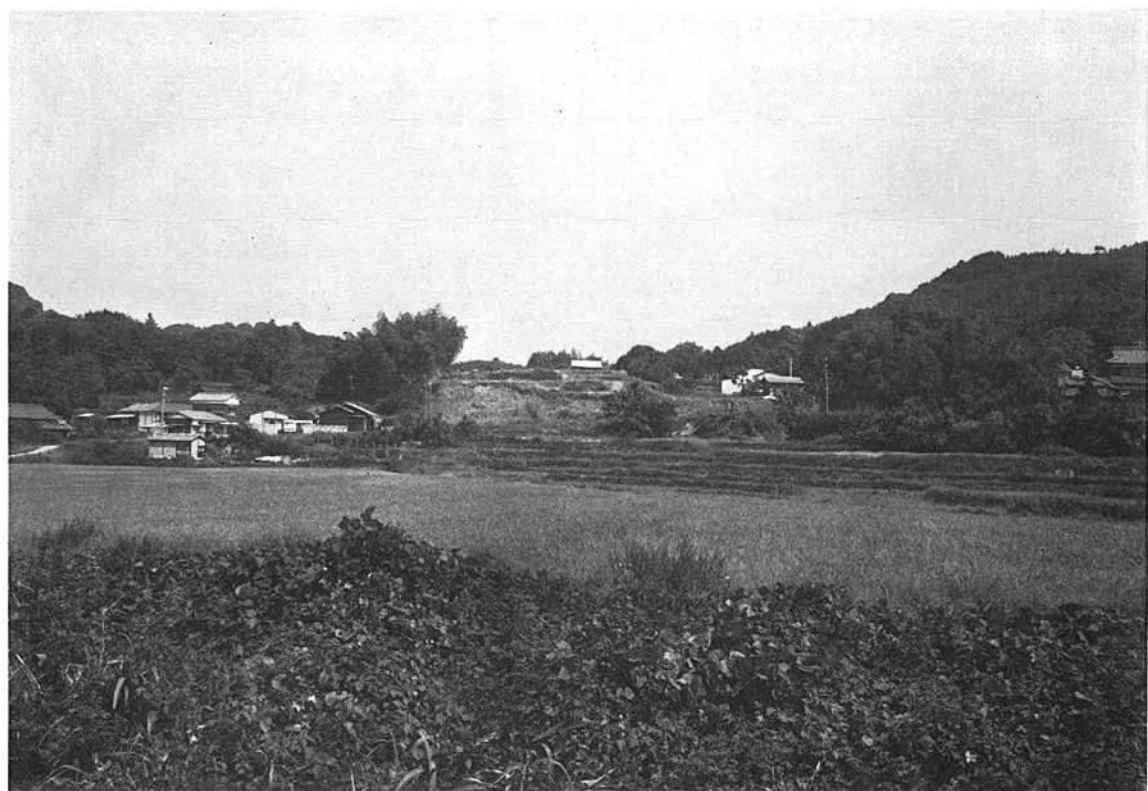
35) 鞍手町内の古墳については渡辺正気・小田富士雄・松岡史他「銀冠塚」1963, 上野精志「古門窯跡」1973, 鞍手町誌編集委員会「鞍手町誌上巻」1974を参照した。

# PLATES



(1) 向山遺跡及び周辺遺跡航空写真

1. 向山古墳群 2. 向山住居群 3. 高木B古墳群 4. 高木A古墳群 5. 証拠山古墳群 6. 石田堤遺跡 7. 音丸城跡



(1) 遺跡遠景(西より)



(2) 住居跡群全景(西より)



(1) 第1居住居跡(西より)



(2) 第1号住居跡(東より)



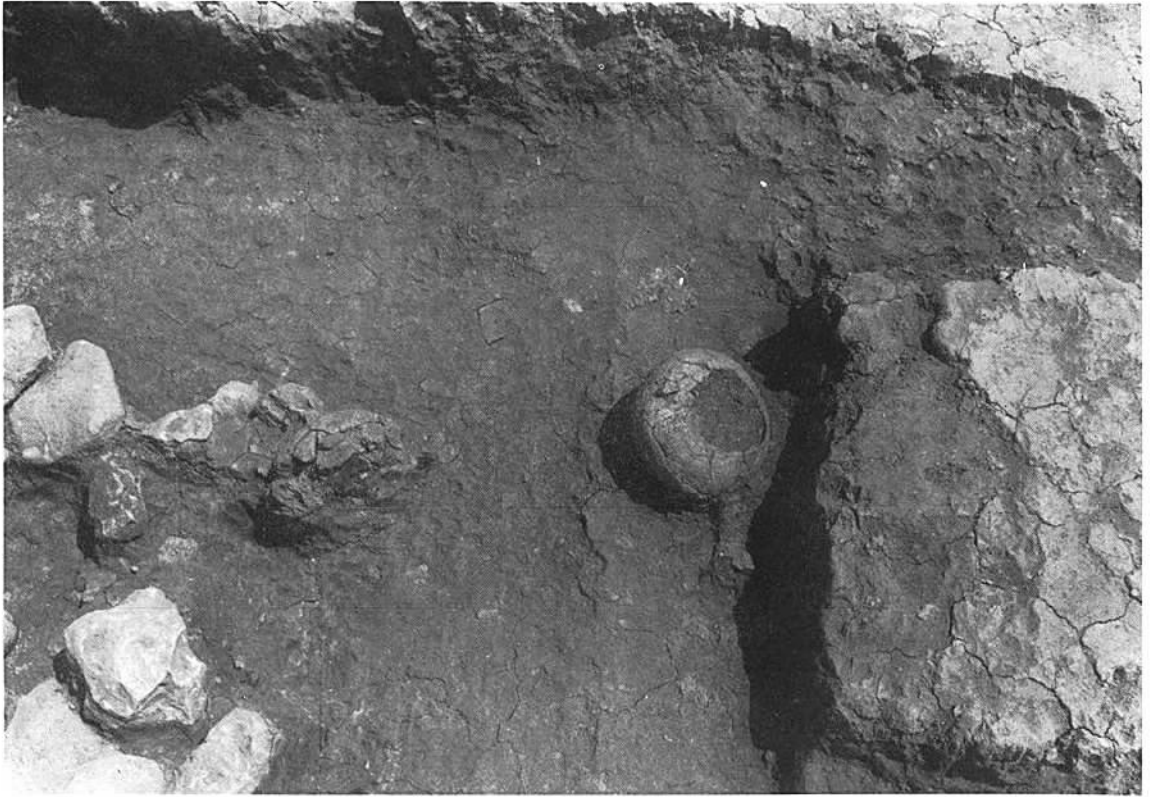


(1) 遺物出土状態(西より)



(2) 遺物出土状態(東より)

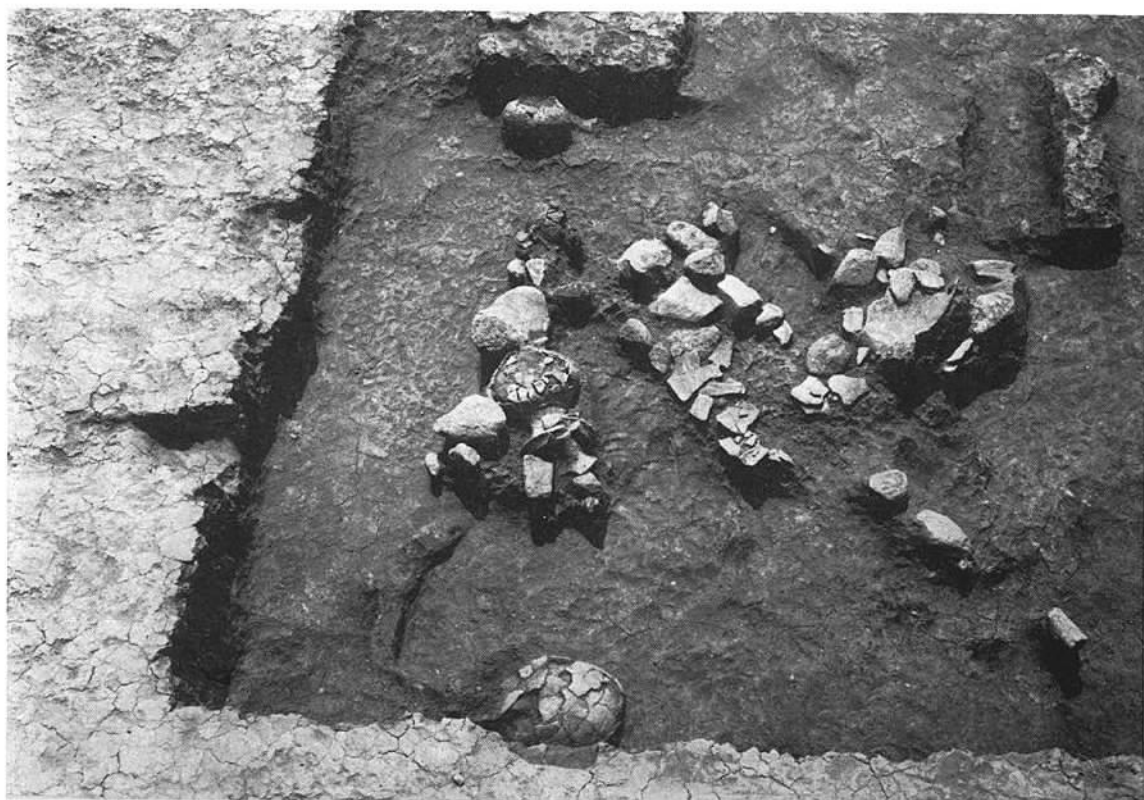




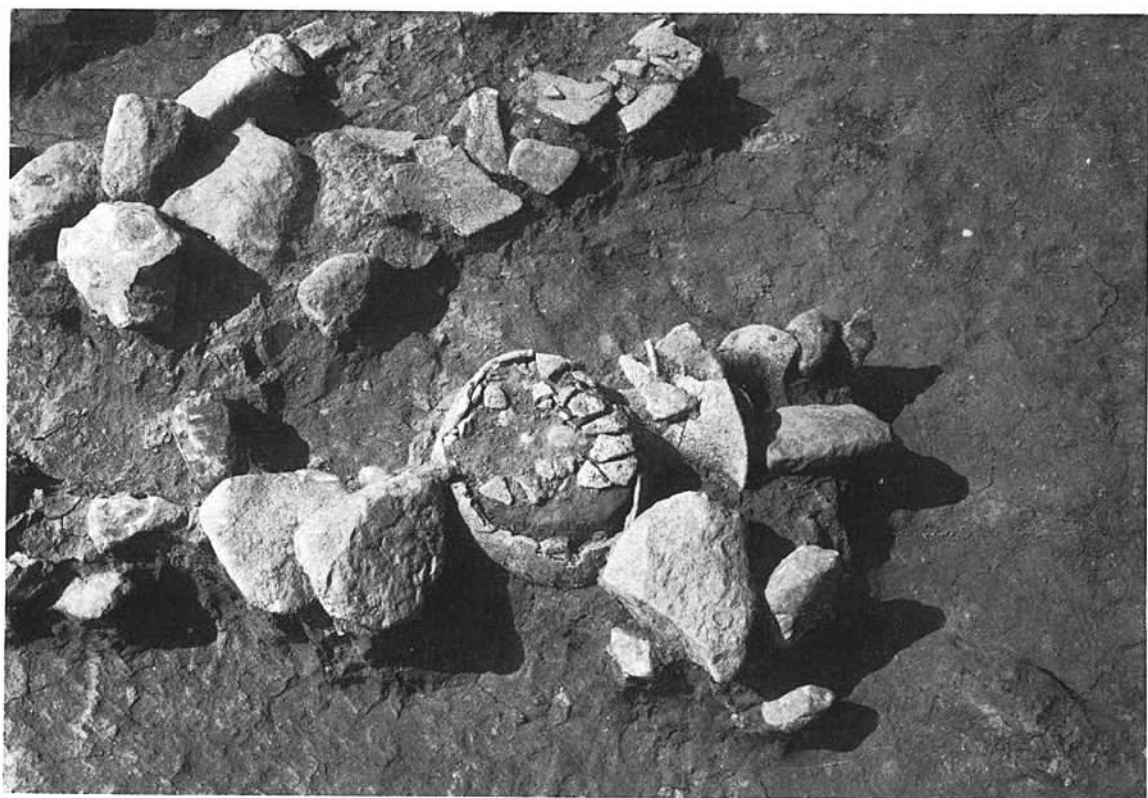
(1) 床面出土壺



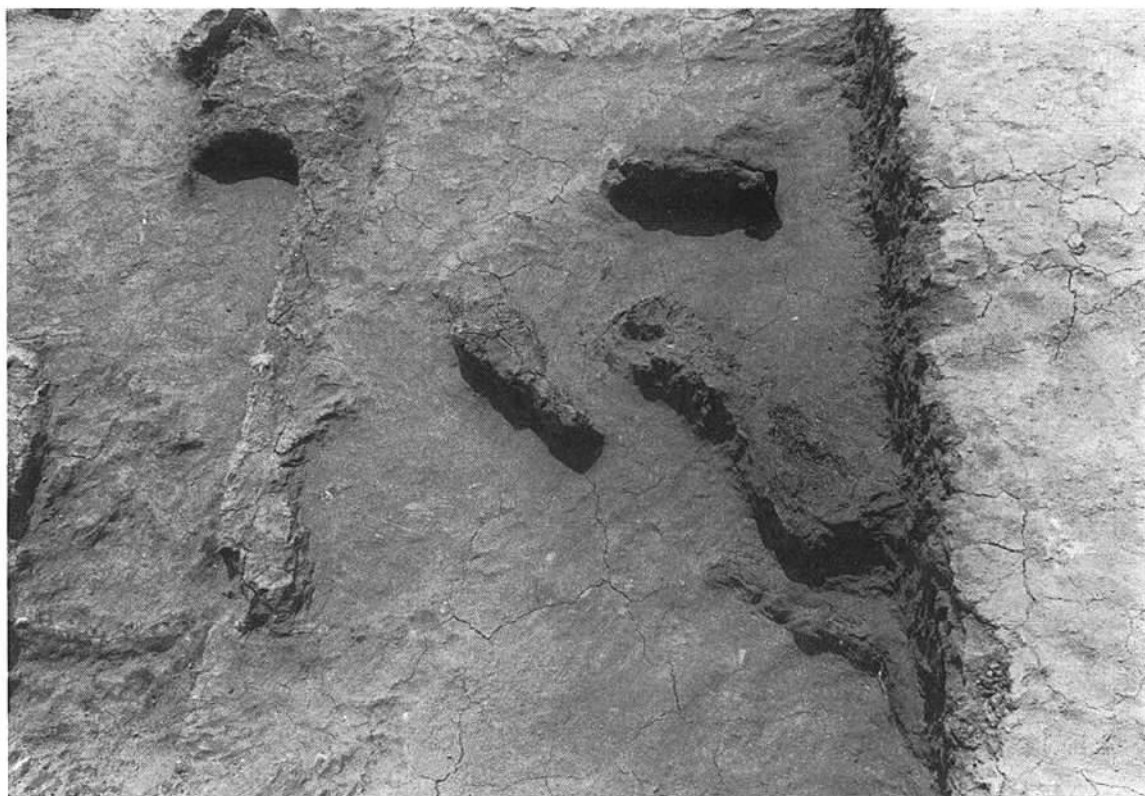
(2) 床面出土石包丁



(1) 東南半覆土中礫群・土器



(2) 覆土中出土壺



(1) 北側ベット状遺構附近炭化材



(2) 北壁際周溝(手前)と周壁溝





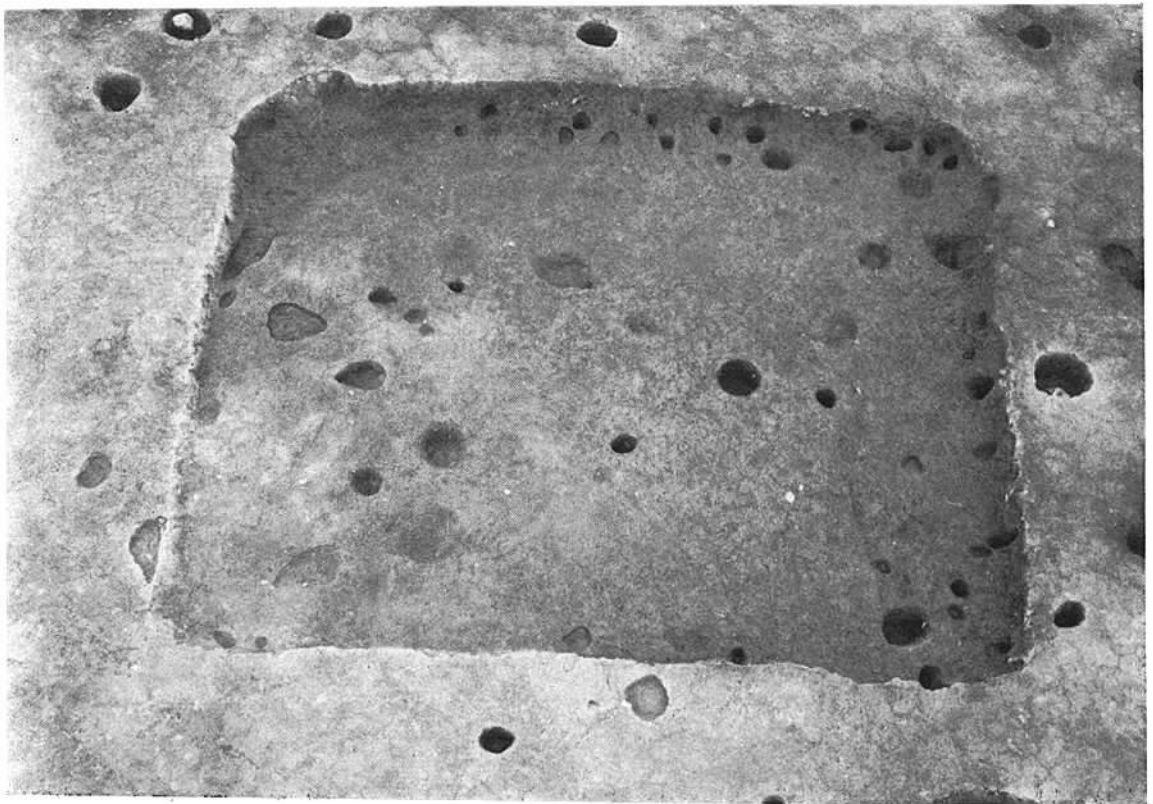
(1) 第2号, 第3号(手前)住居跡全景(北より)



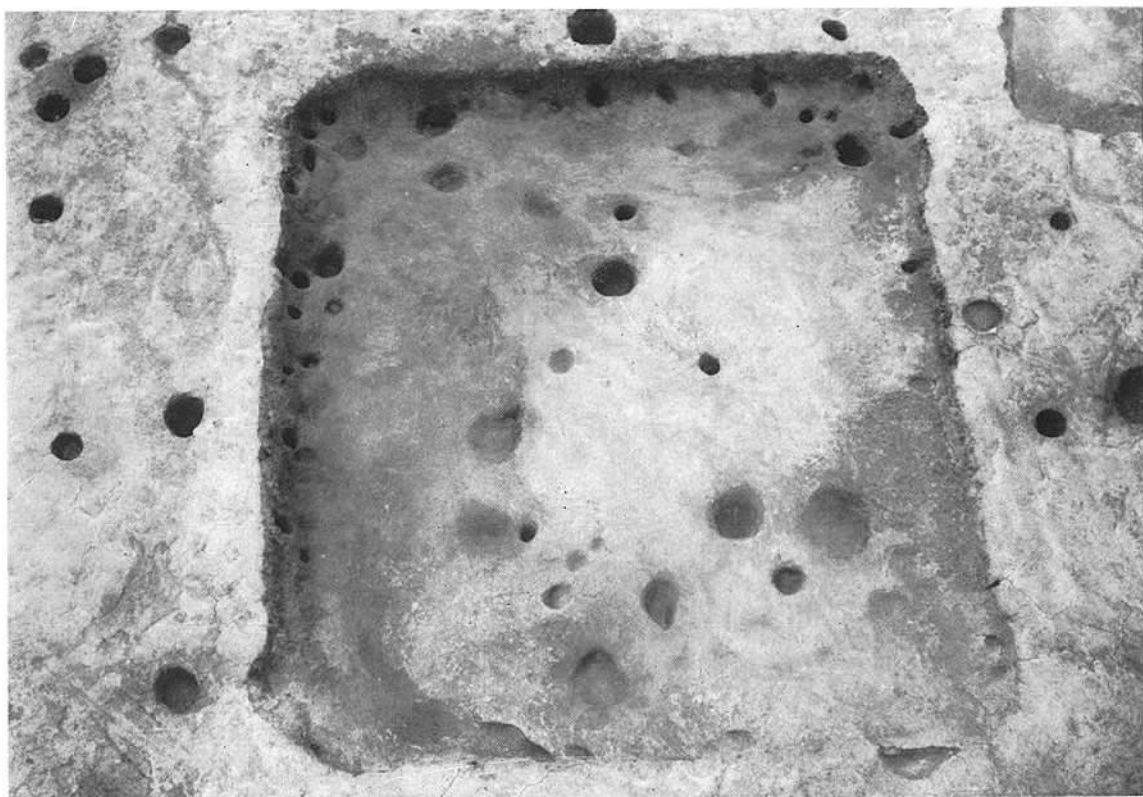
(2) 第2号住居跡 床面遺物出土状態(西より)



(1) 床面遺物出土状態 (南より)



(2) 完掘後 (北より)



(1) 完掘後(東より)

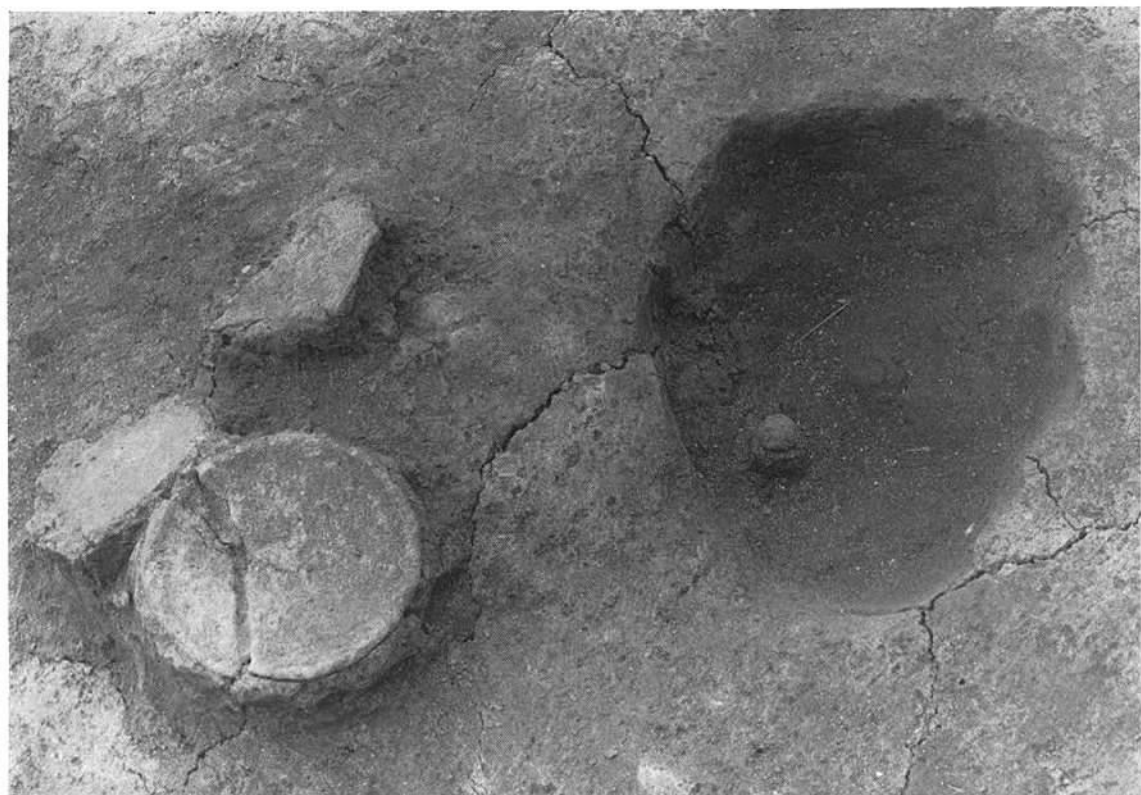


(2) 覆土中及び床面出土土器群

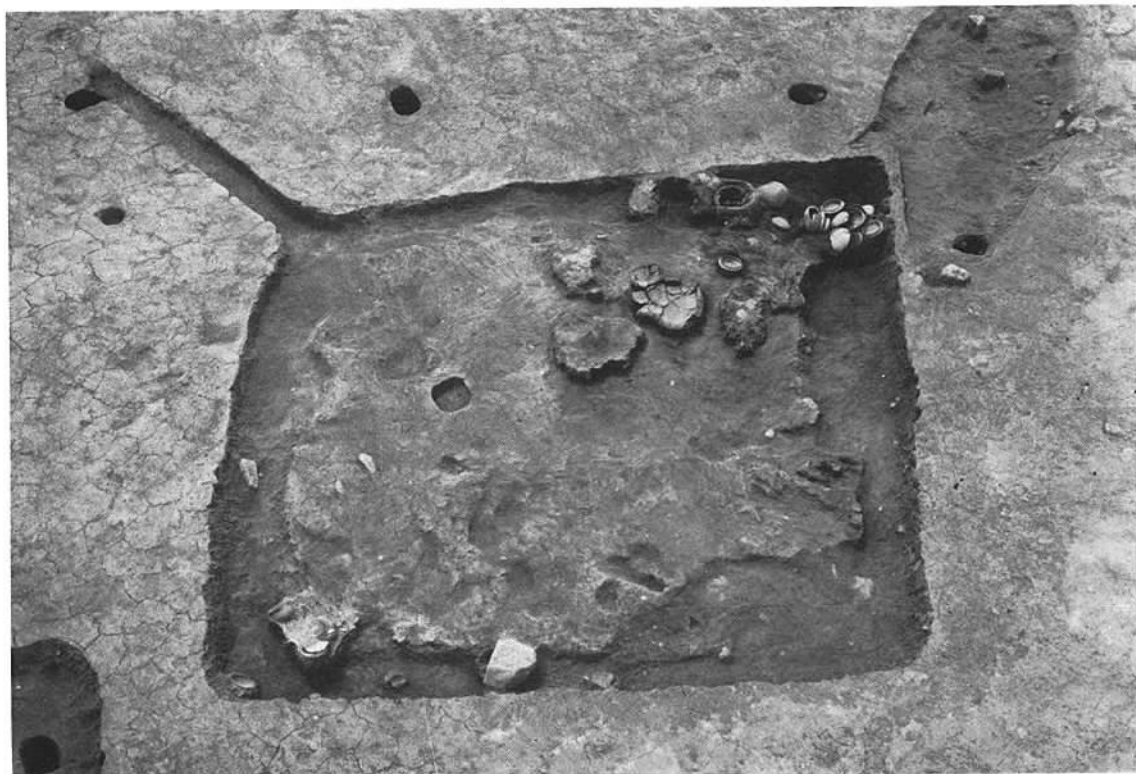




(1) 床面出土器台他出土状態



(2) 土製丸玉出土状態



(1) 全景・遺物出土状態(東より)



(2) 全景・遺物出土状態(北より)





(1) 完掘後全影(北より)



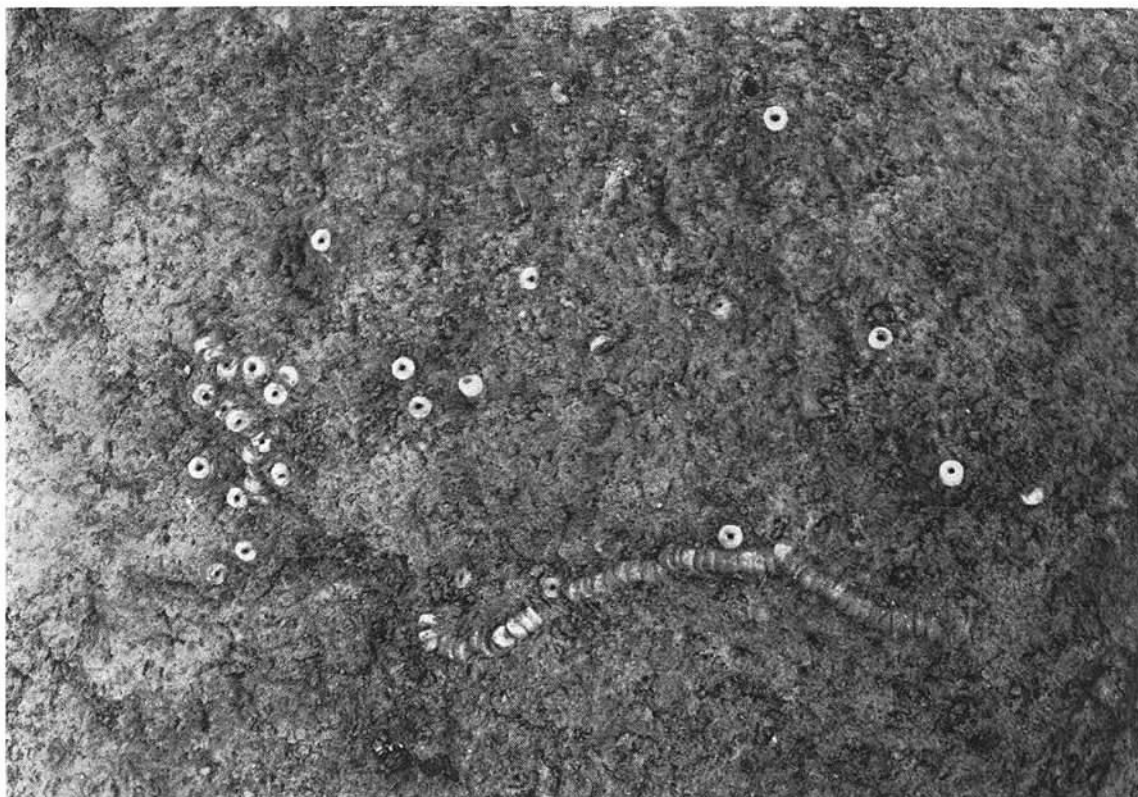
(2) カマド附近土器出土状態(南より)



(1) カマド附近土器出土状態 (北より)



(2) 東南隅土器出土状態 (南より)



(1) 西南隅白玉出土状態

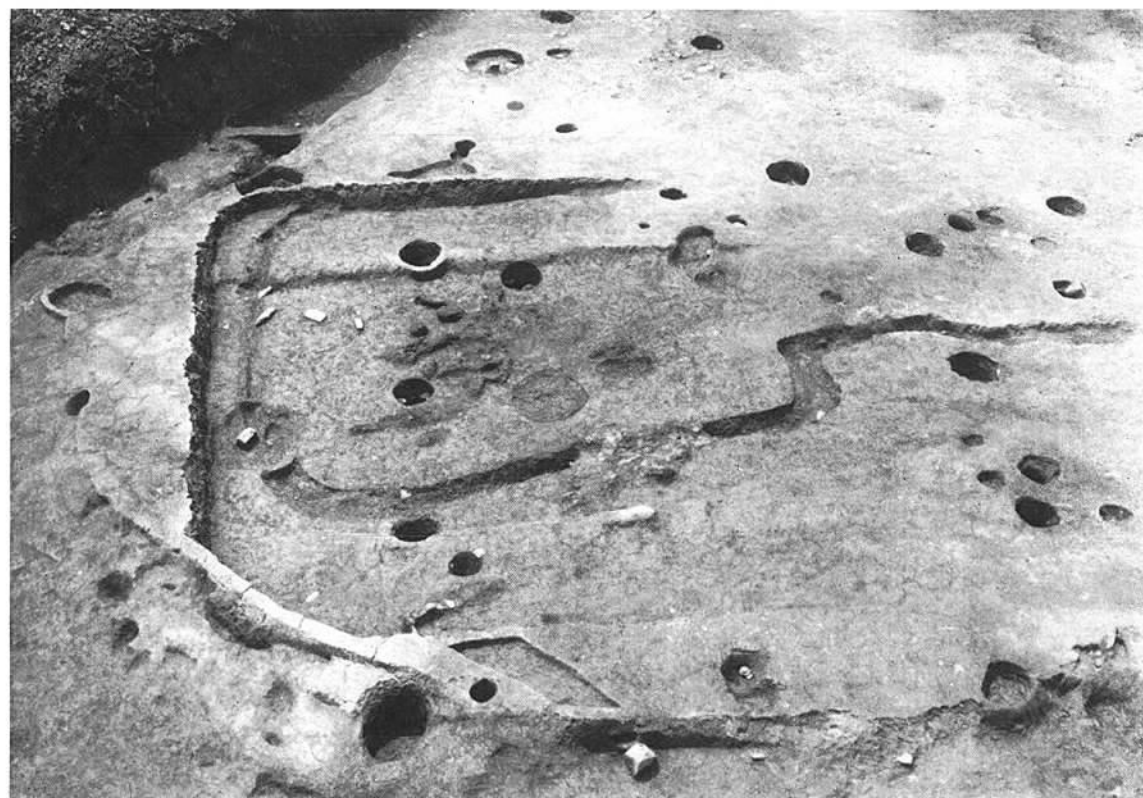


(2) 4号住居跡から2・3・7号住居跡を望む(南より)





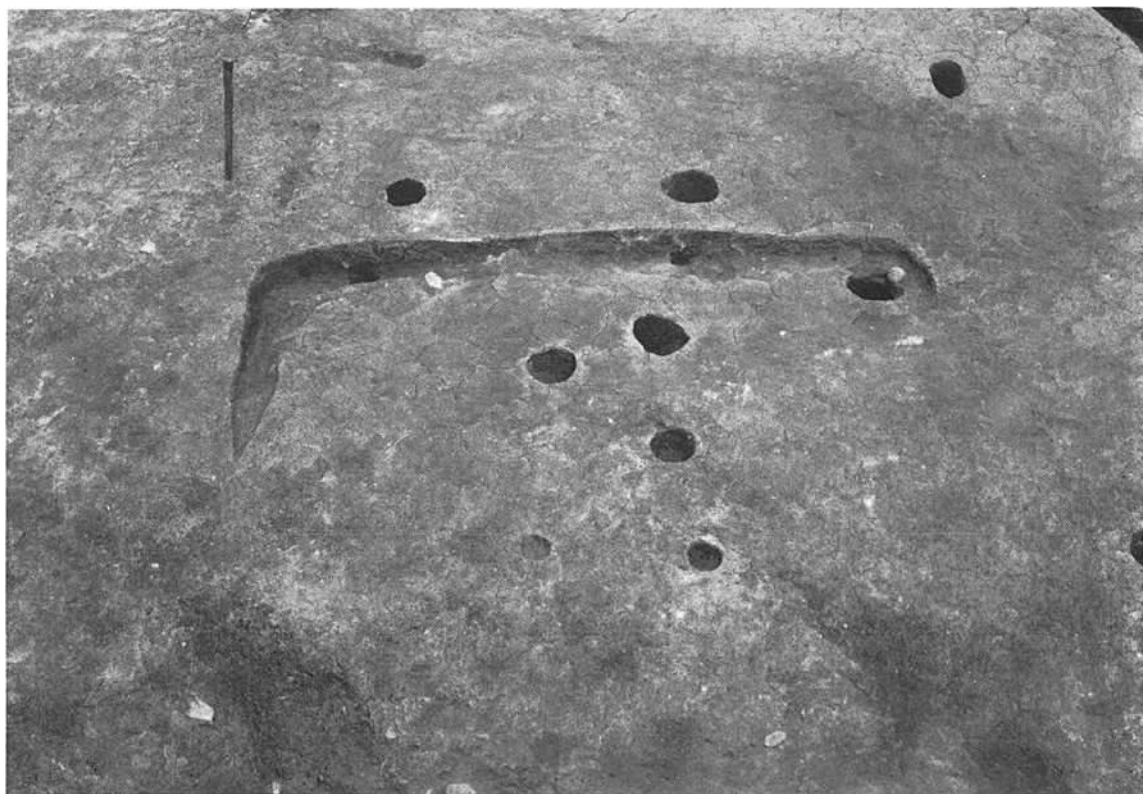
(1) 全 景 (西より)



(2) 全 景 (北より)



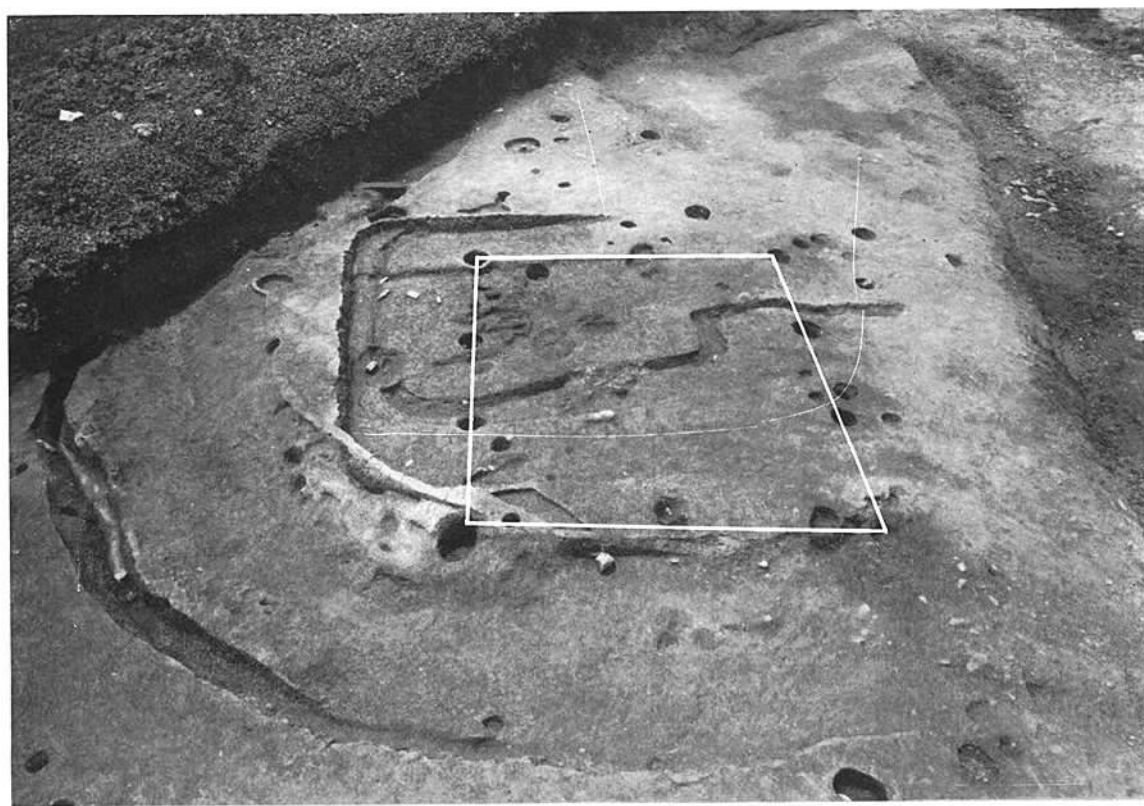
(1) 第4号住居跡東壁際周壁溝



(2) 第7号住居跡全景(西より)



(1) 第15号土壇



(2) U字溝・掘立柱建物(白線)(北より)

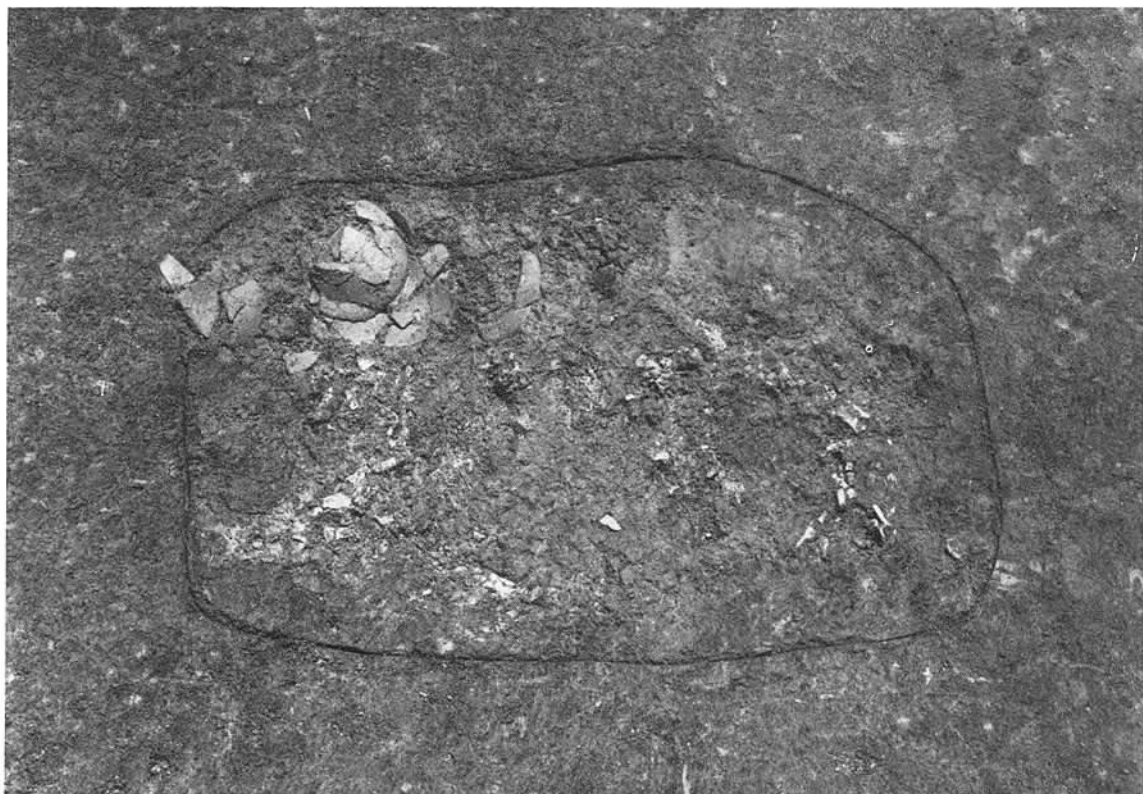


(1) U字・V字溝土層断面



(2) U字溝内覆土中土器・礫群出土状態



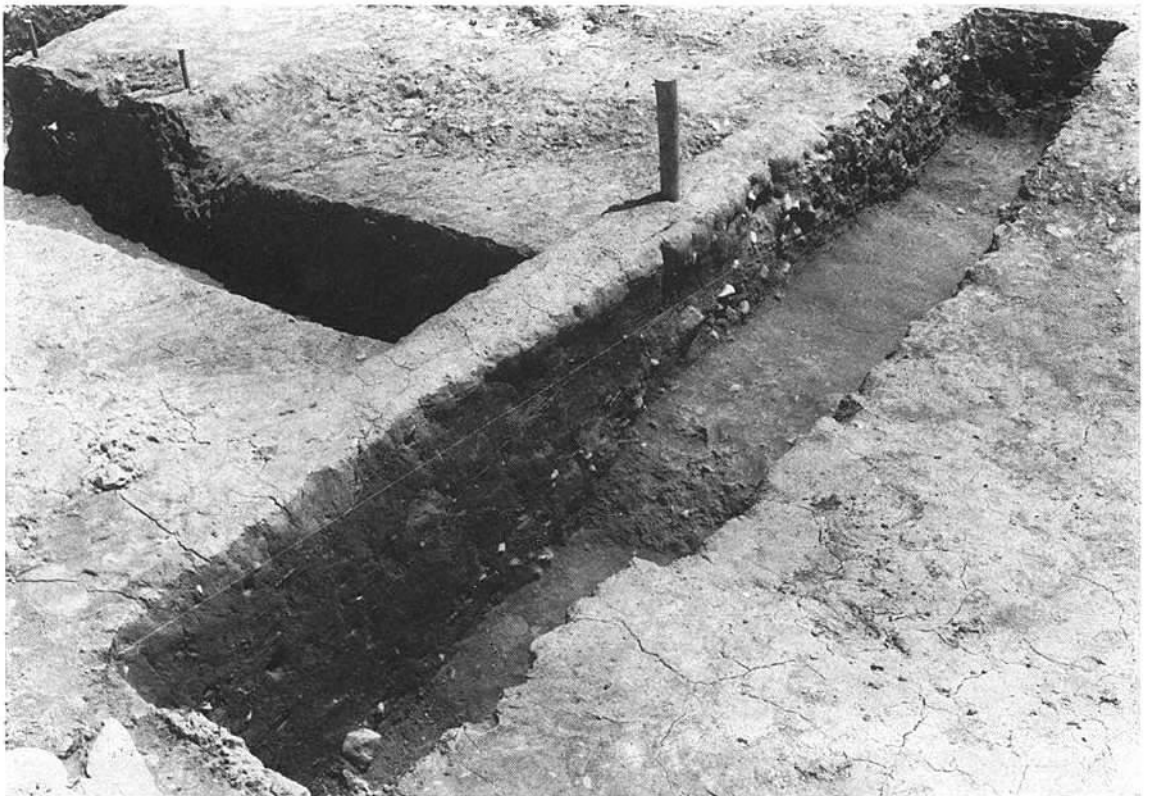


(1) 火 葬 墓 (西より)

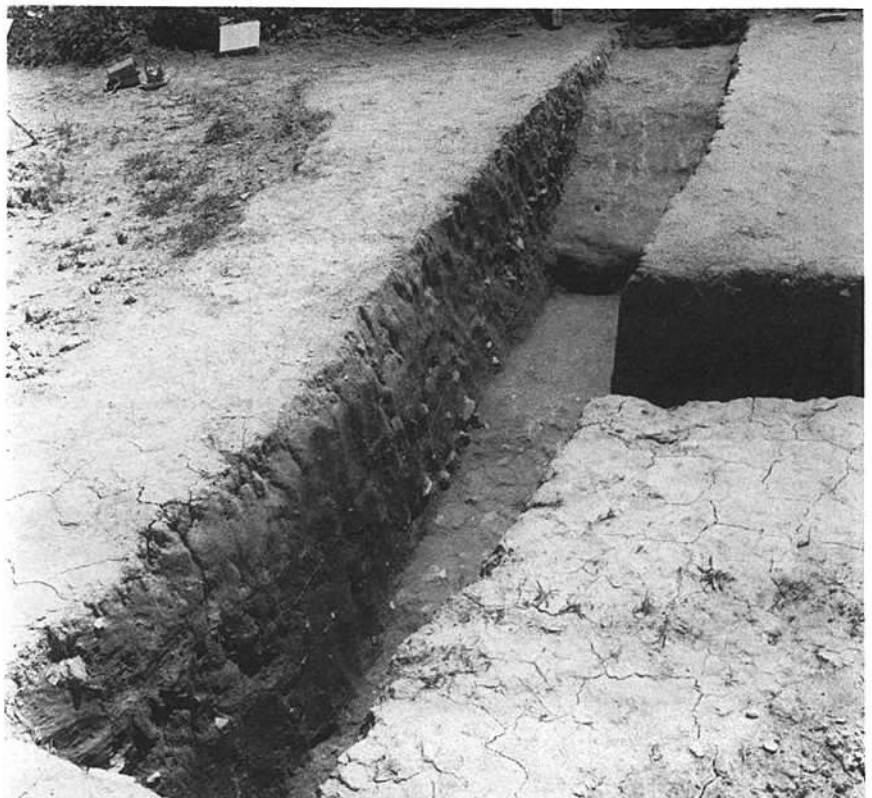


(2) 西下段トレンチ (南より)

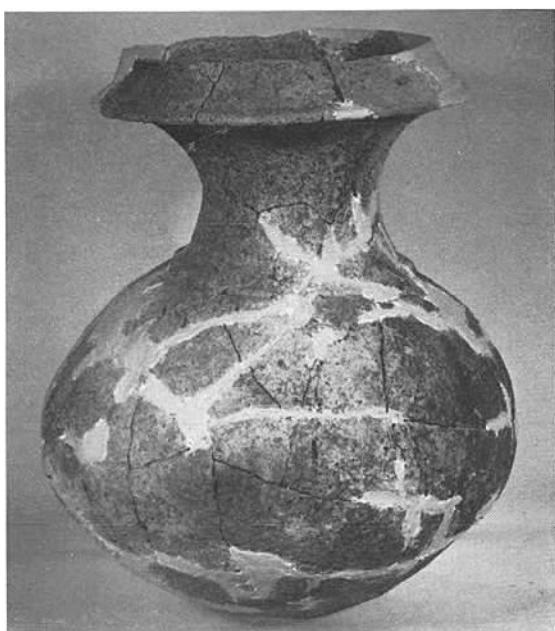
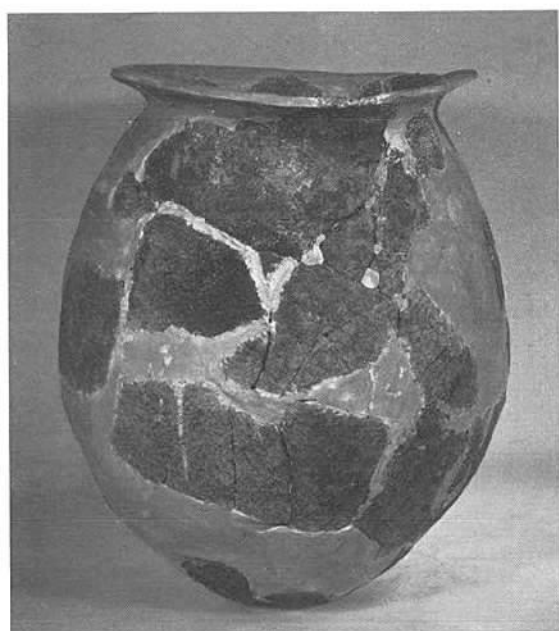




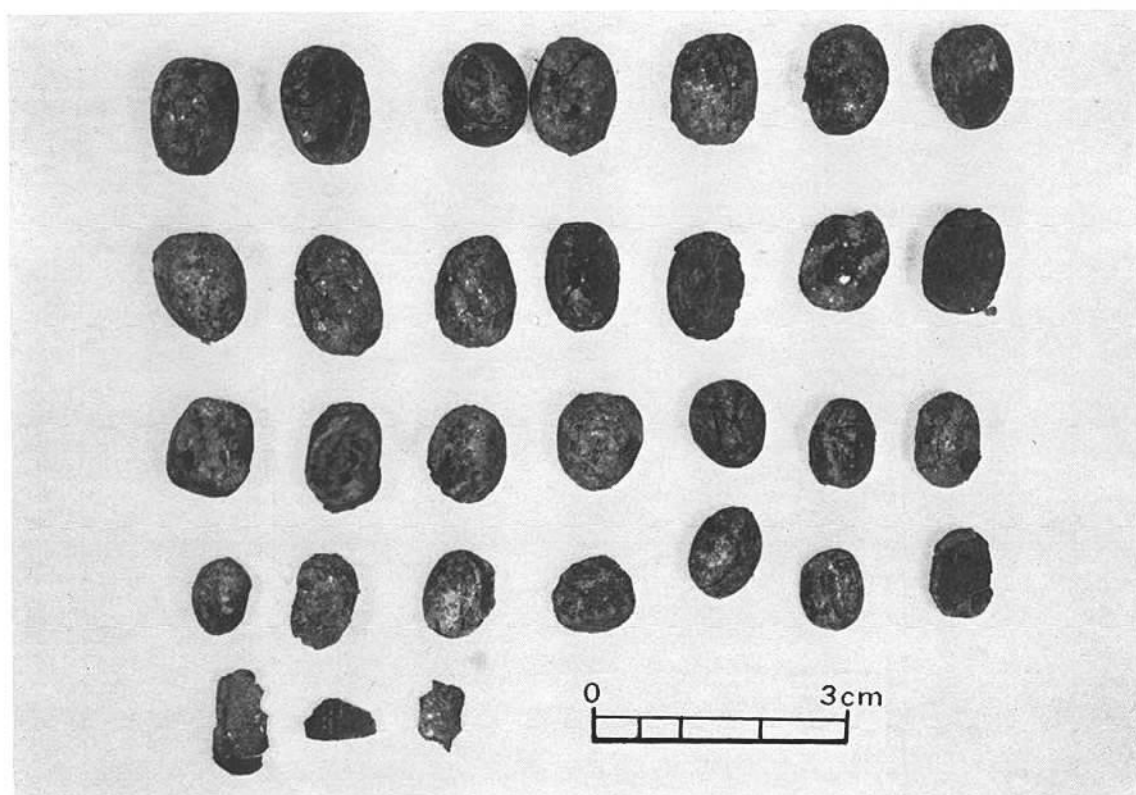
(1) 西下段 No.2 トレンチ



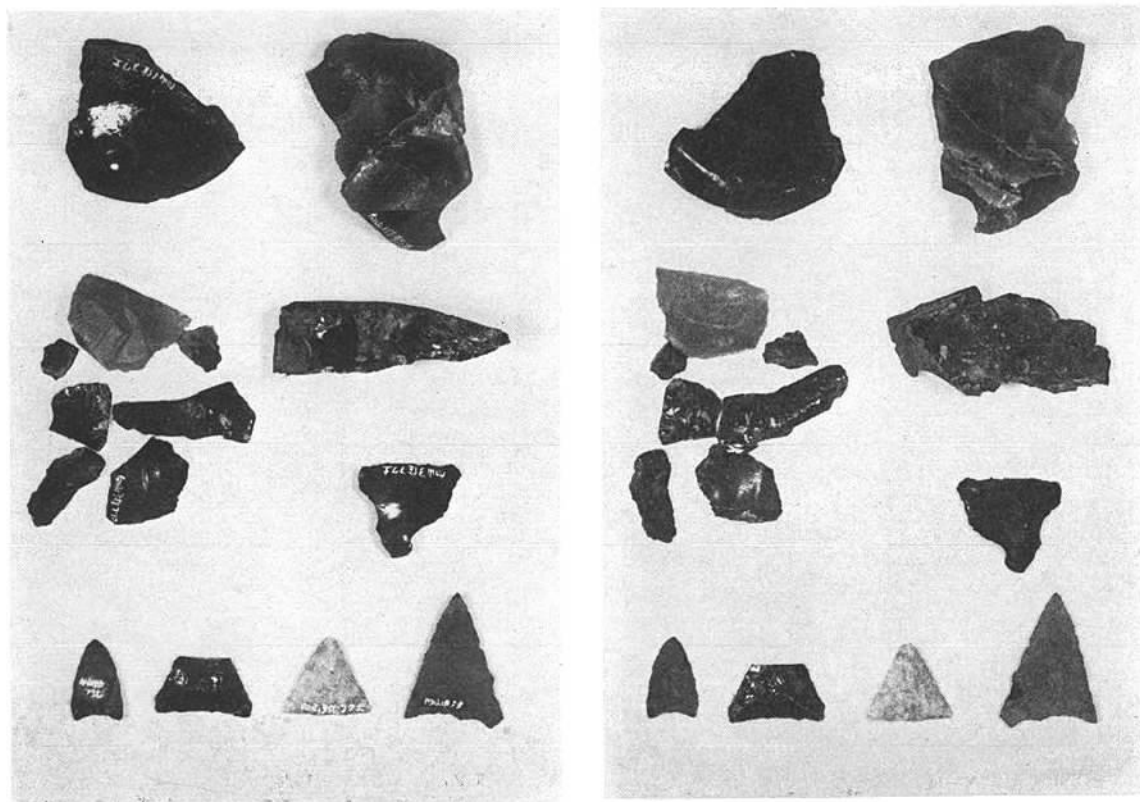
(2) 西下段 No.3 トレンチ



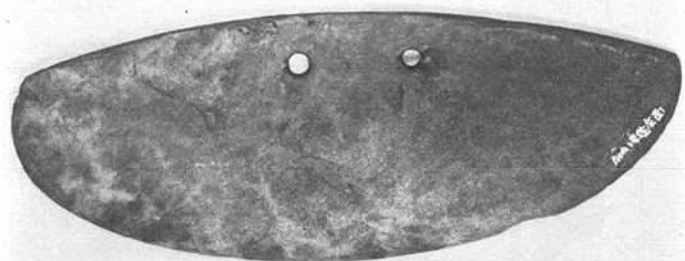
(1) 弥生式土器



(1) 炭化堅果類



(2) 第1号住居跡・その他出土石器類



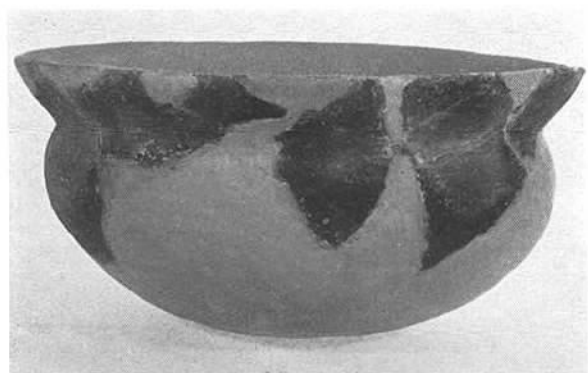
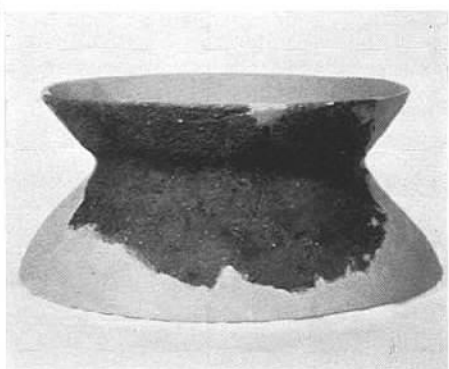
(1) 第1号住居跡出土石製穂摘具



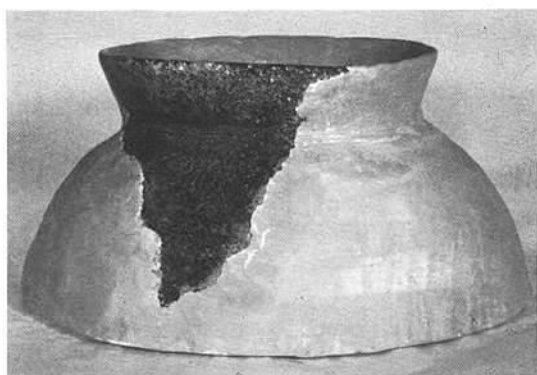
(2) 覆土中出土弥生式土器



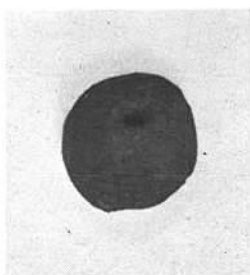
(2) 覆土中出土弥生式土器



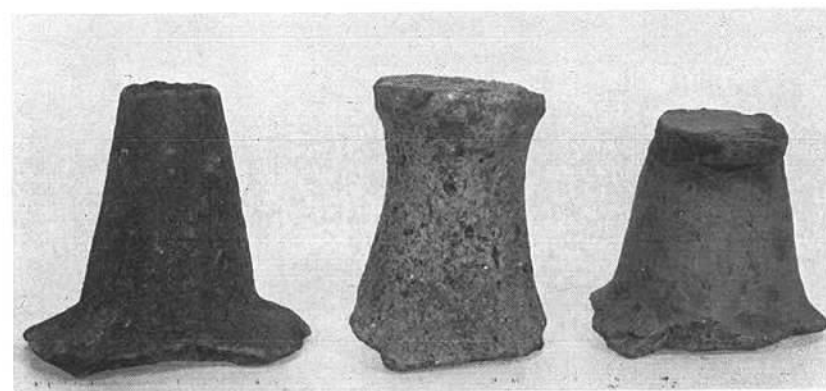
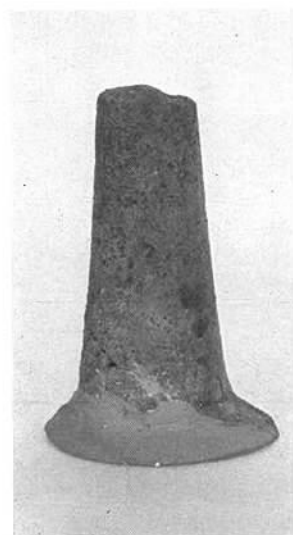
(3) 第2号住居跡出土土師器



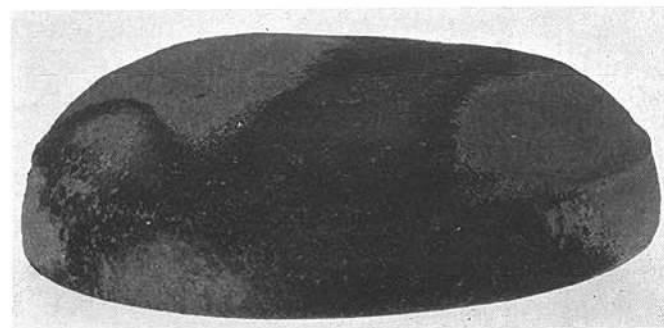
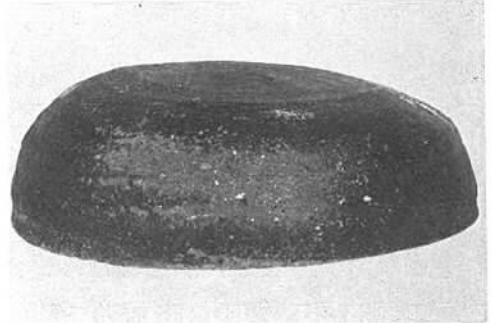
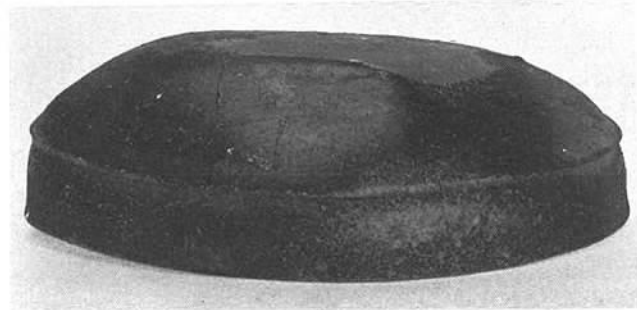
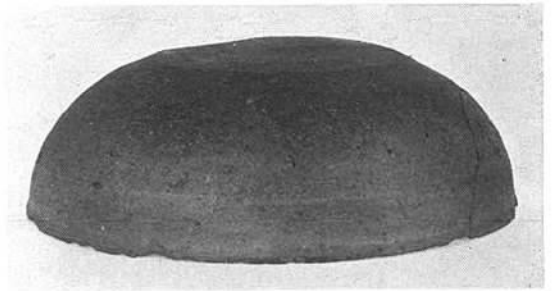
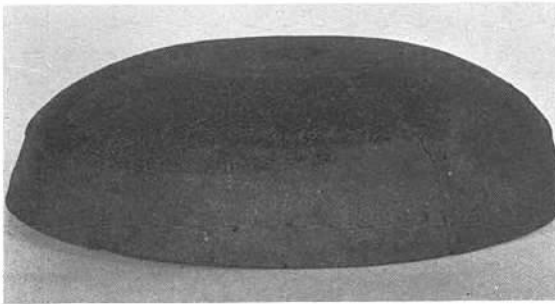
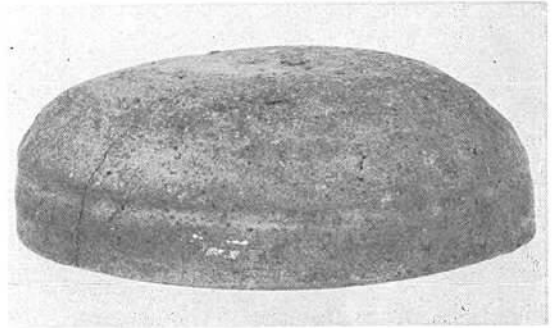
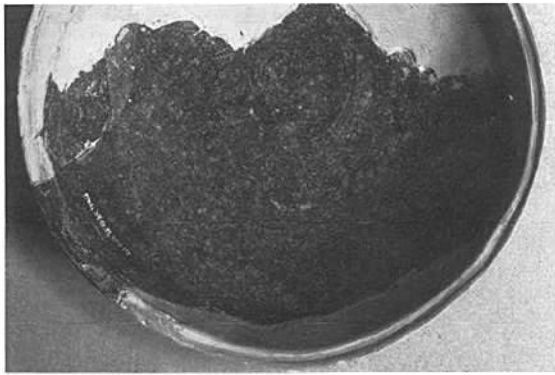
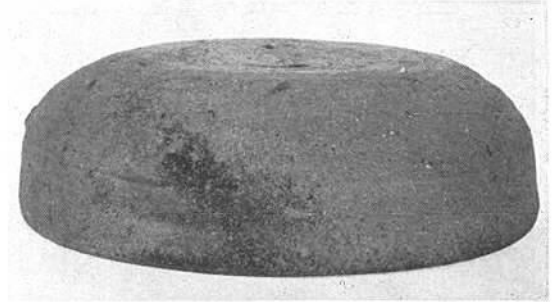
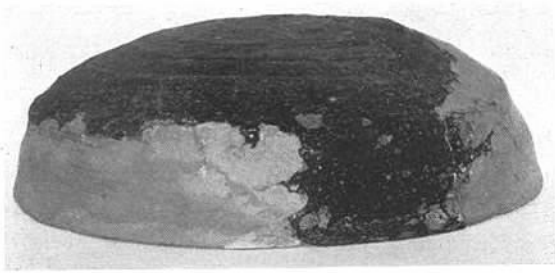




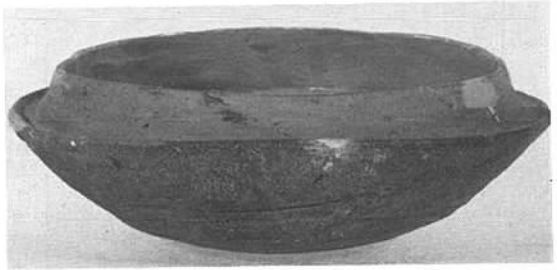
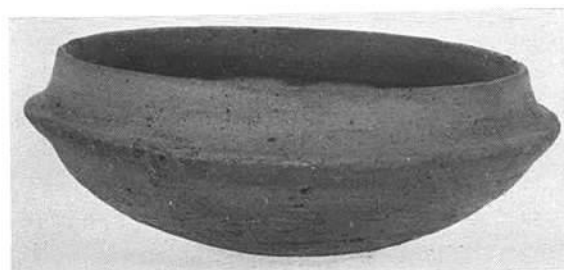
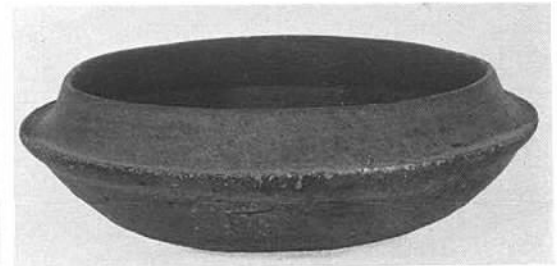
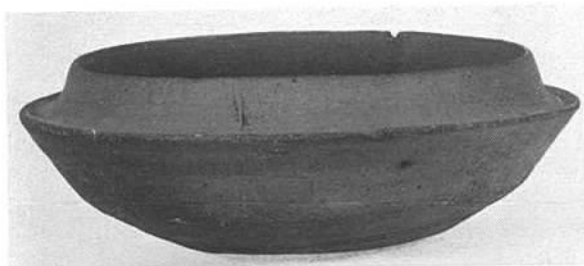
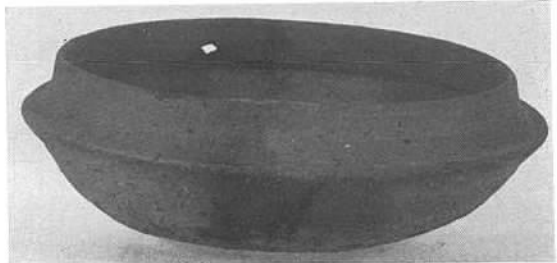
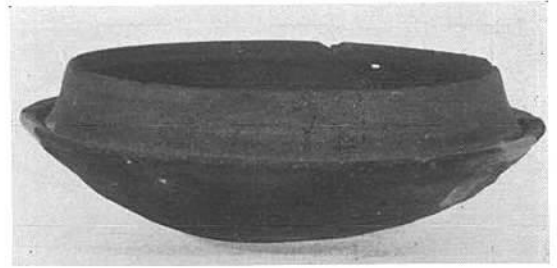
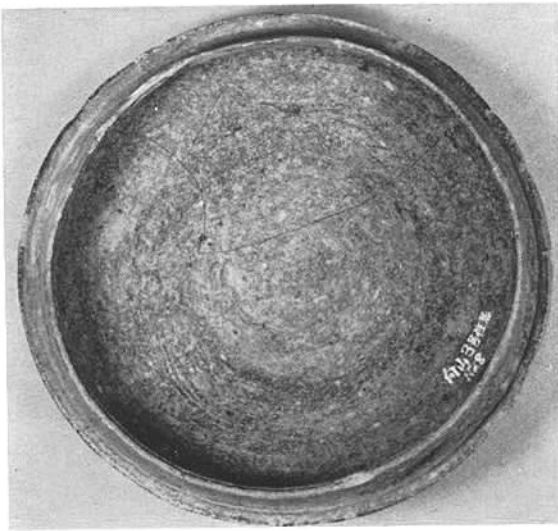
(1) 土製丸玉



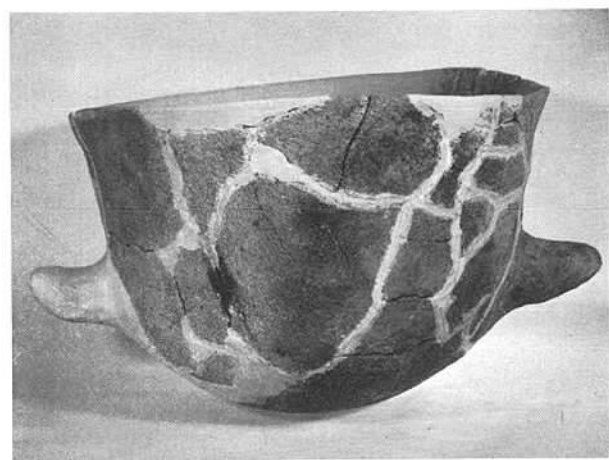
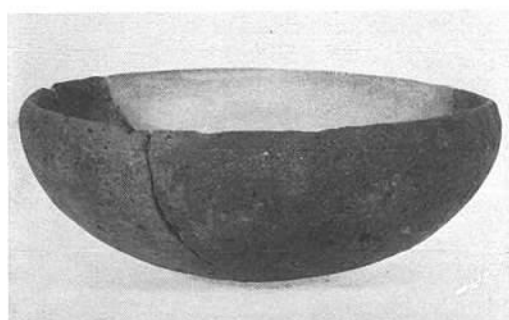
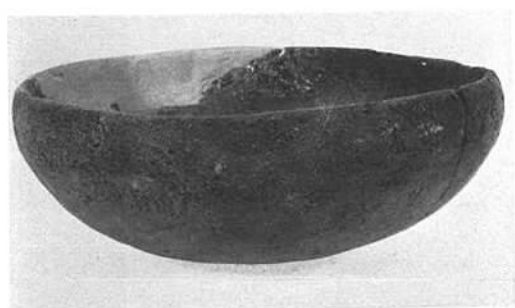
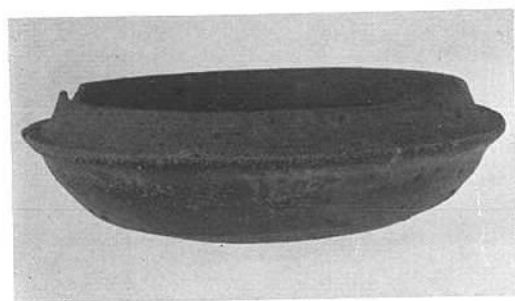
(2) 土師器



(1) 須恵器杯蓋・台付碗

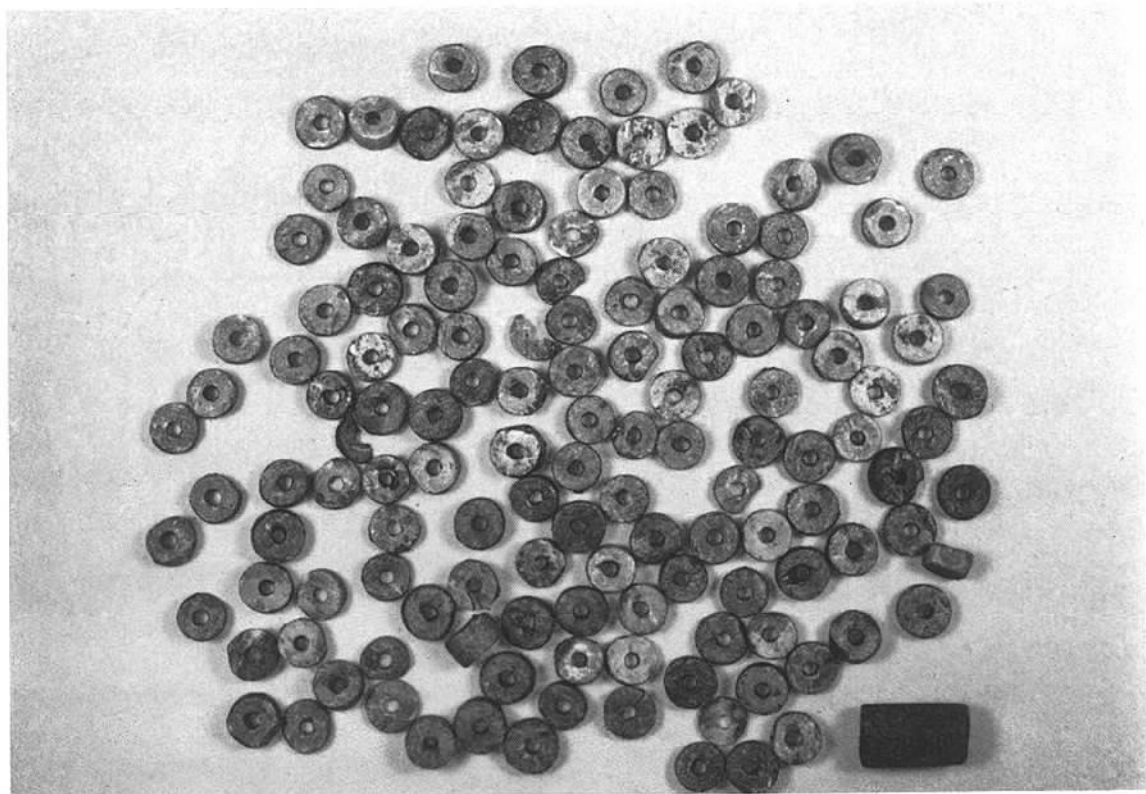


(1) 須恵器杯身



(1) 須恵器・土師器

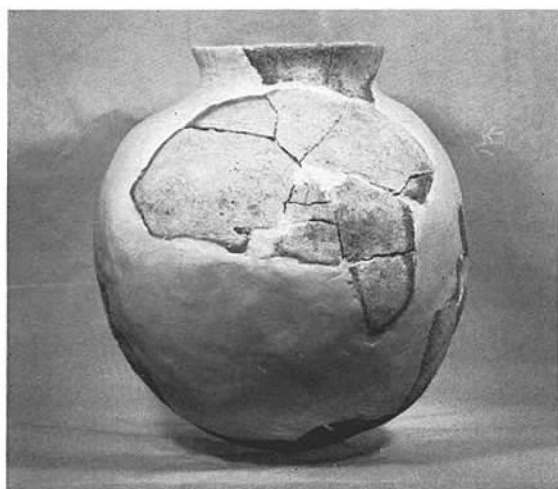




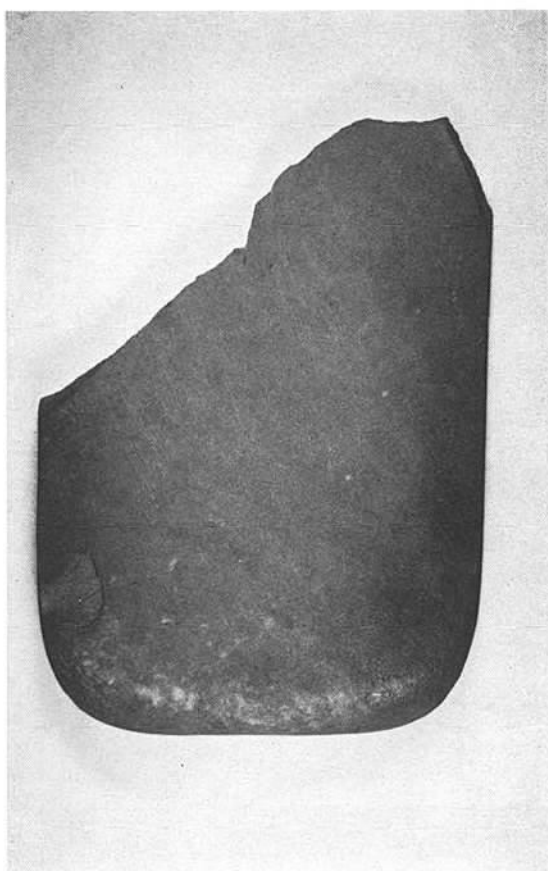
(1) 滑石製白玉・管玉



(2) 土師器



(1) 第3号住居跡覆土中出土土師器

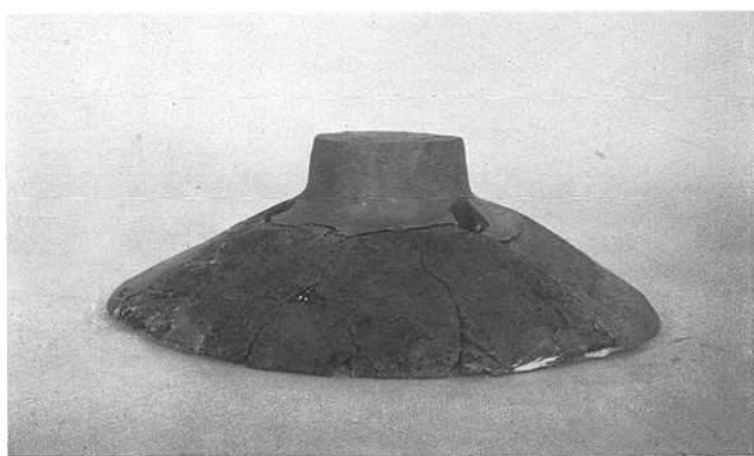
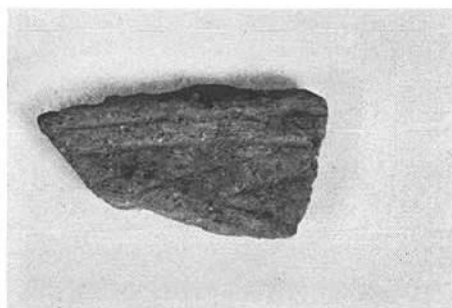


(2)

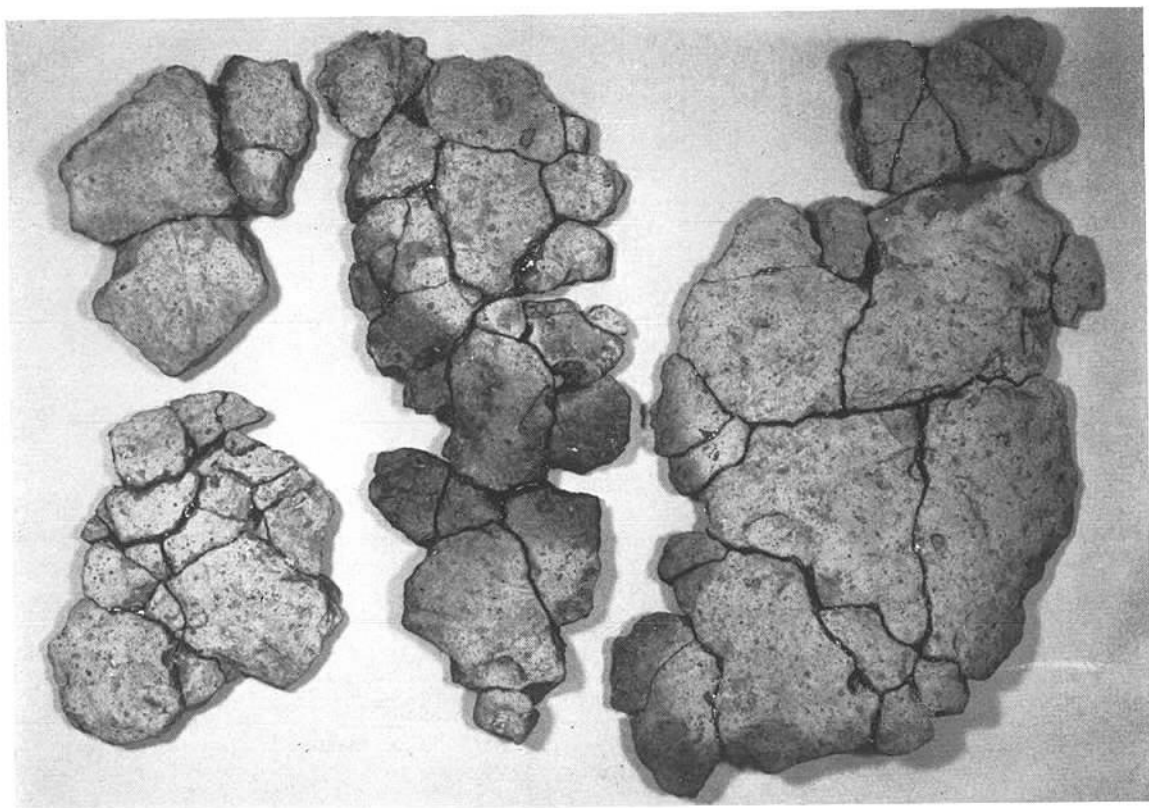
V字溝出土砥石



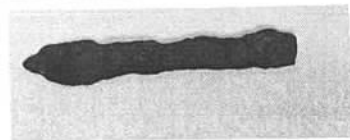
(3) 4号住居跡出土  
弥生式土器



(4) 第7号住居跡出土土師器

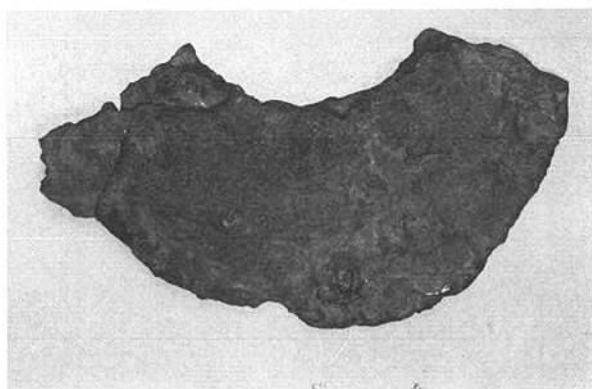


(1) 床面出土焼粘土塊



(3) U字溝出土須恵器・鉄鍬

(1) 西下段包含層出土瓦器・土師器・須恵器



(2) 火葬墓副葬土師器

(4) 第16号土塚出土鉄製鋤先





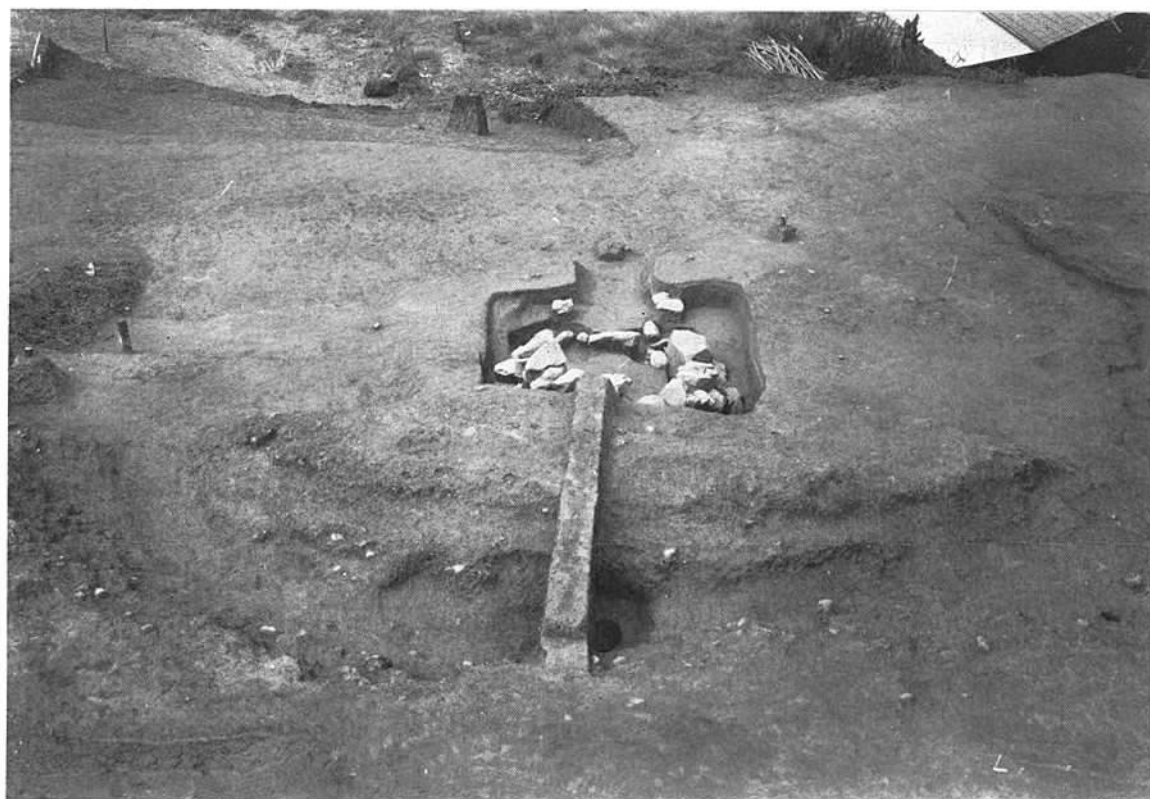
(1) 遠 景 (西より)



(2) 発 掘 前 (西より)



(1) 全 景 (西より)

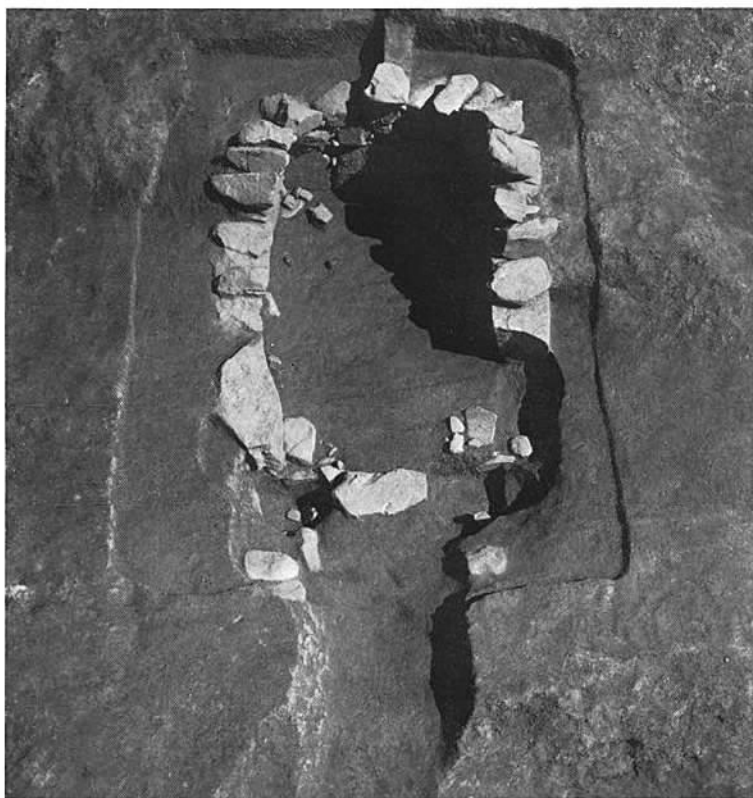


(2) 全 景 (東より)

(1) 石室全景  
(完掘後)



(2) 石室全景  
(石抜き跡状況)





(1) 奥壁石積み状況



(2) 左壁石積み状況





(1) 右壁石積み状況



(2) 裏込め状況

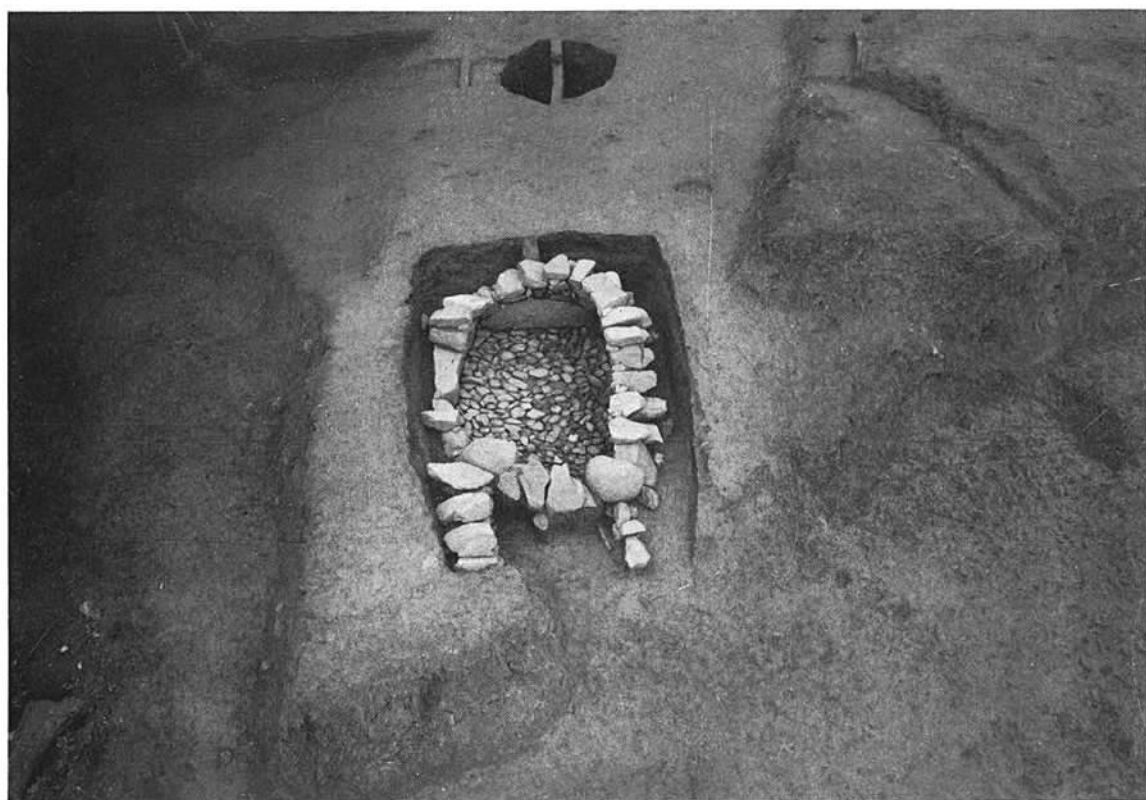
(1) 1号墳腰石状況



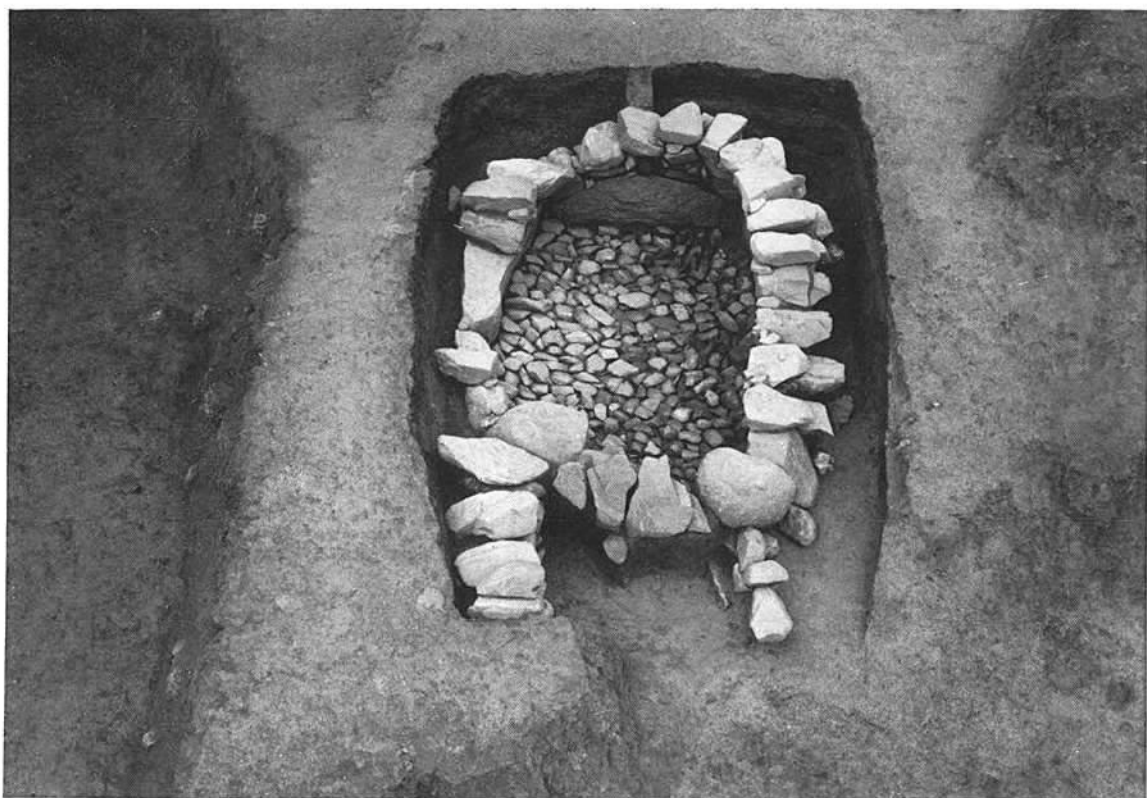
(2) 2号墳発掘前(南より)



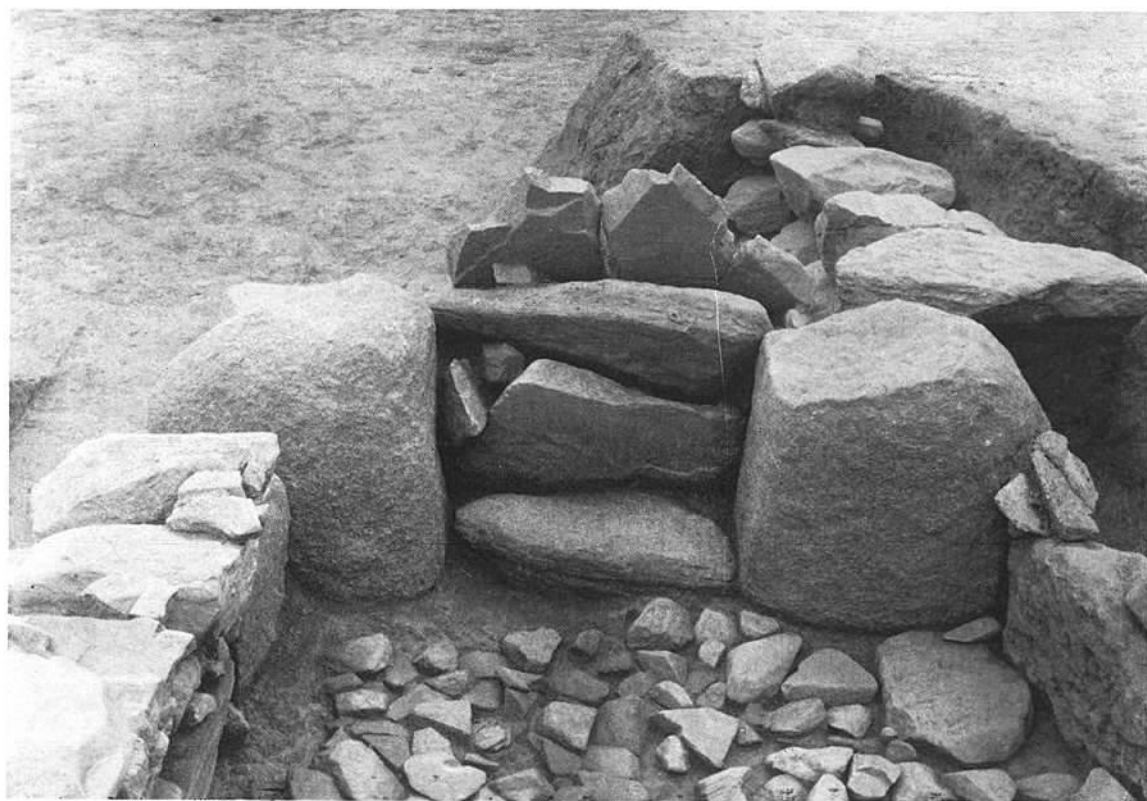
(1) 2号墳発掘前(西より)



(2) 2号墳全景(西より)



(1) 2号墳石室全景

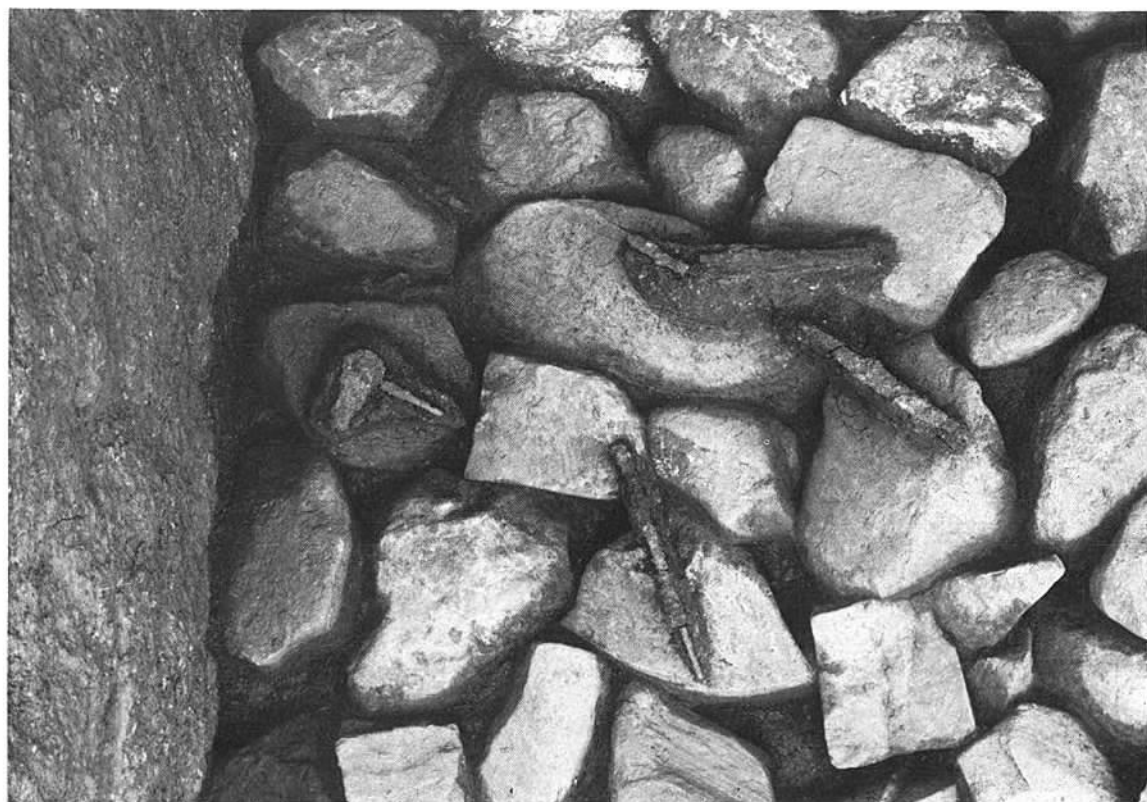


(2) 閉塞状況





(1) 羨道部及び閉塞状況



(2) 鉄器出土状態



(1) 奥壁石積み状況



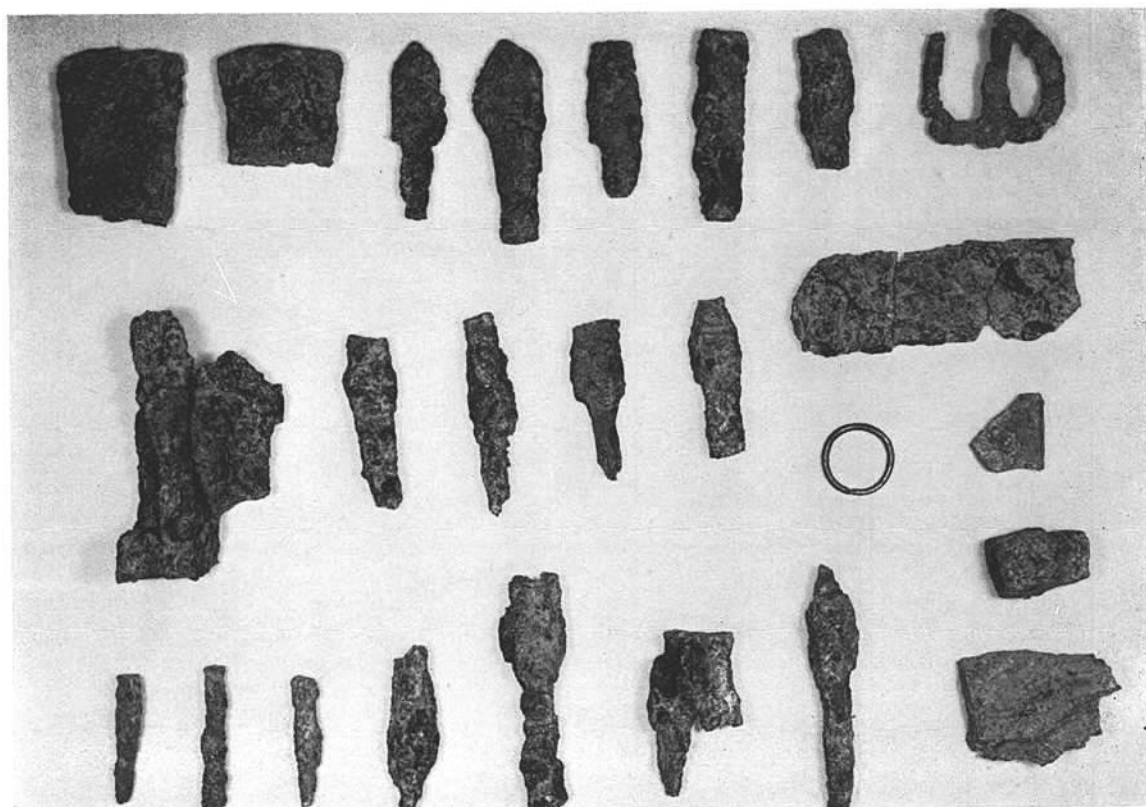
(2) 右壁石積み状況



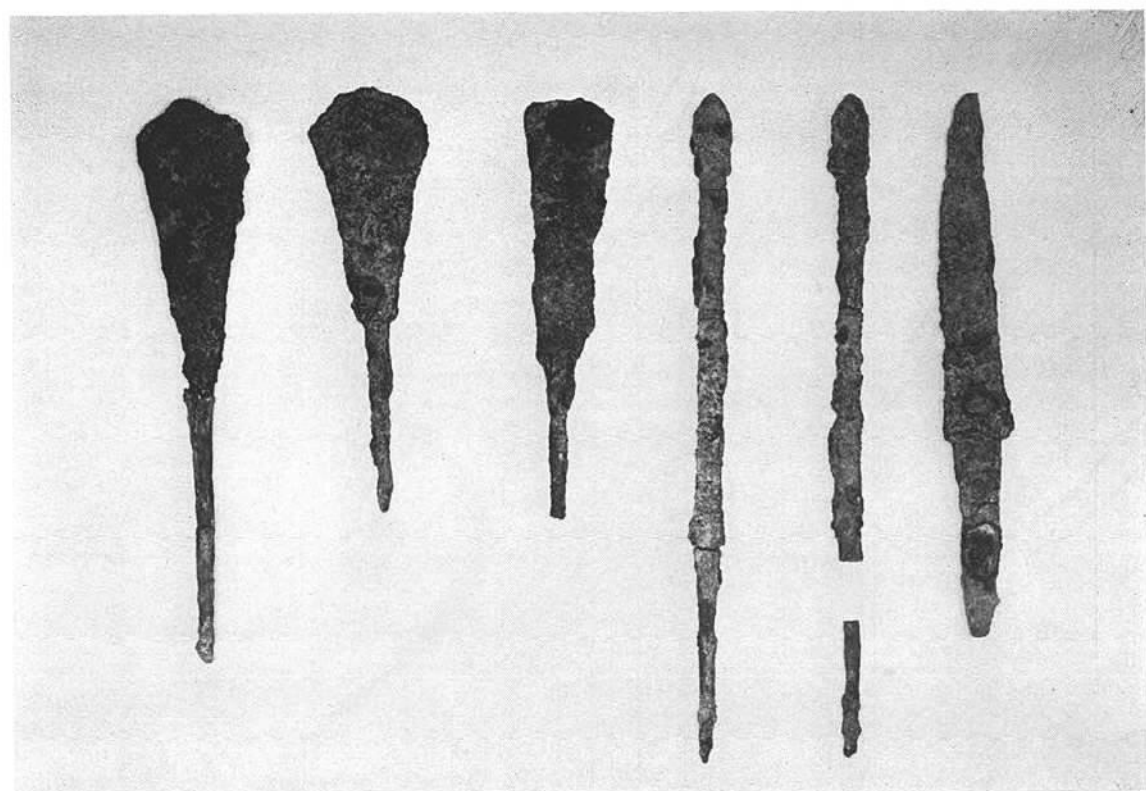
(1) 石室腰石のみの状況 (北より)



(2) 石室腰石のみの  
状況 (西より)

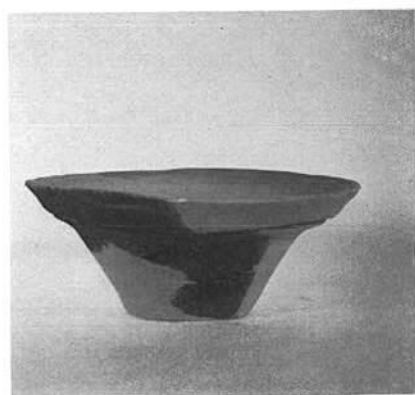


(1) 1号墳出土鉄器類・銀環

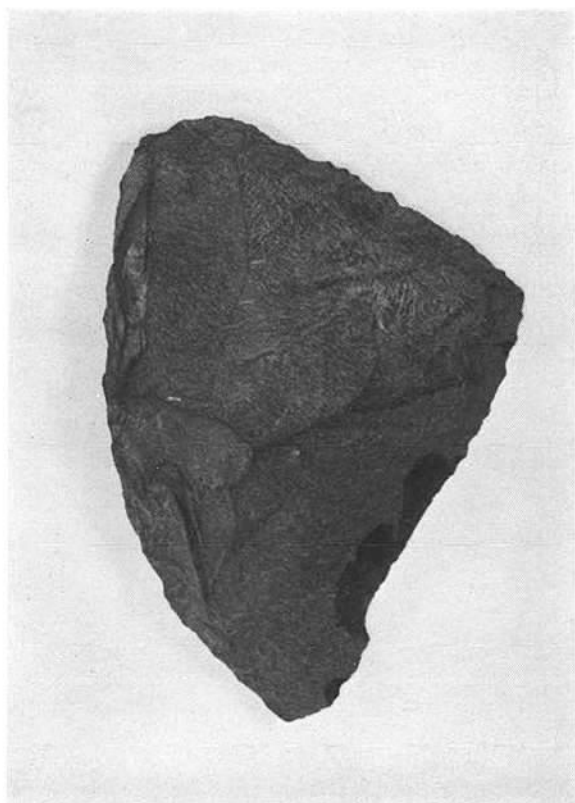


(2) 2号墳出土鉄鏃・刀子





(1) 南側周溝内出土須恵器

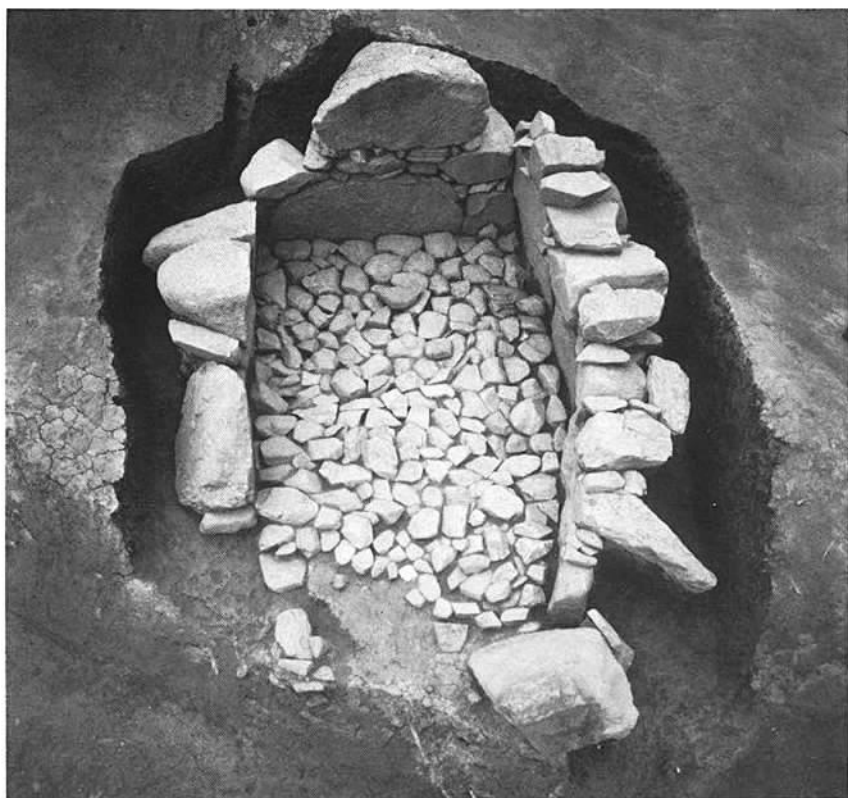


(2) 石室覆土内出土石器



(1) 発掘前状況(北より)

(2) 石室全景  
(西より)





(1) 奥壁石積み状況

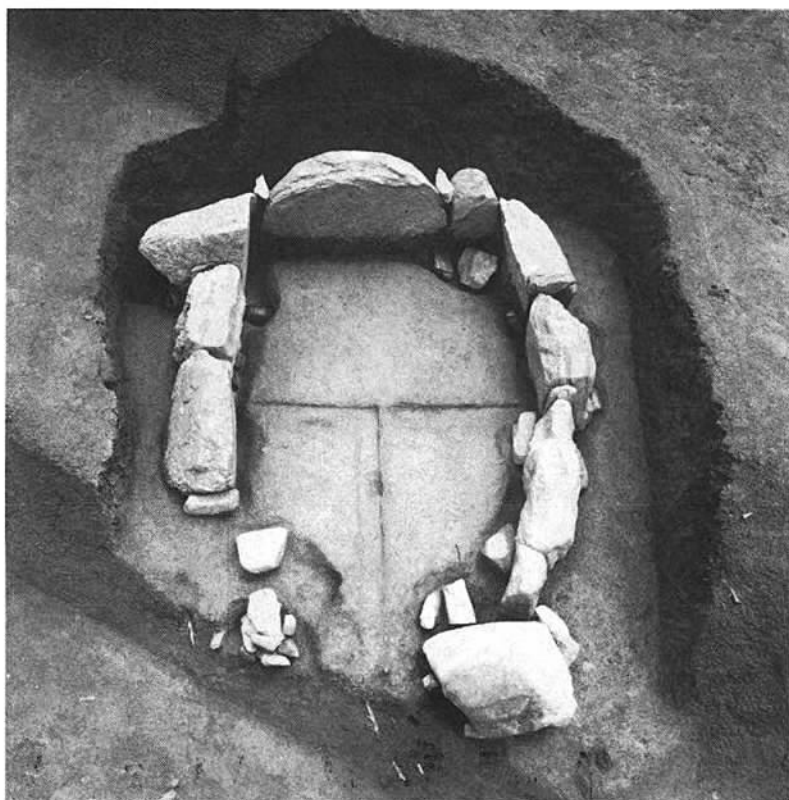


(2) 右側壁石積み状況



(1) 鉄鏃出土状況

(2) 腰石のみの状況





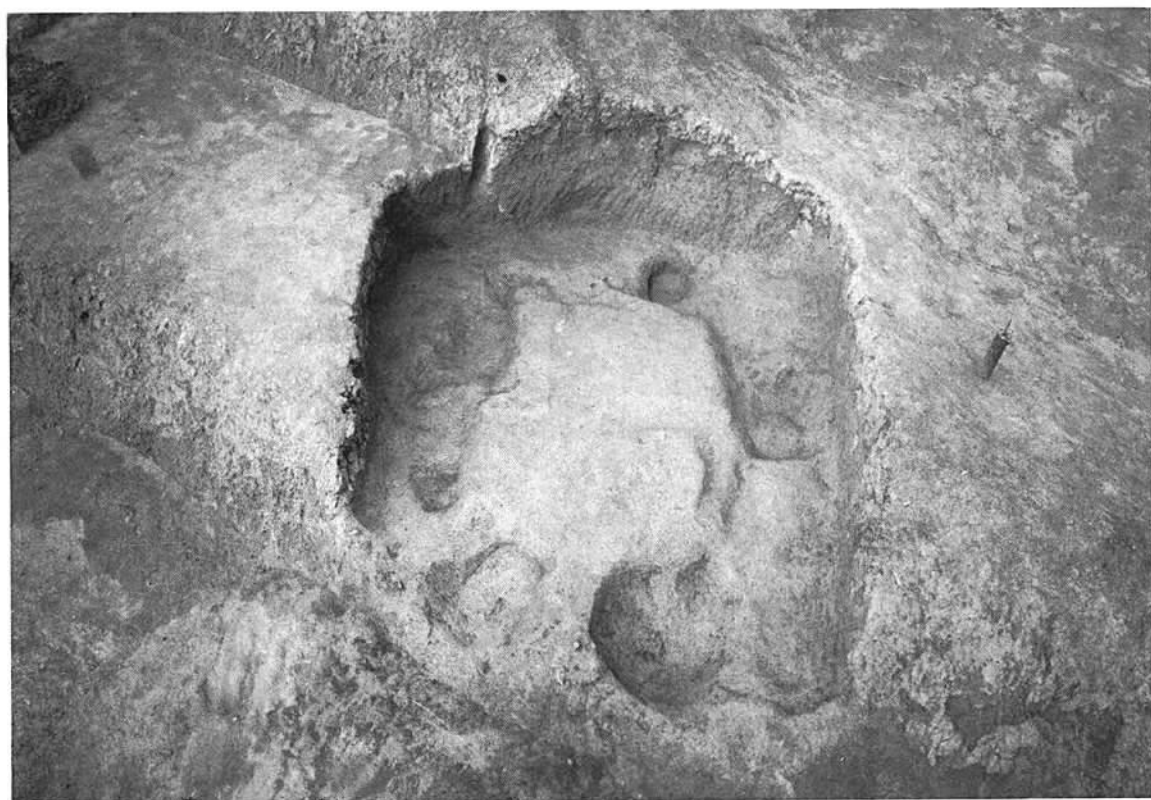
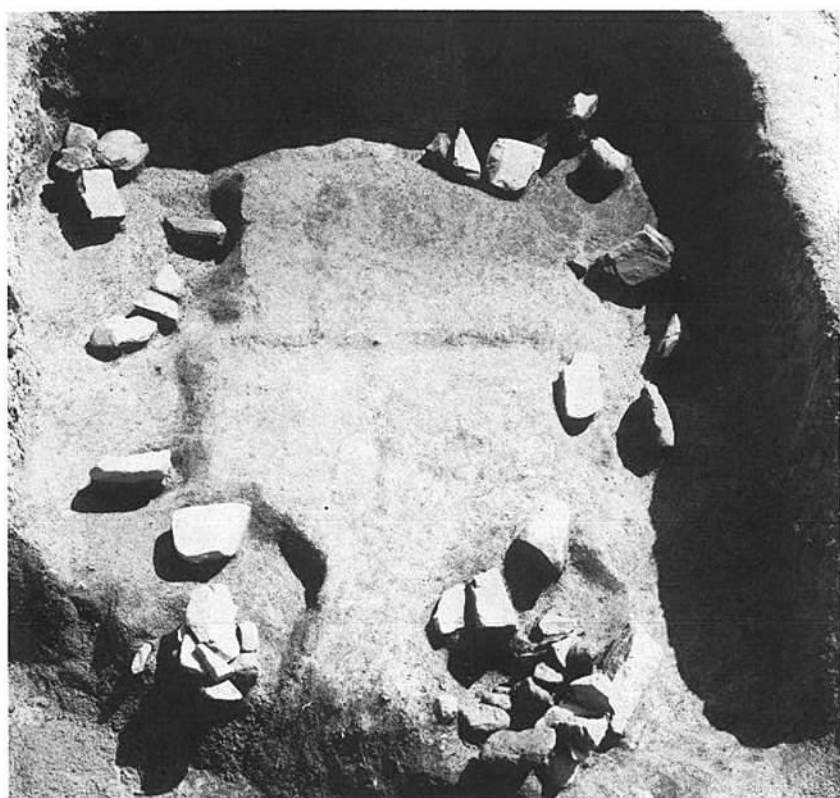


(1) 腰石及び根石の状況（北より）



(2) 腰石及び根石の状況（南より）

(1) 腰石下の根石  
の状態



(2) 墓塚の状態



(1) 3号墳より5号・6号墳を望む(西より)



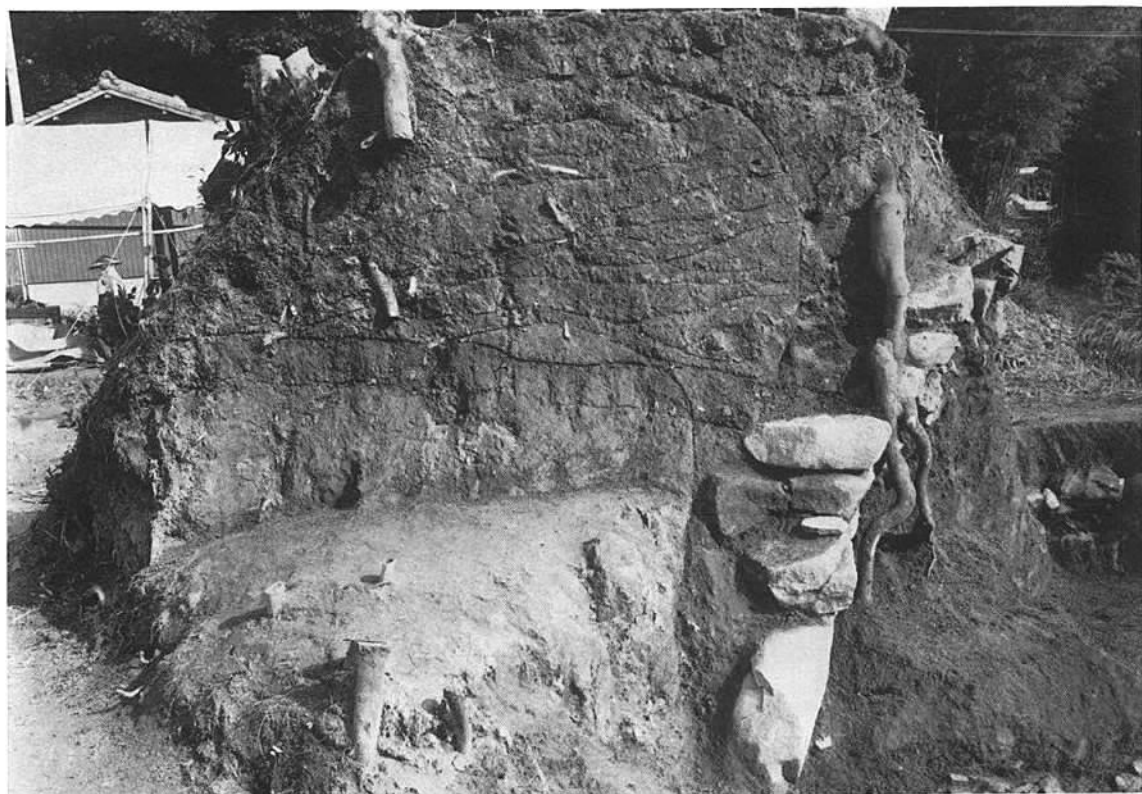
(2) 4号墳発掘前の状況(北より)

(1) 石室全景  
(西より)

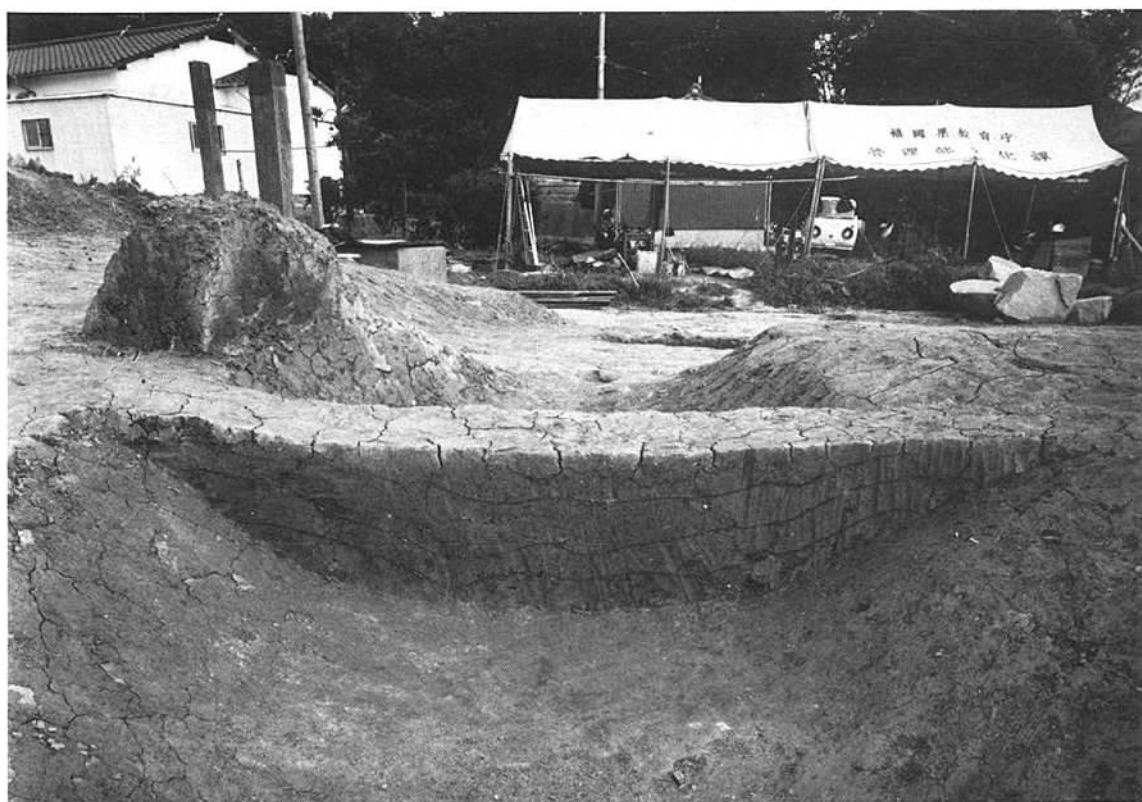


(2) 石室全景 (北より)





(1) 墳丘断面(奥壁側)



(2) 周溝断面



(1) 奥壁石積み状況



(2) 右側壁石積み状況



(1) 玉類出土状態



(2) 玉類出土状態



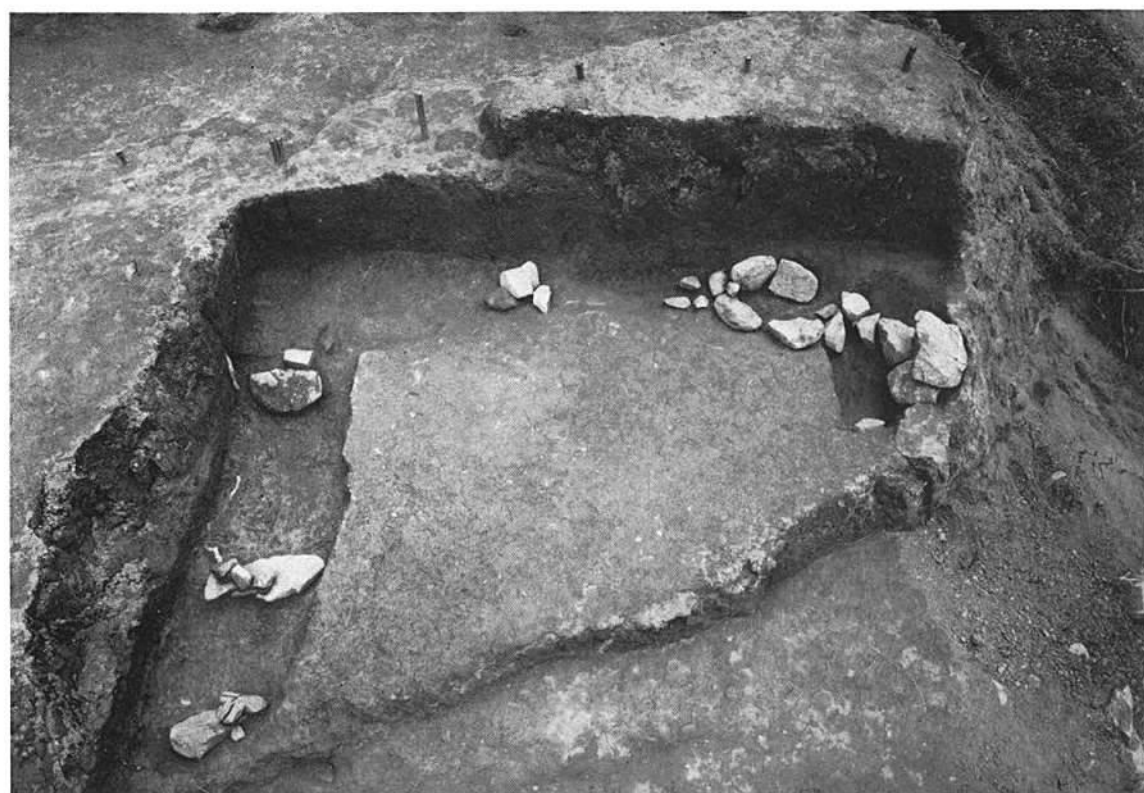
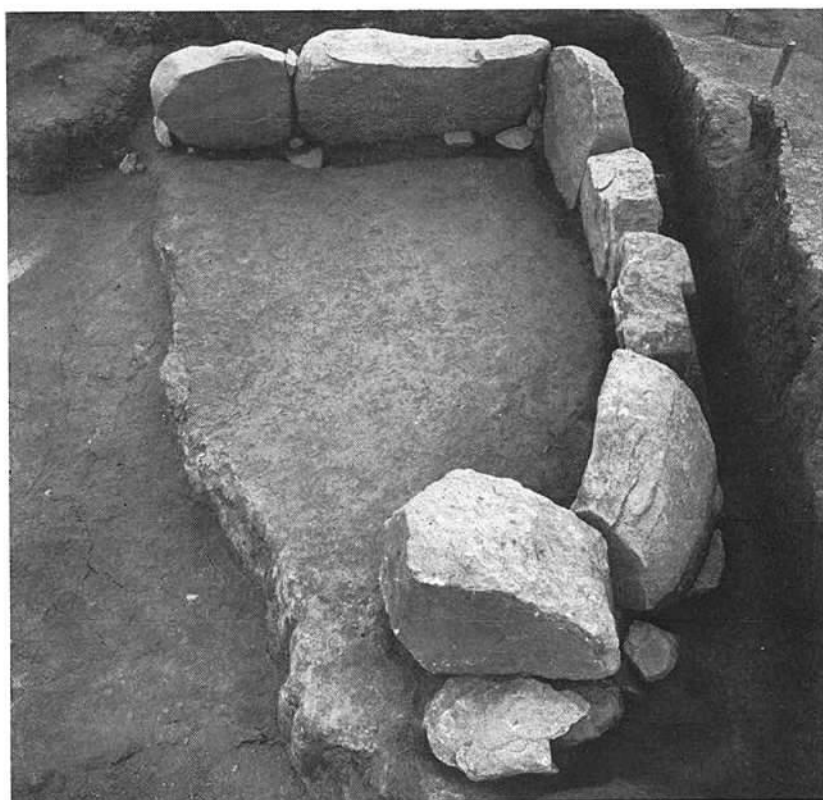


(1) 馬具類・須恵器出土状態



(2) 刀子出土状態

(1) 腰石のみの状況



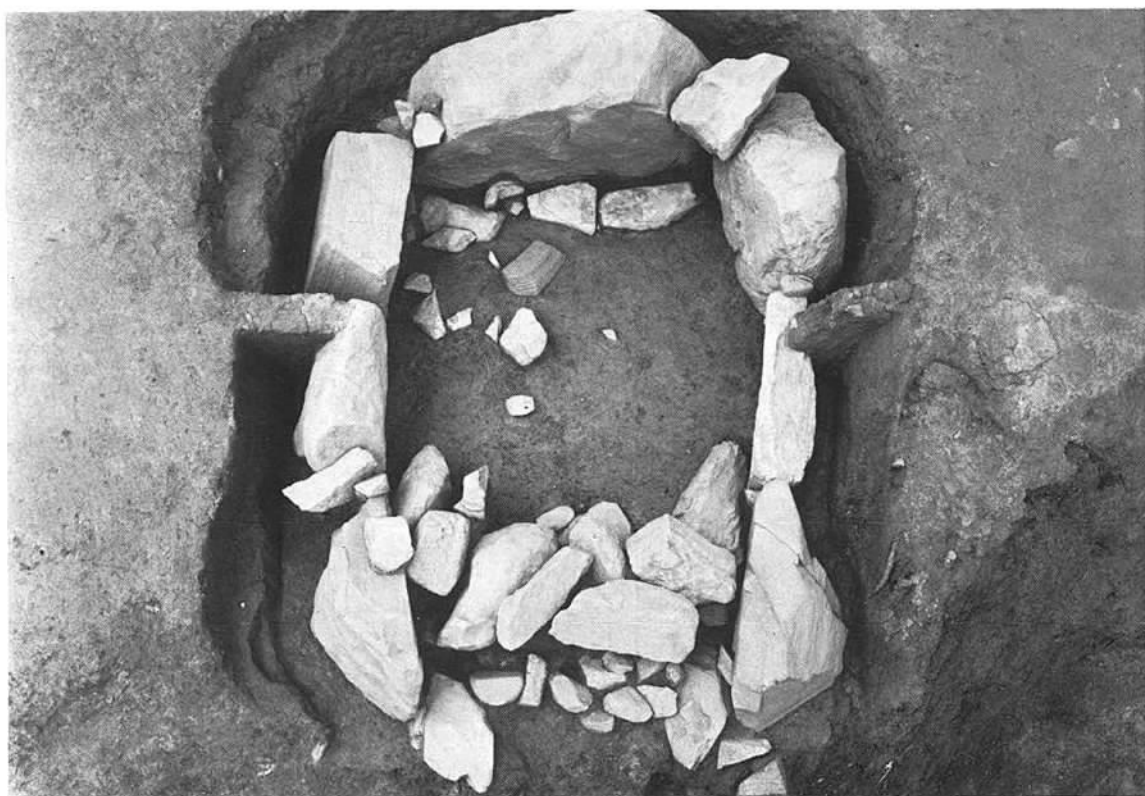
(2) 腰石下根石の状況



(1) 4号墳墓坑



(2) 5号墳全景



(1) 石室全景

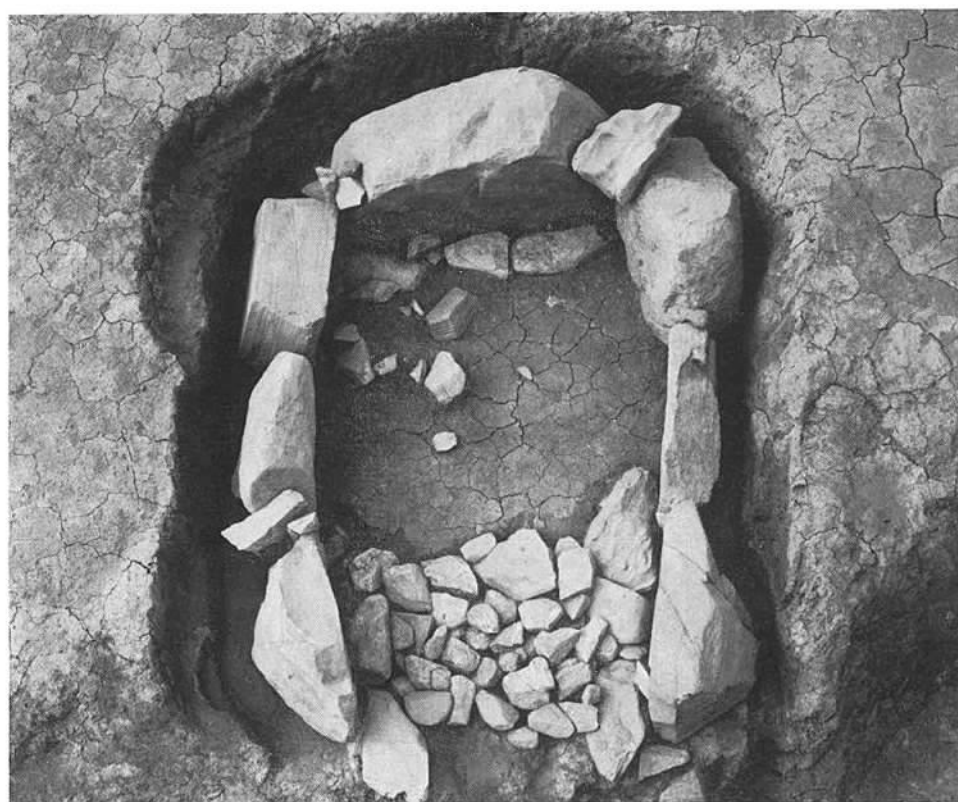


(2) 閉塞状況





(1) 閉塞石と敷石



(2) 敷石残存状況



(1) 腰石のみの状況



(2) 墓壇の状況





(1) 全 景



(2) 石室全景



(1) 石室全景 (東より)



(2) 腰石のみの状況

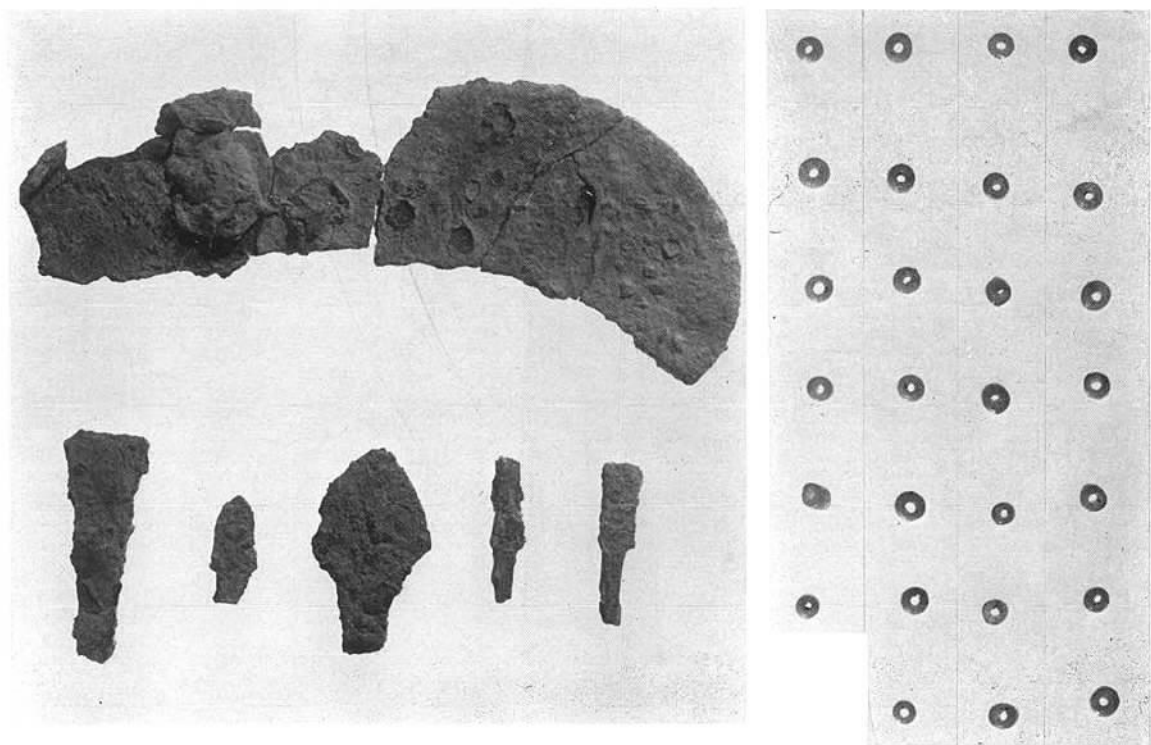


(1) 根石及び墓壇の状況



(2) 6号墳より西を望む

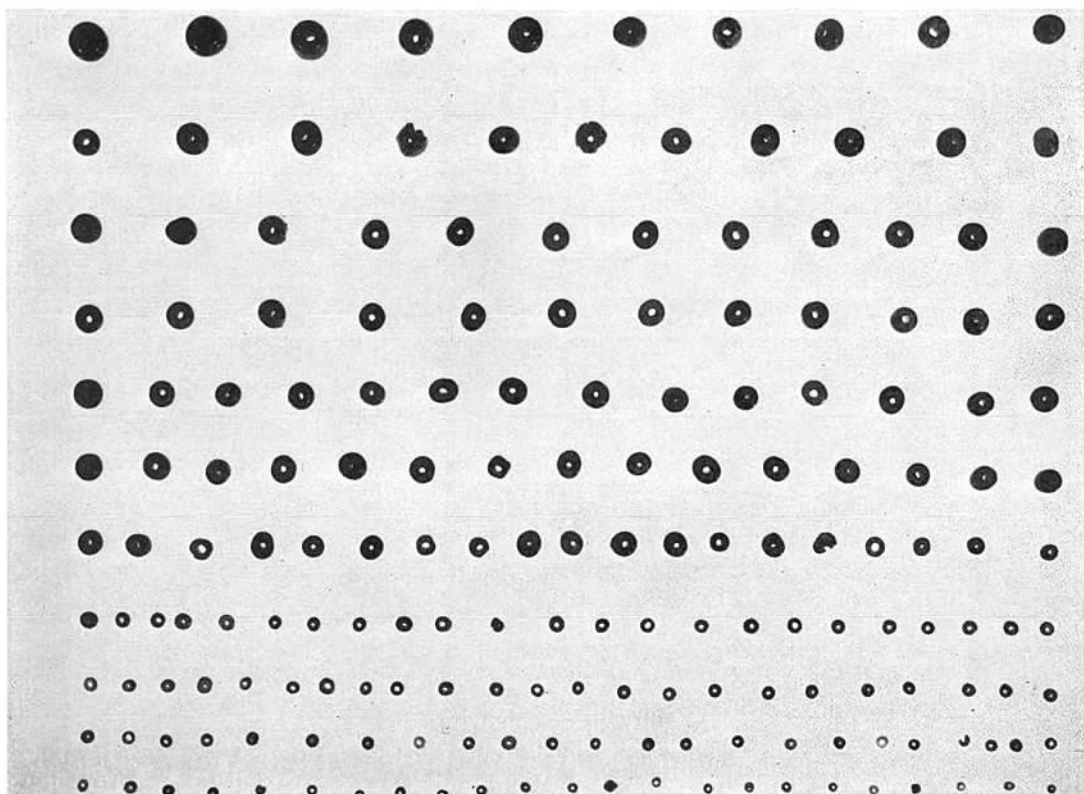




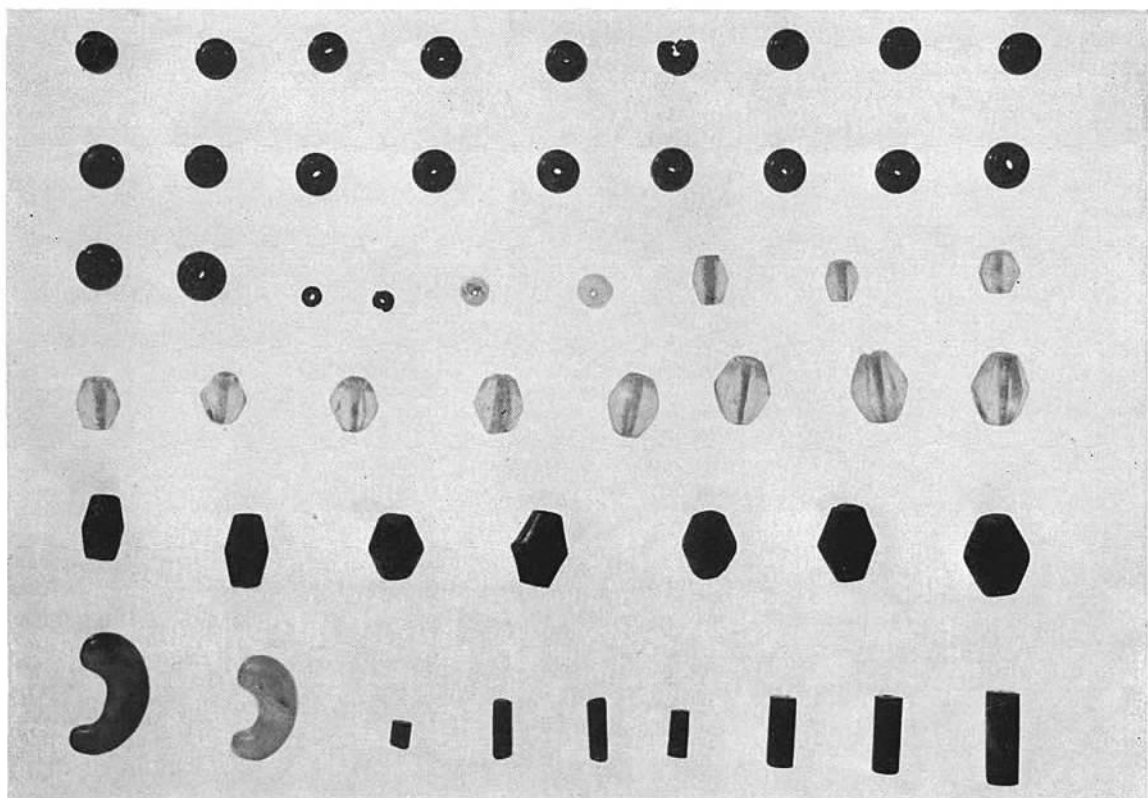
(1) 3号墳出土鉄器・玉類



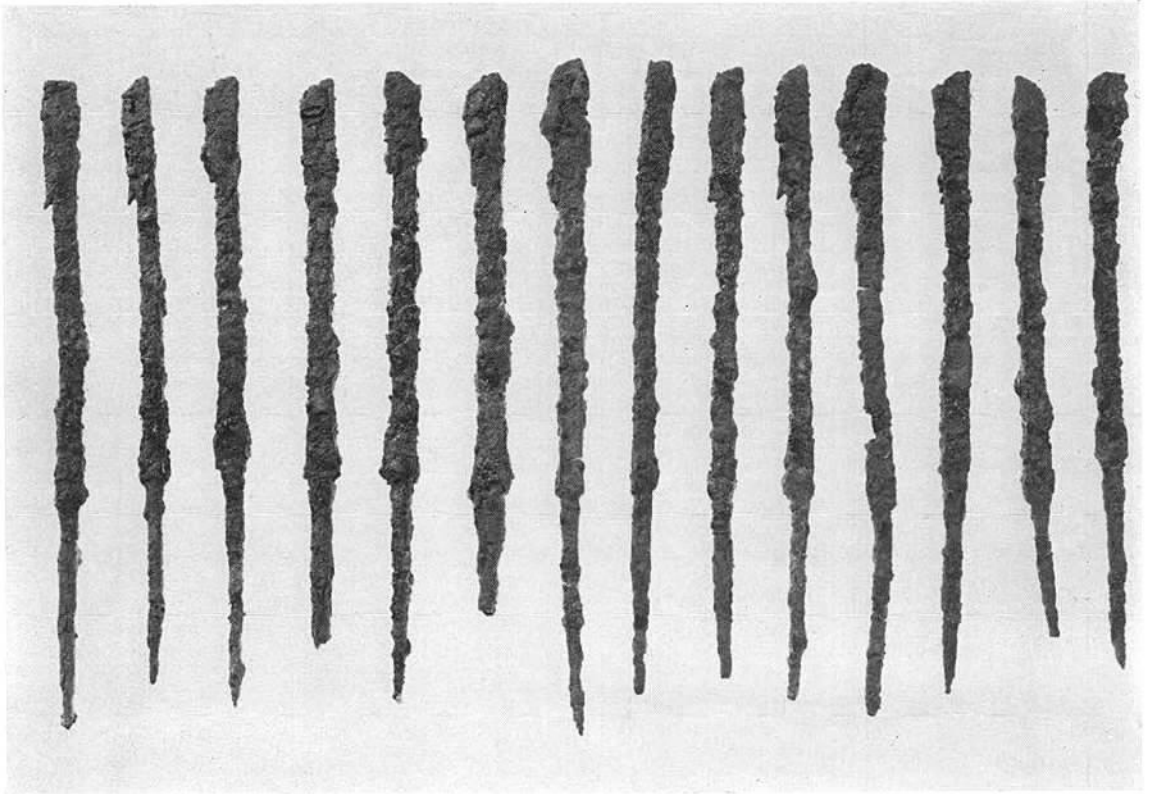
(2) 4号墳出土須恵器



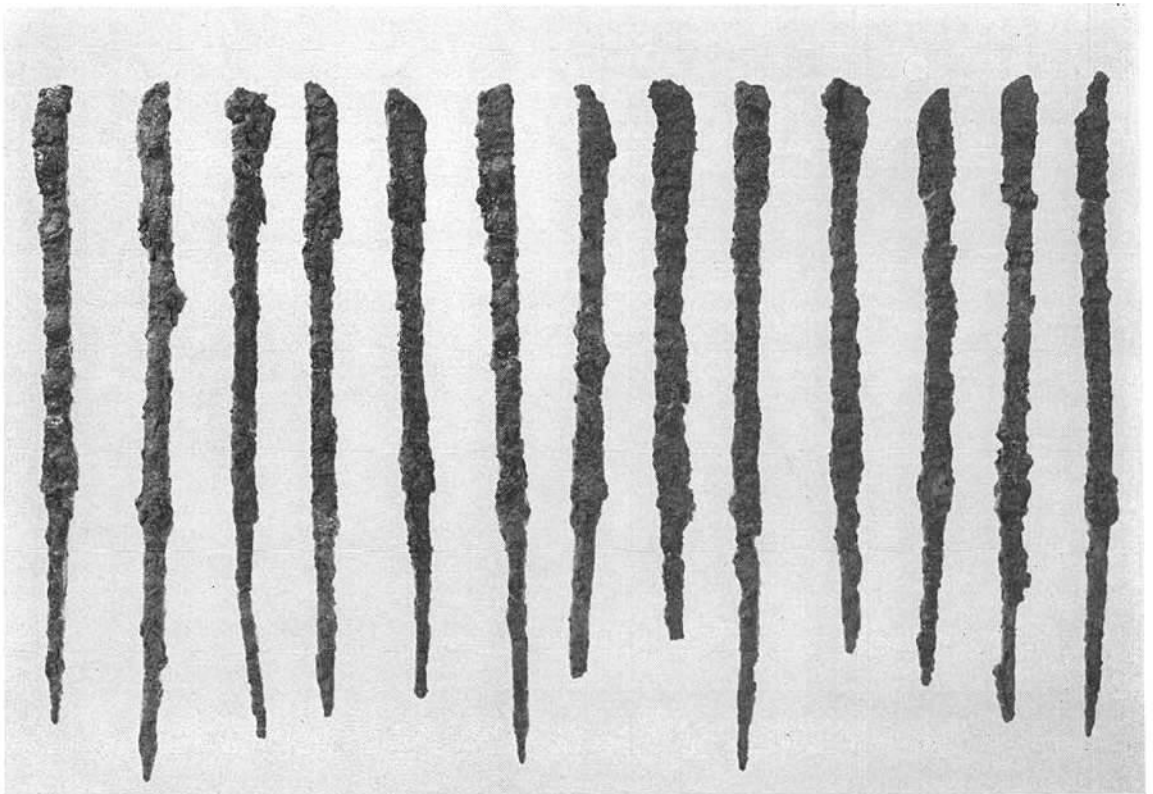
(1) 玉 類



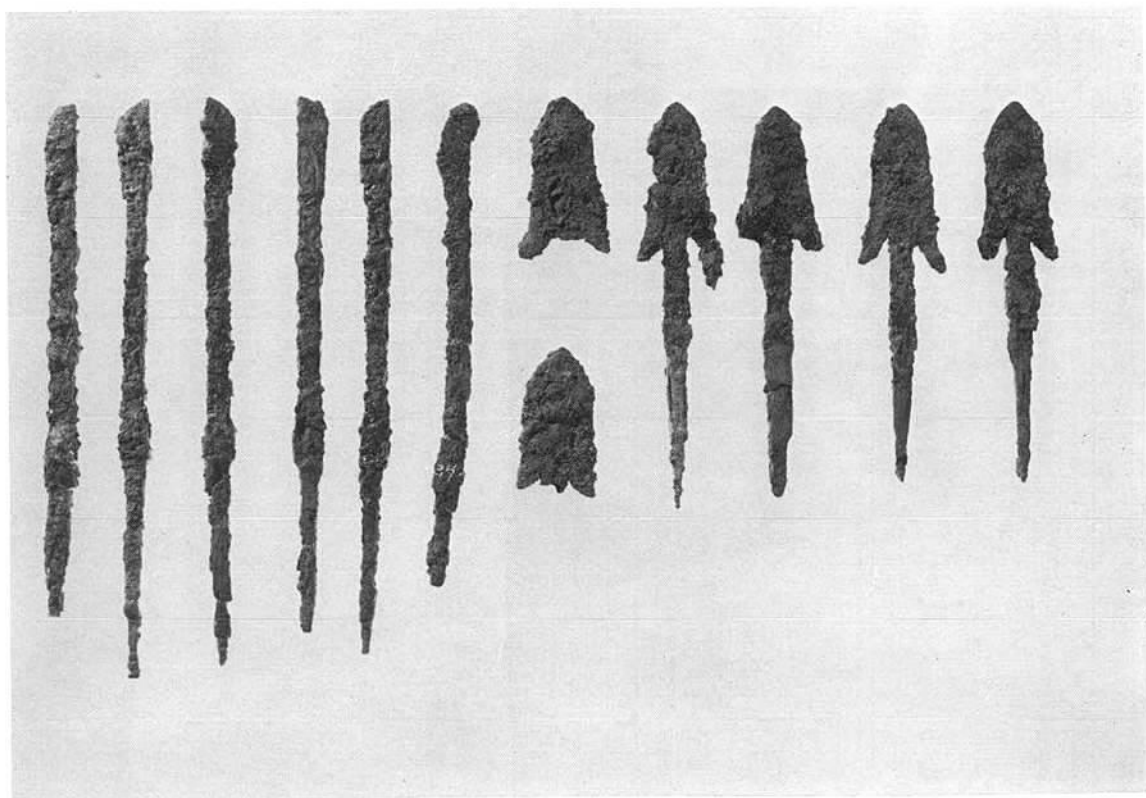
(2) 玉 類



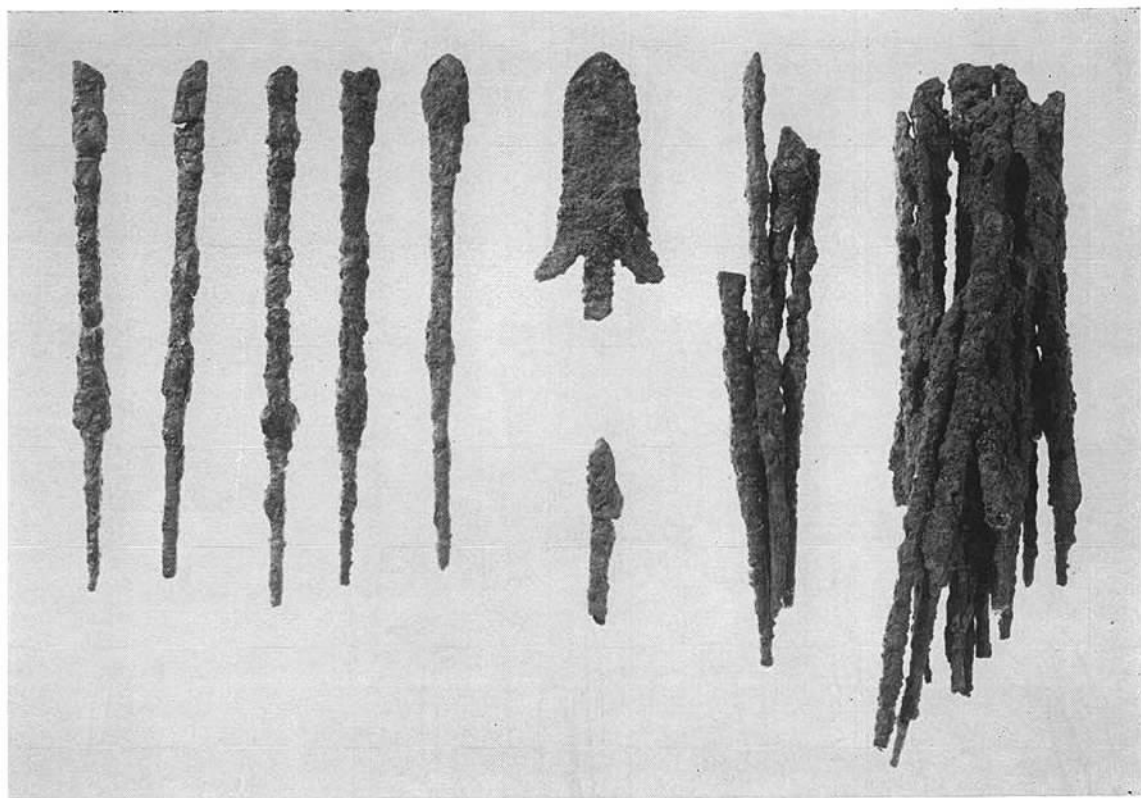
(1) 鉄 鏃



(2) 鉄 鏃

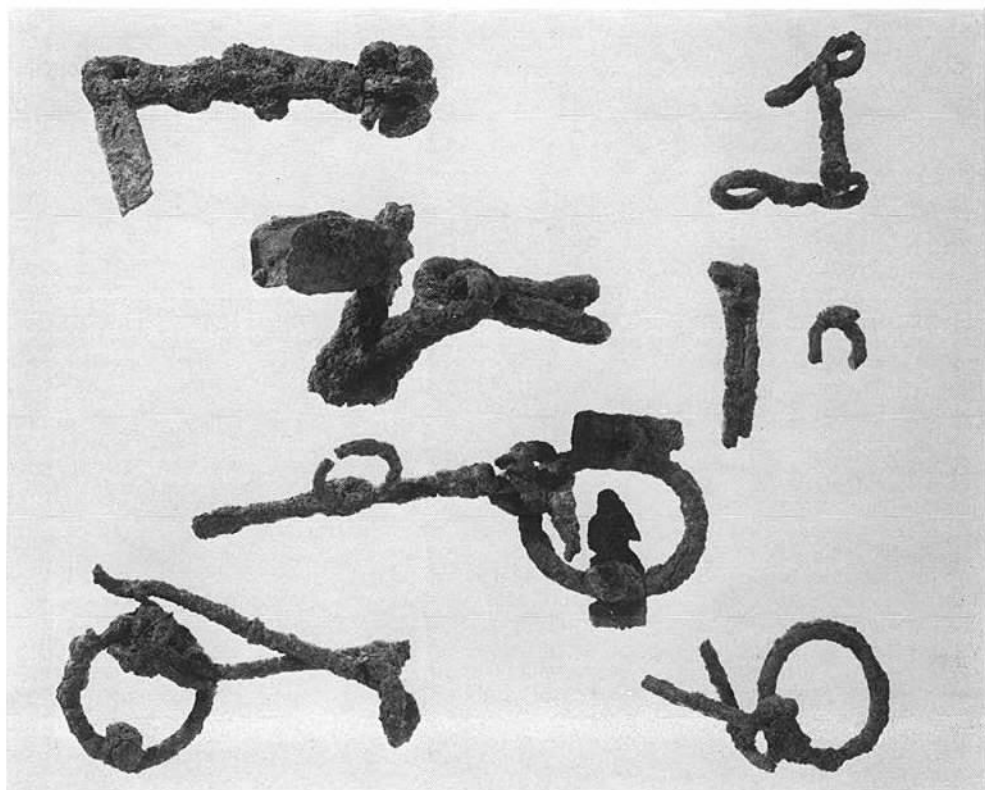


(1) 鉄 鍬

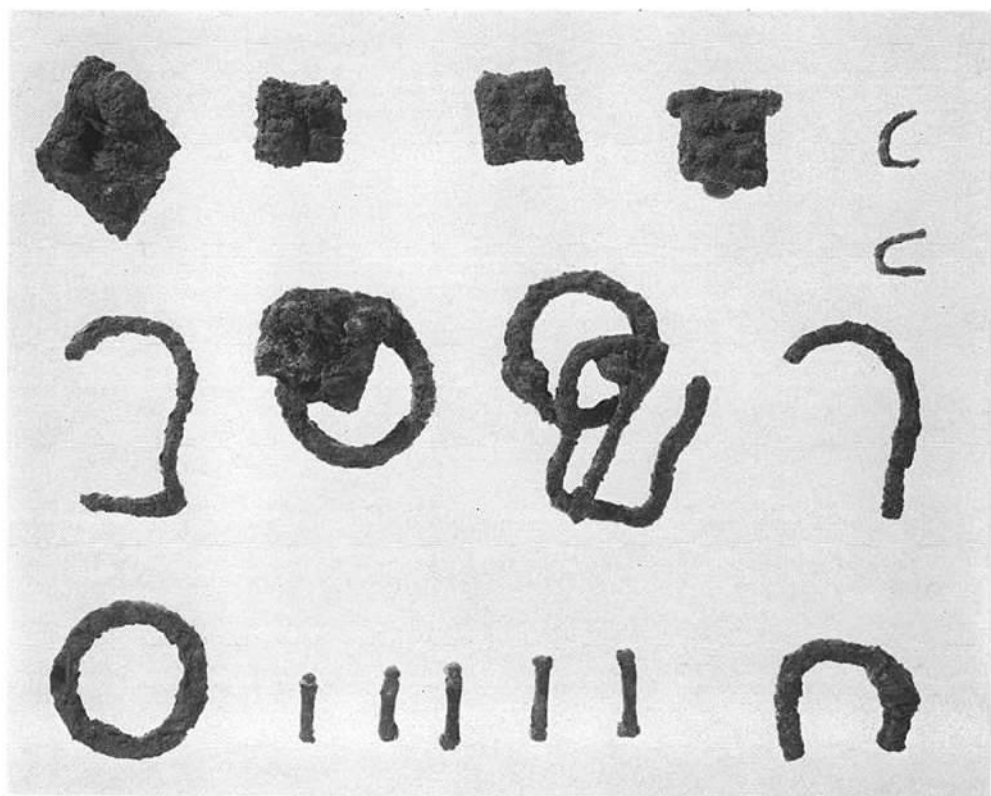


(2) 鉄 鍬

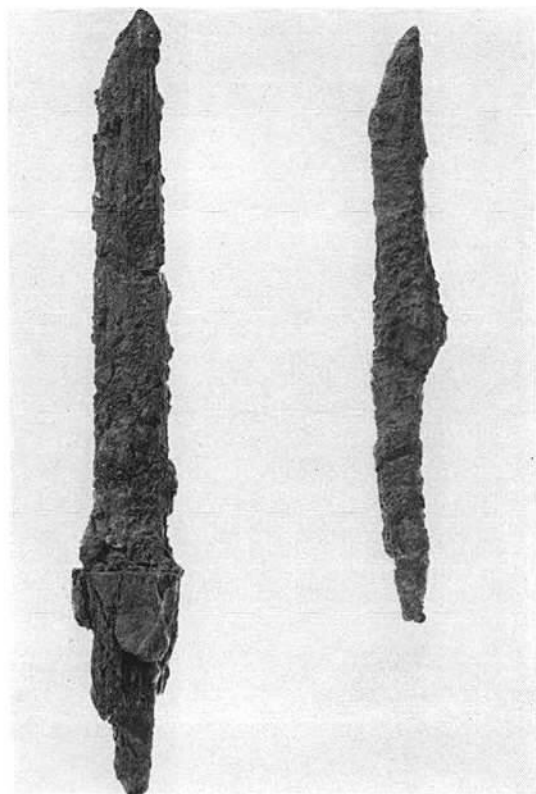




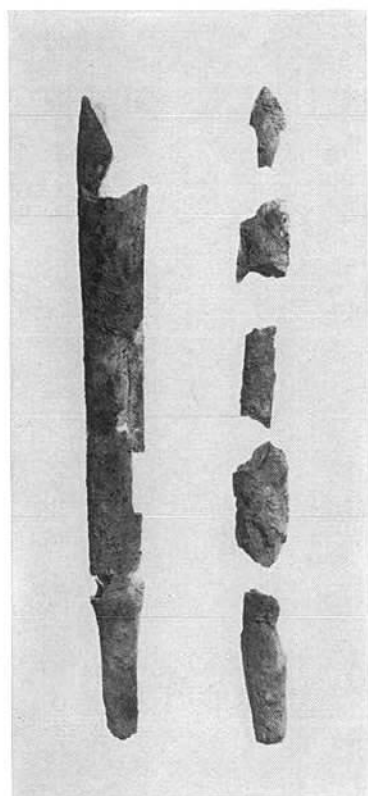
(1) 馬具



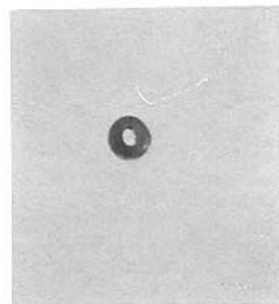
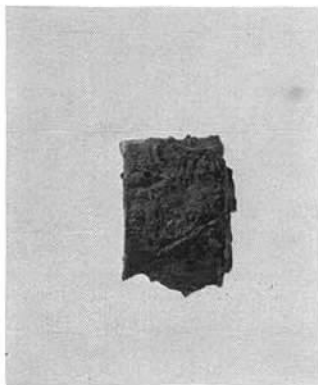
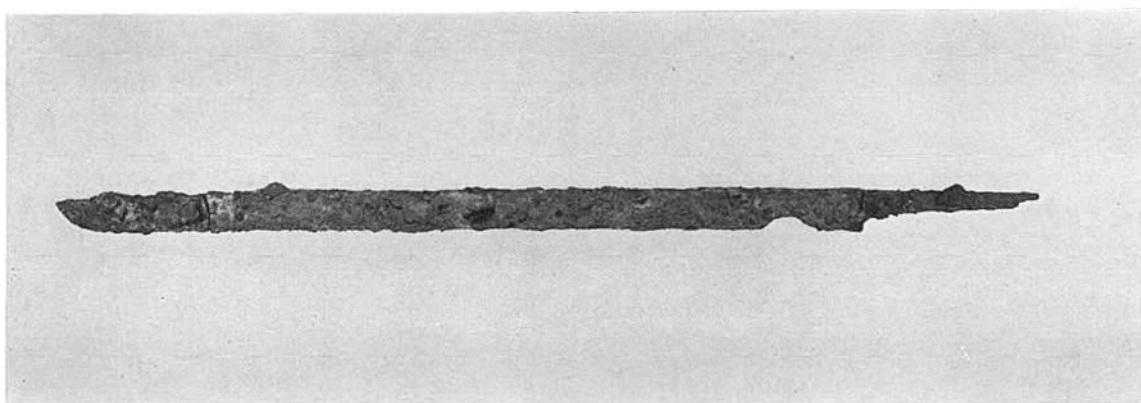
(2) 馬具



(1)  
4号墳出土刀子

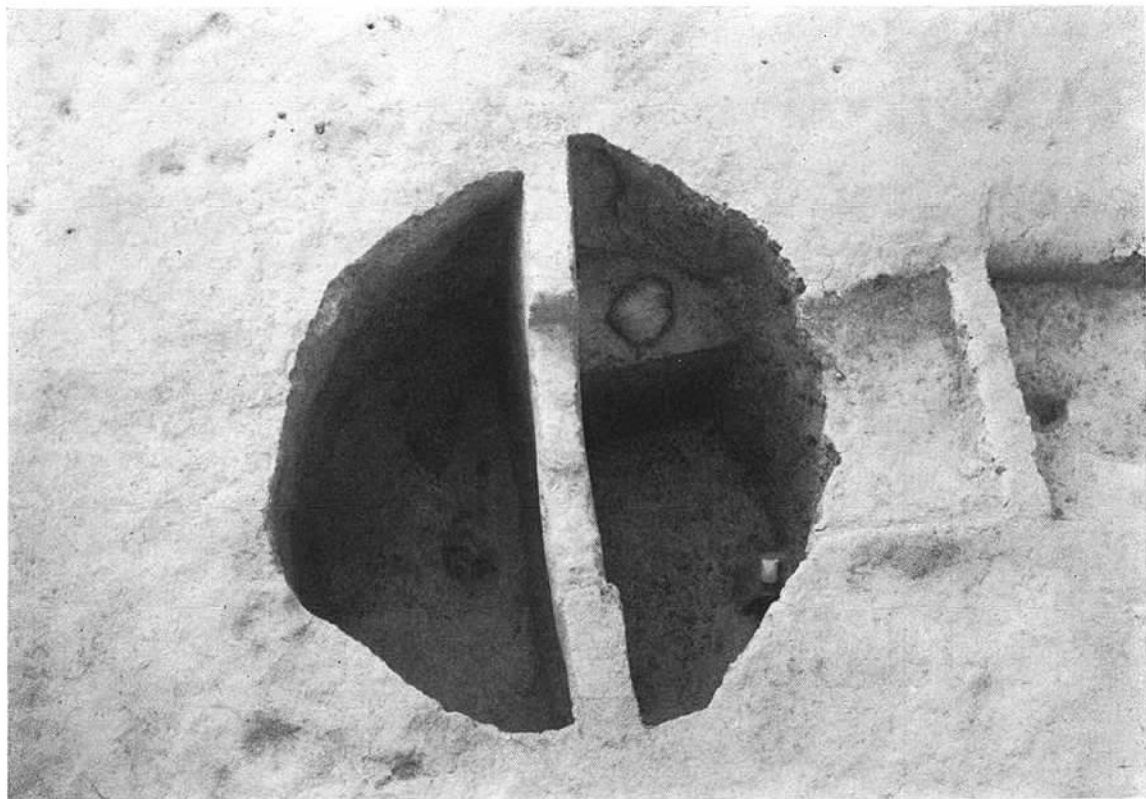


(2)  
4号墳出土鹿角鏃

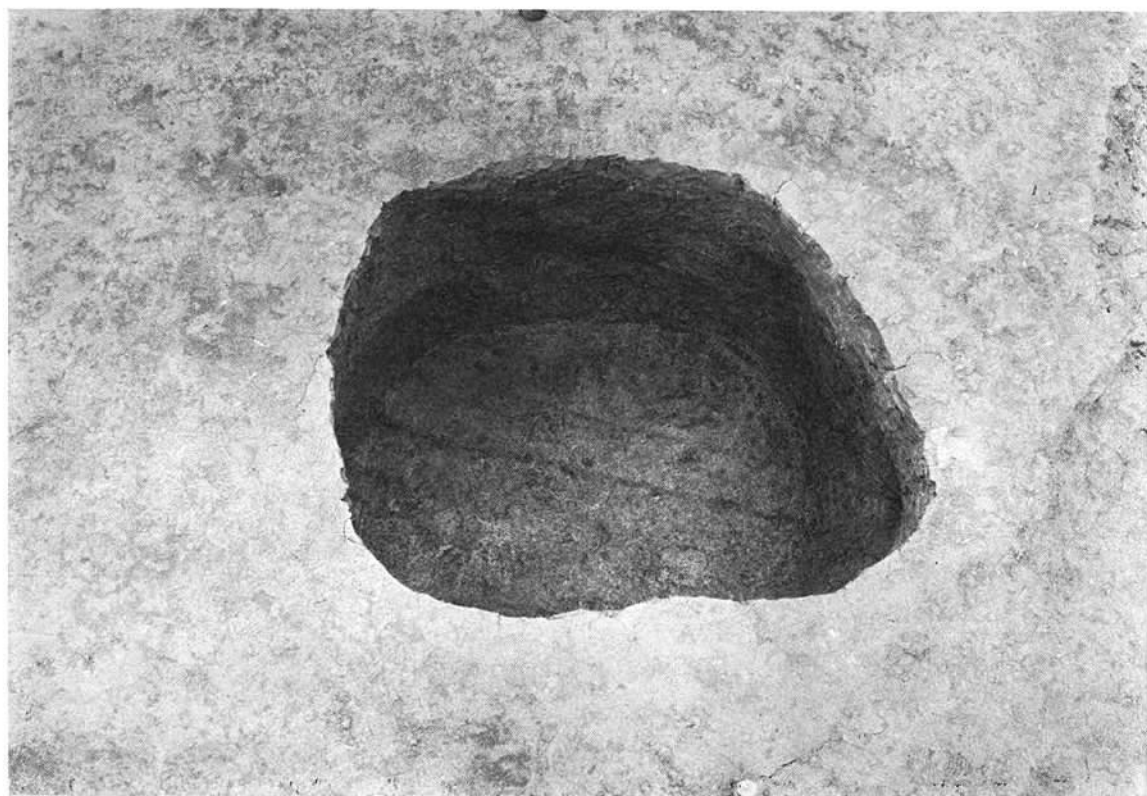


(4) 5号墳出土玉

(3) 4号墳出土太刀・鐔・鞘口金具



(1) 1号袋状袋穴内壺・石斧出土状态



(2) 3号袋状竖穴



(1) 2号袋状竖穴



(2) 1号袋状竖穴





(1) 4・5・6・7号袋状竖穴

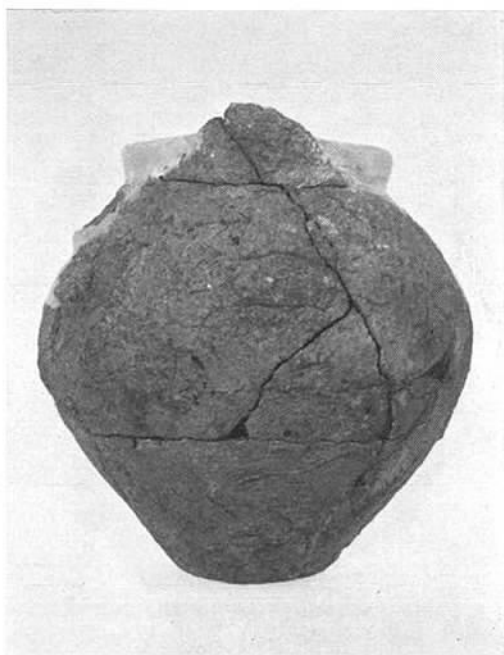
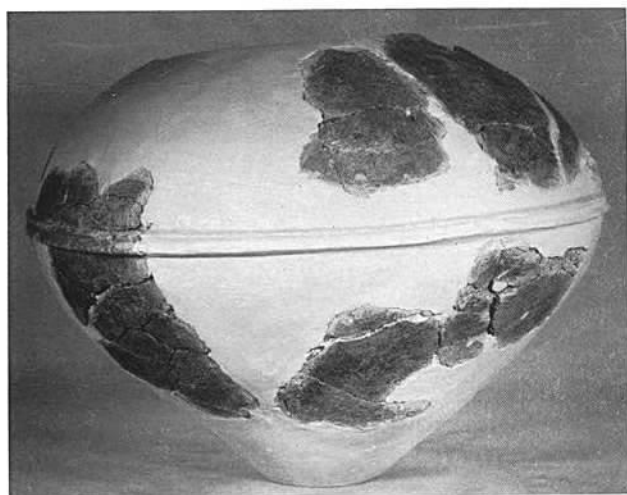


(2) 古墳群周辺遺構全景(東より)



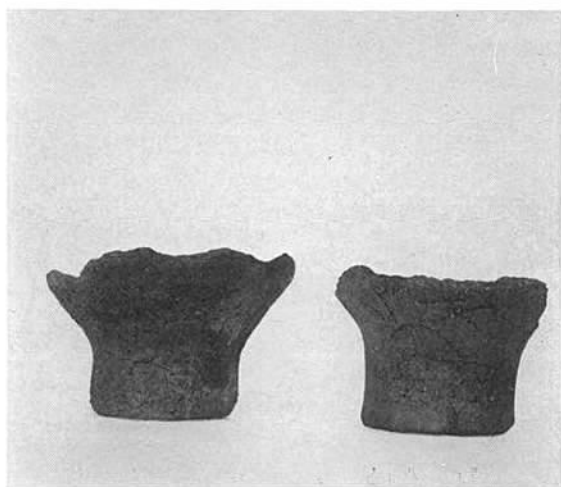
(1)

1号袋状竖穴出土土壺

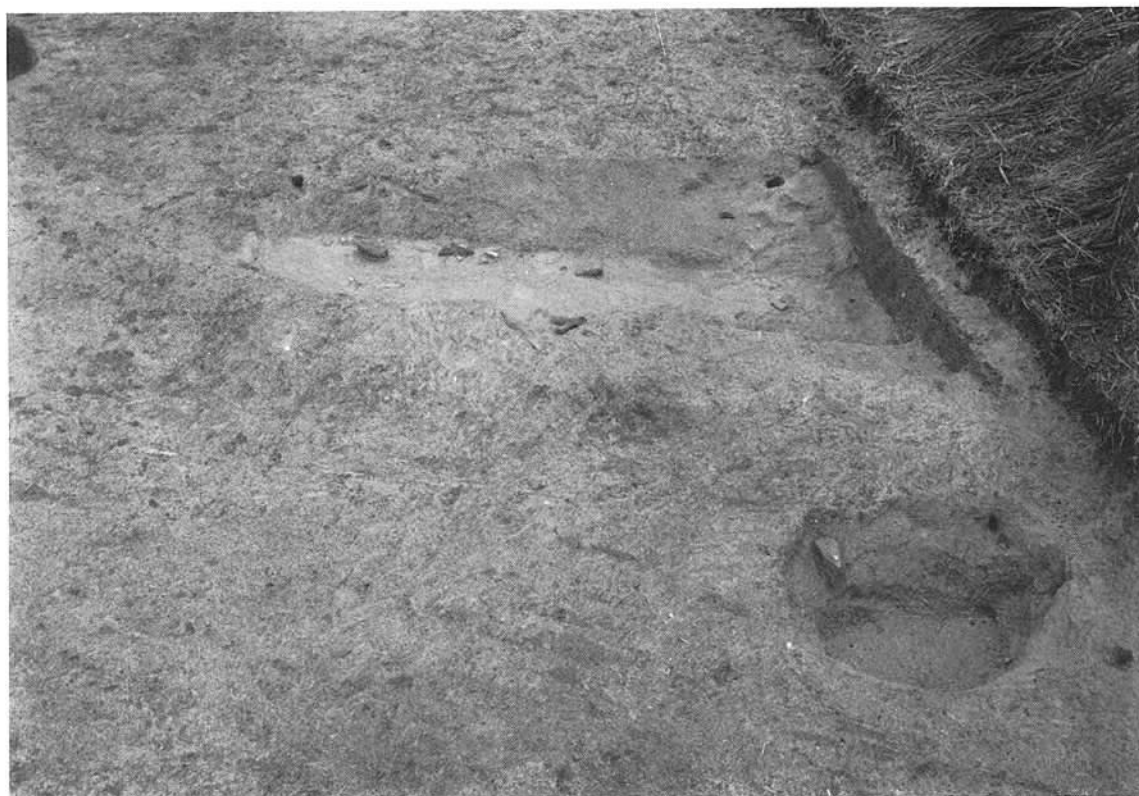


(2)

2号袋状竖穴出土小壺



(3) 1号袋状竖穴出土石斧



(1) 3号土坑



(2) 1号土坑

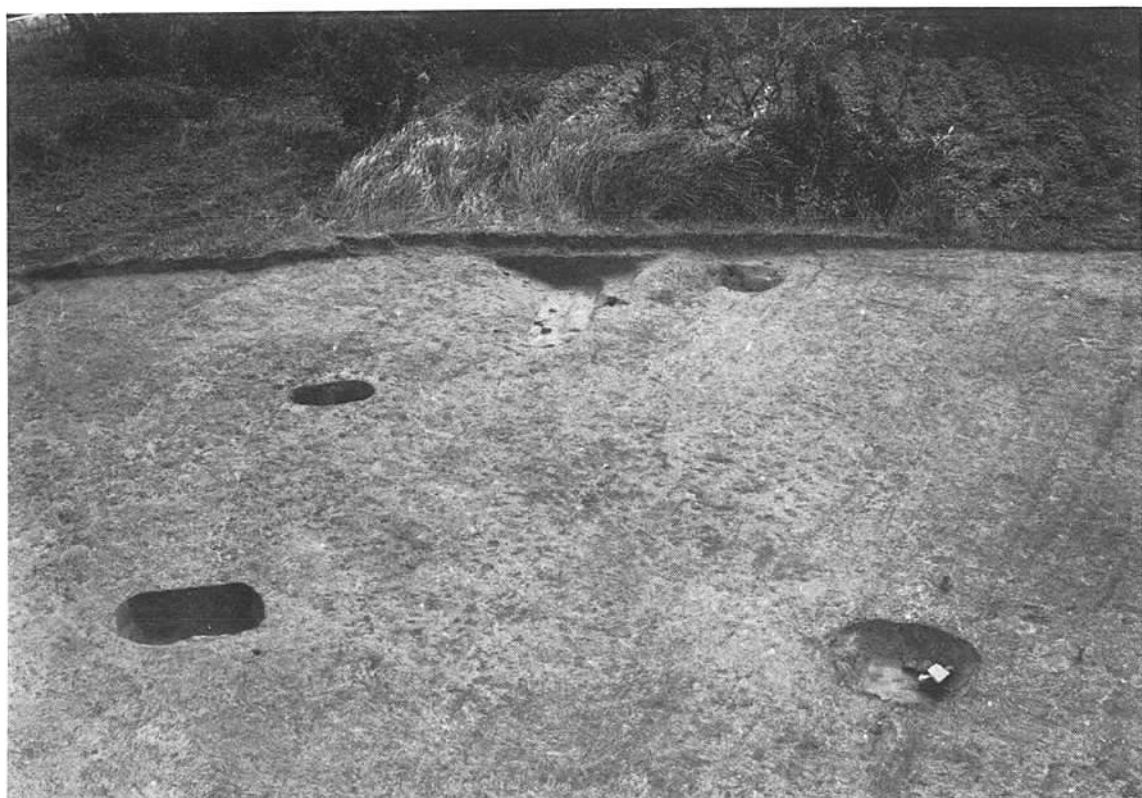


(1) 4号土塚



(2) 5号土塚





(1) 1・3・4・5土塚(北より)



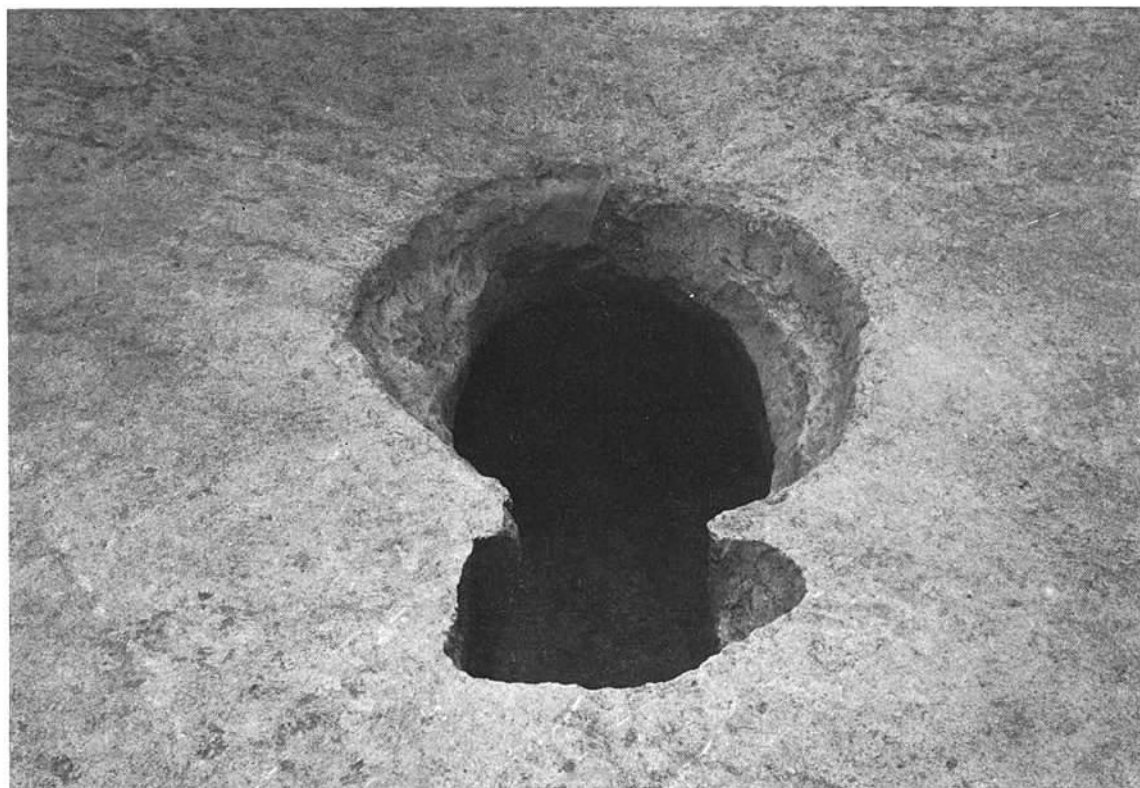
(2) 7・8・9号土塚(南より)



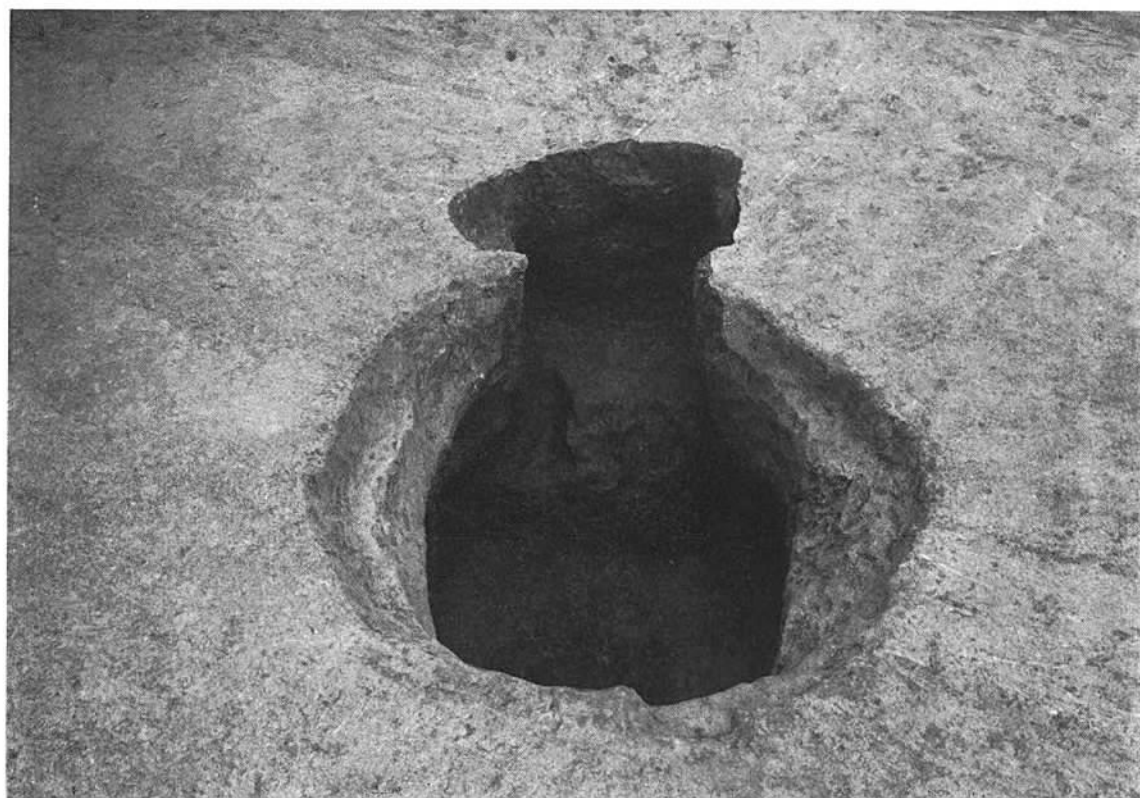
(1) 6号土塚



(2) 中世土坟墓



(1) 全 景 (西より)



(2) 全 景 (東より)

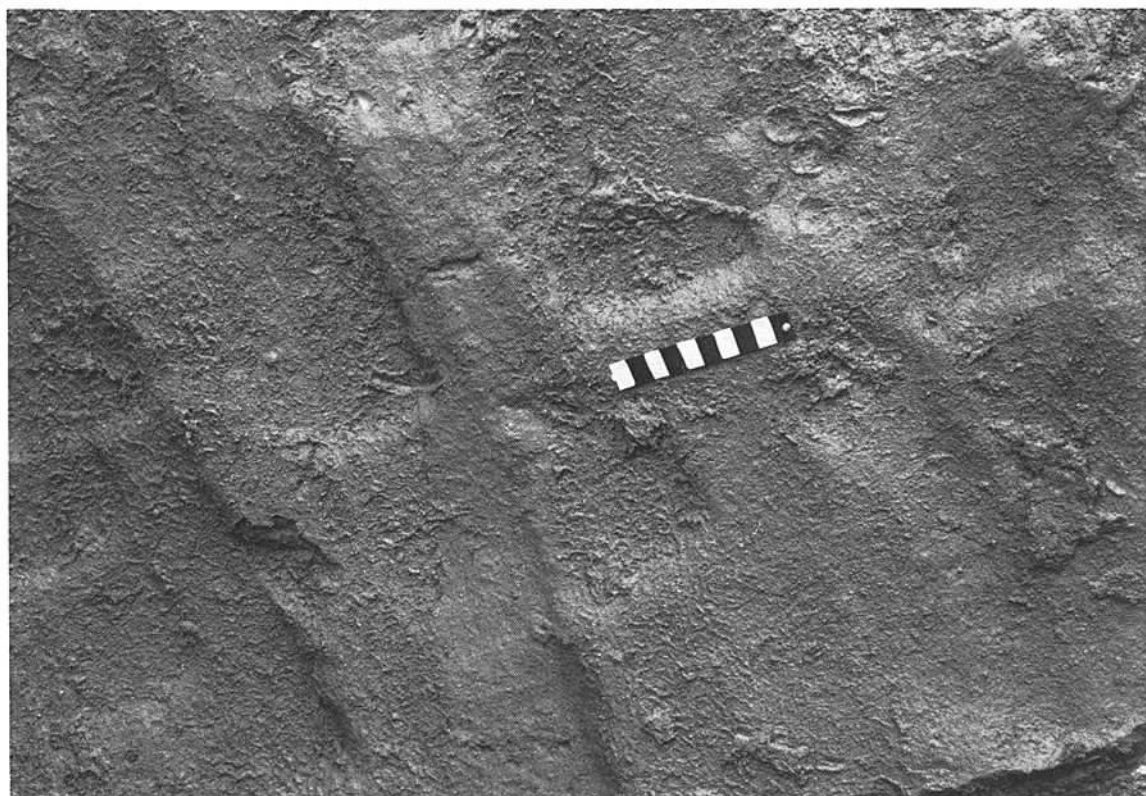




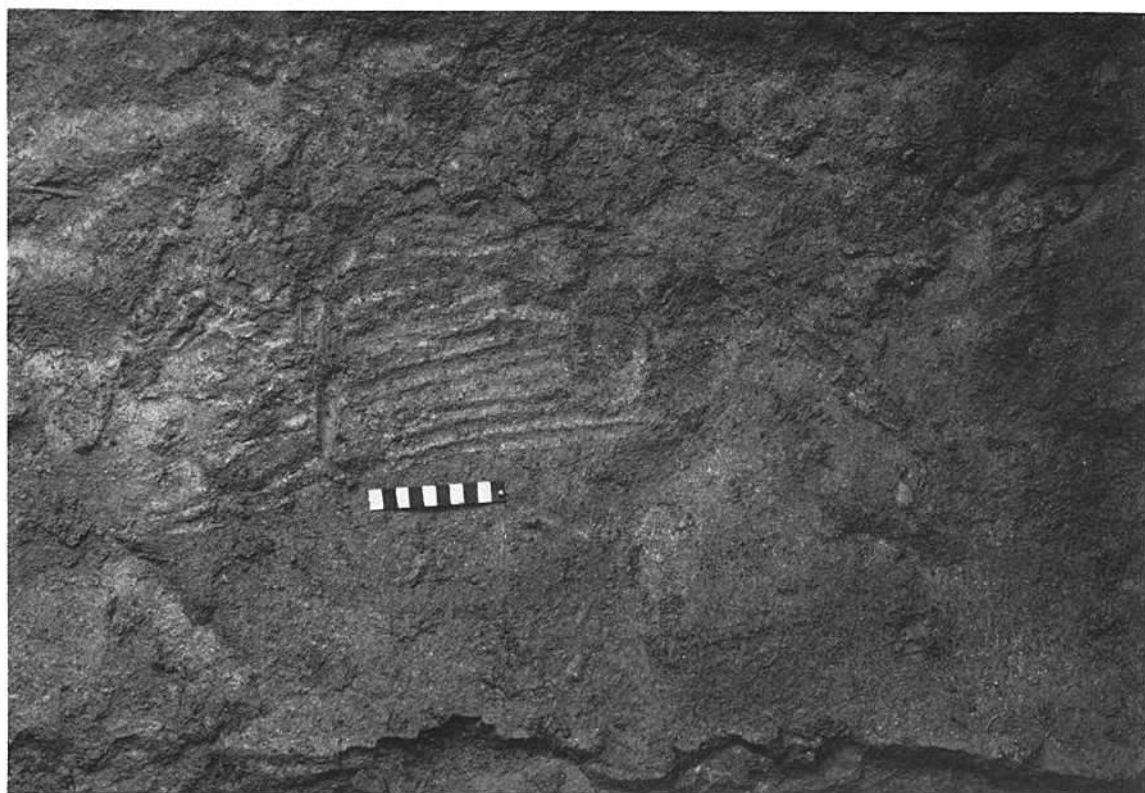
(1) 奥壁

(2) 玄門・堅坂部





(1) 右側壁の工具痕



(2) 奥壁中央の指ナデ痕

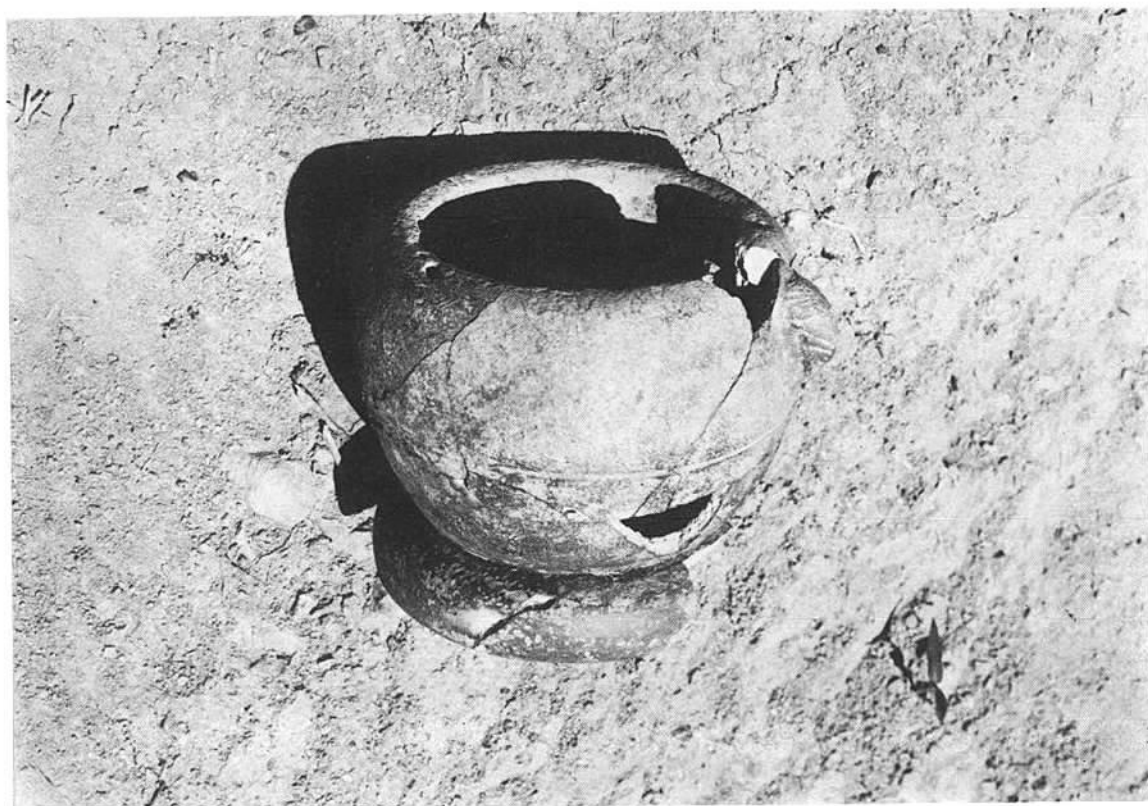


(1) 柱穴群全景 (南より)

(2) 柱穴群全景  
(西より)



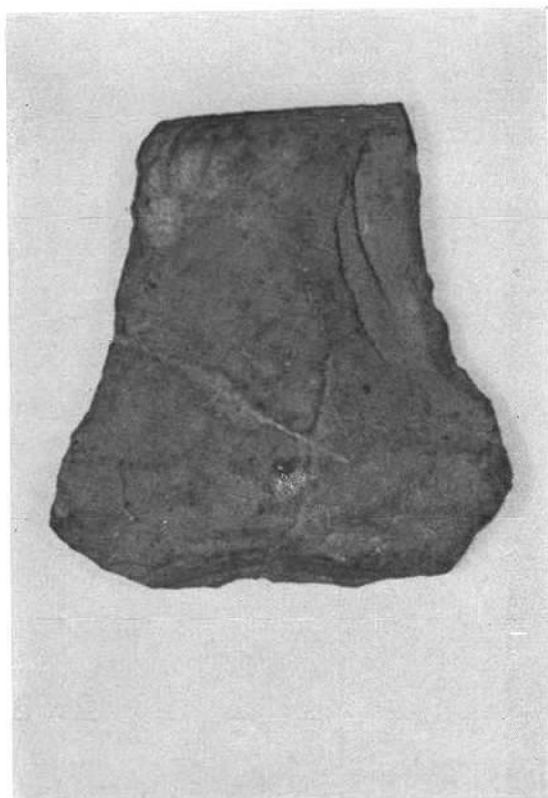




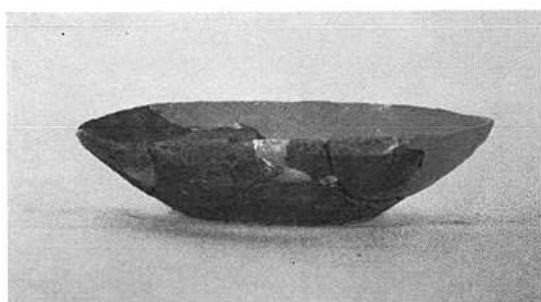
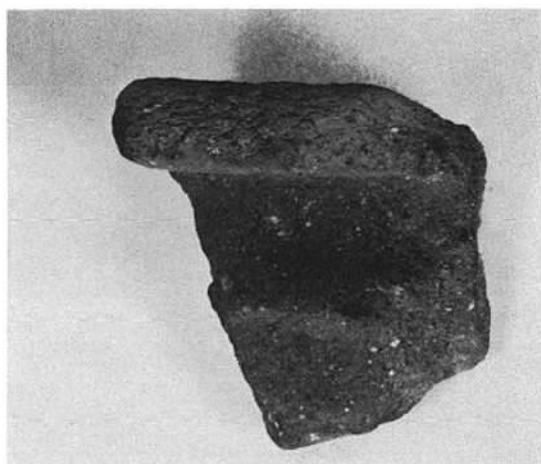
(1) 1号墳墓



(2) 2号墳墓



(1) 表土出土石器



(2) 中世土塚墓出土土師器



(3) 1号墳墓骨藏器



(4) 2号墳墓骨藏器



九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告 一Ⅻ一

昭和 52 年 3 月 31 日

発行 **福岡県教育委員会**

福岡市中央区西中洲 6 番 29 号

印刷 **株式会社 川島弘文社**

福岡市中央区舞鶴 1 丁目 5 番 6 号